1969年6月20日第三種郵便物認可・2024年5月1日発行・毎月1回1日発行・第56巻第7号

ミュージック・マガジン

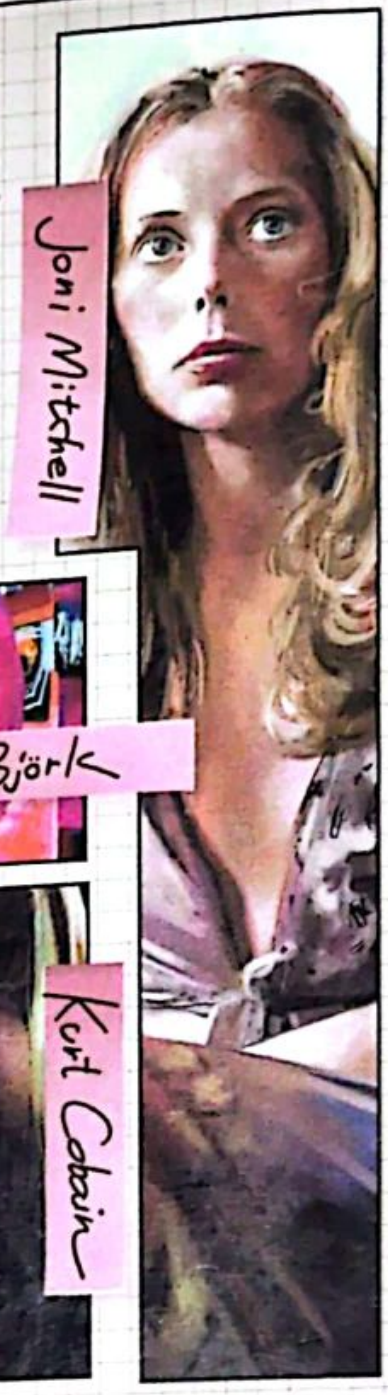
MUSIC MAGAZINE

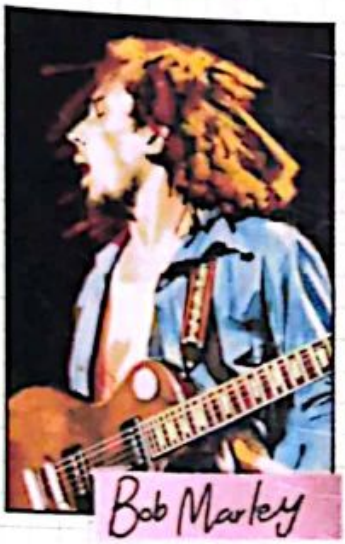
5
2024
MAY

創刊55周年記念特集

ポップ・ミュージック55年史

最重要アルバム110
（前編）





特集 カマシ・ワシントン　特集 アマピアノ

ハートランド・ロック30選

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

Vampire Weekend

ヴァンパイア・ウィークエンド

これは新境地か、それとも原点回帰か？新しさと懐かしさを同時に感じさせる5thアルバム

小林祥晴

ヴァンパイア・ウィークエンドのフロントマンであるエズラ・クーニグは、ニューヨーク・タイムズの取材でヴァンパイアのアルバムにはそれぞれ〝守護聖人〟がいると説明している。1作目はポール・サイモン、2作目はジョー・ストラマーとサブライム、3作目はレナード・コーエン、4作目はグレイトフル・デッドのジェリー・ガルシアとロバート・ハンターとフィッシュ、そして5年ぶりの新作『オンリー・ゴッド・ワズ・アバヴ・アス』のそれは、97年に開催されたレイジ・アゲインスト・ザ・マシーンとウータン・クランのジョイント・ツアーだという。

レイジやウータンとヴァンパイアという組み合わせに違和感を覚える人もいるだろう。だが実際にアルバムを聴けば、エズラの言わんとしていることがわかる。今作の音色はバンドの一般的イメージを裏切るように硬質でハードで荒々しく、ギターやシンセは耳障りなくらいに歪む瞬間がある。スティーヴン・シーゲルが撮影した地下鉄の廃車両の写真を採用したアルバムのスリーヴ・アートが喚起する情感そのままに、特にアルバム前半は驚くほど荒涼としたムードが漂っているのだ。

その一方で、今作はクラシックなヴァンパイアのサウンドに回帰している側面がある。オープニング曲「アイス・クリーム・ピアノ」の畳みかけるようなドラミングを筆頭に、各楽器が奏でるフレーズの端々からは、前作では希薄だったヴァンパイアらしい手癖を感じ取ることが出来る。こうなった理由は明白。前作はエズラ以外のメンバーが参加していない実質的なソロ作品だったのに対し、今作では約半数の曲にクリス・トムソンとクリス・バイオが参加しているからだ。つまり今作は、文字通り〝半分〟バンドに回帰したアルバムである。その結果、新しさと懐かしさを同時に感じさせるようなサウンドになっている。

それにしても、なぜ今作ではこんなにも荒涼とした音のトーンが選ばれたのか。それはやはりこのアルバムが非常に重たいテーマと真摯に向き合っているからだろう。「アイス・クリーム・ピアノ」では個人間の衝突から戦争まで様々なレヴェルの対立が止まない世界に対する苛立ちが表明され、「クラシカル」では過去の残忍行為が英雄視されるという〝勝者の歴史観〟の上に成り立っているこの世界の在り方に疑問を投げかける。そして「カプリコーン」は40歳を迎えたエズラが人生の儚さに思いを馳せているとも解釈できるし、「ジェン・X・コップス」は〝世代〟で物事を捉えがちな現代だからこそ激化している世代間闘争の暗喩かもしれない。公式声明によると、今作のテーマは20世紀のニューヨーク。だがそれは単純な郷愁ではない。「アイス・クリーム・ピアノ」で歌われるように、〝旧世界の首から血を吸った吸血鬼の息子や娘たち〟によって形作られたのが20世紀のニューヨークだという観点がひとつにはあるはずだ。

今作の認識は重い。しかし各所の取材で主

CamScannerでスキャン

写真＝Michael Schmelling

『オンリー・ヨット・ウズ・アバウ・アス』
ソニー／発売中

ズラが強調するあり、これは映画としての作品たは言いきれない。アルバム後半から後々に様々なムードがはじまり、最後の「オーシャン」ではある種の勢いが増幅される。始まりとか終わりとか、それすらもしようもんだ。ある時のこの曲は、どこから手を付けていいかわからないほど複雑で不条理で残酷な世界を前に絶望したり過剰に攻撃的になったりします。まず世界はそういうものだと受け止めるところからはじめよう、と語り手に呼びかける。この最終曲では対照的に、1曲目の「アイズ・クリーム・レアノ」は「こんな世界なんてクソ喰らえだ」という非常に強い言葉ではじまる。ガキそうしたな攻撃的な態度は、結局まだ何も知らしか生まれない。だからこそ今作は最終的に「オーシャン」の世界観に辿り着く。絶望に満ちたこの曲からは、世界に絶望しそれでもなおそれでいた青年期を経て、不惑を迎えた人間の成熟が見て取れる。

CamScannerでスキャン

ワクサハッチー

カントリーとオルタナティヴ・ロックの融合
――その決定打となる一枚がついに登場

木津毅

いまアメリカでは様々な層でカントリーが活況を見せているが、インディ・ロック・シーンでもカントリーとのクロスオーヴァーに勢いが感じられる。ケイティ・クラッチフィールドによるソロ・プロジェクトであるワクサハッチーはアメリカーナとオルタナティヴ・ロックを融合させることで熱い注目を集める存在で、6作目となる『タイガーズ・ブラッド』はその決定打と言える一枚だ。

リモートでおこなったインタヴューでカントリーの盛り上がりについて尋ねると、彼女はそのトレンドを歓迎しているという。

「ビヨンセがカントリーのアルバムを作るぐらいだからね。エキサイティングだと思うし、ザック・ブライアンみたいにわたしに強く影響を与えてくれる例もある。ある意味、いまのアメリカはカントリーが支配していると言ってもいいくらいじゃないかな」

ただ、ワクサハッチーとして20年にリリースした前作『セイント・クラウド』の時点ではカントリーの要素を強めることにいくらかのリスクも感じていたという。

「あのアルバムは自分のルーツに立ち返るもので、オーディエンスがこれについて来てくれるだろうかという想いもあったね。でもスタジオでは自分が正しいことをやっているという確信があった。結果として、自分にとってもっとも意味のある作品にできた」

その成果を生かした『タイガーズ・ブラッド』は基本的に前作の路線を推し進めたものだが、ウェンズデイのMJレンダーマンやスペンサー・トゥイーディらの参加により、バンドの生き生きとしたアンサンブルの魅力がとりわけ強く感じられる。プロデュースを務めたブラッド・クックはテイクをあまり重ねずにシンプルで温かみのある演奏を録ることを重視したとのことで、また、バンドにとって全曲でエレキ・ギターを弾いているMJレンダーマンの存在が非常に大きかったという。本作にオルタナティヴ・ロックのムードが強いのは彼の影響でもあるそうだ。

「MJがバンドに入ってくれたことによって、これまでわたしがあまり表に出してこなかった影響元が出てきたというのはある。彼のバンドに存在するサザン・ロックの要素が今回のアルバムには入っているし、わたし自身が大好きなR.E.M.も入ってるしね。彼らの影響はこれまでもあったんだけど、今回はそれが前面に出ていると思う」

ラフなタッチを残しつつも柔らかな響きを持ったバンド・アンサンブルによって、『タイガーズ・ブラッド』はつねに人間的なぬくもりを感じさせる作品に仕上がっている。彼女自身が経験した断酒を主題とした前作に対し、本作ではそこから着実に人生を重ねることを綴る楽曲が強い印象を与える。

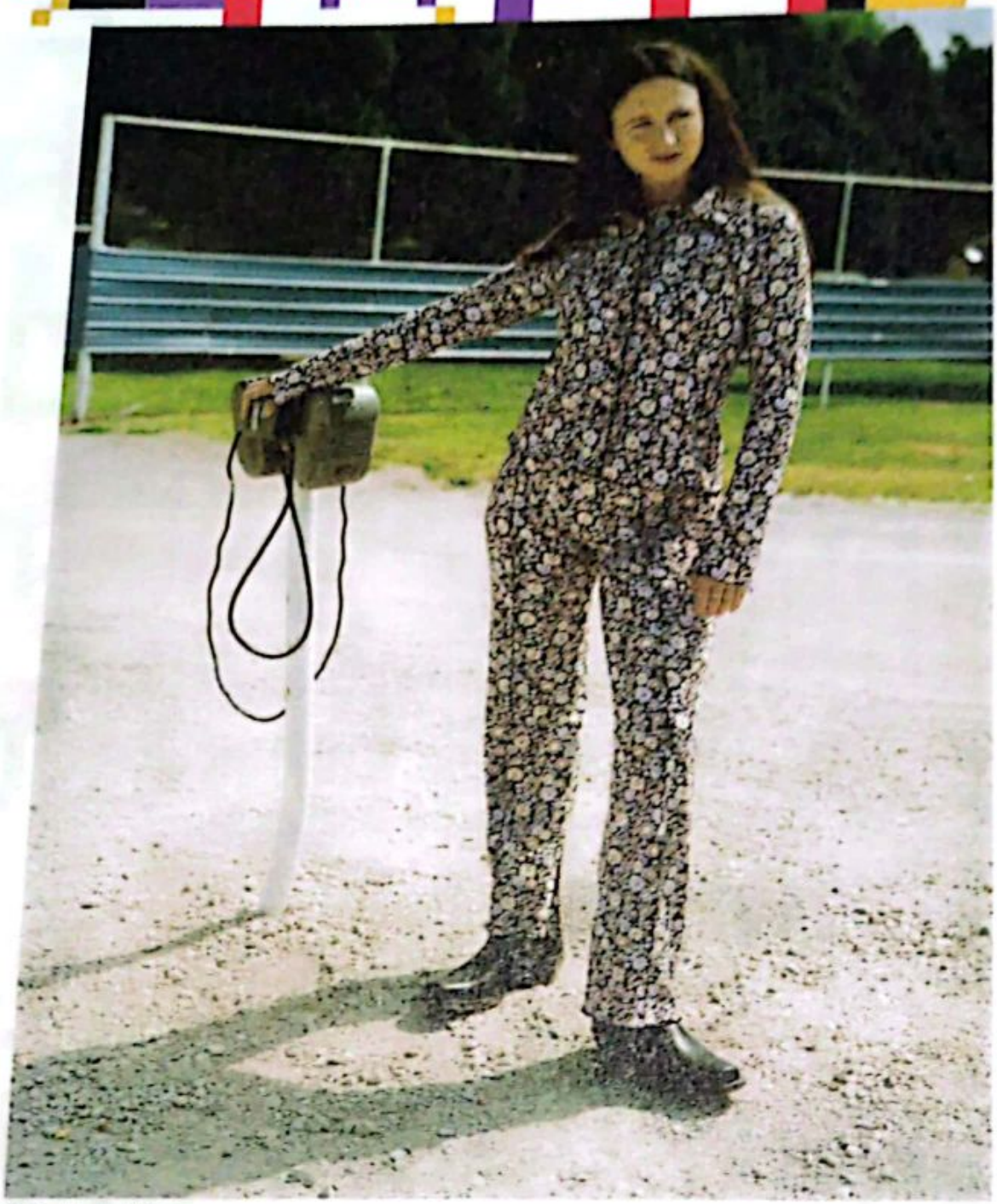
「ギリアン・ウェルチの影響を受けた『Back To It』はデモを録ったときにいろんなものがカチッとハマった感覚があったんだけど、あの曲は長く同じひとと付き合うなかの

CamScannerでスキャン

関係性の記伏について歌っているのね。すごく特別に感じられる瞬間もあれば、つらくなるときもあるし、それを乗り越えようと頑張るときもある、という。それはある意味、ロマンティックなことなのかもしれない」

自身のなかにある暗い感情を見つめ、ゆるやかに受容する曲が多い理由を尋ねると、クラッチフィールドは「わたしの音楽はすべて悲しみについてだと言えるかもしれない」と話してくれた。けれどもそれが、『タイガーズ・ブラッド』ではまさに〝獣〟のように、ときにワイルドに解放されるのである。

「〝タイガーズ・ブラッド〟というのはアメリカでかき氷のフレイヴァーの名前でもあるんだよね。それと、今回のアルバムは少し男性的なところがあって、獣の雰囲気と合ってる。だから子ども時代を思い出すイノセントな部分と、ダークな部分に惹かれる部分をかけ合わせたタイトルになってるんだ」



写真＝Molly Matalon

"Tigers Blood"
Anti-／発売中

CamScannerでスキャン

LONDON

ファット・ホワイト・ファミリー

バンドの音色の幅は偶然の賜物——ロンドン・シーンの重要バンドが最新作を発表

近藤真弥

ファット・ホワイト・ファミリーは、現在盛りあがりを見せるロンドンのロック・シーンにおいて、孤高の存在感を持ったバンドと言える。11年に結成して以降、ザ・フォールなどのポスト・パンクの系譜を色濃く受けついだサウンドと詩情によって、熱狂的支持を得てきた。ゴート・ガールやブラック・ミディなど、ロンドンから矢継ぎ早に魅力的なロック・バンドが輩出されるようになって久しいが、その流れを形成するのに一役買ったという意味でも重要なバンドだ。

そんなファット・ホワイト・ファミリーが最新作『フォーギブネス・イズ・ユアーズ』を発表する。創設メンバーであるソウル・アダムチェウスキーの脱退という出来事を経て作られた本作は、持ち前のポスト・パンク・サウンドのみならず、レナード・コーエンやボブ・ディランあたりのオーセンティックなシンガー・ソングライターを想起させる音も目立つ。こうした作風について、今回インタヴューに応えたフロントマンのリアス・サウディは、ディランやコーエンからの影響を認めつつ、次のように語ってくれた。

「ザ・フォールはあまり聴かなくなった。テクノとかアシッド・ハウスにハマってた。ただ、バンドの音色の幅は、僕だけのものじゃない。もっと共同作業というか。すべては偶然の賜物だった。フォーク・スタイルでやったり、ポップな感じでやったり、クソみたいに聞こえなくなるまで作業を続けた」

本作の収録曲で真っ先に目を引いたのは、世界一有名なバンドのメンバーがタイトルの〈John Lennon〉だ。ケタミン（麻酔薬）に溺れながら、オノ・ヨーコと出会ったジョンが歌の途中で自身の霊に取り憑かれるという物語を描いたこの曲は、リアスの実体験を基に作られたという。

「6〜7年前、ニューヨークにあるショーン・レノンの家にいた。セッションでね。ベッドルームでショーンとワインを飲んでいたら、そこにヨーコが入ってきた。そのとき僕はケタミンをやっていたから、ちょっとトリップしてた。ヨーコは〝なんか背中が…〟とかなんとか言ってね。そうしたら優しい空気が流れて、ショーンがヨーコにベッドでマッサージを始めたんだ。これはマジで奇妙だなと思った。その後ヨーコは僕に話しかけてきた。あなたは私の夫を思い出させる、彼もシンガーだったって。まるで僕がジョンのことを知らないみたいな話ぶりでさ。そのとき思ったんだ。僕はジョンの魂に憑りつかれたみたいだってね。ケタミンやら何やらで、ジョンが僕を通して現れたみたいな」

〈Religion For One〉も興味深い曲だ。バンドの高いソングライティング力を見せつけると同時に、ジャズの香りを漂わせている。

「ジャズはチェット・ベイカーとかマイルス・デイヴィスを聴くよ。でも、その曲に関して言うと、30年代のマレーネ・ディートリッヒをよく聴いていた。バンドをやっている

CamScannerでスキャン

人たちって、狭い範囲に閉じこもりがちだと思う。いまのトレンドはポスト・パンクのような非常に特殊なものだけど、いつもポスト・パンクなんだ。〝ピッチフォーク〟で規定されたボックスみたいなね。僕らは、すべてがリミックスされたアイデアを再利用する時代に生きている。いまや誰もがDJで独自性がないし、画期的なものもない。それはもう不可能なんだ。ロックやポップスというメディアでは、もうすべてが起こってしまった。みんながいまやってることは、コラージュをいじくりまわしているようなもの。なぜ、ポスト・パンクから少しでも逃れることを禁じているのか。過去を焼きなおすだけなら、ちゃんと選んでミックスしたほうがまだマシだ」

　このような視座が鮮明な今回の新作は、冷徹な批評眼が際立つ作品だ。ファット・ホワイト・ファミリーの音楽は、常に知的興奮をもたらしてくれる。

写真＝Louise Mason

『フォーギブネス・イズ・ユアーズ』
ビート／4月26日発売

CamScannerでスキャン

エムドゥ・モクター

鋭利なギターがトゥアレグの苦境を描くニジェールのバンドの新作

宗像明将

ニジェールから登場した新手の、砂漠のブルース。か…と聴いたところ、そのソリッド極まりないギター・サウンドに惚れたのがエムドゥ・モクター。彼らのニュー・アルバム『フューネラル・フォー・ジャスティス』では、鋭利と表現するにふさわしいエレキ・ギターが鳴る。

タイトル・ナンバーの「Funeral For Justice」からして強烈だ。それは、容赦なく切り込んでくるギターのせいだけではない。コブシのきいたヴォーカルとコーラスも響き、間違いなく西アフリカのニジェールから生まれた音楽であることを物語る。ベースはシンプルな動きのようでいて、ドラムと強烈なグルーヴを生み出し、バンド・アンサンブルは呪術的なまでの魅力を放つ。

「Imoshar」は、シンプルなギター・リフで幕を開け、ヴォーカルとコーラスが前面に出た序盤こそ抑えめだが、ほどなくしてギターが轟音を響かせる。シンセサイザーによる音も加えられており、その音がサウンドの奥行きを意識させる。間奏でギターの速弾きを聴くのも、正直久しぶり。あくまでギター・オリエンテッドなサウンドなのだ。楽曲の最後に響くのはエフェクターの残響である。

ギターのリフ、打楽器やベースも伝統音楽を意識させるのが「Takoba」だ。これは〝砂漠のブルース〟のイメージに近く、アコースティック寄りのサウンドの中で、しっかりと歌とコーラスのコール&レスポンスを聴かせる。「Imagerhan」も冒頭から伝統色が浮きあがり、ヴォーカルをじっくりと聴かせていく。さらにアコースティック・ギターの響きがサウンドを主導していく。

その一方、「Sousoume」では冒頭からギターがかき鳴らされる。そして、4拍子であっても複雑さを醸しだすバンド・アンサンブルに魅了される。終盤でのギターのうねりは、伝統性と現代性を掻きまわすかのような混沌を生み出していく。その終盤でもギターの速弾きは顔を出す。

冒頭からギターがいななくように響く「Tchinta」では、そのギターと拮抗するかのようにヴォーカルが高らかに響きわたる。コーラスも含めて、歌のレヴェルが高いこともエムドゥ・モクターの魅力だ。ここでも4拍子だが複雑、というバンド・アンサンブルの魔法が繰り広げられる。最後にメンバーのシャウト、そしてエフェクトのノイズが響き、スタジオ・ライヴのような音源でもある。

もっとも伝統音楽に接近した「Djallo Ni」は、伝統的な擦弦楽器の演奏を収録し、そこからエレキ・ギターのうなる「Oh France」へと流れ込む。ヴォーカルがもっとも強く歌い上げている楽曲である。

最後を飾る「Modern Slaves」は、アコースティック・ギターが奏でる伝統色を感じさせるフレーズから、打楽器やクラップの鳴るアコースティック編成での演奏へと展開。エムドゥ・モクターというバンドの持つ深みを

CamScannerでスキャン

写真＝Ebru Yildiz

味わわせながらアルバムは幕を閉じる。

『フューネラル・フォー・ジャスティス』で描かれるのは、ニジェール、そしてトゥアレグ族の苦境だ。本作が完成したのは23年7月だというが、同月に軍事クーデターが発生し、民主的に選出されたニジェールの政権は退陣させられた。国内の混乱は続く。バンド名の由来であり、シンガー、ギタリストであるモクターは、資料でこう述べている。

「今、アフリカではテロリストによる暴力がより深刻な問題となっている。アメリカやヨーロッパがアフリカに来たとき、彼らは私たちを助けると言ったが、私たちが見ている状況はずいぶん違う。彼らは決して解決策を見つける手助けはしてくれない」

4月のコーチェラ・フェスティヴァルに出演し、6月には全米ヘッドライン・ツアーを行うエムドゥ・モクターによって、ニジェールの現状に目を向ける人が増えることを願う。

『フューネラル・フォー・ジャスティス』
ビート／5月3日発売

CamScannerでスキャン

tofubeats

行き場のない熱にしがみついて——ヴォーカルをAIの歌声合成ソフトで制作した新作

池谷瑠悟

2015年のメジャー・デビューから約2年ぶりとなる新作『NO BODY』は5曲入りのEP。前作との間には映画やTVドラマの劇伴や、他アーティストへ楽曲提供をするなど、精力的な活動を続ける傍ら、ハウス・ミュージックをコンセプトに制作された新作について聞いた。

「これまでのオリジナル作に連なる、純然たる作品ではあるんですけど、前作のフル・アルバム『RUN EMOTION』がコロナ禍のムードをテコにしてできていったものなので、ちょっと寄り道したというか。20年の『TBEP』の頃はクラブでどんどんDJやるぞという気分だったのに、リリース直後にコロナになってしまった。果たされなかった怨念みたいなものがずっと漂っていたんですが、それをようやくキャッチして成仏させたという感じですかね（笑）。あと、もうひとつテーマがあって、海外を意識しながらも独自の展開を見せた日本産のクラブ・ミュージック、Jクラブと呼んでいるんですけど、去年ぐらいにマネージャーが“トーフってJクラブの最後のアーティストじゃない？”って言い出したんです。確かに思い当たる節もあったし、Jクラブという軽薄な語感も含めてめちゃくちゃいい言葉だなと感じて。アニメで使われているから日本っぽいみたいなことじゃなく、音楽的に自分が無意識にやってしまう、全然海外っぽくない音こそがJクラブというか。だから、今回もスタンダードなハウスを自分が狙って作ると、そうじゃないものができることを織り込んだ上で、それを作品のコントラストのひとつにすることを考えたんです」

ダンス・ミュージックとしての機能を追求しつつ、その背景に様々な思惑が込められた『NOBODY』だが、同時に大きな試みもある。それは全曲のヴォーカルをAIの歌声合成ソフトで制作したということだ。これまでにもAIとバック・トゥ・バックを行なったり、AIが生成する音楽への強い関心を表わしてきた彼らしい試みだが、一方でメジャー・レーベルに所属するアーティストが全曲AIでヴォーカルを生成するフェーズがいきなり訪れたことにも驚かされる。今やプロンプトだけで架空のバンドによるアルバムをアートワークやヴィジュアル、MV、ライナーノーツまで含めて生成できるようになった時代において、新作はリアルなミュージシャンがAIに対してどう向き合っていくのかという適例のひとつにもなると言っていいだろう。

「1曲目の△_CAN_FEEL_▽の歌詞ができたときに女性のヴォーカルを仮で入れてみようと、シンセサイザーVという歌声合成ソフトを使ったら、もうこれで良くない？となったんですよ。この曲の一番のネックはちょっと熱い歌詞で、この歌詞を誰に歌ってもらおう…中途半端な知り合いの人とかには頼みづらいし、もしかしたら事務所側からNGがあるかもしれない。そんなモヤモヤとした杞憂はAIには関係ないわけです。これまでのヴォーカルや歌、歌詞には人格みたいなもの

CamScannerでスキャン

が乗っかっていたわけですけど、それがまったくない。ラストのタイトル曲は〝君のことずっと待ってたよ〟と歌っていますが、誰も待っていない。扉の向こうで誰かが歌っているけれど、扉を開けたら誰もいなかったという行き場のない感じがおもしろいなって。今のムードっぽいじゃないですか」

――supercellの自身は今後AIとどう向き合っていくのか。

「この『NOBODY』が時代の転換点として、このときシンセサイザーVとか使ってたよね的な、そのときの空気感をとどめた作品になったらいいな、という願いはありましたね。かつてのボカロがそうなったように。今後も自分がやることは変わらないというか、この作品で指針が決まるわけでもなく、新技術が出てくるたびにうろたえながら、自分なりの距離感を合わせていくみたいなスタンスでやっていけたらと思います」

『NOBODY』
ワーナー／4月26日発売

CamScannerでスキャン

町あかり

テーマがあるのは書きやすいです。楽しいです
——4作連続リリースの第1弾は〝ディスコ〟

安田謙一

2024年は町あかりの新しい曲が雑誌のように届く年になります。

春（4月）、夏（7月）、秋（10月）、冬（12月）というタイミング（季刊誌ですね）で4作連続のリリース。春号＝第1弾のテーマは〝ディスコ〟。題して『ディスコあかり』！　まずは町さんのディスコ観を伺った。

「岩崎宏美さんの〈未来〉とか〈センチメンタル〉とか、そのへんが大好きで。あとから、世界的に流行ったディスコの影響なんだ、と知りました。私にとってのディスコって、まずはそこからですね」

ディスコというお題に応えた、四つの新しいオリジナル曲の、1曲目はタイトル曲になった〈地球出禁にしていいよ〉。

「〝出禁〟とかいう言葉を聞くと、（スマホに）メモしておいて。キツい言葉だけど面白くなるかな、と。それと、アース・ウィンド&ファイアーの〝宇宙〟みたいに、ディスコってでっかいテーマが合うなあって思ってたんですよ。そこから〝地球出禁〟と思いついて（笑）。女の子の恋愛ばなしを聞いてて、つきあってる相手が凄い（ひどい）なとか、そういうことがあるんですけど、そういう恋愛している女のひとに独特な思いがあって、それを描いてみようかな、って」

2曲目は蟹川べに（和楽器バンド）の三味線をフィーチャーした〈常磐ディスコ港町〉。

「ある日、お風呂で〝常磐ディスコ〟って思いついて。母の実家が、いわき市なんですよ。小名浜っていう港町で。前から、方言憧れみたいなのがあったんですけど、じゃあ、それ（常磐の言葉）でやってみようと、〝福島県＋いわき＋訛り〟とか検索して（笑）、これで合ってるかどうかは、お母さんに聞いてみたらいいかと。（震災をふまえて）美味しい魚があるから〝遊びに来てね〟という気持ちもこめた、和ディスコです」

3曲目は〈黒帯フィーバー〉。カール・ダグラスはカンフーで踊るが町あかりは柔道だ。

「これも〝黒帯〟って言葉が面白いと思ったのと、ワードとしてフィーバーも外せないな、と。ディスコにおいて黒帯の彼は、ダンス・スキルだけじゃなくて、ハートも大事なんだ、みたいな歌になりました」

最後にきらめくストリングスをフィーチャーしたディスコ歌謡決定版〈楽園流しの刑〉。

「（今回、ディスコというお題があって）最初に作った曲です。これも〝○○流しの刑〟ってメモってて（笑）、なに流しの刑だと面白いのかな、と考えて、嫌なところに流されるのはもちろん嫌だけど、果たして、楽園に流されるのは幸せか、って。今、毎日、もがいて、うーっとかって、やりたくないことやってることが、実は幸せを生むんじゃないか、と考えて。やりすぎなくらい、ハイ・テンションで、明るく歌ってます」

四つの収録曲は2枚の7インチ・シングルでも限定発売される。CD（通常盤と、DVD付のデラックス限定盤あり）には4曲のオ

CamScannerでスキャン

リジナル・カラオケも収録されている。町あかりのデモ音源をもとに岡田ユミがアレンジ（主楽器の演奏も）、岡田陽助（g）、YOKAN（fl、ピッコロ）らも参加している。

「〈地球出禁…〉のコーラスは、私のデモ音源をそのまま使ってます。あの無感情な感じはレコーディングし直せないです（笑）」

町あかりとディスコ音楽の相性の良さは彼女の独特な曲づくりにも起因している。

「〝複雑なものがいい〟という考えにアンチなところがあって、それは絵を描くときも同じなんですけど。なんならAメロだけでもいいと思ってて。童謡にサビとかないじゃないですか。それでいて美しくて。なるべく童謡みたいな曲をつくりたいな、と思ってます」

現在、すでに夏（7月）発売の新曲に取り組んでいる。テーマは乞うご期待。「テーマがあるのは書きやすいです。楽しいです。無限に書けるなあ（笑）という気がします」。

『地球出禁にしていいよ〜ディスコあかり DISCO Machi Akari』
ウルトラ・ヴァイヴ／発売中

CamScannerでスキャン

Neighbors Complain

CamScannerでスキャン

体がダンス・ミュージックに傾くなか、部屋にいるときにまったりと聴けるようなこういった作品を作ること自体が冒険でもある。制作体制の変更も含め、いろんな意味で新しいスタート地点となった作品なのかもしれない。

「実は僕たちも、BPM120ぐらいで四つ打ちで踊れる感じの、体が動かしやすいっていう曲が結構多くて、それが人気曲でもあるんです。でも、そういう曲ばっかりになっちゃうと、ライヴでどの曲も全部一緒に聞こえちゃったり、そもそもライヴ自体がある一定のラインから上に行けなくなる現象が起きたりするんです。今回はソウルフルなコーラス・ワークにも結構こだわって、ブレイク明けにコーラスだけになるパートを作ったりとか、ライヴで様々な表現ができるようになるために作ったみたいなところもあるんですよ。いいライヴをしたいってのは、本当に大切に思ってることなんです」

『A life like ice cream』
ヴィヴィド／発売中

CamScannerでスキャン

lyrical school

どこに出しても胸を張れるアルバムだと思います――〝男女共学〟8人体制になって初のアルバムを発表

高岡洋詞

昨年2月12日、渋谷O-WESTでのワンマン公演で〝男女共学〟8人体制になったlyrical schoolを初めて観た。前情報ゼロだったこともあって心底驚いたが、自由で開放的な空気にぐいぐい惹き込まれた。

それから約1年、現体制初のアルバム『DAY 2』が完成。今や重鎮的存在の大久保潤也、ALI-KICK、上田修平をはじめ、Rachel (chelmico)、valknee、KM、Lil' Leise But Gold、R.I.K、BBY NABEら新鋭に、初参画のUztama、Flat Line ClassicsのSart & BIG FAF、PARKGOLFと、多士済々の作家陣がいずれ劣らぬ好曲を提供している。在籍10年のminanと、新加入のmanaとryuya、プロデューサーのキムヤスヒロに話を聞いた。

まず共学になった理由をキムに聞いた。最も大事なのは「メンバーのやりたいことを僕がハンドリングするというか、むしろ振り回されながら、バイクを1点で支えるみたいな奇跡的なバランスを横索したい」という点だと感じた。メンバーもそれは感じ取っていて、ryuyaは「キムさんのそういう考え方が投影されたアルバムだと思います」と言う。

「以前は全員でマイク・リレーをしたり、誰かがラップして誰かがフックで歌う曲が多かったんですけど、今回は楽曲に参加してるメンバーとしてないメンバーがいるのが違うんです。それぞれの表現の幅が広がったし、今までできなかった曲ができるようになったんじゃないかなと感じてます」(ryuya)

スキットを交えて「8人にとって特別じゃないある1日」(キム)を描いた構成はいつもながらよく練られている。それぞれのお気に入りを聞くと、「全部好きなんですけど」

CamScannerでスキャン

たときに初めてわかることがあると思うんですよ。グループにどういう影響を与えるのか、アルバムの内容がどうなるのか、現状では想像つかない部分が大きいんですけど、まぁ、なるようになればなって」（キム）

プロデューサーの「なるようになればな」は頼もしい。「最後に何か言いたいことがあれば」と振ったら、mamiが挙手して「私はアルバムというものがとってもとっても好きで、ずっと憧れてたんです」と話してくれた。

「〈NEW WORLD〉とか〈House Party〉とか、別々に出してきた5曲が全然違って聞こえるんですよ。どこに出しても恥ずかしくない、胸を張れるアルバムだと思います。〈NEW WORLD〉の聞こえ方がとりわけヤバいんですけど、うまく言葉にできないんで、手にしてくれた方には全員、1曲めのスキットから最後まで通して聴いてほしいです」

（mana）

『DAY 2』
ビクター／4月24日発売

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

創刊55周年記念特集

ポップ・ミュージック55年史

最重要アルバム110（前編）

本誌は1969年に『ニューミュージック・マガジン』として創刊され、1980年に『ミュージック・マガジン』に改名、今年で55周年を迎えました。いつも支えてくださっている読者の皆さんに心から感謝を申し上げます。55周年を記念して、1969年から現在までを5年ごとに区切り、音楽シーンと社会の移り変わりを振り返るとともに、55年間の最重要アルバム110枚を選出する特別企画を3カ月連続で展開します。完全保存版の大特集、まずは前編（1969～98年）です。

1969年8月16日、ウッドストック・フェスティヴァル（ジョン・セバスチャンのステージから） ©Henry Diltz

ポップ・ミュージック55年史①
1969〜73年

ヴェトナム戦争とウッドストックの69年から70年代の訪れに新時代の到来を見る

小倉エージ

〝ニュー・ロック〟、もはや死語となってしまったが、1960年代末から70年代初頭までの日本のロック状況を振り返る際、無視できない用語でありカテゴリーだ。

ザ・ビートルスが『ラバー・ソウル』、ボブ・ディランが「ライク・ア・ローリング・ストーン」のヒットを生み、『追憶のハイウェイ61』を発表して以後、米英のロック・シーンは変容を遂げ、斬新な音楽内容によるアルバムの登場が相次いだ。

そのうちグレイトフル・デッドなどのデビュー作や、ジミ・ヘンドリックス・エクスペリエンス、クリームなど、新たな動向はサイケデリック・ロック、アート・ロックとして例外的に発表されたが、日本でのアルバムの紹介はシングル・ヒットの有無

CamScannerでスキャン

に左右され、大半はお蔵入りしていた。しかも、〝ロック〟という表現も一般的ではなく、〝グループ〟と表現されることはあっても〝バンド〟という表現は滅多に使われず、その認識すらなかった。なにしろ日本でザ・ビートルズが〝ロック・バンド〟と認識されるようになったのは69年以後のことだ。それまで50年代半ば以後のロックンロールの系譜にありながら、オリジナル曲主体の音楽性を持つグループとしての評価を得てはいたが、アイドル・グループとしてみなされていた。また、69年以後も〝ニュー・ロック〟として語られたことはない。

69年、中村とうようによって本誌の前身、『ニューミュージック・マガジン』が創刊された。前後してレコード各社から英米の最新作に加え、お蔵入りしていた旧作も相次いで発表され、〝ニュー・ロック〟はその総称として認知されていたのである。

69年1月、ヴェトナム反戦運動・第二次反安保闘争を背景にした起きた学園紛争で封鎖されていた東大の安田講堂から全共闘らが機動隊によって強制排除されたが、まだ60年代以来の反戦、反体制運動が収束したわけでもない。アメリカではヴェトナム戦争の泥沼化とともに反戦を訴えたアルバムが発表されていた。同年の出来事として今も語られることが多いのは、8月、ウッドストックで開催されたロック・フェスティヴァルと、11月、カリフォルニア州オルタモントでのローリング・ストーンズのコンサートで起きた殺人事件だ。

『ニューミュージック・マガジン』創刊号
(1969年4月号)

音楽的な動向では、前年の68年以来の〝スーパー・セッション〟および、〝スーパー・グループ〟の存在が挙げられる。その発端となったマイケル・ブルームフィールド、アル・クーパー、スティーヴン・スティルズによる『スーパー・セッション』をライヴで再現し、スティルズに代わってエルヴィン・ビショップ、カルロス・サンタナが参加した『フィルモアの奇蹟』は、60年代半ば以来アメリカで盛んに実施されてきたライヴでのセッション主体の演奏展開や、アメリカのロック・シーンでのプルースの動向を伝えていた。そして、同作で不在だったスティーヴン・スティルズがグレアム・ナッシュ、デヴィッド・クロスビーと結成したCS&N、ニール・ヤングを加えたCSN&Yは、スーパー・グループとして注目されていた。さらに、プラス・セクションを起用し、ジャズ的な要素を取り入れたブラッド・スウェット&ティアーズの『血と汗と涙』、対照的にロック志向とメッセージ性を重視した歌詞によるシカゴの『シカゴと23の誓い』でのブラス・ロック、ポコなどによるカントリー・ロックなども新たな傾向として話題を呼んだ。

イギリスではヤードバーズ、ジョン・メイオール&ブルース・ブレイカーズ、クリームを経たエリック・クラプトンが、クリーム出身のジンジャー・ベイカー、トラフィックを休止中のスティーヴ・ウィンウッドらとスーパー・グループのブラインド・フェイスを結成したが、短命に終わった。むしろ日本で話題を呼んだのはクラプトンに加え、ジェフ・ベック、ジミー・ペイジを擁したヤードバーズの存在、及び、3人の新たな動向だ。

いずれもブルース・ロックを基盤にしながら、クラプトンはデラニー&ボニー&フレンズの一員として行動を共にした後、アメリカ南部のブルースへ傾倒してデレク&ザ・ドミノズを結成。ジェフ・ベックは自身のグループを結成し斬新なギター・スタイルや、ロッド・スチュワートを迎えてバンド・サウンドを追求。ジミー・ペイジはロバート・プラントとレッド・ツェッペリ

CamScannerでスキャン

ンを結成し、フォーク的な要素も加味、それぞれ独自性のある音楽性、サウンドを展開していった。

同時に、60年代初頭以来アレクシス・コーナー、次いでジョン・メイオールが牽引し、イギリスでブルース・ブームを生んだフリートウッド・マックなども紹介されたが、それよりもB・B・キングはじめモダン・ブルースやカントリー・ブルースなどへの関心が高まる。それには中村とうようの紹介が大いに貢献した。

先にも触れたデレク&ドミノズはジョージ・ハリスンの『オール・シングス・マスト・パス』、クラプトンを除いてジョー・コッカーのマッド・ドッグス&ヒズ・イングリッシュメンにも関わる。そこで見逃せないのがレオン・ラッセルと、そもそもの発端となったデラニー&ボニーの存在だ。

また、イギリスで69年から70年半ばにかけて数多くのフォロワー的なグループが続出し、エルトン・ジョンなどにも影響を及ぼし、レッド・ツェッペリンも『Ⅲ』でその影響を独自に具現化したことを明らかにした、ザ・バンドの存在も見逃せない。

70年に入って、ジョン・ロードのオルガン、リッチー・ブラックモアのギターをフィーチャーしたディープ・パープル、ヘヴィーなスタイルのブラック・サバスなど、ハード・ロックの台頭と全盛期を迎える。中でもグランド・ファンク・レイルロードはシンプルで大衆的な親近感を持っていたことから、ハード・ロック人気、ロック・ファンの拡大に貢献する。

さらに、イギリスではR&B、サイケデリック・ロックを経て、クラシックや現代音楽の要素を取り入れた幻想的な音楽展開を追求したピンク・フロイド、叙情的な要素も加味したキング・クリムゾン、ジャズ的な要素を濃くしていくソフト・マシーンなどが実践した音楽展開は、プログレッシヴ・ロックとして認知、評価された。

1970年代の訪れ

70年になってもアメリカでの反戦運動は収まらず、5月にはオハイオ州ケント州立大学での米軍のカンボジア爆撃への抗議デモで州兵の狙撃により大学生4人が死亡し、9人が重軽傷を負い、CSN&Yが「オハイオ」という楽曲を発表した。

同年2月、スライ&ザ・ファミリー・ストーンの「サンキュー」に続いて、サイモン&ガーファンクル（S&G）の「明日に架ける橋」が全米チャート1位にランクされ、6週間その座を守った後、ザ・ビートルズの「レット・イット・ビー」がその後に続いた。

スライ・ストーン ©Henry Diltz

スライの「サンキュー」は、60年代半ば以来、ファンク・スタイルを実践してきたジェイムス・ブラウンに次いで、ロック、ポップ的な要素を加味した、シニカルな歌詞によるファンク・ナンバーで、ハービー・ハンコックの『ヘッドハンターズ』をはじめ、多分野にまたがって影響を及ぼした。S&Gとザ・ビートルズの2曲は、ハード・ロックの台頭にあって、穏やかな曲調によるもので、前者は救済をテーマとし、後者はあるがままを受け止めて、といった歌詞が話題になった。さらにピアノによる演奏はゴスペル的な要素が汲み取れる、と中村とうようが指摘。後にポールはアルバム制作やライヴで、ディキシー・ハミングバーズ、ジェシー・ディクソン・シンガーズなどのゴスペル・グループを起用する。

当時、ゴスペルには不案内だったことか

CamScannerでスキャン

ら中村とうようの指摘にピンとこなかったが、『レコード・コレクターズ』2019年5月号の〝1969年の音楽地図〟特集で故・小出斉が触れ、クエストラヴが『サマー・オブ・ソウル』として映画化し、日本でも上映された〝ハーレム・カルチュラル・フェスティヴァル〟の模様から、当時のゴスペル・シーンの在りようを知り、納得できたものだ。

70年4月にはポール・マッカートニーがザ・ビートルズからの脱退を宣言。同年末にジョージ・ハリソンは『オール・シングス・マスト・パス』、ジョン・レノンは『ジョンの魂』を発表。ポールも『マッカートニー』をリリースし、翌年、妻のリンダ、デニー・レインとウィングスを結成する。

同年、ジェイムス・テイラーが自伝的な「ファイアー&レイン」をヒットさせ、翌71年、キャロル・キングが『つづれおり』を発表。同作から「イッツ・トゥ・レイト」がヒット。先にジェイムス・テイラーがカヴァーした「君の友だち」などもあって驚異的ロング・セラーを記録。ジョニ・ミッチェルも自身を反映した傑作『ブルー』を発表して絶大な評価を獲得。シンガー・ソングライターの活躍が目立った。

そして、71年末以来、グループ名を改名しシンプルなポップ・ヒットを相次いで放ったT・レックス、64年にデビューしながら長く恵まれず、イメージを改め続け、72年に〝ジギー・スターダスト〟と名乗って成功を納めたデヴィッド・ボウイによる退廃的なグラム・ロックが一世を風靡した。

前後して71年5月、マーヴィン・ゲイがヴェトナム戦争やアメリカの社会状況を反映したコンセプト作『ホワッツ・ゴーイング・オン』、次いでスライ&ザ・ファミリー・ストーンも同様にアメリカの現況を反映した『暴動』を発表。60年代後半から秀作を発表してきたアレサ・フランクリンの『アレサ・ライヴ・アット・フィルモア・ウェスト』『ヤング・ギフティッド&ブラック』、ダニー・ハサウェイの『ライヴ』、カーティス・メイフィールドの『スーパーフライ』、スティーヴィー・ワンダーの『トーキング・ブック』なども多分野に影響を及ぼし、幅広いファン層の支持を得た。

72年、前年のチーター・クラブでのライヴ作『ライヴ・アット・ザ・チーター』により、サルサ・ミュージック、及びファニア・オールスターズへの関心が高まった。翌73年にはボブ・マーリー&ザ・ウェイラーズが『キャッチ・ア・ファイヤー』でメジャー・デビューし、レゲエは世界中に拡大し、浸透していく。

72年にはイーグルス、ドゥービー・ブラザーズがデビュー。60年代のロックとは異なる演奏、サウンドの感触に新時代の到来、70年代の訪れを覚えたものだ。

そして。日本のロックについて触れておかねばならないが、スペースを失くした。アルバムを挙げるとすれば、岡林信康『見る前に跳べ』、遠藤賢司『niyago』、はっぴいえんど〝ゆでめん〟、吉田拓郎『元気です』、井上陽水『氷の世界』、荒井由実『ひこうき雲』。フラワー・トラベリン・バンドなら『SATORI』だろうか。

ジョニ・ミッチェル

マーヴィン・ゲイ
『ホワッツ・ゴーイング・オン』

CamScannerでスキャン

The Band
The Band

1969
Capitol

衝撃的だったデビュー作に続く本作では、カナダ出身の4人のアメリカ南部への憧憬をロビー・ロバートソンが代弁。リヴォン・ヘルムのアイデアを得て、同地方での人々の暮らし向き、さらにはアメリカの歴史をさかのぼる物語を展開。リンカーンについては触れるなと助言したリヴォンのエピソードも一興だ。バンドとしての結束を物語る一体感を増した演奏展開のインパクト、説得力は圧倒的で傑作と語られる所以でもある。「ロッキー越えて」「オールド・ディキシー・ダウン」など名曲揃いの中で「アンフェイスフル・サーヴァント」が光る。

The Beatles
Abbey Road

1969
Apple

ザ・ビートルズは本作の発表後、日本ではリヴァプール出身の4人組ではなく、ロック・バンドとしての認識、評価を得る。傑作と語るにふさわしいジョージの「サムシング」や繊細な叙情による「ヒア・カムズ・ザ・サン」、ジョンの「カム・トゥゲザー」「アイ・ウォント・ユー」など、『ホワイト・アルバム』以後、顕著な〝個〟の存在を感じさせながら、「ビコーズ」「サン・キング」でのコーラスなどグループとしての一体感の復活を物語り、「ジ・エンド」でのギター・バトルでの演奏力の充実も。B面のメドレーはポールならではだ。

King Crimson
In The Court Of The Crimson King

1969
Island

強靭なギター・リフからジャズ・ロック風のリズミカルな展開へと変化する「21世紀の精神異常者」、ザ・ビートルズ的なポップ・センスやサイケデリック風味を進化させた表題曲。一方で「風に語りて」「エピタフ」でのフォーキーなセンスがうかがえるメランコリックで幻想的な叙情味。ヴォーカルにおけるヴォコーダー的な効果やメロトロンの調べがもたらす現代音楽のミュージック・コンクレート的な趣き、ことにメロディのセンスはイギリスの土壌にしか生まれえないもの。プログレッシヴ・ロックがここに開花した。

The Rolling Stone
Let It Bleed

1969
Decca

ブルースの追求などルーツ回帰の姿勢は前作以来。本作ではより深度を増し、アメリカの南部的な要素を濃くしていた。当初、クレジットされなかったロバート・ジョンソンの「ラヴ・イン・ヴェイン」がそれを物語る。ライ・クーダーの協力もキースとの対立から無視された後、『ジャミング・ウィズ・エドワード』で明らかに。ヴェトナム戦争に触発された「ギミー・シェルター」、ボストンの絞殺魔事件をヒントにした「ミッドナイト・ランブラー」など、混乱した当時の社会状況を反映。発表当時、日本での彼らの評価は一気に高まった。

Simon & Garfunkel
Bridge Over Troubled Water

1970
Columbia

70年初頭に発表され、6週間にわたってチャートのトップにランクされた表題曲、先にヒットしていた「ボクサー」など、いずれも長期にわたり録音制作に取り組んだ。表題曲のタイトル、救いの手を差しのべるという歌詞、演奏内容はゴスペル的要素が濃い。アートが映画出演のため、サイモン単独の作業が多い。ロス・インカスの演奏にポールが英詩を書いた「コンドルは飛んでいく」、バーカッシヴな「いとしのセシリア」などワールド・ミュージック志向を見せていた。グラミー賞の主要部門をはじめ全6部門で最優秀賞の賞を獲得した。

CamScannerでスキャン

Crosby, Stills, Nash & Young
Déjà Vu

1970
Atlantic

CSNも名曲揃いでコーラスが充実。レイドバック・サウンドの演奏は褒めないということからニール・ヤングが補強参加。その成果はバンドとしてまとまりのある一体感を得られたものの、4人のエゴがむき出しに。個としての存在と個性を発揮した名曲が揃った。

また、同時期の『アフター・ザ・ゴールド・ラッシュ』『マナサス』『ソング・フォー・ビギナーズ』『イフ・アイ・クッド・オンリー・リメンバー・マイ・ネーム』といった、それぞれ充実した4人のソロ活動における成果も聴き逃せない。

Carole King
Tapestry

1971
Ode

自伝ミュージカルでのことだが、ジェリー・ゴフィンとの初めての出会いの際「私の名前はクライン！」と素性を明かすセリフがあった。ジェリーとはヒットを量産してきたが、本作はアレサ・フランクリンとシュレルズへの提供曲のみセルフ・カヴァー。「イッツ・トゥー・レイト」はトニー・スターンとの共作で、他は自身が作詞。日常の観察、心情を表現した平易な歌詞と万人好みのメロディーからすると記録的ロング・セラーに納得。私的にはジョニ・ミッチェルの赤裸々な『ブルー』を挙げたかったが、涙を飲んで大人の判断、本作を選んだ。

Led Zeppelin
Led Zeppelin IV

1971
Atlantic

まぎれもなくレッド・ツェッペリンのベスト作にして最高傑作。スピーディーで強靭、ダイナミックでパワフルな「ブラック・ドッグ」「ロックンロール」もさることながら、ザ・バンドへの敬愛の成果である前作以来のプリミティヴなスタイルを昇華させた、トラッド・フォーク的趣きによる「限りなき戦い」の叙情的展開が味わい深い。ドラマチックでスリルに満ちた「天国への階段」を聴き終えて味わう高揚感は容易に得難いもの。締めくくりの「レヴィー・ブレイク」も、ブルースや伝統曲の借用にしっかり落とし前をつけてみせたのは天晴！

Sly & The Family Stone
There's A Riot Goin' on

1971
Epic

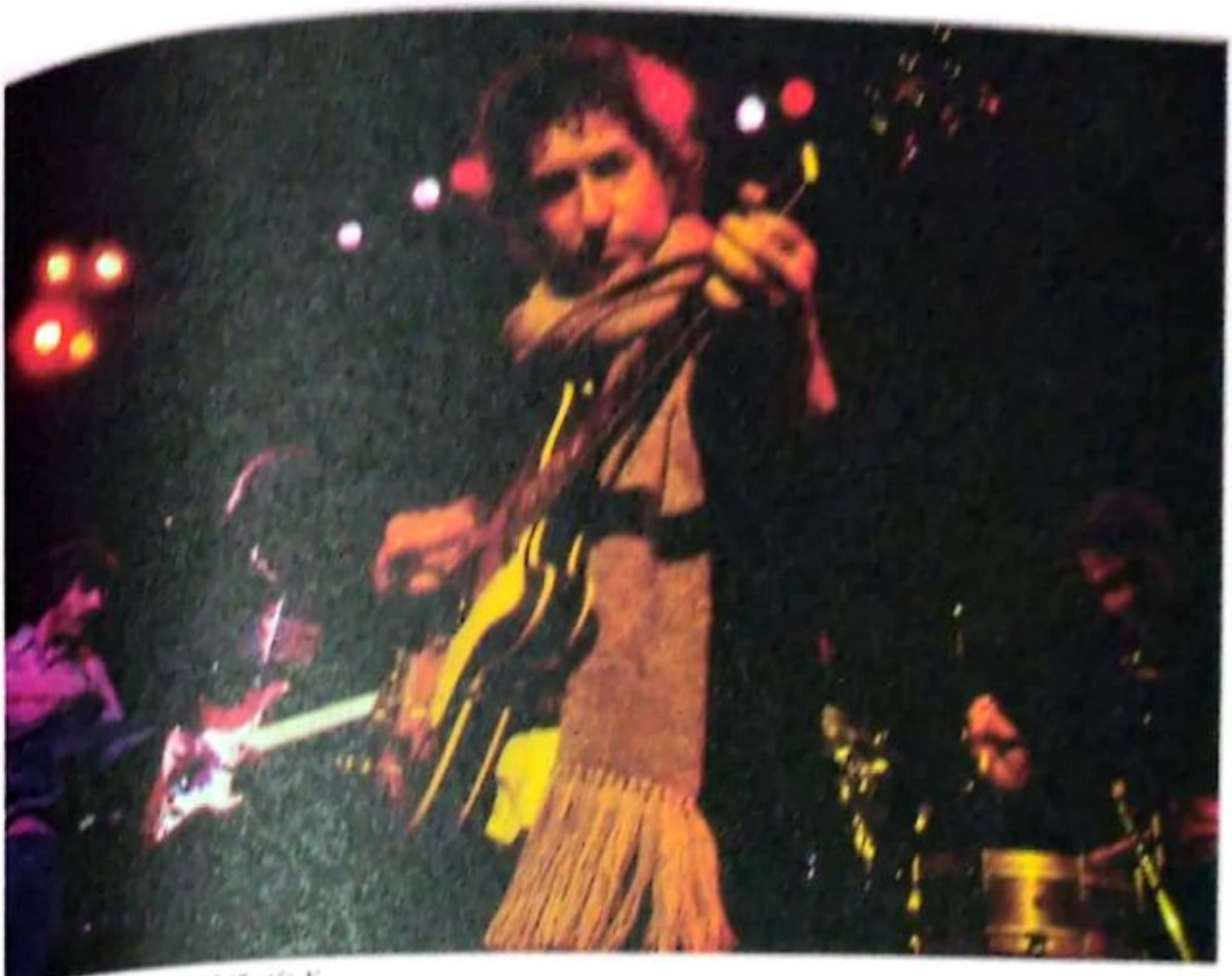
プリンス、ハービー・ハンコックなど多方面に刺激、影響を及ぼし、時代を変えたとされる「サンキュー」のシングル版は『グレイテスト・ヒッツ』に収録。代わってリズムをテンポ・ダウンさせた「サンキュー・フォー・トーキング・トゥ・ミー、アフリカ」を収録。シングル曲のリズミカルな「ファミリー・アフェアー」や「ランニン・アウェイ」もそれまでとはイメージが異なった。大半が陰鬱な印象で、スライ自身の内面とアメリカの状況を反映したもの。マーヴィン・ゲイ『ホワッツ・ゴーイン・オン』との類似、同時代性も興味深い。

Pink Floyd
The Dark Side Of The Moon

1973
Harvest

幻想的な趣向のサイケデリック・ロックから、シンプルなロックを基調にしたヴォーカル・ナンバーの一方、シーケンサーなどの電子機材やSEなどミュージック・コンクレート的な手法によるサウンド・コラージュ的なインストゥルメンタルを共存させたアルバムを相次いで発表。そうした音楽展開に、現代社会における人間のありようをコンセプト・アルバムとして描き出した。現代人に内在する狂気や時間の経過、その概念の喪失、物質主義、拝金主義、各地での紛争など、様々な病巣を浮き彫りにし、問題を提議したシリアスな内容を持つ。

CamScannerでスキャン



1974年、ボブ・ディラン&ザ・バンド
ボブ・ディラン『セア・ブラッド、セア・トラックス
〔ブートレッグ・シリーズ第14集〕』のブックレットから

ポップ・ミュージック55年史②
1974〜78年
ロックの世代交代とディスコの時代〜
世界各地の多様性への視座

北中正和

1974年の1月3日、シカゴ・スタジアムでボブ・ディランとザ・バンドによる全米ツアーがはじまった。ロックの最重要人物の一人とみなされていた60年にバイク事故で重傷を負って以来、ディランは半隠遁状態の謎めいた存在と化していたから、本格的な活動復帰は注目の的だった。

その間に状況は一変していた。ホール中心だった60年代のツアーとちがって、会場はスタジアムやアリーナだった。前回のツアーには、ロックに転じて間もない彼を商業主義に走ったと非難するフォーク・ファンが大勢つめかけたが、8年ぶりの観客はエレクトリック・ギターの演奏に罵声を浴びせることもなく、伝説的な歌手の復帰に喝采を送った。アルバム『プラネット・ウ

ェイヴズ』は彼の初の全米1位作になり、名盤のほまれ高い『血の轍』がそれに続いた。75年のツアーは小さな会場を抜き打ち的に回る〝ローリング・サンダー・レヴュー〟で、その様子は映像化もされた。

ボブ・ディランのシカゴ・スタジアム公演から約9カ月後、コンゴ民主共和国（当時はザイール）のキンシャサのスタジアムで3日間にわたって〝ザイール74〟が行なわれた。これは同地でのモハメッド・アリとジョージ・フォアマンのボクシングの試合に先立って開催されたフェスティヴァルで、ジェイムス・ブラウン、B・B・キング、セリア・クルース、タブー・レイ・ロシュロー、フランコ&TPOKジャズ、ザイコ・ランガ・ランガ、ミリアム・マケバらが出演した。「アフリカとアフリカから離散した〝いとこ〟たちのフェスティヴァル」と企画者のヒュー・マセケラが構想したコンサートからは、ジェイムス・ブラウンやセリア・クルースの映像が商品化されたが、アフリカのアーティストの演奏は、音源の一部以外まだほとんど倉庫に眠ったままだ。

マイルス・デイヴィス
『アガルタ』
（1975年）

以上、長々と書いてきたのは、60年代から70年代にかけてのアメリカの音楽産業の様変わりと、アメリカを中心に回ってきたポピュラー音楽の南北格差や市場経済の現実がよくわかるからだ。と一気に話を進めるのは乱暴すぎるので、話を巻き戻そう。

60年代前半まで、ティーンエイジャーは大人になれば〝反抗的〟なロックンロールや〝子供だましの〟ティーン・アイドルの音楽から卒業すると思われていた。しかし60年代後半以降、ミュージシャンは自分の年齢に見合う音楽を作りはじめ、ビートルズやボブ・ディランを聴いて育ったファンもそれを求めた。

その結果、多様なハード・ロック、クラシックやジャズの要素を取り入れたプログレッシヴ・ロック、シンガー・ソングライターの穏やかな音楽、アメリカ南部色の強いサザン・ロック、性を超越したファッションが話題のグラム・ロックなど、新しい装いをまとった音楽が次々に登場してきた。

ソウルの世界でも、ジェイムス・ブラウンやスライ&ザ・ファミリー・ストーンらが切り拓いたファンクの16ビートの感覚を、カーティス・メイフィールド、マーヴィン・ゲイ、スティーヴィ・ワンダーらも共有するところとなり、ジャクソン5のような新世代のアイドルが登場。アース・ウィンド&ファイアーやPファンクがその人気を受け継ぎ、フィラデルフィアのゴージャスなソウルも注目を集めた。

ファンクに呼応するようにジャズの世界ではマイルス・デイヴィスが電気楽器を使った16ビートの演奏をはじめ、多くのジャズメンがそれに追随した。ソウルやロックとのクロスオーヴァー現象が進んだ音楽は、70年代後半には〝フュージョン〟と名付けられた。

リトル・フィートやスティーリー・ダンやドゥービー・ブラザースはロックにそうした語法を持ちこみ、タキシードを着てロックをやるミュージシャンが登場し、AOR（アルバム・オリエンテッド・レイディオ、アダルド・オリエンテッド・ロック）という言葉が使われはじめた。

成熟し洗練されていったロックやその関連音楽では、アルバムが主力商品になった。67年から77年にかけてアメリカのレコード売り上げは約3倍に増え、76年から売り上

CamScannerでスキャン

ゴールド（50万枚）、プラチナ（100万枚）という記録単位ができ、2月にイーグルスの『グレイテスト・ヒッツ』が初のプラチナ・アルバムに認定された。76年から78年にかけては、イーグルス『ホテル・カリフォルニア』、フリートウッド・マック『ファンタスティック』『噂』、ビー・ジーズらによるサントラ盤『サタデー・ナイト・フィーバー』などの売り上げが次々に1000万枚を超えた。そして増え続けるファンに対応するための会場としてスタジアムやアリーナが定着していった。

ボブ・ディランの74年のツアーのプロモーターは、60年代後半にサンフランシスコの小さな小屋、フィルモアでロックのイヴェントを仕切っていたビル・グレアムだ。75年夏にはじめてカリフォルニアを訪れたとき、彼はベイエリアのスタジアムなどでデイ・オン・ザ・グリーンという野外イヴェント・シリーズを開催しており、デイヴ・メイスン、ピーター・フランプトン、フリートウッド・マック、スティーヴン・スティルス、ジェシ・コリン・ヤングなどを楽しんだことが懐かしく思い出される。

世界各地のポピュラー音楽の多様性

ポピュラーミュージック・マガジン』では以上のような音楽を通常取り上げていたが、現象として大きかったのにはとんど無視していた分野がある。ディスコだ。アメリカで黒人やゲイ向けのディスコが注目されたのは73年ごろからだ。当初はマヌ・ディバンゴ「ソウル・マコッサ」、バリー・ホワイト「愛のテーマ」、ジョージ・マックレー「ロック・ユア・ベイビー」などいろんなタイプの黒人音楽がかかっていたが、75年ごろにはヴァン・マッコイの「ザ・ハッスル」のように4分の4拍子のビートを機械的に強調した、いわゆるディスコ調の音楽が増えてきた。

78年には映画『サタデー・ナイト・フィーバー』がヒットして大ディスコ・ブームが訪れる。〝スタジオ54〟などは、人種、年齢、性別にこだわらない社交の場として、スノッブが集まるニューヨークの観光名所となった。アバは「ダンシング・クイーン」のディスコ・ヒットをきっかけにポップ・アイコンに成長し、ローリング・ストーンズの「ミス・ユー」やロッド・スチュワートの「アイム・セクシー」といったディスコ狙いの曲もヒットした。ミュンヘンからジョルジオ・モロダーのプロデュースで登場したドナ・サマー、ナイル・ロジャーズがいたシックのようにディスコから生まれた人気スターもいたが、ディスコの曲の大半は匿名性が高く、テレビ番組ではメンバーの入れ替え可能な企画色の強いユニットが踊っていた。

『サタデー・ナイト・フィーバー』
米公開時のポスター

70年代中期にはロックの世代交代も進んだ。70年代半ばにCBGB、マクシズ・カンサス・シティなどのクラブに出演しはじめたニューヨーク・パンクのグループは、アメリカではアンダーグラウンドな存在だったが、76年にラモーンズのイギリス・ツアーが大反響を呼んだころから、風向きが変わりはじめた。

パンクの先駆的存在ニューヨーク・ドールズの末期のマネジャーだったマルコム・マクラレンはロンドンに戻ってセックス・ピストルズをデビューさせた。彼らの扇動的な「アナーキー・イン・ザ・UK」を追ってクラッシュをはじめ無数のパンク・バ

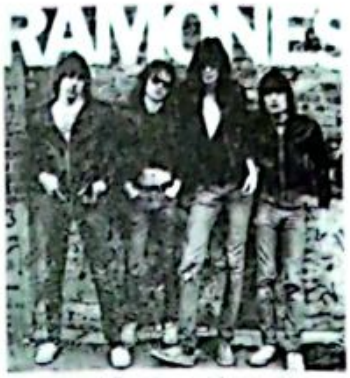
CamScannerでスキャン

ンドがデビューした。当時のイギリスは不況が続き、失業者の多くは若年層で、パンクは彼らの表現だった。

パンクによって、ロックは粗野で強烈なビートや反抗的なイメージを取り戻した。若いミュージシャンは高度に洗練された技術がなくても、リズムとサウンドで音楽が楽しめることを発見した。パンクからニュー・ウェイヴ／ポスト・パンクの時期にかけてのめまぐるしい転換には、凝ったアルバムより勢いで出すシングルのほうがふさわしく、ディスコのフロア用に使われていた12インチ・シングルの形が重用された。

この時期イギリスで、パンクとジャマイカ生まれのレゲエが〝反抗の音楽〟として出会ったのも重要だった。ジャマイカ系移民の多いイギリスでは60年代からレゲエの前身であるスカがヒットしていた。レゲエが登場した70年代前半にはエリック・クラプトンが「アイ・ショット・ザ・シェリフ」を、ローリング・ストーンズが「チェリー・オー・ベイビー」をヒットさせた。しかしそれらが音楽業界の枠内での出来事だったのに対し、パンクとレゲエの交流はストリート感覚に根ざしていた。クラッシュとリー・ペリーの出会いは、リー・ペリーがプロデュースしたボブ・マーリーの「パンキー・レゲエ・パーティ」や、ロック・アゲインスト・レイシズムの運動にまで広がっていった。DJのエイドリアン・シャーウッドのように「パンキー・レゲエ・パーティこそ当時の時代精神を表わすものだ」という人もいる。この時期にニューヨークの移民クール・ハークがジャマイカの野外ディスコ、サウンド・システムをブロンクスに持ちこんでヒップホップへの道を拓いたこと、サウンド・システムから派生したダブが80年代以降のポピュラー音楽のサウンド作りに測り知れない影響を与えたことも忘れられない。

70年代中期以降『ニューミュージック・マガジン』は英語圏以外の音楽にも視野を広げていった。悲惨な植民地貿易の結果とはいえ、アフリカの音楽のグルーヴが世界に広がり、20世紀のポピュラー音楽の背骨を支えていることの重要性や、アメリカの音楽と対照できる歴史を持つ世界各地のポピュラー音楽の多様性は、いくら強調しても足りないと中村とうよう編集長は考えていた。これは冒頭のヒューマセケラの〝いとこ〟発言とも重なるものだ。



ラモーンズ『ラモーンズの激情』
(1976年)

1977年8月号
表紙＝ボブ・マーリー
&ピーター・トッシュ

ニューヨーク・ラテンのサルサ、ブラジルのサンバの復活とMPBの進展、アフリカ各地の新しいポピュラー音楽などが随時記事化されたが、特筆されたのはナイジェリアのフェラ・クティだった。70年代中期は彼がジャズ、ファンク、西アフリカのハイライフなどの要素を統合し、政治的メッセージを伝えるアフロビートを完成させた時期だ。軍事政権に批判的な彼の拠点、カラクタ共和国が軍隊に放火・襲撃された77年の事件は衝撃的だった。当時、音楽業界で彼を認識していた人はわずかだったが、歴史は変わった。21世紀にアフロビートの世界化が進み、ブロードウェイ・ミュージカルまで作られたことはご存じのとおりだ。

CamScannerでスキャン

Celia & Johnny
Celia & Johnny

1974
Fuya

ニューヨークでは70年代からルンバ、ソン、ファンタジャなどを様々なラテン音楽が混淆されてきた。その流れを受け継ぎ、自らもジャズの感覚も加えた音楽が70年代にサルサとして世界に広まった。それを主導したファニア・レーベルの制作陣でトニカ出身のジョニーがキューバ革命後アメリカに亡命していたセリアと作ったのがこれ。調子よしの"キンバラ"、アフロ・コロンビア曲"トロ・マタ"などの名演は、サルサがキューバ音楽を基本にしながら汎中南米的な音楽として成立したことも教えてくれる。

Kraftwerk
Autobahn

1974
Philips

イギリスではじまったプログレッシヴ・ロックは、70年代にヨーロッパ各地に広まった。クラフトワークは電子音やノイズを使った実験的な音楽でドイツの工業都市デュッセルドルフから登場し、この4作目でポップに舵を切った。高速道路がテーマのタイトル曲では、ロック的なベースやドラムを徹底還元した簡潔なリズムの上で、シンセサイザーや歌声による走行の現実描写が展開する。80年代以降のエレクトロなポップの先駆的存在。次々作の『ヨーロッパ特急』がアフリカ・バンバータに影響を与える日がくるとは当時は想像もできなかった。

Bob Dylan
Blood On The Tracks

1975
Columbia

ツアーを休止していた5年間もボブ・ディランはアルバムを出し続けていた。しかし声色を変えてナッシュヴィル風のカントリーをやったり、ジャンルを超越したカヴァー曲中心のアルバムを出したりして、ファンを当惑させてもいた。その間に新しい世代のシンガー・ソングライターが多数登場して世代交代が進む中、ツアー復帰後に出たこのアルバムは、時間の構成の工夫で物語歌の枠を広げ、幻想的な叙事詩人としての底知れない才能をあらためて発揮したもの。ボール・ブレイディから学んだオープンD調弦の影響も指摘されている。

Caetano Veloso
Jóia

1975
Philips

60年代のブラジルのカウンター・カルチャーの旗手だったカエターノは軍事政権に追われてロンドンに亡命。帰国してから実験的な音楽でMPBと呼ばれるポピュラー音楽の地平を広げていった。サンバ/ボサノヴァをルーツにするアコースティックな音楽、ブラジル各地の音楽と連動するアフリカ音楽、ビートルズをはじめとするロックの色彩感、クラシックの室内音楽の要素などを配合して、この素晴らしいアルバムを作りあげた。発表時は不思議な音楽としか言えなかったが、いまならチェンバー・ポップの名作と呼びたい。

Queen
A Night At The Opera

1975
EMI

クイーンがデビューしたときはレッド・ツェッペリンの亜流のポップスだと思った。しかしアルバムを重ねるにつれて、それは彼らの音楽の一側面にすぎないことがわかってきた。ハード・ロック、プログレ、クラシック、民謡…多様な要素を鋏で切り張りしたようにコラージュされた彼らの人工的な音楽は、いまにして思えば、ポップ・ミュージックにおいて編集が重要な意味を持つ時代を先取りするものだったのかもしれない。ミュージック・ホールの時代から続くイギリスの大衆芸能の下世話さもしっかり感じさせる。

CamScannerでスキャン

Bob Marley & The Wailers

Live!

1975
Island

70年代はジャマイカのレゲエが国際的に認知された時期で、そのきっかけを作ったのはジミー・クリフやボブ・マーリーだった。イギリスのアイランド・レーベルと契約したウェイラーズは、バニー・ウェイラーとピーター・トッシュの退団後、ボブ・マーリーと女性コーラスの組み合わせで再編され、被抑圧者の視点に立つ音楽で、欧米のロック・ファンや開発途上国の若者たちに影響を与え続けた。ロックやソウルと同じ楽器編成なのに異なるリズム、メランコリックなのに情熱的な歌声を忘れ難いものにしたライヴ盤。

Eagles

Hotel California

1976
Asylum

70年代に入るころからロサンゼルスにはザ・バーズ、ポコ、フライング・ブリトー・ブラザーズなどの流れをくむシンガー・ソングライターが集まってきた。その離合集散の中で、リンダ・ロンシュタットのバック・バンドから出発したイーグルスは、ドン・フェルダーやジョー・ウォルシュを加えてハードさを増し、ヴァン・ヘイレンらが登場する前のロサンゼルスの音楽を集約する存在に。建国200年を意識したこのアルバムは、カウンター・カルチャーの夢の名残と巨大ビジネス化したロックの現実の狭間で展開する享楽と憂鬱の物語。

Parliament

Live (P. Funk Earth Tour)

1977
Casablanca

60年代後半に誕生したファンクは、70年代にはR&Bの基本的なサウンドになり、それをポップなエンタテインメントに昇華したアース・ウィンド&ファイア、コミック的な演劇精神を盛りこんだジョージ・クリントン率いるPファンク（パーラメント／ファンカデリック）などが人気を集めた。メイシオ・パーカーをはじめ元ジェイムス・ブラウン・バンドのメンバーやクラシック畑出身のバーニー・ウォレルらが参加した演奏と複数の歌手が交錯する音楽は、R&Bの多様な伝統を踏まえつつ自由度の高いもので、後のヒップホップにも直結。

Fela And Afrika 70

Zombie

1977
Coconut

教育者や女性運動家の両親のもと、ある種の"ぼんぼん"として育てられたフェラはイギリスに留学してジャズを学び、ナイジェリアに戻ってからも放送局でジャズを紹介していた。しかしハイライフやジェイムス・ブラウンのファンクやアメリカの公民権運動と出会って、方向を転換。強靭なリズムと豊かな諷刺精神を持つ音楽をドラマーのトニー・アレンらと作り上げ、アフロビートと名付けた。軍隊をゾンビにたとえた表題曲は、スピード感のあるリズムに乗って、キーボードやサックスのソロ、歌とコーラスが展開する驚くべき音楽。

Sex Pistols

Never Mind The Bollocks

1977
Virgin

ロンドン・パンクのポジティヴな側面を象徴していたのはクラッシュ、扉を開けたのはセックス・ピストルズだった。マルコム・マクラレンという策略家のマネジャーのもと、過激さを売り物にする企画グループとして作られたところもあったが、メンバーは演技を超えた現実味を感じさせる資質に恵まれていた。このデビュー・アルバムでは、プロデューサーのクリス・トーマスが、シンプルな演奏をメタリックな重量感のある音に仕上げ、ヴォーカルやコーラスの諧謔味や迫力を引き出し、パンクを"音楽"として認知させることに貢献。

CamScannerでスキャン

1983年撮影、トーキング・ヘッズ『ストップ・メイキング・センス』から（映画公開は84年）
写真＝Jordan Cronenweth, Courtesy of A24

ポップ・ミュージック55年史③
1979〜83年

最大級のイノヴェーションがあった80年代ほど面白かった時代はない

高橋健太郎

1980年代の音楽は、現代では60年代や70年代のそれに比べて、軽く見られがちである。ヴィンテージな価値は認められず、ダサい時代と片づけられたりもする。だが、僕はそれにしばしば異議を唱えてきた。80年代ほど面白かった時代はないと。ポップ・ミュージックの歴史を振り返っても、80年代は最大級のイノヴェーションがあった時代だ。なにしろヒップホップが興った。60年代以後の僕の音楽聴取体験の中で、まったく新しい、巨大なジャンルの誕生を目撃したのは80年代だけである。

ただ、アルバム単位で時代を振り返ると、80年代の経験はこぼれ落ちてしま

CamScannerでスキャン

うちのが多い。今回の企画で僕は1979～83年を担当しているが、この5年で最も衝撃的な1曲は、アフリカ・バンバータ&ソウル・ソニック・フォースの「プラネット・ロック」である。82年の夏に、僕は初めて訪れたNYでそれに遭遇した。何だかよく分からない音楽が街中で鳴り響いている。その衝撃は絶大だったが、それを振り返ることができるようなアルバムはない。

そういう意味では、今回選んだ1979～83年のアルバム10枚は必ずしもこの時代の空気感を伝えられるものではない、ということは断っておきたい。アルバムに刻まれるには至らなかったアンダーグラウンドな衝撃体験も数多くあった。そういう時代だったのだ。

70年代には僕はアメリカのシンガー・ソングライターの音楽に強い影響を受けていた。あるいは、ザ・バンドやグレイトフル・デッドやリトル・フィートといったアメリカのロック・バンドにも。だが、79年にはそうしたアメリカン・ミュージックへの興味はかなりしぼんでいた。リッキー・リー・ジョーンズのデビュー・アルバムはそんな中で発表された70年代最後のシンガー・ソングライター名盤と言ってもいい1枚だった。今回選んだ10枚の中では唯一のロスアンジェルス産の音楽だ。

一方で、パンクからニュー・ウェイヴへの移行期にあったイギリスの音楽は79年だけで強烈な印象を残すアルバムが列をなす。クラッシュの『ロンドン・コーリング』、ジョイ・ディヴィジョンの『アンノウン・プレジャーズ』、ギャング・オブ・フォーの『エンターテインメント!』、スロッビング・グリッスルの『20ジャズ・ファンク・グレイツ』、ポップ・グループの『Y』、ディス・ヒートの同名アルバムなどなど。アルバム『ドラムス・アンド・ワイアーズ』発表直後のXTCの来日もこの年で、僕の音楽生活を大きく変えるきっかけになった。だが、79年のロック・アルバムから1枚だけを選ぶなら、これはスペシャルズのデビュー作しかない。

スペシャルズ

白人黒人混成のバンドが古いジャマイカ産のダンス・ミュージックを掘り起こす。そのアティテュードは現代に至るレコード文化～ディガーと呼ばれるコレクター気質の興隆にも大きな影響を残している。僕も刺激を受けて、スカのみならず、古いR&Bやラテンなどのレコードをやみくもに漁るようになっていった。移民の音楽～ディアスポラの音楽という視点が開けたのも、スペシャルズ以後のイギリスのユース・ムーヴメントのお陰だったし、それがアンチ・レイシズムの運動の起点ともなったことは、今でも大きな意味を持っていると思う。

80年代の幕開けとともに、新しい時代に突入していく感覚はより強力になる。それを象徴する1980年発表のアルバムがトーキング・ヘッズの『リメイン・イン・ライト』だ。パンク・ムーヴメントとともに登場した4人組のロック・バンドが、ブライアン・イーノと組み、アフロ・ファンク的なビートと実験的なサウンドを融合させた音楽に進んだ。

CamScannerでスキャン

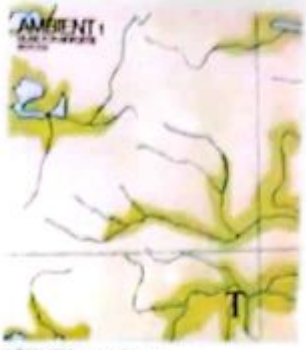
は比較的早期に、同種の志向を持つバンドは数多く現れた。ポップ・グループから派生したビッグ・バッグやリップ・リグ&パニックの登場も80年。イギリスのニュー・ウェイヴ系のロック・バンドはこぞって、アフロやファンクやレゲエの要素を持つリズミックなサウンドに傾斜していく。日本ではYMOが人気爆発、JAGATARAが始動した頃でもあった。ロック界だけでなく、ジャズの世界でもアブストラクトなジャズ・ファンクが台頭。ジェームズ・ブラッド・ウルマーの大傑作『アー・ユー・グラッド・トゥ・ビー・イン・アメリカ?』も80年である。

そんな中でリズムへの興味が拡大するとともに、もうひとつ、僕の中で膨れ上がっていったのがダブへの興味だった。もともとはジャマイカのレゲエ・シーンから発したダブというサウンド手法がロックやポップにも浸透。ブリティッシュ・レゲエ・バンド、マトゥンビのリーダーで、リントン・クウェシ・ジョンソンのプロデューサーでもあったデニス・ボーヴェルが、ポップ・グループやスリッツのアルバムを手掛けたことも大きなエポックだった。そのあたりの流れにいちはやく反応した坂本龍一の『B-2UNIT』で、ボーヴェルがダブ・ミキシングを行なったのも80年だ。この1年だけでどれだけの驚きを体験したか、思い返すと気が狂いそうになる。

ブライアン・イーノはパンクやニュー・ウェイヴと関わる一方で、アンビエント・ミュージックを提唱。78年の『ミュージック・フォー・エアポーツ』はその記念碑的作品だった。イーノの周辺でハロルド・バッド、ララージ、ジョン・ハッセルらの音楽に触れたことも、既存の音楽観を大きく書き換える出来事になった。

ジェームズ・ブラッド・ウルマー
『アー・ユー・グラッド・トゥ・ビー・イン・アメリカ?』

坂本龍一『B-2UNIT』


ブライアン・イーノ
『ミュージック・フォー・エアポーツ』

80年代前夜〜幕明けの喧騒の中で

パンク〜ニュー・ウェイヴは世代交代を求めるムーヴメントだったとも言えるが、ことイギリスのプログレッシヴ・ロック人脈に限っては、イーノのようにそれに呼応して、むしろ元気になった才人が少なくなかった。『ミュージック・フォー・エアポーツ』でピアノを弾いたロバート・ワイアットは1980年以後、パンクの代表レーベルのひとつだったラフ・トレードからシングルを発表。その一枚一枚が静かな驚きをもたらした。ピーター・ゲイブリエルがワイアットもカヴァーした「ビコ」を含む3作目のソロ作を発表したのも80年。世界各地の民族音楽への興味を募らせたゲイブリエルは、82年にはWOMADフェスティヴァルを成功させ、ワールド・ミュージック・ブームを引き寄せることになる。

ゲイブリエル脱退後のジェネシスでヴォーカリストとして開花したフィル・コリンズは81年以後、ソロ・アーティストとして大成功を掴むが、同時期のジェネシスも充実していた。とりわけ、80年の『デューク』は近年、聴き返すことが多い。ロバート・フリップのキング・クリムゾンがエイドリアン・ブリューをメンバーに迎え、トーキ

CamScannerでスキャン

ング・ヘッズとも共振するポリリズミックなサウンドに向かったアルバム『ディシプリン』は81年だ。

ロバート・ワイアットのラフ・トレードからのシングル群の中でも、僕が最も驚いたのは「僕は自由(At Last I Am Free)」だった。それはシックの78年のアルバム『エレガンス・シック(Chic)』中の曲のカヴァーだった。ナイル・ロジャースの率いるシックというグループにはそれまでのソウルやディスコにはない何かが感じられた。シックは79年にアルバム『危険な関係(Risque)』を発表。その冒頭に置かれたのが、後にラップのブレイクビーツの定番となる「グッド・タイムス」だった。そのベース・ラインが弾いてみたくて、初めてベースという楽器を買ったのを思い出す。

1983年9月号
表紙＝キング・サニー・アデ

リズムへの興味からシックのような新しいファンクにも目が向く中、80年のザップのデビュー・アルバムにも衝撃を受けた。リズム・マシーンやヴォコーダーを使った未来形のテキサス・ファンクだ。そのクールネスはリントン・クウェシ・ジョンソンの『ベース・カルチャー』と双璧だった。81年のルーサー・ヴァンドロスのデビュー・アルバムも新しいソウル・ファンクの幕開けを感じさせる傑作だった。ラッキーなことに、その翌年、僕は初めてNYを訪れ、ルーサーが拠点としたメディアサウンドにも足を踏み入れた。スタジオの外では冒頭で触れた「プラネット・ロック」が鳴り響いていた。

僕が本誌に原稿を書くようになったきっかけも、その82年の海外渡航である。NYを経由してジャマイカに渡った。レゲエ・サンスプラッシュというフェスティヴァルを取材し、それをレポートしたのだ。ボブ・マーリーが死去した翌年。レゲエの世界にも変化が訪れていた。その原動力となっていたのがスライ&ロビーというリズム・セクションで、彼らの姿はジャマイカに飛ぶ直前に、NYのブラック・ウフルーのコンサートで目にした。そのコンサートのオープニングがアフリカ・バンバータ&ソウル・ソニック・フォースで、同時にヒップホップのライヴの初洗礼も受けた。

ジャマイカのレゲエを世界にマーケッティングする代表レーベルだったアイランド・レコードは、82年にはナイジェリアのキング・サニー・アデの世界進出を企てた。一方ではU2ほかのイギリスのロック・バンドを成功させていて、余裕があったのだろう。83年のNYで僕はキング・サニー・アデを観て、ハーレムのレコード店で何だか分からないアフリカ音楽を大量に買って帰ってきた。本誌の年間ベスト企画に参加させてもらったのは83年からだが、たくさん聴いたアフリカ音楽の中でもそこでベストとして紹介したのが、ユッスー・ンドゥールのセネガル盤'Mouride'というアルバムだった。これはまだ中村とうようも知らないだろう、というヒヨッコ・ライターの背伸びだった。

音楽業界で仕事を始めた時期でもある1979～83年を僕はそんな喧騒の中で過ごした。それまで影響を受けてきたアメリカのロック・ミュージックをほとんど聴かなかった時期と言ってもいいが、83年には変化の兆しが訪れた。ロスアンジェルスの遊園地で、Rapid Eye Movementというバンドのライヴに遭遇したのだ。後のR.E.M.である。

CamScannerでスキャン

◆1979~83年 最重要アルバム・ガイド

文・選＝高橋健太郎

Rickie Lee Jones
Rickie Lee Jones

1979
Warner Bros.

リッキー・リー・ジョーンズの鮮烈なデビュー作は、レニー・ワロンカーとラス・タイトルマンが手掛けた70年代最後のシンガー・ソングライター名盤でもあった。スティーヴ・ガッド、ウィリー・ウィークス、麻薬禍から脱したバジー・フェイトンほかの精鋭達が完璧にサポート。サウンドも超ハイファイ。トム・ウェイツ、チャック・E・ワイスらとの交遊を反映した物語性高いソングライティングも魅力だった。インナースリーヴのリッキー、レニー、ラスの幼少時スリー・ショットの真偽がいまだに気になっている。

The Specials
The Specials

1979
Two-Tone

ロンドン近郊のコヴェントリーから登場した白人黒人混成バンド、スペシャルズのデビュー・アルバム。プロデュースはエルヴィス・コステロ。リーダーの鍵盤奏者、ジェリー・ダマーズは2トーン・レーベルを主宰し、スカ・リヴァイヴァルを先導。フロントに立つテリー・ホールは怒れるルード・ボーイの代表となり、ストリート・ダンス・ミュージックの中に社会へのプロテストを吹き込んだ。パンクの精神とヴィンテージなジャマイカ音楽への愛を融合させ、アンチ・レイシズムの先頭にも立った彼らの影響力は、世界規模で現代まで息づく。

Linton Kwesi Johnson
Bass Culture

1980
Island

ブリティッシュ・レゲエの中から登場したダブ・ポエット、リントン・クウェシ・ジョンソンが階段を下っていく。寒いイギリスに生まれたジャマイカンがアンダーグラウンドに脈打つ自分達のベース・カルチャーと触れ合う。そんなイメージを視覚化したジャケットが鮮烈だ。デニス・ボーヴェル率いるバンドのダブ・トラックとLKJの沈静感のあるポエトリー・リーディングが絶妙に溶け合い、厳格な完成美を放つ音楽に昇華されている。ヒップホップを知る前に、自分がこんな音楽を聴いていたという事実が、今では信じられなくなった。

Genesis
Duke

1980
Charisma

80年代の初頭、リアル・タイムではピーター・ゲイブリエルのソロ作をよく聴いたが、近年は同時期のジェネシスを聴き返すことが多い。とりわけ、フィル・コリンズのソロ活動前夜の1980年に発表された本作は、スケール大きいバンド・サウンドとポップ・ソングへの志向とのバランスを上手くとり、深みあるトータル・アルバムに仕上げた傑作だった。商業的にも全英チャート1位、アメリカでも売れて、ジェネシスというバンドのピークを記録。冒頭のシンセの音色だけでエイティーズへの甘酸っぱい郷愁で胸が一杯になる。

Zapp
Zapp

1980
Warner Bros.

オハイオ出身のファンク・バンド、ザップのデビュー・アルバム。Pファンクのブーツィー・コリンズが共同プロデュースしたが、リズム・マシーンやヴォコーダーを使った彼らの未来派ファンクは独自性が高く、80年代の幕開けを強く感じさせた。リーダーのロジャー・トラウトマンはジョニー・ギター・ワトソンとプリンスの間に位置するような才人。ヘヴィかつ粘性の高いグルーヴとジャジーなハーモニーを駆使しながら、洒落っ気やユーモアにも富んだダンス・チューンを生み出した。後にヒップホップに与えた影響も巨大だ。

CamScannerでスキャン

Talking Heads
Remain In Light

1980
Sire

トーキング・ヘッズは1979年の『フィアー・オブ・ミュージック』でアフリカン・ミュージックに急接近。そのプロデューサーだったブライアン・イーノが本作ではデヴィッド・バーンと多くの曲を共作し、5人目のメンバーと言ってもいい働きをして、バンドの音楽を異次元に押し上げた。トランシーなアフロ・ファンクをベースに、ダブ的な手法も駆使して構築されるサウンド空間は、イーノ&バーンの実験作『ブッシュ・オブ・ゴースツ』(81年に発表)をふまえたものだが、ゲスト参加したジョン・ハッセルの影響も強く感じられる。

Luther Vandross
Never Too Much

1981
Epic

セッション・シンガーとしての活動が長かったルーサー・ヴァンドロスが1981年、30歳にして発表したソロ・デビュー作。ルーサー自身が書いたタイトル曲がヒットし、アレンジャーのナット・アダレイ・ジュニア、エンジニアのマイケル・ブラウワーとともに生み出したサウンドでもニューヨーク産のソウル・ミュージックに新風を吹き込んだ。非マッチョで、シャイで、真摯なルーサーの佇まいも新しかった。パワー・ステーションを拠点とするシック一派と、メディアサウンドを拠点とするルーサー達が好ライバルに見えた時代だった。

Robert Wyatt
Nothing Can Stop Us

1982
Rough Trade

ロバート・ワイアットが1980年から81年にかけてラフ・トレードに残したシングルの編集盤。キューバ民謡の「グァンタナメラ」やビリー・ホリデイの「奇妙な果実」、ビオレータ・パラの曲や在英ベンガル人グループとの共演もあれば、発表されて間もないシックの曲もカヴァーされる。時空を駆け巡るワイアットの音楽観と、自由自在の曲解釈~アレンジメント、それをごくごく個人的な録音作品として提出する様に強い刺激を受けた。共産主義者だったワイアットの世界人民への連帯が強く表明された内容でもある。

Sly & Robbie
Crucial Reggae -
Driven By Sly & Robbie

1982
Island

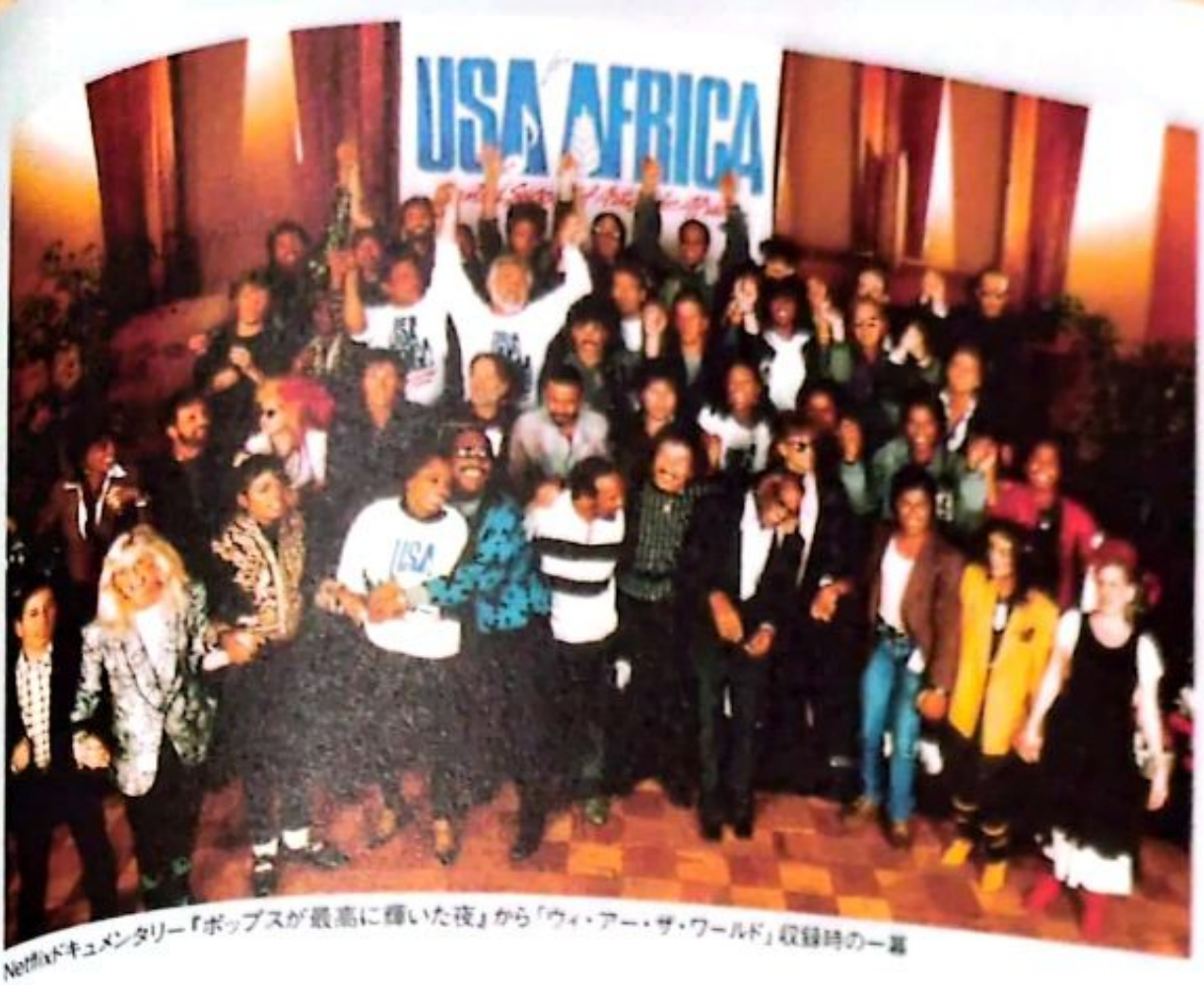
1982年、僕がジャマイカを初めて訪れた年には、レゲエ・シーンはスライ&ロビーというリズム・セクションを中心に回り始めていた。本作は彼らが制作したジャマイカン・アーティストのコンビレーションで、この年に人気爆発したマイティ・ダイアモンズやイエローマンも含まれている。ソウルやファンクとも触れ合うソリッドなビート感覚を持つ彼らは、バハマのコンパス・ポイント・スタジオのハウス・バンドにも参加。ロック・アーティストのレコーディングにも数多く貢献した。80年代のリズム感覚は彼らを抜きにしては語れない。

The Police
Synchronicity

1983
A&M

1983年のポリスのラスト・アルバムは、ニュー・ウェイヴ以後の英ロックの終着点にも思える。スティングがソングライターとして才気爆発。一方で、メンバー間の関係は最悪だったというが、その3人のモンセラット島での合宿録音が、プログレであり、パンクであった奇妙なバンドの燃え尽きる様を刻み込んだ。ヒット曲ではない部分にヒリヒリするような緊迫感が漂う。エンジニアのヒュー・パジャムの仕事も素晴らしい。LPとCDが同時発売された最初期の一枚でもあり、そのどちらでも音が良かった稀有なアルバムだ。

CamScannerでスキャン



Netflixドキュメンタリー『ポップスが最高に輝いた夜』から「ウィ・アー・ザ・ワールド」収録時の一幕

ポップ・ミュージック55年史④
1984〜88年

一気に押し寄せたデジタル化の波——やけに賑やかだったポップ音楽シーン

萩原健太

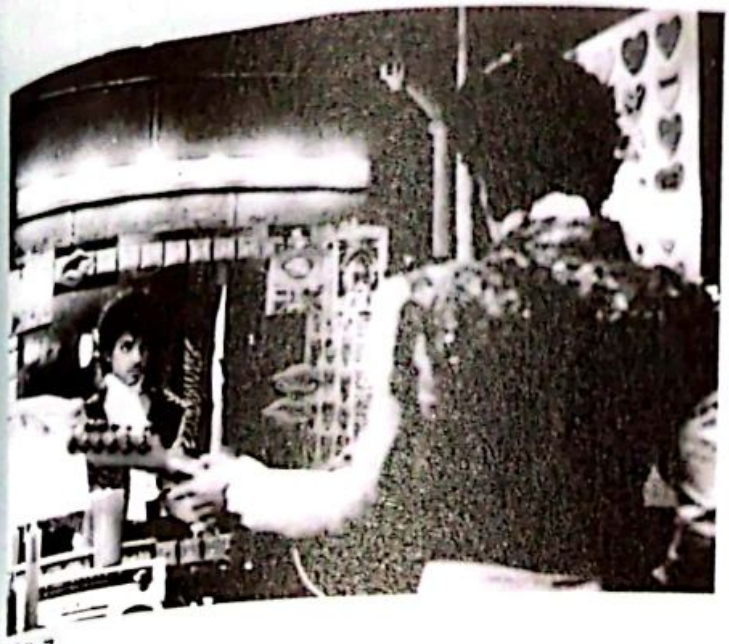
個人的な話で恐縮だが。まだ駆け出しライターだったぼくが本誌で初めて原稿を書かせていただいたのがまさにこの時期。1980年代半ば。40年前か…。懐かしい。英米のポップ音楽シーンもやけに賑やかだった覚えがある。

MTVもすっかり定着。レコード・リリースに合わせて豪勢な予算を注ぎ込んだミュージック・ヴィデオが制作されることも必須に。そうした様々な要素の相乗効果でヒットの規模も右肩上がり。ポップ音楽シーンはそれまでとは比較にならないビッグ・ビジネスへと膨れ上がった。80年代の到

CamScannerでスキャン

デジタル技術の流入と〝エイド〟もの

こうした状況を生んだ要因のひとつが当時最新だったデジタル技術の本格的流入だろう。音楽制作の現場にこの時期一気にデジタル化の波が押し寄せた。楽器も変わった。機材も変わった。CDという新たなデジタル再生メディアも未来の音楽として喧伝され始めた。仕事量もまだ少なかったため、原稿執筆だけでなく作曲やら編曲やらできることなら何でもやっていたぼくは、当時のレコーディング・スタジオでシンセサイザーやコンピューターの使用がごく当たり前になったことでエレクトロニック・ジャンルが飛躍的に幅を広げたオタクな室内楽的ファンキー・ポップという風情のスクリッティ・ポリッティや、いわゆる〝ユーロビート〟の担い手的プロデューサー・チーム、ストック／エイトケン／ウォーターマンが送り出したバナナラマ、リック・アストリー、カイリー・ミノーグらの大活躍は、こうしたテクノロジーの発達なくしてはあり得ないものだった。R&Bやヒップホップ・シーンでも、もはや音作りの基本はデジタルに。若い世代だけでなく、エレクトロ・ポップの要素も巧みに取り込んだ本格カムバック作『プライヴェート・ダンサー』（84年）をヒットさせたティナ・ターナーのようなヴェテラン勢も健闘した。こうした動きがジャンルの壁をそれまで以上に曖昧にぼかし、モータウンの大御所、ダイアナ・ロスやライオネ



プリンス

ル・リッチーらヴェテラン黒人アーティストたちがアダルト・コンテンポラリー系のラジオ局を巻き込んで時代を代表するスターの座につくことになった。

そんなジャンルの交錯劇を象徴するムーヴメントが、いわゆる〝エイド〟ものだ。エチオピアの飢餓を救おうというボブ・ゲルドフの呼びかけに応えて集結した英国およびアイルランドのスターたちがハンド・エイド名義でリリースした「ドゥ・ゼイ・ノウ・イッツ・クリスマス」（84年）と、アフリカの飢餓と難民を救済しようという目的の下、ハリー・ベラフォンテが構想し、クインシー・ジョーンズがプロデュース、ライオネル・リッチーとマイケル・ジャクソンが曲を書き、米国の多彩なスーパースターたちがUSAフォー・アフリカ名義で一堂に会して歌った「ウィ・アー・ザ・ワールド」（85年）。この動きがそのまま大規模なチャリティ・コンサート＝ライヴ・エイド（85年）へとつながっていった。ジャンルを超えた一大イヴェント。が、打ち出しが大仰だったぶん、これが当時の英米ポップ・シーンのある種、終着点的なピークを形成してしまったのも事実。69年のウッドストック・フェスティヴァルともまた違った形で、とてつもない高揚感だけを残し、以降、シーンはそれまで以上のスピードで細分化していくことになる。

ギャップを取り戻すための5年間

と、大ざっぱに言えばそんな感じの時代だったかな。もちろんぼくもそうした時代の高揚感にそれなりに酔いつつ楽しんではいた。が、同時にどこかネガティヴな気分も抱いていた。テクノロジーにせよ、映像にせよ、チャリティというコンセプトにせよ、実は音楽そのものとは本来関係のない要素との合体、融合が80年代の音楽シーン隆盛の基本的方法論だったわけで。特にデジタル文化の強圧的な席巻ぶりは気に食わなかったなぁ…。50年代、60年代の音楽が大好きだったぼくとしては、要するに、まあ、こうしたデジタルの荒波に呑み込まれて、もう昔ながらの古き良きアナログなロックンロールなどなくなってしまうんじゃないか、と。少々大げさではあるけれど、そこそこ本気で悲観していた。まあ、言いがかりみたいなものです（笑）。今ではそれも杞憂だったことを知ってはいるけれど、仕方ない。当時のデジタルの勢いはそんな不安すら抱かせるほど凄まじかったのだ。

が、そんなある日、ぼくは1本のミュージック・ヴィデオに出くわした。スティーヴィー・レイ・ヴォーンの「テキサス・ハリケーン（Couldn't Stand The Weather）」（84年）だ。タイトル通り、雨と風とスモークを正面から受けながら、時代遅れの長髪をなびかせてハミルトンのカスタム・ストラトキャスターで凶暴なフレーズを弾きまくるレイ・ヴォーン。古いやつ、と笑われるかもしれないけれど。やはり生の魅力。生の快感。最先端のテクノロジーを駆使したデジタル文化が音楽シーンさえも牛耳っていたあの時代に、そんな感覚と違

CamScannerでスキャン

行するような肉っぽく、ルーツ・ミュージック寄りの快感をこんなに生々しく届けてくれる頼もしい男がまだいたのか、と。ぼくの胸は大いに高鳴った。これもまたこの時期、見逃せない動きのひとつだった。

80年代にやはりロックンロールは不滅だと改めて確信させてくれた頼もしいアーティストというのは何組かいて。まずはこの時期の直前にさっそうと登場したストレイ・キャッツ。で、彼らを世に送り出した初代プロデューサーでもあったデイヴ・エドモンズとか、ニック・ロウといったUK勢。続いて84年に先述のレイ・ヴォーンが登場して。85年にはZZトップが時代の最先端的なシンセサイザーをも取り込みつつ、しかし不変のサザン・ブギ・スピリットを発揮しまくった『アフターバーナー』をリリースして。86年にはスティーヴィーの兄貴、ジミー・ヴォーンを含むファビュラス・サンダーバーズがそれまでのクリサリスを離れてCBSレーベルと契約し、移籍第1弾アルバム『タフ・イナフ』でギアを入れ直し。同年、アメリカのパールハム・ロックンロールは永遠だという胸のすくような事実をごりごりのブルース・ロック・グルーヴとともにぼくたちに思い知らせてくれたジョージア・サテライツがシングル「キープ・ユア・ハンズ・トゥ・ユアセルフ」を全米チャートで大ヒットさせ…。

ブルース・スプリングスティーン

どれもがごきげんに痛快だった。そしてこの潮流は88年のトラヴェリング・ウィルベリーズの初アルバム『トラヴェリング・ウィルベリーズVOL1』で、ある種のピークを迎える。ウィルベリーズはご存じの通り、ジョージ・ハリスン、ボブ・ディラン、ロイ・オービソン、トム・ペティ、ジェフ・リンという5人が、全員がウィルベリー姓を名乗りながら結成した覆面義兄弟バンド。ここで5人の義兄弟たちは、あくまでもギター、それもアコースティック・ギターの躍動的なコード・カッティングを音作りの核に据えていた。ジム・ケルトナーが繰り出す生々しいドラム・サウンドに乗せて、がしがし掻き鳴らしていた。自らプロデューサーとしての資質を持ったメンバーが揃っていたこともあり、やがてやってくる90年代を目前に、新時代に対し実に有効な示唆をはらむ音作りを聞かせてくれているのだな、と頼もしい気分になった。デジタル技術の襲来に引っかき回されっぱなしだった80年代のロック・シーンが、このあたりでようやく落ち着きを取り戻したような…。

よく70年代の音と90年代の音には共通した手触りがある、などと言われるけれど。要するに80年代だけ音が独特だったってこと。特に80年代前半の音像。急激になだれ込んできたデジタル技術をまだ使いこなせていなかった時代ならではの特異さというか。84年から88年という5年間はそのギャップを取り戻すための期間だったと言うことができるかもしれない。

ちなみに、超極私的エポック作としては、88年に出たブライアン・ウィルソンの初ソロ・アルバムが…（以下略）。

CamScannerでスキャン

◆1984~88年 最重要アルバム・ガイド

文・選＝萩原健太

The Style Council
Café Bleu

1984
Polydor

83年発表のデビュー・ミニ・アルバム『イントロデューシング…』に続く初フル・アルバム。ポール・ウェラーとミック・タルボット、二人の基本メンバーが一丸となって、50年代ファンキー・ジャズをはじめ、ゴスペル、クラシック・ソウルなどに影響を受けたソウルフルな音作りに邁進してみせる。狙いは当たり、アルバムは大ヒット。以降、英国の音楽シーンには彼ら同様、大幅にノーザン・ソウル・テイストを導入したポップ・グループが続出していくことになる。トレイシー・ソーンやベン・ワットらネオアコ勢のゲスト参加もポイントだ。

Bruce Springsteen
Born In The U.S.A.

1984
Columbia

84週連続で全米トップ10に居座ったモンスター・アルバム。ブルース・スプリングスティーンの名声を確立することになった代表作だ。ベトナム帰還兵の苦悩をきわめてパーソナルな視線から綴った表題曲など、あまりにもパワフルな歌声と演奏ゆえか、愛国ソングとも誤解され、当時大統領選のまっただ中にあったロナルド・レーガンが勘違いしてキャンペーン・ソングに利用してしまったほどだ。そんな表題曲をはじめ、アルバムからは7曲の全米トップ10ヒットが誕生。翌年にはEストリート・バンドを率いて初来日も果たしてくれた。

Prince And The Revolution
Purple Rain

1984
Warner

前作『1999』で、ソウル、ファンク、ジャズ、ロックなどを柔軟に融合した超ジャンル感覚を広くリスナーに思い知らせたプリンスが、よりキャッチーな感覚を全開にした爆発的ヒット盤。自身の主演による同名映画のサウンドトラックではあったが、ほぼオリジナル・アルバムとして楽しめる充実作だ。ピッチを不気味に揺らしてみたり、ベースレスで強烈なグルーヴを構築してみたり、実験的かつ斬新な試行錯誤を随所に織り込みながらも最終的にはきわめてポップな感触に仕上げる腕には頭が下がる。全9曲中5曲がシングル・ヒット。

Wham!
Make It Big

1984
Epic / Columbia

ジョージ・マイケルとアンドリュー・リッジリーによるポップ・デュオのセカンド・アルバム。後にソロとなってから本格的に花開くジョージ・マイケルのソングライター、あるいはパフォーマーとしての才能の萌芽が随所にちりばめられた快作だ。「ケアレス・ウィスパー」「ウキウキ・ウェイク・ミー・アップ」など4曲のシングル・ヒットを生んだ盤だが、フィル・スペクター・サウンドを意識したオリジナル「ハートビート」や、アイズレー・ブラザーズをカヴァーした「イフ・ユー・ワー・ゼア」など、未シングル化曲にも名曲が多い。

Madonna
Like A Virgin

1984
Sire

音楽だけでなく、写真集を出したり、絵本を書いたり、レコード会社を設立したり、映画や舞台に出たり、監督したり…。多彩な表現をマルチに巻き込みつつメディアの海をサイボーグのように泳ぎ回る女王さまだが。"Boy Toy"と大きくデザインされたベルトを腰に巻き、きわどくキュートで、どこかチープな魅力を振りまきながら"毎日ブルーな日々を送ってた私にあなたは輝きと新鮮さをもたらした。まるで初めて肌を触れたヴァージンみたいな気分よ"と、ポップに弾ける本セカンド・アルバムこそが最強だと個人的には思います。

CamScannerでスキャン

V.a.
We Are The World

1985
CBS / Columbia

多数の米国スーパースターたちが集ってレコーディングしたエチオピア飢餓救済チャリティ・ソング「ウィー・アー・ザ・ワールド」の他、そのセッションに誘われながらも不参加だったプリンスをはじめ、スティーヴ・ペリー、シカゴ、ポインター・シスターズ、ヒューイ・ルイスら多額の寄付をした大物たちの未発表音源を収めたコンピレーション。ブルース・スプリングスティーンがジミー・クリフ「トラップト」をカヴァーしたライヴ音源は当時米国で表題曲以上のオンエアを稼ぎ、全米ロック・トラックス・チャート1位に輝いた。

Run-D.M.C.
Raising Hell

1986
Profile

本家エアロスミスからジョー・ペリーとスティーヴン・タイラーを招いてレコーディングされた「ウォーク・ディス・ウェイ」を含む3rdアルバム。ヘヴィ・メタルもファンクもヒップホップも、すべて飲み込んでいきいきと躍動させてしまう若いブラック・ジェネレーションの強靭な胃袋を象徴する1枚だ。低迷していたエアロスミスがシーン最前線に復活するきっかけともなった。音楽面のみならず、アディダスのジャージ、シューズ、そして極太のゴールド・ネックレスというファッションを日本の若者に広めるうえでも大きな役割を果たした。

U2
The Joshua Tree

1987
Island

5作目。アイルランド出身のU2がロックの源流である米国のルーツ音楽へ本格的に熱い眼差しを送り始めた1作だ。共同プロデュースを手がけたダニエル・ラノワの助けも借りつつ、米国南部に脈々と息づくゴスペルやブルース、カントリーといった豊かな音楽性に対する限りない憧憬と、やはり異国のアイルランド人として、最終的にはそうした音楽性に同化しきれない諦めとの間を行きつ戻りつ…。そんな切実で、でもどこかクールな遠巡の様子が実に興味深い仕上がりだった。バンドとしての背骨をがっちり固めた記念碑的作品。

Bobby Brown
Don't Be Cruel

1988
MCA

88年から89年にかけて、どこでもこのアルバムがかかっていた記憶がある。ベイビーフェイス、LAリード、テディ・ライリーら敏腕プロデューサーを迎え、ニュー・ジャック・スウィングあり、ファンクあり、メロウなバラードあり…当時のソウル・シーンに全方位的に対応する形で制作されたセカンド・アルバムだ。本作からは5曲の全米トップ10ヒットが誕生。うち3曲は全米R&Bチャート1位に輝いている。この時期、日本でブラック・ミュージックを志向するアーティストたちは誰もがボビー・ブラウンになりたがっていたっけ。

Traveling Wilburys
Traveling Wilburys Vol. 1

1988
Warner

50年代にデビューし、60年代初頭、胸締め付ける必殺の“泣き節”でヒットを連発したロイ・オービソン。60年代前半にデビューし音楽界に革命をもたらしたジョージ・ハリスンとボブ・ディラン。彼らの持ち味を70年代以降に受け継いだトム・ペティとジェフ・リン。全員ウィルベリー姓を名乗る覆面義兄弟たちが、互いを尊敬し合い、信頼し合いながら制作した奇跡のファースト・アルバムだ。民家を改造したデイヴ・スチュワートのスタジオで、まるでハイスクール時代に戻ったようにいきいきバンド活動を楽しみながら作り上げられた名盤だ。

CamScannerでスキャン

90年2月の来日時に撮影されたカート・コバーンとコートニー・ラヴ（写真＝久保憲司）

ポップ・ミュージック55年史⑤
1989〜93年
北米インディの活況とグランジ現象——ロックが沸いた激動の音楽シーン

大鷹俊一

ロック復権！　89〜93年を大胆に括ればそう言えるかもしれない。ロックといってどんなサウンド、アーティストをイメージするかは千差万別にせよ、大きな枠組みで考えれば、当時の音楽シーンがロックを軸に活況を呈していたことは間違いない。

ちなみにこの企画、依頼を聞いて同時期の『ミュージック・マガジン』をあたると、93年の年間ベスト・アルバムを掲載した94年2月号の総ページ数が474ページだった。おそらくこれはマガジン誌史上最大のヴォリュームだと思われる。この月は例年、年間にリリースされたアルバムの総索引が付くことでページ数が多くなるが、とはいえ過去最大というのは、単純にそれほどリ

CamScannerでスキャン

リース量が増え、音楽界全体が盛り上がっていたのだろう。

そしてこの時期最大の話題といえば、90年2月のローリング・ストーンズ初来日だ。東京ドームでの10回公演はソールド・アウト、全国各地からツアーが仕立てられての大騒ぎだった。ブルーノ・マーズだ、ティラー・スウィフトだと、今も話題となる大型コンサートはあっても、あれほど社会全体を巻き込んでの騒ぎになることはもう二度とないかもしれない。それ以外にも本当に来日公演が多く、当時の手帳をひっくり返すと、よく通ってたものだと少しびっくり。そんな中、92年2月にやってきたのがニルヴァーナで、数多くやったインタヴューの中でも忘れられない一つ。それも含め、特別な来日公演となった。

そう、この時期に〝ロック〟という言葉を改めて強調したくなる要因の一つは、ニルヴァーナの「スメルズ・ライク・ティーン・スピリット」、そしてアルバム『ネヴァーマインド』（91年）の大ヒットを皮切りとしたグランジ現象のせいでもある。パール・ジャムがファーストの『Ten』（91年）を全米2位、セカンドの『Vs.』（93年）は初登場1位とヒットさせ、サウンドガーデンやマッドハニー、スクリーミング・トゥリーズ等の活躍でシアトル周辺にスポットが当たり、全米各地からさまざまなバンドが登場してきた。

ソニック・ユース

これは決して偶発的なものではなかった。その象徴がソニック・ユースで、90年にメジャー系のゲフィン・レコードからリリースされた通算6枚目のアルバム『Goo』は、彼らのそれまでの作品とは比較にならないほどのセールスを記録する。結成以来、約10年近く各地のインディ・シーンとつながってきた彼らの決断を〝裏切り者〟とするリアクションもなくはなかったが、それ以上に現実問題と向き合いながら奮闘していた各地のインディ・バンドやレーベルを勇気づけ、活動を後押しすることにもなった。

各地の学生たちが運営する独立ラジオを背景として、メインストリームとはまったく違うチャートを売りにした雑誌『CMJ（College Media Journal）』からは独自のスターが誕生するようになり、インディ系のアーティストからR.E.M.やピクシーズなどが順当に人気を獲得していった。同時に、それはメインストリームが若者の感覚とはかけ離れていたことの証左でもあった。80年代のMTVを中心とした華やかな音楽シーンと違った、より自分たちの生活感覚や願望にフィットした音楽や、身近に接することのできるバンドに思いを寄せるようになったのだ。

身近な音は、最初からナショナル・チャートを想定したメジャー系の完成度の高いサウンドではないが、共感度が高く、もっとも身近で音楽的なヒーローとなっていった。こうした流れは以後も強固なものとなり、アメリカの音楽シーンを根底から変えることにもなった。例えば90年にデビューしたスーパーチャンクは、バンド活動と並行して地元ノースカロライナ州チャペルヒルで自らのレーベル＝マージを運営。アーケイド・ファイアやスプーンといった同レーベルの輩出バンドが、のちに全米規模の

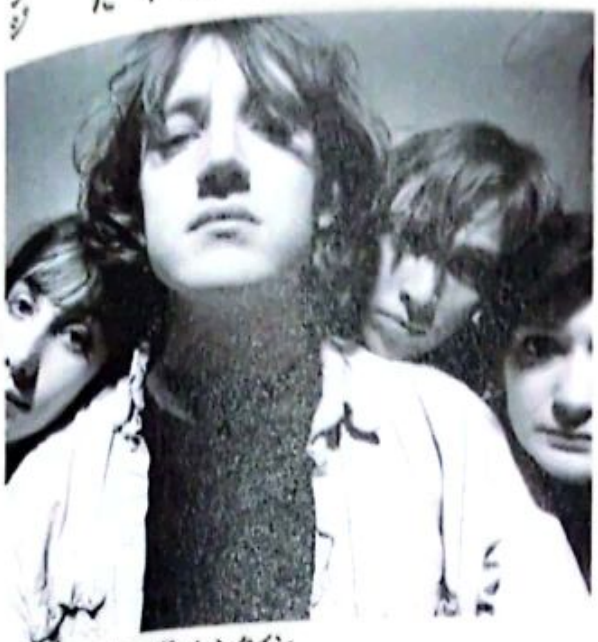
CamScannerでスキャン

大ヒットを生むことになる。その在り方はインディの理想形と言っていいだろう。

女性アーティストの存在感

話を戻し、シアトル周辺でブラック・サバス等のヘヴィなロックに影響を受けたグループを核とするグランジ・ブームは、もちろん多くのメインストリーム・バンドにも影響を与えた。ガンズ・アンド・ローゼズは『ユーズ・ユア・イリュージョン』の『I』と『II』を91年にリリースしたあと、イギー・ポップ&ザ・ストゥージズやナザレス、ザ・ダムド、ミスフィッツなどのカヴァーを中心とした『ザ・スパゲッティ・インシデント?』(93年)も発表。メタリカがスラッシュ・メタルの枠を超えて人気を高めていくのも、単に音楽的な完成度だけじゃなく、こうした〈ヴィな音が受け容れられやすい状況があったからだろう。

そしてグランジに大きな反応を示した一人が、ヴェテランのニール・ヤングだった。盟友クレイジー・ホースと作った傷だらけの栄光(Ragged Glory)』(90年)を携えてのツアーでは、オープニング・アクトにソニック・ユースを起用。彼らに負けない爆音を撒き散らす様子を捉えたライヴ盤『ウェルド:ライヴ・イン・ザ・フリー・ワールド』、そのライヴ中に録音されたさまざまなフィードバック、ノイズなどを35分に再編集した『Arc』を出すなど、まさに〝ゴッドファーザー・オブ・グランジ〟で、95年にはパール・ジャムと一緒に『ミラー・ボール』を作った。


マイ・ブラッディ・ヴァレンタイン

こうした激動が続いたアメリカに比べると、UK周辺はストーン・ローゼズ、ハッピー・マンデーズ、ザ・シャーラタンズ等が引っ張ったマッドチェスターもグランジの爆音にかき消され、全体の動きとして停滞気味となる。当時の『ミュージック・マガジン』でも〝英ニュー・ウェイヴ世代の未来〟(90年5月号)、〝英ロックの新たな可能性を探る〟(90年6月号)が特集されている。そんな中、アイルランドはダブリン出身のマイ・ブラッディ・ヴァレンタインがセカンド『愛なき世界(Isn't Anything)』(91年)で自身のシューゲイズ・スタイルを確立して大きな影響を与えるが、より幅広いムーヴメントとしては、ブラーやオアシスらによる〝ブリット・ポップ〟までシーンの焦点はなかなか定まらなかった。

そんななかで目につくのが、女性アーティストの目覚ましい成果だ。シネイド・オコナーが90年に出した2ndアルバム『蒼い囁き(I Do Not Want What I Haven't Got)』は、シングル「愛の哀しみ(Nothing Compares 2 U)」共々大ヒットし、同時に社会問題やカトリック教会に対して鋭く抗議する活動も注目をあびた。またカート・コバーンがデビュー作『ドライ』(90年)を激賛したPJハーヴェイは次作でスティーヴ・アルビニをプロデューサーに起用、以後も幅広いアーティストたちとの交流を展開していった。そしてシュガーキューブス解散後にソロとなったビョークは『デビュー』(93年)の個性的な歌唱と表現で人気と評価を確立し、今も独創的な活動を続けている。こうした人たちの背景には、U

CamScannerでスキャン

Kのパンク～オルタナティヴ・ロックの流れで女性アーティストの主張や存在感が確立してきたことが大きい。パンクの革命的な役割の一つとして、女性の音楽的な地位の向上があり、それまでの圧倒的に男性優位な観点に変化が促され、多様な創造性が許容されるようになっていくことで、より奥行きのある作品が生まれるようになったのだ。

当時のアメリカを振り返ると、女性メンバーを含むバンドが増えたり、ベイブズ・イン・トイランドやL7、またはビキニ・キルを始めとしたライオット・ガール（Riot Grrrl）などの動きはあったものの、まだまだ限局的であった。しかし近年のビリー・アイリッシュやオリヴィア・ロドリゴのような、過去の音楽を柔軟に吸収し、自分たちの感性で噛み砕いて発信するアーティストが当たり前のように登場している背景の一つとなったことは確かであり、こうした動きは今後さらに大きくなっていくに違いない。

シネイド・オコナー

今年はカート・コバーンの没後30年

当時で気になったことといえば、ラップ／ヒップホップ勢の精力的な活動ぶりと成果で、『チェック・ユア・ヘッド』（92年）におけるビースティ・ボーイズの尖った充実ぶりは、『イル・コミュニケーション』（94年）以降の快進撃へと道を開き、同じく92年のアレステッド・ディヴェロップメント『3 Years, 5 Months And 2 Days In The Life Of...』はギャングスタ・ラップとは違ったフィールドを見せてくれた。他にも、レッド・ホット・チリ・ペッパーズが『ブラッド・シュガー・セックス・マジック』（91年）でリック・ルービンという最強の盟友を得て黄金時代に突入したことや、日本版WOMADが91年から開催されたのも忘れてはならないだろう。

より私的なレヴェルで言うと、ヴェテラン・アーティストたちが個々のキャリアを踏まえつつ生み出した作品が思い出深い。エルヴィス・コステロとポール・マッカートニーの共演が実現し、コステロの『スパイク』（89年）からは「ヴェロニカ」のヒットが生まれ、ポールの『フラワーズ・イン・ザ・ダート』（89年）には共作4曲が収められた。少年時代にビートルズのファン・クラブ会員だったコステロにとっては夢のセッションであったろうし、ポールにとってもソングライティングの才能あふれるコステロは刺激的なファクターとなった。

ルー・リードとジョン・ケイルはヴェルヴェット・アンダーグラウンド時代の恩讐を超えて、87年に逝去したアンディ・ウォーホルへの追悼の一枚『ソングス・フォー・ドレラ』（90年）を出した。そんなことも背景にしつつ、ルーが89年に出した傑作『ニューヨーク』は、彼の後期創作活動の素晴らしいスタート地点ともなった。

新旧、メジャー／マイナーといった壁を越えて、じつに騒々しい時期であったと、こうして振り返ると改めて思う。そして、気がつけばカート・コバーンの没後30年。それを知ってか知らずか、ニール・ヤングは『傷だらけの栄光（Ragged Glory）』を1曲を除き同じ曲順でカヴァーしたライヴ『Fucking Up』をこの4月に、パール・ジャムも同月にハード&ヘヴィに振れた新作『ダーク・マター』をリリースする。単なる偶然か、何者かの意思なのかはわからないが、少なくともあの時期の再検証が求められているのかもしれない。

CamScannerでスキャン

Lou Reed
New York

1989
Sire

古巣RCAレコードに復帰し、『ブルー・マスク』を皮切りに充実した80年代を過ごしたルーだったが、その後サイアー・レコードに移籍し、改めてブルックリン生まれである自身の原点で、創作に大きな刺激を与え続ける都市ニューヨークに目を向けた89年の傑作。アンディ・ウォーホルの死も一つの契機であったろうし、パンク以降、再評価の熱が高まる一方であったヴェルヴェット・アンダーグラウンドの影を彼流に進化させたものでもあった。以後の作品づくりにもさまざまな形で影響を残した、晩年に向けての出発点とも言える1枚。

Elvis Costello
Spike

1989
Warner

コステロの数多いアルバムの中でもひときわヴァラエティに富んだ1枚。ワーナー移籍第1弾でやりたいこともできたのだろうし、前作から3年が空き、多作家の彼にはアイデアが溢れかえっていた。ポール・マッカートニーとの共作もあれば、アラン・トゥーサンやダーティ・ダズン・ブラス・バンドなどのニューオリンズ一派、アイリッシュ系、バックにはマーク・リボーらが入っていたりと、とにかく多彩だが、それでいてコステロの中にすべてがすんなりと収まり、優れた楽曲や歌唱の中に昇華されているのだから、見事と言うしかない。

Sinéad O'Connor
I Do Not Want What I Haven't Got

1990
Ensign / Chrysalis

アイルランドのダブリンに生まれ、90年に出したこのセカンド・アルバムと、シングル「愛の哀しみ」が世界中で大ヒットし、同時に社会問題に対して鋭く抗議する活動でも注目をあびた。92年には、カトリック教会の聖職者による児童への性的虐待、隠蔽への抗議からTVでローマ法王の写真を破り捨てたことが問題となる。その2週間後、ボブ・ディランのトリビュート・ライヴに出演した彼女は大ブーイングを浴び、予定した曲を止めてボブ・マーリーの「ウォー」をアカペラで絶唱した。今でも忘れられない事件だ。

Sonic Youth
Goo

1990
DGC

81年にニューヨークでサーストン・ムーア、キム・ゴードン、リー・ラナルドが活動を本格化し、ホームステッド、SST、エニグマをはじめ世界各地のインディ・レーベルから作品を発表。そして90年6月に本作をメジャーのゲフィンからリリースし、それまでとは桁違いのセールスを記録する。ノイジーでフリーキーなサウンド志向に変わりはないものの、カーペンターズのカレンに捧げた「テュニック」やキャッチーな「ダーティ・ブーツ」のような親しみやすい曲も目立ち、アメリカのインディ・シーンへ目を向けさせるきっかけともなった。

Metallica
Metallica

1991
Elektra

メタルを高速化したスラッシュ・メタル・バンドとして登場し、前作『メタル・ジャスティス』で幅広い層へのアピールに成功したグループが満を持してリリースした通算5枚目。グランジ・ブームを意識し、サウンドはよりハード&ヘヴィ化しつつ、どこか人懐っこいメロディ展開も併せ持つことで初の全米1位を獲得し、「エンター・サンドマン」「ジ・アンフォーギヴン」「ナッシング・エルス・マターズ」などのシングル・ヒットも放った。ルー・リード最晩年のアルバム『ルル』(2011年)での共演もロック史的には忘れられないもの。

CamScannerでスキャン

Red Hot Chili Peppers
Blood Sugar Sex Magik

1991
Warner

新たにワーナーと契約し、リック・ルービンをプロデューサーに迎えての5枚目で、現代最強バンドへのステップを駆け上がることとなった傑作。代表曲と言っていい「ギヴ・イット・アウェイ」や、アンソニー・キーディスの実体験を反映した美しいバラード「アンダー・ザ・ブリッジ」を筆頭に、高い完成度を誇る楽曲が詰まっている。ルービンの提案で伝説の魔術師ハリー・フーディーニが住んだと言われる邸宅にメンバーやスタッフがこもって制作されたせいもあり、無駄なく練り込まれたアイデアが音の隅々にまで漲っている。

Nirvana
Nevermind

1991
DGC /
Sub Pop

89年にサブ・ポップからファーストを出したあと、メジャーに移籍してブッチ・ヴィグのプロデュースでリリースしたセカンド。シングル・カットされ世界中で大ヒットした「スメルズ・ライク・ティーン・スピリット」の他にも、「カム・アズ・ユー・アー」「ブリード」「リチウム」「ドレイン・ユー」など人気曲が揃っている。親しみやすいメロディと、静から動へと激しく展開するサウンド構成のバランスが良く、パンク、ヘヴィ・メタル、オルタナなど、ジャンルを超えて多くの聞き手を獲得し、今でもその影響力は軽視できない。

Neil Young & Crazy Horse
Weld

1991
Reprise

クレイジー・ホースを伴い91年前半に行なったツアーで収録された2枚組ライヴ盤。ソロ初期の「シナモン・ガール」を始め、幅広い時期の楽曲が取り上げられており、湾岸戦争が起こったことを受けてボブ・ディラン「風に吹かれて」もやっている。「コルテス・ザ・キラー」「パウダーフィンガー」「ライク・ア・ハリケーン」などもヘヴィなヴァージョンに仕立て上げられ、ニールのもっとも激しい面が出たものとして聴き応え充分。初回限定でノイジーな音を編集した『ARC』付きの3枚組が出され、その後『ARC』も単独リリースされた。

My Bloody Valentine
Loveless

1991
Creation

84年頃にアイルランドのダブリンで結成され、80年代後半からはヴォーカル&ギターのケヴィン・シールズが中心となって活動している。サイケ色の強いサウンドをベースに、ノイジーな方向もどんどん追求していき、91年にリリースした本作において、その音楽性を確立した。シューゲイザーの持つ内面性とエクスペリメンタルな音の暴力性、さらに耽美的なサイケが爆音の中で混ざりあう世界は独特で、UKはもちろんのこと、世界各地のグループに影響を与えた。97年に解散、07年に再結成し、13年に3枚めの『mbv』をリリースしている。

Beastie Boys
Check Your Head

1992
Capitol /
Grand Royal

70年代後半にニューヨークでハードコア・パンク・バンドとして結成され、ヒップホップへと変化していったトリオのサード。ファーストの『ライセンス・トゥ・イル』（86年）が全米1位となり人気を集める中で発表したもので、生楽器とサンプリングを巧みに組み合わせた彼ら独自の世界を創り出している。リリース時の評価はあまり高くなかったものの徐々に認められ、以後、自身のレーベル＝グランド・ロイヤルを作るなど存在感を高めていったが、12年にリーダー格のMCAが病死したことでライヴ活動の停止が発表された。

CamScannerでスキャン

ウータン・クラン

ポップ・ミュージック55年史⑥
1994〜98年
トリップ・ホップ、ドラムンベース、ダブ——世界に拡散したヒップホップの影響

渡辺亨

1994年から98年までの音楽シーンの最大のキーワードは、やはり〝ヒップホップ〟になる。アメリカ合衆国のヒップホップを題材とした本誌の特集としては、94年7月号の〝来日したスヌープ・ドギー・ドッグとG-ファンク〟、同年9月号の〝ヒップホップの最先端——ナス、DJプレミア〟ほか、同年12月号の〝ヒップ・ホップはどこへ行く?——ウータン・クラン、ギャング・スターほか〟、97年1月号の〝ギャングスタ・ラップの急展開——スヌープ・ドギー・ドッグ、ドクター・ドレー、マキャヴェリ(2パック)〟、98年11月号の〝ヒップホップの成熟と変容——RZA、モス

・アメラウィリほか、が挙げられる。この当時のヒップホップを巡る動きをかいつまんで説明すると、まず米国では、ドクター・ドレーや2パックなどの活躍によって、西海岸のヒップホップおよびギャングスタ・ラップが勢力を増し、95～96年に東海岸のヒップホップ勢との抗争が起こった。ところが、そのヒップホップ東西抗争の主役を務めた西の2パックは96年9月、東のノトーリアスB.I.Gは97年3月に相次いで凶弾に倒れた。

92年から94年にかけて、米国ではアレステッド・ディヴェロップメント、ザ・ファーサイド、ディガブル・プラネッツ、ザ・ルーツ、ザ・フージーズなどが相次いでデビュー。これらの、レコードからサンプリングした音源で組み立てたブレイクビーツだけに頼ることなく、生楽器や生演奏、また歌メロやラップの掛け合いなどを重視したグループ、男女混成やバンド形態によるプロジェクトの登場によって、ヒップホップの多様化が進んだ。また、この当時の米国のヒップホップ・シーンを支えたのは、送り手も受け手も、アフリカン・アメリカンだけではない。米国生まれのラティーノもいれば、ハイチやジャマイカからの移民の子孫たちを中心としたカリブ系、さらにはユダヤ系、アジア系、白人の若者も増えた。ひとことで言うと、ヒップホップはもはやアフリカン・アメリカンの若者だけの文化ではなく、また音楽的にも"オルタナティヴ・ヒップホップ"として拡張した。

1994年7月号
表紙＝
スヌープ・ドギー・ドッグ

1998年11月号
表紙＝RZA

影響はブリストルへ

本誌では、前記した米国のヒップホップを題材とした特集に加えて、95年6月号の"未来を探る日本のヒップ・ホップ"、同年10月号の"ブリストル・サウンド――ポップ・グループからマッシヴ・アタック、トリッキーまで"、96年8月号の"拡大版アトランタの挑戦――ブライト・ライツ、ブラック・シティ"、同年9月号の"変貌するフランス音楽"、97年4月号の"嵐を呼ぶグランド・ロイヤル"、同年12月号の"サンプリングの17年"などの特集が組まれている。これらの特集でも、何からの形でヒップホップに関することが言及されているし、"UKソウル最新型の全貌――ジャミロクワイ、カーリーン・アンダーソンほか"の特集が組まれた94年11月号には、この年の8月末に初来日したベックのインタヴューが掲載されている。そして98年12月号の特集は"アメリカン・ロックの現在形"だが、表紙を飾っているのはベックだ。ベックの『メロウ・ゴールド』(94年)と『オディレイ』(95年)は、ヒップホップと切り離せない。

英国では、94年にポーティスヘッドのファースト・アルバム『ダミー』、マッシヴ・アタックのセカンド・アルバム『プロテクション』(ファースト・アルバム『プルー・ラインズ』は91年に発表された)、そして95年に入ってからトリッキーのファースト・アルバム『マクシンクェーイ』がリリースされ、それぞれ評判を集めた。これら3組は、いずれもヒップホップの影響を受けていたので、英国の音楽ジャーナリズムは、彼らの音楽を"トリップ・ホップ"と呼んだ。また、主に欧州産のインストのヒップヒップを指す"アブストラクト・ヒップホップ"という言葉も、94年頃から目につくようになった。

CamScannerでスキャン

トリップ・ホップとして括られた前記の3組は、すべてイングランド西部のブリストル出身。95年10月号の特集〝ブリストル・サウンド〟は、こうした背景のもとに作られた。同特集では、レゲエ／ダブ、さらにアフリカ音楽の遺伝子も受け継がれているブリストルの音楽シーンの歴史が取り上げられている。マッシヴ・アクックは、ブリストルDJ集団、ザ・ワイルド・バンチから派生したグループ。トリッキーは、もともとザ・ワイルド・バンチの準メンバーで、マッシヴ・アタックの『プロテクション』では彼らとコラボレートしている。そのトリッキーの『マクシンクェーイ』には、マーク・スチュワートへ捧げた献辞が記されている。マークは、ブリストルが生んだザ・ポップ・グループの創立メンバーの一人だ。〝ブリストル・サウンド〟のアルバム18選には、そのザ・ポップ・グループの『ハウ・マッチ・ロンガー』（80年）をはじめ、同グループから分裂／増殖したピッグバッグ、リップ・リグ&パニックなどのアルバムも紹介されている。ポーティスヘッドは、ワイルド・バンチから派生したプロジェクトではない。ただし、音作りを担ったジェフ・バーロウは、リップ・リグ&パニックに参加していたネナ・チェリーのセカンド・アルバム『ホームブルー』（88年）にプロデューサー&ソングライターとして関わっている。また、〝ブリストル・サウンド〟には同地のジャングル／ドラムンベース・シーンを盛り上げていたロニ・サイズに関するコラムが設けられている。そしてアルバム18選には、スミス・アンド・マイティーのロブ・スミスとピーター・ディーを中心としたモア・ロッカーズの『ダブ・プレイト・セレクション VOL1』（95年）が取り上げられている。ロニ・サイズとDJクラストは、94年に共同で設立したVレコードを通して、それぞれシングルをリリース。前記したモア・ロッカーズのアルバムにはリミキサーとして関わっている。97年6月号の特集は、〝ドラムンベース〟だ。

〝ブリストル・サウンド〟のアルバム18選には、マーク・スチュワートがオン・ユー・サウンドの設立者であるプロデューサーのエイドリアン・シャーウッドと組んで作り上げた『剥がれゆく虚飾（As The Veneer Of Democracy Starts To Fade）』（85年）も選ばれている。このアルバムで演奏を務めているザ・マフィア（タックヘッド）は、79年に設立され、ラップ時代の幕開けを告げたシュガーヒル・レコードのハウス・バンドだった。この点を含めて、〝ブリストル・サウンド〟や97年11月号の〝ダブ特集：再び脚光を浴びる音響の魔術〟は、ヒップホップの歴史と繋がっている。

〝ダブ特集：再び脚光を浴びる音響の魔術〟には、エイドリアン・シャーウッドを起用して『バニシング・ポイント』（97年）のダブ・リミックス・アルバム『エコー・デック』（同）を発表したプライマル・スクリームをはじめ、ダブの歴史、英国音楽におけるダブの重要性などの記事が掲載されている。また、前記したエイドリアン・シャーウッドはもちろん、ザ・ポップ・グループに関わったデニス・ボーヴェル、マッシヴ・アタックに関わったマッド・プロフェッサーも紹介されており、〝ブリストル・サウンド〟との強い繋がりを改めて認識させられる。

1995年10月号
表紙＝
EAST END×YURI

1998年12月号
表紙＝ベック

CamScannerでスキャン

ビョークの時代

94～98年の間にデビューしたディアンジェロやメリカ・バドゥなどの"オルタナ・ソウル"勢は、ヒップホップの影響を受けていた。95年12月号には、僕が行なったダイアン・リーブスの来日インタヴューが掲載されている。ダイアン・リーブスのプロウン・シュガー』（95年）を初めて聴いたときは、ダリルスの"ザ・ウェイ・オブ・ザ・ウィンズ"（87年）に匹敵する衝撃を覚えた。あえて総括すると、80年代は"プリンスの時代"、対して90年代は"ビョークの時代"という認識を僕は抱いている。

96年1月号の表紙はカサンドラ・ウィルソン。96年11月号の特集は"アメリカを揺さぶる女たち"。この特集は、当時人気だったアラニス・モリセットやルシンダ・ウィリアムスを中心にしたものだが、デビューしてから間もない新人アイドル・アーティストにも言及されている。96年5月号の特集は"ラージャ音楽の新しい世界"。この特集では、"幹なし男"（91年）のハートリーを中心とするオルタナのシーンを紹介。96年11月号の特集は"幹なし男"（95年）を発表したカヒーフ・カーンが大きく取り上げられている。97年9月号の表紙はそのカヒーフ

ビョーク

で、来日時のインタヴューが載っている。ヒップホップの影響は、この当時のR&Bやロック、テクノ、ジャズ、クラブ・ミュージック全般、さらにカヒーフ・カーンのリーフの"リーヴ"（97年）にも及んでいる。別項のベスト10の選定にはこうしたことが反映されており、だからこそ94～98年の音楽シーンの最大のキーワードは"ヒップホップ"ということになる。

ジャズに関しては、98年7月号で"ブルー・ジャズ・スピリッツ！"という特集が組まれている。ただし、タイトル通り、ブルー・ジャズを中心とした特集なので、ブランド・メルドーについては一切触れられていない。こうしたこともあって、今回の10選の中に、僕はブランド・メルドーのソロ・アルト・オブ・ザ・トリオVOL.3』（98年）を入れた。ブランド・メルドーはピアノ・トリオほど同時代および90年代以降のピアノ・トリオに大きな影響を及ぼした存在はいない。前記したアルバムのロックの選曲、そしてブランド・メルドーのソロ名義アルバム『ラーゴ』（02年）のプロデューサーがジョン・ブライオンという点でも、メルドーは90年代後半と21世紀を繋ぐ重要なミュージシャンである。

日本では95年1月に阪神・淡路大震災、同年3月には地下鉄サリン事件が相次いで起き、世の中を震撼させた。94～98年の間には、もちろん全世界で色々な出来事が起こった。その中で、最大級の悲劇といえるのが、ダイアナ妃（プリンセス・オブ・ウェールズ）が97年8月31日未明、パリで交通事故死を遂げたことだろう。ダイアナは、当時のチャールズ皇太子と離婚し、すでに英国王室から離れていた。ところが、彼女の葬儀は、準国葬として同年9月6日に行なわれた。エルトン・ジョンがその葬儀でピアノを弾きながら歌った"キャンドル・イン・ザ・ウインド1997"――バーニー・トーピンによってオリジナルの歌詞が書き直されたこのバラードが、当時もっとも多くの人々の心に届いたポピュラー・ソングかもしれない。

Portishead
Dummy

1994
Go! Beat

"トリップ・ホップ"という呼称はともかく、ポーティヘッドの音楽は、ヒップホップの影響下に生まれた英国独自のものである。このトゥンギー・ギターや映画音楽的要素を含む陰鬱な音世界は、TVドラマとして90年から91年にかけて放送され、92年には劇場用映画にもなったデヴィッド・リンチ監督関連の"ツイン・ピークス"のごとく甘美な悪夢のよう。ヴォーカルのベス・ギボンズが21世紀に入ってポトーク・トークのメンバーと共演したこと、本作がスロウコア系ロックに間接的な影響を与えたことも見逃せない。

Caetano Veloso
Fina Estampa

1994
PolyGram / Philips

ブラジルの母国語は、ラテン・アメリカで唯一のポルトガル語。が、カエターノ・ヴェローゾは本作で、キューバやベネズエラ、アルゼンチンなどのスペイン語曲を取り上げた。中には彼が幼少期に耳にしていた曲も含まれているし、ボサノヴァに通底するメロウな感触を持つキューバのフィーリンの感覚や、ラテン・アメリカ独特のロマンティシズムで、アルバム全体を貫いている。つまり、これは安易な企画ではない。本作がシルビア・ペレス・クルスを含めた後続のスペイン語圏アーティストに与えた影響力の大きさも、改めて思い知る。

Cassandra Wilson
New Moon Daughter

1995
Blue Note

プロデューサーのクレイグ・ストリートは、カサンドラ・ウィルソンがデビュー以前に生ギターを弾きながらジョニ・ミッチェルの曲を歌っていたことを知っていた。そんな彼女の側面を引き出した93年作に続き、このブルーノート移籍第2弾も、彼の制作。音作りは、テナー・バンジョーやヴァイオリン等も含む弦楽器と、打楽器が主体。ビリー・ホリデイの名唱で知られる「奇妙な果実」で始まり、自作曲に加えて、ブルースやカントリー、ポップなどのカヴァーが並ぶ。ノラ・ジョーンズのためにブルーノートの扉を開けたのは、この名盤だ。

D'Angelo
Brown Sugar

1995
EMI

ディアンジェロはプロデューサーの主導による90年代前半のR&Bの主流から外れた文脈から登場した。もっとも、このデビュー作にはトニー・トニー・トニーのラファエル・サディークやア・トライブ・コールド・クエストのアリ・シャヒードがプロデュース等で協力している。また、79年のクワイエット・ストームの名曲（スモーキー・ロビンソンの「クルージン」）をカヴァーしている。こんな本作は、R&Bやゴスペルの伝統を汲みつつ、プリンスおよびヒップホップ世代ならではのリアルな現実の空気を醸し出すネオ・ソウル。だ。

Fugees
The Score

1996
Ruffhouse / Columbia

94～98年のヒップホップが集約されているわけではないが、同文化の多様化を象徴する作品である。フージーズは、ハイチからの移民の子供であるワイクリフ・ジョンとプラーズ、ニュージャージー州出身のローリン・ヒルによるトリオ。ラップ、歌、生演奏、サンプリングが混じり合い、音楽的にR&Bやレゲエの要素が目につく。現にこの2作目では、ボブ・マーリーが広めた「ノー・ウーマン、ノー・クライ」を、生ギター入りでカヴァーしている。本作と、98年のローリンの初のソロ作は、ヒップホップのスケールを超えるヒットとなった。

CamScannerでスキャン

Beck
Odelay

1996
DGC / Bong Load

90年にメジャー・デビューしたベックは、この多彩な音楽的情報量を誇る『オディレイ』で、まさに時代の寵児となった。もちろんヒップホップの影響は、グラント・ブラザーズの協力を得つつも、ベックならではの卓越した編集センスが生かされた自作りのみならず、トーキング・ブルースとラップの両方の流れを汲む後のヴォーカルにも感じられる。アルバム全体はダウン・トゥ・アース的で、サウンドは埃っぽく、ベックの語りのようなヴォーカルは気怠そうだ。これらの点でも、"ヒップホップ"がベック流に解体、応用されている。

Fiona Apple
Tidal

1996
Clean Slate / Work / Columbia

フィオナ・アップルが幼少期～思春期のときに味わった辛い体験やそれが刻印された自作曲の数々。フィオナは、ジョン・ブライオンの協力を得て制作したこのデビュー・アルバムを発表したとき、まだ18歳だった。が、本作での彼女は成熟どころか、老成した少女のようで、歌声の震えには喪失感や孤独感が感じられる。フィオナと共演したフィービー・ブリジャーズをはじめ、ゼロ年代以降に登場した――性的アイデンティティのことも含めて、さまざまなことで心に傷を持つ――新世代のシンガー・ソングライターたちには彼女の影を感じる。

Roni Size & Reprazent
New Forms

1997
Talkin' Loud / Mercury / Universal

ロニ・サイズを中心にクラスト、DJダイ、DJスヴらによるプロジェクトのファースト・アルバム。アコースティック・ベースやギター、ドラムス、サックスなどの生演奏、プログラミング、女性ヴォーカル、ラップなどを組み合わせたドラムンベースで、レゲエ／ダブにルーツを持つブリストル・サウンドの象徴的作品でもある。本作が、90年代のUKソウルやクラブ・ミュージックの牙城だった、トーキング・ラウドを通してリリースされたことも重要。ともあれ、95年のゴールディー"Timeless"と並ぶ、ドラムンベースのひとつの到達点だ。

Björk
Homogenic

1997
One Little Indian / Elektra / Mother / Polydor

1曲目「ハンター」は、ラヴェルの「ボレロ」のようなリズムで始まり、やがて808のアコーディオンが聞こえてくる。音作りや作曲にはマーク・ベルやガイ・シグスワース等が関わっていて、アルバム・ジャケットの全地球的な衣装デザインを手掛けたのは、アレクサンダー・マックイーン。ただし、スクッフの人選や音楽的アイデアは、すべてビョーク自身によるものだ。シンセサイザーとストリングスがうねり、ビョークのヴォーカルは圧倒的な存在感を誇っている。"エレクトロニカ"というジャンルの誕生を告げた傑作でもある。

Brad Mehldau
Songs: The Art Of The Trio Volume Three

1998
Nonesuch / Warner

両手を独立して使うブラッド・メルドーのピアノの技巧は、もちろん注目に値する。が、それ以上に彼が奏でるメロディやビートは、90年代にふさわしい"喪失感"や"憂い"を漂わせていることに注目してほしい。だから、そ、このトリオの演奏は、ニック・ドレイクとレディオヘッドといった現代のジャズ・ミュージシャンや音楽ファンの共感を呼んだ。70年代に早逝した英国のシンガー・ソングライターと、前年に世界的にブレイクした英国のロック・バンドの曲、この2曲のカヴァーは、メルドーの独自性を物語っている。

CamScannerでスキャン

特集 カマシ・ワシントン

僕は素晴らしい歌声を持ってない。でもそれを表現できる

グラフ・アルバムを語るもの久しぶりの新作を聴く　村井康司

写真＝Vincent Haycock

今回のレコードは内省的

カマシ・ワシントンの新作『フィアレス・ムーブメント』は、実に聴きごたえのあるアルバムだ。多彩なゲストが登場して歌の要素が大きいのだが、カマシのサックス・ソロもたっぷり聴けるし、1曲の構成もアルバム全体の構成も非常に綿密に考えられている。そして不思議なことに、とても親密でリラックスした佇まいが音楽から漂ってくるのだ。まずはそのあたりから質問してみた。

――あなたの新作を聴いてまず思ったのは、トラックごとにさまざまなタイプの曲が並んでいるのに、全体としてとてもリラックスして親密な雰囲気が漂っていることでした。言い換えると、あなたのパーソナルな気持ちや考え方がアルバムからこちらに届いているように思えたのです。御本人はどう思っていますか。

「そう、このアルバムはとてもパーソナルな作品で、僕の生活、人生の変遷の中で生まれたものなんだ。僕の音楽的エネルギーは、普段は宇宙空間の中に広がるようなものが多いけど、今回はもっと身近で、日常が反映されている。このレコードは、と

ても内省的になっているんだよ」

――その変化はどのようにして起こったのでしょう。

「まず、僕は父親になったし、そしてこのアルバムを作り始めた頃は、パンデミック期間だった。娘という、自分の人生で最も愛する存在が生まれ、そして人との繋がりをより意識するようになったことで、今回のような変化が起こったんだと思う」

――お嬢さんが生まれたことがこのアルバムに影響を及ぼしているのですね。

「娘が生まれてから、世界全体を見る視点が変わったんだ。彼女の視点から世界を見て、物事を考えるようになったからね」

――娘さんは今おいくつなんですか。

「もう3歳になるよ」

――プレス・リリースによれば、あなたは『フィアレス・ムーヴメント』を〝ダンス・アルバム〟だとおっしゃっています。ダンスとこのアルバムの関係について教えてください。

「叔母がダンサーだから、僕は子供の頃、叔母のダンス・スタジオによく行っていたんだ。その影響で、僕は表現力豊かで即興的な動きと音楽との強いコネクションを身近に見てきた。そのダンス・スタジオでは、皆がマッコイ・タイナーやジョン・コルトレーンのような音楽に合わせて踊っていたからね。だから、僕はずっと、もっと人々がそれにインスパイアされて身体を動かしたくなるような音楽を作りたいと思っていた。僕がいう〝ダンス・アルバム〟というのは、俗にいうダンス・ミュージックのアルバムという意味ではなくて、人々の身体を動かすようなリズムを持った音楽が詰まったアルバム、という意味なんだ」

――今回はラップや歌のゲストがたくさん参加していますね。人間の声をフィーチャーしようという意図があったのですか。

「というより、曲が自ら彼らを必要としていたんだ。例えば〈Get Lit〉は、あの曲を聴いていた時に〝この曲には絶対ラッパーが必要だ〟と感じた。そして〈Asha The First〉では、あの曲は僕の娘が書いたメロディで出来ているんだけど、コースト・コントラというグループの音楽を聴いた時に、彼らと一緒に何かやってみたい！と思い、ちょうどあの曲に何かをフィーチャーするスペースがあったから、グループのメンバーのタジとラスのサウンドでそのスペースを埋めてもらったんだ。どの曲も、音楽自体が彼らを求めていたんだよ」

――今出てきた、娘さんがピアノで弾いたメロディを元にした2曲目の〈Asha The First〉ですが、おっしゃるようにタジ・オースティン、ラス・オースティンのパワフルでグルーヴィーなラップが印象的です。この二人について教えてください。

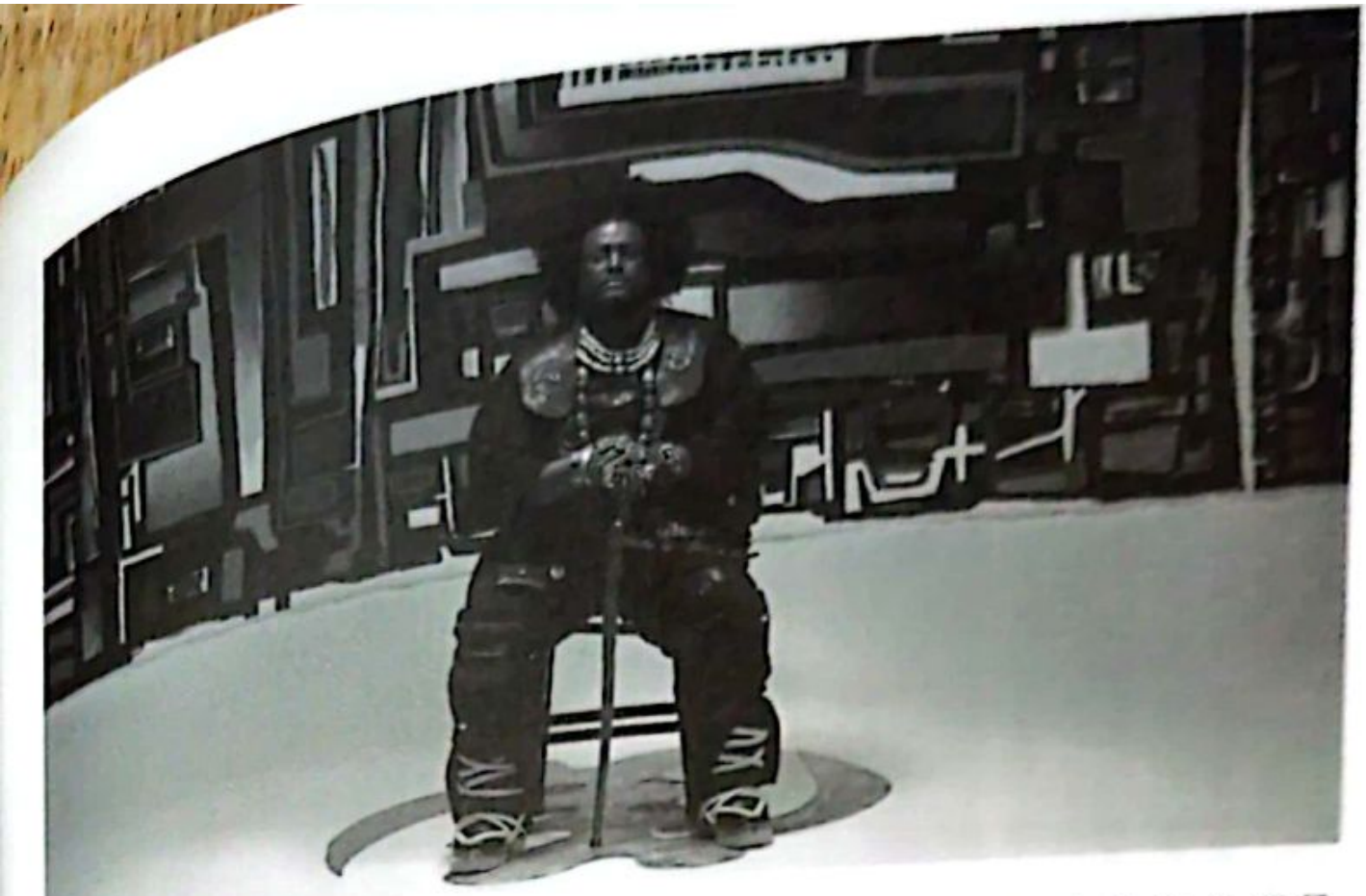
「彼らはコースト・コントラというグループの一員で、実は有名なラッパーのラス・カスの息子たちなんだ。彼らは最高だよ。個人的には、彼らはここ数年活躍している若手MCの中でもベストだと思ってる。彼らに実際に会ったのは2021年。僕が彼らをインターネットで観て、彼らの音楽のファンになったんだ。デイヴ・シャペル（俳優／コメディアン）の番組で、彼らが前座を務めていたのを観たのがきっかけで好きになり、連絡をとったんだ」

――娘さんは3歳にしてもうメロディを書くなんてすごいですね。

「娘は音楽が大好きで、毎朝起きてはすぐにピアノを弾きにいくんだ。前はただ鍵盤を押しているだけだったんだけど、ある日、この鍵盤を押せばこの音が出るっていうのに気づいたらしくて、同じあのメロディを何度も演奏するようになって。だからそれをレコーディングして、それを使って色々実験していたら、あの曲が出来上がったんだ」

――あなたのサックスのソロは、〈Come

CamScannerでスキャン



写真＝日々

Inter Love〉のように非常にエモーショナルに吹いたり、あるいは〈Dream State〉のように瞑想的な雰囲気だったり、〈Road To Sea〉ではエフェクトを使ってクールな感じだったりと、多彩なアプローチで吹いているように思えます。このアルバムでの自身のサックスの役割については、どのように思っていますか。

「サックスは、僕が自分の頭の中にある音楽を表現するために使う楽器。つまり、僕にとってサックスは、メロディを演奏する楽器であり、人間の声のようなものと密接につながっているんだ。僕は素晴らしい歌声を持ってない。でも幸運にも、サックスのおかげでそれを表現できる。グループの中での僕の役割は、皆を一つにすること、そして、バンドをさまざまな方向や場所へ導くこと。そして、皆がそれぞれのエネルギーをもたらすことができるスペースを作ること。このアルバムに限らず、すべての音楽で、僕はサックスを使ってその役割を務めているんだ」

――サックスで今回何か新しい試みに挑戦したりはしましたか？　サックス以外でも構いませんが。

「僕は常に新しいことに挑戦している。今回も、エフェクトやミキシングに関しては、色々なタイプのエフェクトを使ってみたり、演奏に関しても、これまでとは違うハーモニーやリピートの仕方を試してみたりした。そして今回は、さっき〝ダンス・アルバム〟に関して話したけど、人々が身体を動かす様子をイメージしながら作ったから、それがサウンドに影響していると思うね」

各曲が異なる目的や世界を持っている

――曲についていくつか質問させてください。冒頭の〈Leganu〉で唱えている言葉は、エチオピア正教会の典礼に使われるゲエズ語だとのことですね。ここで唱えている言葉はどういうことを言っているのでしょうか。

「曲の中の言葉は、歌集の一部を朗読し

CamScannerでスキャン

ていたんだ。この曲は、どんなことを表現したかったのかというと、まずこのアルバムは、さまざまな場所についての話をしている。その中でも、僕はこの曲でアルバムをスタートさせたかった。なぜなら、この曲は人生に対する感謝の祈りのような曲だから。僕にとってこの曲の目的は、ただ、ありがとう、と言うことなんだ。曲、僕は音楽が大好きだ。自分の人生のために音楽を作ることができていることが本当に嬉しい。その機会をくれたすべてに僕は感謝しているんだ。

――この曲の旋律はエチオピアの伝統音楽と関係がありますか。

あるよ。エチオピア音楽の音階だし、スタイルやリズムもそう。若い時、僕はエチオピア音楽をたくさんプレイしていたんだよ。この曲では、エチオピア音楽とアフリカン・アメリカンのゴスペル音楽が混ざっている。エチオピアの教会とアフリカン・アメリカンの教会とジャズ・バンドを混ぜたらどうなるだろうっていうのが、この曲を作っていた時のアイデアだったんだ。

――静かなホーンズのイントロからバトリース・クインの歌を経てあなたの激しいサックスにつながる大作「Cesars」が終わって、ラス・マーティンとの短い幻想的な「Re Run」、ジョージ・クリントンをフィーチャーした楽しい曲「Gas Mask」、アンドレ3000が意外なことにフルートを吹き、彼のフルートのリフのループであなたが幻想的なソロを吹く「Fists of Fury」と続いて、幸福感が漂うゆったりとした「Change of the Guard」につながる中盤の流れが好きです。曲のつながりやアルバムの構成が非常に緻密に練られているように思えるのですが、いかがですか。

その通り。ストーリーを伝えられるように、曲順はかなり長い時間をかけて考えたんだ。人生への感謝から始まり、そして、その次は僕の人生を超えて思い続ける人生の世界に入りたかったから、娘のメロディを使った「Re Run」を持ってきた。それぞれの曲が、異なる目的や世界を持っているんだよ。

――最後の「Fists of Fury」はAG・ロジャスが監督したヴィデオが2015年で公開されています。モノクロとカラーが混在して、常にゆっくり動いているカメラが、さまざまな動きをする人々を写している印象的な映像ですね。最後の曲のタイトルが「Procession」なわけですが、この曲は何のプロローグなんでしょうか。

その曲は、アストル・ピアソラという有名なアルゼンチンの作曲家の曲、そして通常、プロローグというのは何かの最初にくるものだよね。今、僕は娘がいるから、これからの世界がどんな世界であってほしい、という願望がより強くなった。多くの場合、何かの始まりは何かの終わりでもある。言い換えれば、何かが終わることで、新しい何かが始まるわけで、将来手に入れたい何かを掴むためには、今持っている何かを終え、手放す勇気が必要な時もある。僕にとってこの曲は、今あるものを手放して、次にやってくる新しい何かを掴む勇気を表現した曲なんだ。

「電話インタヴュー。通訳＝原口美穂」

『フィアレス・ムーヴメント』
ヤング・アート 2015年3月31日発売

The Epic

カマシ・ワシントン・アルバム・ガイド

文＝落合真理、花木洸、原雅明

物語はここから始まる。

『ジ・エピック』は、2015年のリリース当時34歳であったサックス奏者、カマシ・ワシントンの衝撃のデビュー作である。それまでもLAのミュージック・シーンで、スヌープ・ドッグやケンドリック・ラマーのバンドに参加し、その厳ついルックスも含め、独特の存在感を放ってきたカマシ。2010年にかねてから親交のあったプロデューサー、フライング・ロータス（アリス・コルトレーン の甥）に声を掛けられ、気心の知れたLA界隈のジャズメンと共に（ベースはサンダーキャット、ドラムはロナルド・ブルーナー・ジュニア、鍵盤はブランドン・コールマン等）、自らの音楽的出自であるゴスペル、ビッグ・バンド、ヒップホップなどを深化させ、まさに叙事詩的な音世界を作り上げた。

完成までに5年間を費やした本作は、デビュー作としては前代未聞の全17曲、総収録時間は172分に及び、32名のオーケストラと20名のコーラスを含む総勢60名以上が参加している。1か月で完成した45曲中17曲をフライング・ロータスに聴かせたところ、"厳選してから教えて"と言われたが、全曲を通して聴いた彼は最終的に1曲たりとも削れないと判断。自らのレーベル、ブレインフィーダーから3枚組のアルバムとしてリリースするという英断を下した。

かくして『ジ・エピック』は日の目を見て、ジャズ界のみならず全ミュージック・シーンを揺るがす一大トピック、いや一大事件となったのである。

第1部（"The Plan"）の1曲目「Change Of The Guard」は、盛大なストリングスを纏した激しいモード・スウィングで幕を開ける。カマシいわく、夢の中に門番が現れ、ストーリー展開を案内してくれるガイドのような役割を担っているとのこと。ここで彼はジョン・コルトレーン後期の特徴でもある燃えるような咆哮を続け、やがて物語は緩やかで甘美なエンディングを迎える。サンダーキャットの手練れなエレクトリック・ベースが印象的な「Askim」、オルガンがグルーヴィなベース・ラインを支える美しい「Isabelle」と続き、ラスト「The Rhythmic Changes」はパトリス・クインによる太陽の光のようなヴォーカルをフィーチャーし、ポジティヴなオーラで第1部を締め括る。

第2部（"The Glorious Tale"）と第3部（"The Historic Repetition"）では、カマシ自身の過去、現在、未来を映す立体的かつ流動的なパフォーマンスが繰り広げられる。熱を帯びつつも、それ以上に客観的なプロデューサー的視点を持ち合わせる彼の根源には、LAジャズの巨匠＝ジェラルド・ウィルソンから受け継がれた手法と魂が脈打つ。過去を認識・再構築することの重要さを説きながら、「Re Run Home」で1970年代ファンクをリイマジンし、ドビュッシーの「月の光」で高揚感溢れるアンサンブルを、テレンス・ブランチャード作の「Malcom's Theme」（映画『マルコムX』のサウンドトラックから）では、シンガーのドワイト・トリブルとクインがソウルフルなデュエットを聴かせ、感動を呼ぶ。

LAジャズの申し子、カマシ・ワシントンの鮮烈なデビュー作であり、独自の世界観で現代ジャズ史に風穴を開けた『ジ・エピック』。彼自身の伝説の始まりであり、現在のカマシ・ワシントンに繋がる壮大なストーリーは、確かに『ジ・エピック』を起点としているのだ。

（花木洸）

CamScannerでスキャン

2018
サンダンバート
ハリウッド

Heaven And Earth

『ワン・レニック』から約3年の時を経て発表されたフル・アルバム。クリーク年にリリースされた『ワン・レニック』のアルバム自体の反響はもちろんながら、同年にはケンドリック・ラマー『トゥ・ピンプ・ア・バタフライ』への参加、16年のフジ・サマーソニック17年のサンダーキャット、イライジャ・ウィンウィンドー、シンヨン・レジェンドなど、カマシ・ワシントンの名前も増え、注目度が高まった状態でのリリースとなった。16年には日本のフジロックにも出演し、国内での知名度もクライマックスに上がっていた時期だ。

そんな期待のもとリリースされたのは、絶対論なライヴの多くの名演を経た後のことも知るファンも増えるなか、カマシ・ワシントンらしいミニマリズムとスピリチュアルなエッセンスがどんなバランスで詰め込まれているのか、あるいはそのようにして作品が生まれ、そしてそれはどのようにオーケストラルなジャズ・サックス奏者としてのカマシ・ワシントンではなく、プロデューサー作編曲家としてのカマシ・ワシントンなのか。

アルバムは自身の内面をあらわす『アース』（ディスクワン）外部の世界をあらわす『ヘヴン』（ディスクツー）で構成されている。配信などでは別アルバムとなっている16年リリースのアルバム『ザ・チョイス』は、フィジカルでのリリース時には、この作品のボーナス・ディスクとして収録されていた。

録音メンバーは前作からはほぼ変わらず、彼の率いる『ザ・ネクスト・ステップ』のメンバーが中心に、クワイアやストリングスなどのアンサンブルが加わる編成。メインは、前作ではストリングスのみだったアンサンブルに、金管楽器、木管楽器、そしてバーカッションが加わり、さらに多彩なものとなっているところだ。分厚くもクリアに聞こえる録音は『ウィー・アー・ザ・ワールド』の録音も行われたA&Mの名門ヘンソン・スタジオ（チャップリン・スタジオ）でのレコーディングも功を奏している。

アルバムのスタート『トラヴィン・ライトの登場』のようなカウアーはカマシの名刺を表明するようなもの。日本公開は長時代の上海でブルース・リーが活躍するこの映画を取りあげたこと、そしてこれが黒人がヒーローの映画ではないことは、インクウェルでも『ブラック』という表現を避ける彼らしい選曲だ。ストリングスとクワイアを使った映画音楽のようなオーケストラルなアレンジながら、リズムはアフロ・キューバン調、その上でサックスやピアノがアグレッシヴにソロをとる、このマリアーシュにカマシ・ワシントンの、らしさが凝縮されている。フレディー・ハバードの『ハブ・トーンズ』のカヴァーでは、こちらも楽曲の4ビートをラテン調にアレンジ、かと思えば『テスティファイ』では『ストリート・ファイター・マス』ではファンクを基調に『ウィル・ユー・シング』ではクワイアを含めた分厚いアンサンブルをクラスタップ的なリズムがあえたりと、アレンジの幅は広く3時間近いアルバムのヴォリューム感を良い意味で感じさせない。ボーナス扱いの『ザ・チョイス』では、80年代のドゥーワップであるシュレルズのカヴァーや、トラディショナルなジャズにアレンジされた『マイ・ファニリー』スピリチュアル・ジャズ風のサックスのルバートにクリス・デイヴのドラムが切り込む『エージェンツ・オブ・ザ・マルチバース』など、こちらもヴァラエティに富んだ仕上がりだ。

（井上）

CamScannerでスキャン

Fearless Movement

2024
ヤング/ビート
YQ350CDJP

“圧倒的なカリスマ性で現代のジャズ・シーンを牽引するサックス奏者”（リリース・インフォ）と形容されているカマシ・ワシントンだが、『フィアレス・ムーヴメント』から見えるのは、ジャズ・シーンという枠で歩みを進めることから離れた姿だ。『ジ・エピック』の成功と『トゥ・ピンプ・ア・バタフライ』への参加を経て、『ヘヴン・アンド・アース』では作曲家としての評価も高めたワシントンに対して、“ジャズ・プレイヤーではない、（単なる）サックス奏者だ”彼の語彙はジャズではない”と発言して物議を醸したのはブランフォード・マルサリスだった。あの頃のワシントンは、ホレス・タプスコットやジェラルド・ウィルソンのレガシーも受け継ぎ、ロサンゼルスのジャズ・シーンの代弁者として活動する意志を強く持っていた。だから、マルサリスの発言には同意しかねたが、ジャズの中心地であるニューヨークで活動をして評価を得ようとしないワシントンへの冷ややかな反応も根強くあるのだろうと感じた。

その後のロバート・グラスパー（彼もまたマルサリスの批判を受けた）らとのディナー・パーティーでの活動は、シーンを越えたゲストも招いた本作の世界に進む後押しになったと思われる。とはいえ、本作でワシントンの音楽性が大きく変化したわけではない。ただ、個性的なゲストもすべて引き込んでしまうくらい、その音楽性はより強固なものとしてアルバムを貫いている。象徴的なのは、“New Blue Sun”をリリースしたアンドレ3000のフィーチャーだ。インディアン・フルートを吹いて、ニューヨークのブルーノートにも出演したアンドレは、8分強の「Dream State」という曲で現在の彼の静かな世界観を冒頭に展開し、ワシントンのテナーと時折ユニゾンで重なる演奏をしている。だが、次第にダイナミックに刻まれるリズムに乗るテナーが支配的となる。アンドレは自分のアルバムでは見せなかった、まるで普通のジャズ・フルート奏者のように空いたスペースを埋める演奏を始める。

「Dream State」の躍動感を増していく演奏そのものは聴き応えがあるが、現在のアンドレをフィーチャーするのであれば、テナーとのデュオをメインとした展開を聴きたかったと思う。しかしそのような不確実性の伴うアンビエント・ジャズ的な演奏は、このアルバムでは必要とはされていないのだ。BJ・ザ・シカゴ・キッドをフィーチャーした「Together」という曲も、ライアン・ポーターのトロンボーンを軸にしたワシントンのバンドらしいバラードの演奏スタイルが、以前にも増してしっかりと確立されている。その中に、BJの歌が配置されているという構図だ。

これらの曲に表れているのは、ジャズの即興性よりも作曲がメインで、ポップスのスタイルも下敷きにした演奏と捉えるのがしっくりくる。それは、リスナーが共感しやすいポップスを抽象化して解釈し、カヴァーしてきた、従来のジャズの演奏とは異なっている。ファンクにもフュージョンにも移行せずに、ストレートでダイナミックなジャズのままポップスのフィールドに突き進んでいるとも言える。その結果として、繰り返しの多いフレージングも、熱量を増していくソロも、分かりやすくスタイル化されている。グラスパーはマルサリスへの反論をしたが、ワシントンは沈黙を守った。その間接的な返答も、このアルバムには表れていると感じた。（原）

CamScannerでスキャン

その他重要作品、ゲスト参加作品など

細田成嗣

フライング・ロータスがジャズを掲げた“You're Dead!”（14年）への参加が話題を呼び、3枚組の大作“The Epic”（15年）で現代ジャズ界に衝撃的な登場を果たしたかに見えるカマシ・ワシントンだが、その時点で既に10年以上のレコーディング・キャリアを積んでいた。最初のアルバムは04年にバンド名義でリリースした“Young Jazz Giants”。高校時代にキャメロン・グレイヴス（p）、ステファン・ブルーナーすなわちサンダーキャット（b）、ロナルド・ブルーナー・ジュニア（ds）と結成したヤング・ジャズ・ジャイアンツによる作品だ。カマシ名義では、ほぼ同メンバーにブランドン・コールマン（kbd）、マイルス・モズレー（b）、ライアン・ポーター（tb）、テラス・マーティン（as）らを加えたバンド＝ザ・ネクスト・ステップを従えて吹き込んだライヴ盤“Live At Sir Cecil Dixon”（05年）が初作。その後、スタジオ盤“The Proclamation”（07年）“Live At The World”（08年）を出している。豪快な風貌も相まって咆哮するサックスのイメージがあるカマシだが、バラードから高速ビバップまで巧みにこなす技術力の高さがこれら初期作品からも聴き取れる。

Young Jazz Giants “Young Jazz Giants”

“Harmony Of Difference”

“Becoming”

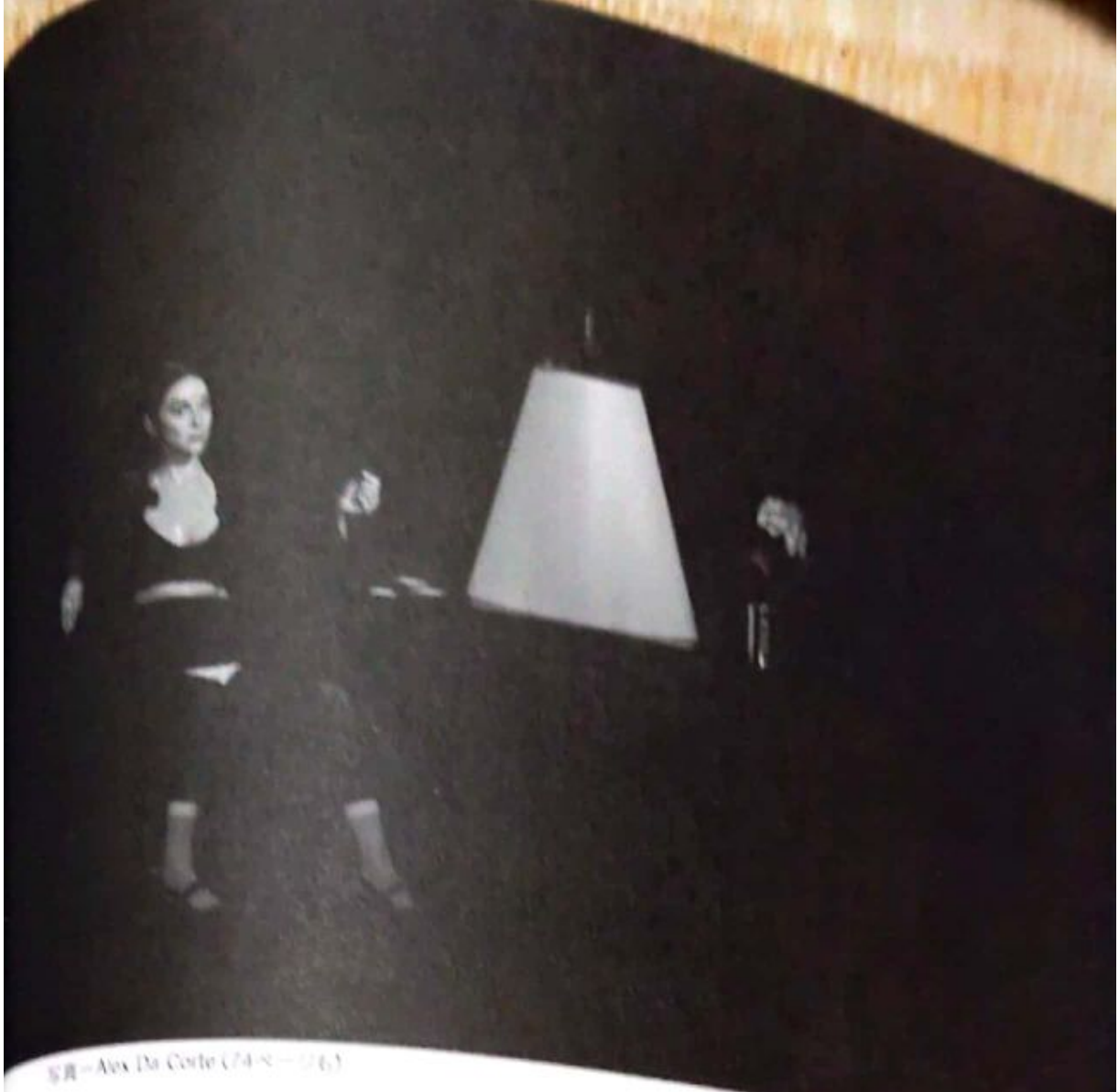
大学時代に師事したジェラルド・ウィルソンのオーケストラへの参加もカマシの初期キャリアでは重要だ。00年に加入して14年にジェラルドが没するまで活動を共にし、4枚のアルバムに参加。こうした経験がカマシの作編曲に影響を与えたと思われるが、大編成という意味ではホレス・タプスコットが立ち上げたパン・アフリカン・ピープルズ・アーケストラでも演奏している。初期のキャリアでは高校時代から仲間たちと参加していたスヌープ・ドッグのバック・バンドとしての活動も見落とせないことを付記しておく。

ザ・ネクスト・ステップのメンバーとも重なるカマシの幼馴染たちからなるLAのジャズ集団＝ウエスト・コースト・ゲット・ダウン（WCGD）が正式に結成されたのは09年。実質的にはそれ以前からライヴや録音で共同作業を続けてきたわけだが、15年にこのコレクティヴが参加したケンドリック・ラマーの傑作“To Pimp A Butterfly”、そしてカマシの“The Epic”がリリースされると、その後、堰を切ったようにWCGDメンバーのリーダー作が相次いだ。

ところで17年はカマシ本人のキャリアを見ると転機と言える年だった。ブレインフィーダーからヤング・タークス（現ヤング）に移籍してEP“Harmony Of Difference”を発表。同レーベルを傘下に持つXLレコーディングスの主宰者リチャード・ラッセルによるコラボレーション・プロジェクト“Everything Is Recorded”（18年）に参加するなど活躍の場を広げる。他方で17年にはテラス・マーティンのプロジェクト＝ザ・ポーリーシーズの“Sounds Of Crenshaw Vol. 1”でカマシはロバート・グラスパーと音盤上で初めて共演。フレーズの反復を基調としたその音楽は20年にデビューするディナー・パーティーの萌芽にも聞こえる。

他にも初の映画サントラ“Becoming”（20年）、スロットル・エレヴェーター・ミュージックやカルロス・ニーニョ&フレンズへの参加など、彼の活動は多岐にわたる。だが様々なジャンルを跨ぐ器用さとWCGDを基盤としたコミュニティの強さを持ち合わせていればこそ、あのようにスケールの大きなリーダー作を生み出すことができたのではないだろうか。

CamScannerでスキャン



写真＝Alex Da Corte（74ページ参照）

St. Vincent

セイント・ヴィンセント

自分自身もクリープでフリークでウィアードだと思っている

オルタナティヴ・ロックの遺伝子であることを証明した、初のセルフ・プロデュース作品

岡村詩野

2021年の新作"Daddy's Home"から3年ぶりとなるセイント・ヴィンセントの新作"All Born Screaming"は、彼女のルーツを再証明する力作だ。初の完全セルフ・プロデュースだが、それは彼女が自分の世代の音楽だという90年代のオルタナティヴ・ロックの遺伝子であることを心おきなく実践したということでもある。メタリックで切れ味あるエレクトリック・ギター、歪んでずっしりと重い低音、目の詰まった密度の高い音圧、そしてヒリヒリとした、まるしくスクリーミングなヴォーカル…それらは確かにセイント・ヴィンセントア

ミー・クラークの参加をなど重要な変化があった。さらに今作ではニルヴァーナ時代さながらにデイヴ・クロールをドラマーとして起用、さらにはマーク・ジュリアナ、ステラ・モズガワ、そして現フー・ファイターズのジョシュ・フリーズといったドラマーにも声をかけている。ベックやナイン・インチ・ネイルズらとの共演でも知られるジャスティン・メルダル・ジョンセン、最近ではウィルコの新作もプロデュースしたケイト・ル・ボンらも招集した。彼女はゆっくりと言葉を選びながら言う。「今回のアルバムで当時のあのロックを探求してみた」。それは今の時代だって"I'm a creep, I'm a weirdo, I'm a loser"と歌っていい、歌うべきという一張だ。今作で実践した20年代クリープでルーザーでウィアードなロックの音作りの肝とは何か。リモートで話を聞いた。

リアルなことしか書きたくなかった

――プレス・リリースであなたは今作について"its my least funny record"（笑えないレコード）と語っていますね。

（笑）。前作の"Daddy's Home"は重いテーマでブラック・ユーモアがふんだんに盛り込まれていて、自分が想像するある種のパワーを表わそうと思っていたの。でも今作ではペルソナやアイデンティティを追求する気はあまりなかった。ただ誰もが人生に跪かせられる瞬間があるはずなので、必要不可欠でリアルなことしか書きたくなかったってわけ（苦笑）。だから必要性も切迫性もない歌詞や音は外したの。まあ、そもそもあの作品は父についてのアルバムということでもなくて。自分の中にある複雑な感情をどうにか紐解いて、父から教わり、私自身も愛している音楽を制覇し、その一部になることによって自分の主体性を取り戻すということだった。もっとも、自分のそういう意図に気づいたのはアルバムが完成してから。だから今作には深い悲しみも自己嫌悪も多く詰まっている。でも後半に入ると〝人生の辛さは誰でも経験するけど、人生は一度だけ、絶対に生きる価値はある。人生を満喫して最善を尽くすべきって感じのカオスになるんだけど（笑）」

――今作は初の単独セルフ・プロデュース作品と位置づけられています。共同作業として制作に関わっていた過去の作品と、具体的な作業のプロセスなどにおいてどのような違いがありましたか。

「今回はまず自分の手持ちのモジュラー・シンセとドラム・マシーンを並べ、アナログの電子回路を使って電気を流したらどんなものができるか？というところから始まったの。そういうのがエキサイティングなカオスだと思うから、自分が雷の神のような気分で刺激的なサウンドに突き当たるまで、機材のつまみを回し続けた。スタジオで永遠に音やビートと遊び、エレクトロニックなポスト・インダストリアル・ミュージックをたくさん作りだし、それを聴き返して〝これはすごくエキサイティング！この部分を発展させて曲にできる〟という発見をしていった。"Broken Man"や"Big Time Nothing"は、そういうところから生まれた曲。"All Born Screaming"のサイケっぽい終わりからアウトロまでの部分も、ただ演奏しているだけ。これは新しい手法の演奏ね。制作のプロセスには思慮深さと、子どものように楽しくて仕方がないという心の両方が必要だと思う。それを最終的にちゃんとした曲に作り上げるのが大変。そこが一番難しい」

――今作を手がけるにあたり、どういうプロデューサーの仕事をお手本、参考にしたのでしょうか。

「特になかったけど、J・ディラ、リー・スクラッチ・ペリーやキング・タビーなどのプロデューサー陣が手掛けるダブ・プ

CamScannerでスキャン

ロダクション・スタイルは大好き。セルフ・プロデュースの場合、裁判官、陪審員、そして実行役をすべて担わなければならない。最後の一音まで歌詞のすべてを真実として歌いきれるまで歌わなきゃいけないし、1万フィート下がって「うん、これは上手くいきそう」って客観的に見ないといけない。でも、細部まで追求する必要もある。それの行ったり来たりが大変なの」

――ダブ・プロダクションをどのように今作にフィードバックできたと言えますか。

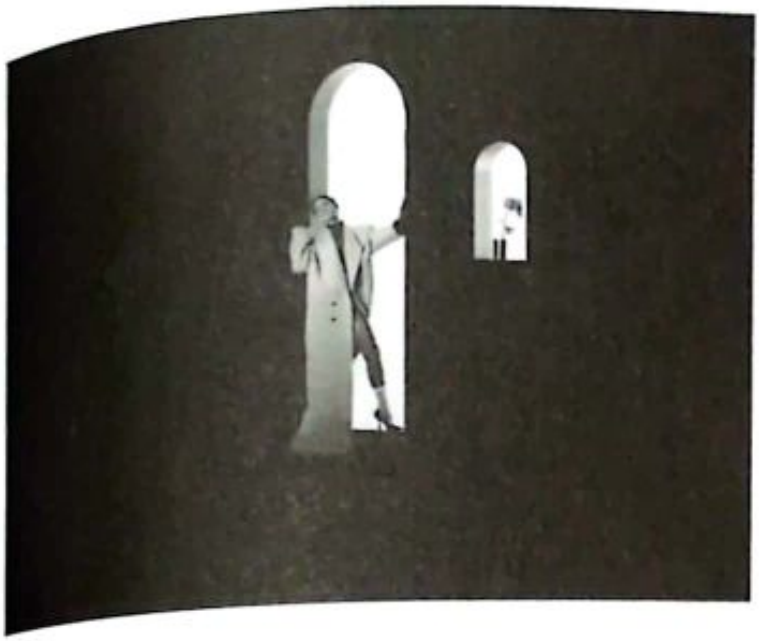
「ダブにはまるで音に触れられるような感触があって、それが好きな理由の一つ。例えばリー・スクラッチ・ペリーがスネア音をスプリング・リヴァーブに通すとバネの金属音が聞こえたり、シンバル音をテープ・エコーに通すとテープの音が聞こえるでしょう？　テープをシュルシュル巻く音まで聞こえる。実際に触れることも大事。実際にテープを触り、卓を触り、つまみを触る。コンピューターを使っていると目で確認してそれを真実として受け止める。だけど実際に触れると（楽曲と）新たな繋がりが生まれるしリズムにも関係していく。これまでのプロデューサーやダブ・プロデューサーから私はそういうことを学んだ。『こういう音にするんだ』という大きな決断をすることにより、それが次の音に影響をもたえ、より分かりやすく安定感のある方法で曲が構築される。建築のようにね」

――今回のアルバムではデイヴ・グロール、マーク・ジュリアナ、ステラ・モズガワ、さらにはジョシュ・フリースというそれぞれに異なるドラマーが起用されていますが、それも今の話と関係あると言えますか。

「そう。プロデューサーの腕が試されるのは、必要な個所に適切な人材を呼べるかどうかだと思う。デイヴ・グロールに声をかけたのはエネルギー・レヴェルを『8』から『11』に振り切りたかったから。彼はとてつもないパワーの持ち主。と同時に素晴らしいソングライターでもある。

ジョシュ・フリースはロック界の偉大なドラマーの一人。でも彼にお願いしたHell Is Near』のドラム・パートは極力抑え目。非常にシンプルだけど、彼だったら1音1音に全身全霊を込めてくれるってわかっていた。その他にもほぼレゲトンというか冒険的なダブの旅とも言える『Go Many Planets』にも参加してもらった。私がダブを完全に取り違えていたらどうしようっとも思ったりしたけどね。彼は本当に力強いドラマーで、でもスペシャルズっぽい演奏を要求されることには当然慣れていなかった。それでも全力でやってみよう！ってチャレンジしてくれたおかげで素晴らしく美しい結果になった。

そしてマーク・ジュリアナ。彼と一緒に生演奏できるなんて、本当に私って幸運。色んな意味で素晴らしいドラマー。『Violent Times』にグルーヴを与えてもらった。それからステラ・モズガワのタムタムが大好きな私は、彼女が『Sweetest Thing』にぴったりだろうなと踏んでいたの。レゲ



CamScannerでスキャン

トラックに乗ったきらびやかな女のタムタムはナイン・リアン・ポップス的なフィーリングの作りのドラマーはそういう観点から選んだのよ。ギリシアンの勢そろいね」

――ドラムにしても曲ごとに異なる音作りをしようとなると、あなた自身のヴォーカルとのバランスも必然変化しますよね。

「ミキシングは曲ごとに違う手法をとっていた。例えば『Sister Ray』みたいな曲は繊細さが必要だったので、歌詞は聴き取れるか聴き取れないかぐらいに抑えた。余計なものは省き、目の前の状況を述べていくことを重視したので必要最低限のヴォーカルしかいらない。目の前の状況を出来る限り冷静に説明し、あとは音楽とメロディに任せるだけ。あの曲はリヴァーブを多用していて、大好きなコクトー・ツインズのエリザベス・フレイザーに敬意を示したの。そして次の曲では完全に乾いたヴォーカル・サウンド……と、曲によってアプローチを変えていったから確かに違うわね」

"これこそ私たちの世代の音楽"

――それほど丹念でアイデア豊富な音作りをしつつも、あなたの作品はどうしようもなく"ロック"だと思います。あなた自身の起点となるのがロック・ミュージックであることは自覚しているのでしょうか。

「やっぱり誰もが幼稚園から受け継いでいる音楽ってあると思う。だけど90年代初期のロック・ミュージックを初めて聴いたとき、"これこそ私の音楽。他の世代から受け継いだ音楽ではなく、これこそ私たちの世代の音楽だ"って確信した。1991年にテキサス州のダラスで初めてニルヴァーナのカセットを聴いたのを覚えている。あれで自分が大きく変わった。だから、今回のアルバムでも当時のあのロック、あの荒いロックを探求してみたの。考えてみれば私のヒーローたちは'I'm a creep, I'm a wierdo.'(レディオヘッド〈クリープ〉)、'I'm a loser.'(ベック〈ルーザー〉)と歌っていたじゃない？　だから自分自身もクリープでフリークでウィアードだと思っている。醜い物も深い悲しみも怒りも直視する必要があるってことね」

――ところで、アルバムのタイトルと先行曲'Broken Man'のタイトルを見て、レイジ・アゲインスト・ザ・マシーンの'Born Of A Broken Man'という曲を思い出したのですが。

「知らない。どのアルバム？」

――99年のアルバム'The Battle Of Los Angeles'に収録されています。"敗残者のもとに生まれたけど、落ちぶれていない。(Born of a broken man but not a broken man)"というフレーズが印象的なのですが、あなたは'Broken Man'という言葉をどういう意図で使ったのでしょうか。

「ここにいる誰にも負けない、誰にも私を止められない、自分は最高にイケてる！"とふんぞり返って歩くことがあっても、その虚勢の根底にはどうしようもない脆さが潜んでいるもので、その虚勢が暴かれそうになれば怒りが沸く。そしてその怒りを掘り下げると深い悲しみに直面する…って感じかな。ただ、そもそもなんで'Broken Woman'じゃなくて'Broken Man'にしたのか自分でも理由はわからない。なんとなく'Broken Man'の方が音に乗せやすかったという、そんな単純な理由だったかもしれないし、もしかしたら'Broken Man'の方がイメージ的になにか心を揺さぶるものがあったのかもしれない。自分の男性的な面がそう思わせたのかもしれないわね」

〔3月26日　Zoomで〕

田

"All Born Screaming"
Total Pleasure / VMG
4月26日発売

CamScannerでスキャン

ジェフ・ミルズ

宇宙は人類にとって依然として重要なテーマであり続けている

テクノのオリジネイターに聞く

小野島大

ろせなかったのが残念。

進化に関わるのが好きなんです

――あなたはお会いするたびに違う試みをやっていて、常に新たなアプローチで新しい音楽、新しいアート・フォームを作ろうとしているように思えます。

「私は進化していく芸術の形態を好意的に受け止めているんです。成長し、拡大し続けるものの進化に関わるのが好きなんですよ。そして、エレクトロニック・ミュージックは、エンターテインメントという点で、より幅広い観点から考えられるべきだと考えています。主にダンス・フロアのためだけでなく、ダンス・ミュージック文化の枠の中だけでなく、エンターテインメントという広い観点からね。だから、コンテンポラリー・ダンスに応用したり、ミュージカルやオペラに応用したり、より幅広い敬意を払うというアイデアは、理にかなっているんです。エレクトロニック・ミュージックが生まれてから40年以上が経ちますが、何かしらそういった新しい提示をしていければいいと思いました」

――あなたは常々、ダンス・フロア向けに特化しすぎたことでエレクトロ・ミュージックの進化が妨げられてるんじゃないかとおっしゃってますね。

「そうですね。音楽プロデューサー、レコード会社、パーティ・プロモーターなどが一体となってダンス・フロアということを強調しすぎて、それが仇になって視野が狭くなってしまったことはあると思います。アコースティック・ミュージックを聴く耳やセンスがなくなってしまったり、人間が演奏しているということを受け入れられなくなってしまったり、マイクで録音されたものをダイレクト・エンドで聴くことができなくなってしまったり。素晴らしい音楽を生み出すには他にもたくさん方法があるし、もう1回、オープン・マインドになってそのことを見直してもらいたい、そういった素晴らしい音楽の作り方とか聴き方があるっていうことをみんなに知ってもらいたいと思ってます」

――今回のプロジェクトが実現したのはどういう経緯なんですか。

「1992～93年ごろかな。アンダーグラウンド・レジスタンス（UR）にいた頃、よく"ブラックホール"というアイデアについて話していたんです。ギザの大ピラミッドについて神話や歴史といったものを探求するアルバムを作ろうというアイディアをね。結局、僕がURを辞めたので立ち消

CamScannerでスキャン

えになってしまったんだけど、2019年にブラックホールが存在することが確認されて、ブラックホールが実際にどのようなものなのか、最初のシミュレーション画像を手に入れたのです。それでブラックホールをテーマとして扱いたいという気持ちが強くなりました。そうするうち、1年ほど前にCOSMIC LABからオファーがあったんです。彼らとは2016年に『THE TRIP』として宇宙をテーマにした映像と音楽のイベントをやっていました。それは宇宙人に拉致されるという内容だったんですが、それをさらにスケール・アップしたような企画をやりたいっていうことを話しました」

未来の何かを聴いているという感覚

――ジェフさんは宇宙をテーマやモチーフにした作品が非常に多いですね。そうでない作品を挙げるほうが難しいという。今さらですが、なぜそんなに宇宙に惹かれるんですか。

「SFは本当に私を虜にしたんです。ファンタジーのストーリーテリングや、物語を語る仕組みにとても興味があったし、そのうえでエレクトロニック・ミュージックがあらゆるクリエイティヴなメディアを包括することができれば、究極のアートになれるという信念があった。エレクトロニック・ミュージックがコンテンポラリー・ダンスだけでなく、映画でも、彫刻でも、建築でも、あらゆる創造的な芸術形態と関わり合い、流動的に対話することができれば、究極の表現方法を手にすることができるかもしれない。そう考えた時に、宇宙というテーマが共通言語になりやすいと思ったんです。科学者とかでない限りは、みんなが同じような知識しかないから、同じようにみんなでアプローチしやすい。一緒に学び、成長していくことができますから」

――いわゆるアフロフューチャリズムの思想の影響はありますか。

「いや、それはないね。というのも、アフロフューチャーという言葉は、比較的新しいタームで、サイエンス・フィクションというジャンルから出てきたものだから。『スタートレック』のようなSFや、いくつかの映画の中にその兆候や影響を見つけることができる。たとえばサン・ラー。彼の生き方は非常にSF的だった。彼の、土星からやってきて土星に帰るというストーリーは、アフロフューチャーというよりはSFだね」

――SFとは結局、想像力だと思うんです。例えばブラックホール。誰もブラックホールを通過したことはない。だから、あなたがブラックホールをテーマにした作品を作るとき、想像力を最大限に働かせなければならない。

「その通りです。それこそが、人々がS

CamScannerでスキャン

『THE TRIP - Enter The Black Hole』
アクシス／ウーマ UMA11147／4月24日発売

もちろん、未来の何かを聴いているという感覚を得ることができる。それは、エレクトロニック・ミュージックが単なる音のスタイル以上のものであるということです。私はほかのジャンルの音楽やアート・フォームで、そうした感覚を与えてくれるものを思いつきません。一部のSF映画を除いてね。それが、エレクトロニック・ミュージックが何十年も前から進化してきた中で一番重要なポイントなんじゃないかと思います」

――なるほど。

「音楽家が、まだ存在しない未来のことを、もうずっとずっと先の未来のことを想像して作る。普通の科学者とかそういう人たちとは違う、想像だけで、音とかシーケンスを作っていく。それが面白いんです。そういうテクノ的なものを作っている人たちの間で共鳴するような、聴く人たちも共感できるような、共通した未来の感覚みたいなものを持つことができる。それがエレクトロニック・ミュージックの偉大な側面だと思います」

――最後の質問です。もしあなたが『スター・ウォーズ』の新作のサウンドトラックを頼まれたら、どんな音楽を作りますか。

「おお…（苦笑）。私はジョン・ウィリアムズが大好きです。ジョン・ウィリアムズの音楽で育ったんです。でもね、そろそろ何か違うものが必要かもしれない。もっと今の時代に合った音楽が必要なんだ。今という時、今という瞬間、僕らが今いるこの時間を反映するようなものをね。より強く、より抽象的で、多次元的なもの。僕はクラシック音楽も好きだけど、はるかかなたの銀河系の話をしているとき、クラシック音楽じゃないだろうと思う。まったく異なる歴史を持つ、宇宙の別の場所にある別の惑星について話すんだから。たぶん、その動物たちは地球上の動物たちとは違う音を、違う声を出しているはずだからね」

（4月1日　麻布・UMAAで）

CamScannerでスキャン

特集 アマピアノ

昨年から世界的なヒットになっている、
女性シンガーのタイラの楽曲「ウォーター」などによって
注目度を高めている南アフリカ発祥のダンス・ミュージック＝アマピアノ。
2010年代初頭にハウスから派生した、
シェイカーやログドラムを用いた独特のサウンドは、
南ア以外のアフリカ諸国やロンドン、東京にも飛び火して広がっている。
タイラの初アルバムがリリースされたこの機に、その全貌に迫ってみたい。

タイラ

南アフリカ発祥の音楽ジャンルがここまで世界的にポピュラーになったことは今までになかった

アマピアノの発生と展開

板谷曜子

CamScannerでスキャン

南アに根付いていたハウスから誕生。ここ数年で一気に世界中のクラブやフェスでプレイされるようになり、音楽ファンから熱い眼差しが向けられているアマピアノ。グラミー賞を受賞した南アフリカの新星アーティスト、クイラがブレイクしたことで、アマピアノというジャンル名はより多くの人々に知られることになった。

アマピアノは南アフリカ共和国発祥の音楽で、ディープ・ハウスやラウンジ・ミュージック、ジャズ、そして南アフリカ独自のジャンルであるクワイトやバカルディ・ハウスといったダンス・ミュージックがミックスされたハイブリッドな音楽だ。BPM113前後のテンポが中心で、曲全体を通して鳴るシェイカーがグルーヴを作り、小さめのキック、そして〝ログドラム〟というベースとも打楽器とも感じられるシンセ・ベースが使われていることが特徴だ。アマピアノはこれらを基本形として、日々進化し続けている。

では、アマピアノはどんな場所で、どのように生まれ、今日まで来たのか。その歴史を簡単に辿ってみたいと思う。

アマピアノが生まれた南アフリカはハウス大国。ヒット・チャートはハウスを基調とする曲で溢れており、街中で当たり前に流れ、世界的なハウスDJ＝ブラック・コーヒー（Black Coffee）が国民的英雄であるような、ハウスがポップ・ミュージックとして生活に溶け込んでいる、とてもユニークな国だ。

1994年まで続いていた悪名高い人種隔離政策、アパルトヘイトにより、黒人たちは政府に指定された旧黒人居住区、タウンシップで暮らすことを余儀なくされた。現在でも多くの人々が暮らしているのだが、当時は夜間外出禁止令や公共の集会の中止など、生活のあらゆる面を監視され、分断されていた。

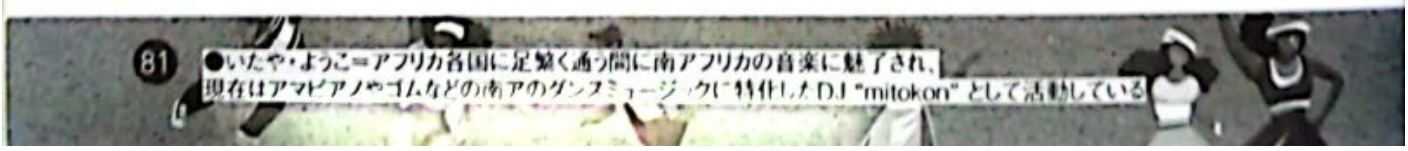
アパルトヘイト終焉の後、制裁が解除され、国際的な音楽にアクセスしやすくなった人々はハウスを輸入し始めた。そして生まれたのがクワイトだ。主にシカゴ・ハウスをダウン・テンポにし、ベースを強調して、現地の言葉のヴォーカルを乗せることによって始まったクワイトは、黒人たちの解放を象徴するサウンドトラックとして愛され、のちに南アフリカで生まれる様々な音楽の基礎となるジャンルになった。

クワイトやハウスは、DJたちのプレイやミックステープ、新しいレコード・ショップやラジオ局の誕生、そして〝タクシー〟と呼ばれ、親しまれている南アフリカの乗合バスでドライヴァーたちがプレイすることによって国中に広まった。

2000年代中盤から後半、クワイトの人気が下火になった後、人々が求めたのはより洗練されたディープ・ハウスだった。ブラック・コーヒーらが普及に貢献し、特にヨハネスブルグで人気を博した。また、ヨハネスブルグの北部に位置する都市プレトリアや、東部にある港町ダーバンなどでは、クワイトを基盤とした地域性のあるハウスも生まれた。

そして2010年代初頭、ヨハネスブルグやプレトリアのタウンシップで暮らすプロデューサーたちが新しい音楽を模索する中で生まれたのがアマピアノだ。アマピアノのパイオニアと言われているMFRソウルズや、キング・オブ・アマピアノと称されるカブザ・デ・スモール（Kabza De Small）は、元々ディープ・ハウスのDJやプロデューサーだった。主流はBPM125前後のテンポだったが、人々がもっと踊りやすいゆっくりとしたBPMを求めていることがわかり、テンポを落とした曲を作り始め、その音楽を徐々に広げていった。

初期のアマピアノは、ジャズやゴスペル・ミュージックで演奏されるようなソウル



81 ●いたや・ようこ＝アフリカ各国に足繁く通う間に南アフリカの音楽に魅了され、現在はアマピアノやゴムなどの南アのダンスミュージックに特化したDJ "mitokon" として活動している

CamScannerでスキャン

フルな鍵盤楽器による長尺のソロがフィーチャーされることが一番の特徴だった。それらは"AmaPiano"と呼ばれるようになり――"Ama"は現地の多数派民族の言語であるズールー語やコーサ語などで複数形を表わす接頭辞を、"Piano"はピアノや鍵盤楽器全般を指しており、英語で言えば"The Pianos"を意味する――そこからジャンル名として定着したのだ。

2010年代中盤になると、メジャー・レーベルと契約するアーティストも出てきた。その頃の南アフリカはアフロ・ハウスやダーバンで生まれたゴム（Gqom）の全盛期だったが、アマピアノは少しずつヒット・チャートにも乗り始め、盛り上がっていった。

同じ頃、プロデューサーのMDU aka TRPが現在のアマピアノの代名詞であるログドラムのサウンドを発見して楽曲に取り入れ、他のアマピアノのプロデューサーたちもこぞってログドラムを使うようになった。今日ではログドラムはアマピアノの一番の特徴となるサウンドになったのだ。

そして2019年、カブザ・デ・スモールとDJマポリサ（DJ Maphorisa）が組んだデュオ、スコーピオン・キングスのファースト・アルバムと、彼らがプロデュースしたサムシング・ソウェト（Samthing Soweto）による楽曲"Akulaleki"が大ヒットし、アマピアノというジャンル名は南アフリカ全土で認知された。クワイトやヒップホップとも接近し、それまでは違うジャンルで活動していたアーティストがアマピアノに転向するなど、南アフリカは一気にアマピアノに染まった。

アマピアノの大流行により、それに関わる人々の生活は大きく向上した。アマピアノは社会全体を変化させた音楽なのだ。

人気が確立されてからもアマピアノは新しいサウンドを取り入れながら進化していき、派生ジャンルも増えていった。

アマピアノの拡散とこれからの姿

アマピアノの流行は、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行とも関係しているだろう。2020年、全世界がコロナ禍に突入した際、南アフリカ全土でも長期間のロックダウンが行われ、人々はパーティーができなくなった。そこで世界の例に漏れず行われたのがYouTubeやソーシャル・メディアでのDJ配信だ。特にメジャー・リーグDJズによる"Balcony Mix"シリーズはアマピアノを世界中に知らしめるきっかけの一つとなった。

また、TikTokやインスタグラムなどでのダンス・チャレンジの流行も大きいだろう。曲の魅力と共にそれに合わせたユニークなダンス・ステップや振り付けが世界中で踊られるようになり、アマピアノは認知度が上がり、人気が高まった。

ロックダウンの期間中は、多くの人々が自宅でアマピアノを楽しんでいたが、解除された後は外に出てクラブなどでアマピアノを大音量で楽しむことができるようになり、その魅力をシェアすることでアマピアノの人気は一気に爆発した。

元々、南アフリカと関係性が深く音楽的交流も多かったUKでは、南アフリカ国外では初の大規模なアマピアノのフェスティヴァルが開催されるなど、早い段階から注目されていた。2021年頃にはスクラッチクラート（Scratchclart / Scratcha DVA）らがアマピアノとUKベースや

DJマポリサとカブザ・デ・スモール

CamScannerでスキャン

UKファンキーを融合した楽曲をリリースし、クラブ・バンガーを生み出した。

アメリカでは、元々南アフリカのアーティストとの親交が深かったディプロ率いるメジャー・レイザーが、先述した"Believer"に出演。メジャー・リーグDJズとのアマピアノ・アルバムもリリースした。また、スクリレックスらダブステップやエレクトロのアーティストもアマピアノをリリースし、ファンたちを驚かせた。

アフリカ大陸の国々、特にナイジェリアでは南アフリカのアーティストとのコラボレーションによってアマピアノは広がった。そしてアフロビーツにアマピアノの要素が取り入れられるようになり、多くのヒット曲が生まれたが、元々ディアスポラが多く、欧米での存在感があったアフロビーツにアマピアノの要素が多く使われるようになった結果、オリジネーターである南アフリカの存在が薄くなってしまう面があることが問題視されている。

2021年にUKのアーティスト、ジョルジャ・スミスがガーナのプロデューサー＝ギルティビーツを迎えてアマピアノを取り入れた楽曲を発表した際も、オリジネーターの不在が物議を醸した。

生まれ故郷を飛び出し、新たなフェーズを迎えているアマピアノ。

ヨーロッパ最大のアフリカ音楽系フェスでは毎回、メイン・ステージの他にアマピアノのステージが設けられ、南アフリカのアマピアノ・アーティストたちはアメリカやヨーロッパ、UAEなどの中東各国、オーストラリアなど世界中を飛び回るようになった。西洋のポップ・スターたちがアマピアノを聴いて踊る姿は数多くシェアされ、サウンドクラウドやバンドキャンプには世界中のプロデューサーたちによるアマピアノ・エディットが溢れている。

そして、最大の出来事は"Nkosi"の大ヒットにより世界に羽ばたいた南アフリカのアーティスト、タイラが第66回グラミー賞で新設された"最優秀アフリカン音楽パフォーマンス賞"を受賞したことだろう。彼女はアマピアノや南アフリカの文化をアフロビーツ、R&Bなどと融合してポップ・ミュージックとして成立させている。

K-POPやヒップホップなどにもアマピアノの要素は取り入れられるようになってきており、今後もトレンドとして様々なジャンルに取り入れられていくだろうと予想される。

メジャー・レイザーとメジャー・リーグDJズ（写真＝tk）

アマピアノはいろんなジャンルと交差することができるし、ニーズに応えることができる懐の深い音楽だ。ここまで来ると、南アフリカのアーティストが不在のアマピアノはもういくらでもあるし、今後も新たな解釈が生まれていくだろう。

しかし、これを読んでアマピアノのオリジネーターたちの存在を感じ取ってもらえたら嬉しい。

南アフリカ発祥の音楽ジャンルがここまで世界的にポピュラーになったことは今までになかったことだ。搾取するのではなく、新たな価値を作り出すこととリスペクトを同時にできる時代は来ていると思う。アマピアノを通して新たな情景を見られることを期待している。

CamScannerでスキャン

アマピアノのアルバム／EP30選

選・文＝板谷曜子
文＝池城美菜子、石田昌隆、坂本哲哉、森崎昌太、吉本秀純

V.A.
AmaPiano
Volume 1

2016
House Afrika /
Born In Soweto

南アフリカ・ハウスの重要レーベル＝ハウス・アフリカ（House Afrika）からリリースされた初めてのアマピアノ・コンピレーション・アルバム。MFRソウルズ、カブザ・デ・スモール、カルヴィン・ファロ、ガバ・カナルなど、アマピアノの先駆者たちの曲が収録されている。ログドラムが導入される以前、アマピアノの基本形が少しずつ形作られてきていた時のサウンドを楽しむことができるだろう。（板谷）

Kwiish SA
Spiritual Sounds

2018
Kwiish SA

牽強付会を承知で言うが、本作収録の "Isgnathi (Gong Gong)" がなければアマピアノがここまで進化することはなかっただろう。BPM117前後のトライバルなハウス・ビートに神秘的な電子音、そして極め付けはトラックに強烈な推進力を与えるログドラム。これらが三位一体となった感染力の強いサウンドは、アマピアノをアンダーグラウンドからポップ・フィールドに押し上げる原動力の一つになった。（坂本）

Zing Mastar
General

2018
Mabala Noise

こちらもログドラム導入以前、少し遅めのテンポのアマピアノだが、プレトリア出身のアーティストが作っていたアマピアノがどんなものか知ることができるだろう。プレトリアらしいバーカッシヴなサウンドとクワイトが融合されたユニークなアルバムで、同じくプレトリア出身のクワイト・アーティスト、ペンシルとの共作 "Tshwara" は、まだアマピアノの名が一般に知られる前に南ア国内でも大ヒットした曲だ。（板谷）

MFR Souls
The Beginning

2019
Sony

MFRソウルズは、ジョハネスバーグに隣接するハウテン州イースト・ランド出身、トゥメロ・ネドンドウェとトゥメロ・マベヒットの二人組み。スコーピオン・キングスの二人が参加してシャ・シャという女性歌手が歌うヒット曲 "Love You Tonight" を含むデビュー作だ。テクノ・ポップみたいなキーボードが入ってきたり、ダブみたいに音をカットしたり、いろいろ展開するが南アらしさは一貫して感じられる。（石田）

CamScannerでスキャン

DJ Maphorisa & Kabza De Small
Scorpion Kings

Gaba Cannal
AmaPiano Legacy

2020
Gentle Soul

JazziDisciples
Disciples Of Piano

2019
Jazzidisciples

Kabza De Small
I Am The King Of Amapiano: Sweet & Dust

2020
Piano Hub / Sony

DJ Stokie
Amapiano Movement (Vol.1)

2019
Universal

CamScannerでスキャン

De Mthuda
The Landlord 2.0

2021
Universal

メガヒットしたEP『The Landlord』など多くの歌モノ・ヒットを生み出してきたデ・ムテュグ。プロデューサーたちがアマピアノの新たなサウンドを模索するなかで、デ・ムテュグはそれまでとは違う、アタック感が強すぎない丸みのある音色のログドラムを使うようになる。浮遊感と温かみを感じるサウンドは、エモーショナルな歌モノととても相性が良く、気持ちよく聴くことができる。特に、"Sgubu"は必聴だ。

（坂本）

MDU aka TRP & Kabza De Small
Pretty Girls Love Amapiano 3

2021
Piano Hub / Sony

アマピアノの先駆的プロデューサーと近年の隆盛を象徴するプロデューサーがタッグを組み、ファンの不意を突くように発表した50曲収録のアルバム（5週に亘って楽曲を公開）。黎明期は鍵盤を特徴にしていたアマピアノが、ログドラムという発見を経て、ポップかつラディカルに拡張している様をダイナミックに描いた一枚だ。50曲というヴォリュームを恐れず聴けば、アマピアノの新たな扉が開かれると思う。

（坂本）

Musa Keys
TAYO

2021
Keys

ミュージック・ヴィデオが鮮烈なヒット・シングル"Vula Mlomo"を収録した21年のアルバム。強力なログドラムのビートとキャッチーなサビを持ち、ダンス・フロアでの大合唱を容易に想像させる"Selema (Po Po)"や、ミニマルかつトライバルなムーンチャイルド・サネリーとの"Uy, Bambe"などのクラブ・バンガーを筆頭に、全編スリルと肩情感に溢れるが、美しいメロディが多幸感を加える。

（森崎）

Teno Afrika
Amapiano Selections

2020
Amapiano Tapes From Africa

アマピアノのメジャー・プロデューサーによるアルバム。ダンスホールを感じるログドラムやシンセ・サウンドなどアマピアノの新たなサウンドを提示しつつ、クワイトやカルディ・ハウスといったアマピアノのルーツであるサウンドを積極的に取り入れ、オルタナティヴなアマピアノを作りあげる。22年の2作目では、より洗練された音を聴かせる。

（森崎）

Mr JazziQ & Busta 929
Maba Jabul'abantu

2020
Black Is Brown

アマピアノのメジャープロデューサー同士のコラボ作。浮遊感のある電子音とパーカッシブなログドラムがうねるリズム、アイアー・ベースのバイレ・ファンキを想起させるサブ・ベースのコンビネーションを軸にした野性味溢れるバウンシーなサウンドに、自由連想のように綴みつくヴォーカル／ラップが印象的。冒頭のメロウな"Ezo Qo"も良いが、コズミック感が横溢する"Ezo Zodo"の陶酔感には敵わない。

（坂本）

Caltonic SA
The Terminator

2020
Ejarden

カルトニックSAは、リンポポ州センショベ生まれ。ヒット曲"[illegible]"を含むアルバム。これはプレトリア在住のシェ・コンカと作った曲。反復するアマピアノのビートの上でフルートの音色のキーボードがリリカルなメロディを奏でているなと思ったら、途中からアマピアノのビート自体が激しく動く展開となり、南アならではの感覚がすごくて感動した。他には躍動感ありすぎで今ひとつノれない曲もあった。

（石田）

CamScannerでスキャン

Vigro Deep
Far Away From Home
2021 Kalawa Jazmee

最初はラッパーを目指して音楽を始めたという、ブレトリアはアッテリッジヴィル出身のこの若きプロデューサーが鳴らすアマピアノは最初から少し違っていた。例えば、19年の「アントールド・ストーリーズ」における、硬質な音色を持ち、アタック感が強化されたログドラムが生み出すローリングするようなリズムはその一つの象徴と言えるだろう。だからこそ彼は自分の音楽をアマピアノと表現することに抵抗を感じていたのかもしれない。本作はそんな彼が、ジャケットにも描かれているように、自分のサウンドをイギリス、ひいては世界へ届けようとする野心的な一枚である。まず驚かされるのが以前より迫力を増したパーカッションとサブ・ベース。UKベース・ミュージックからの影響を感じさせるそんなビートに、スクリレックスから入手したという艶やかなヴォーカル・サンプルと緊張感のある不穏なシンセを加えながら、彼はアマピアノの可能性を拡張してみせる。未だにアマピアノが進化し続けていることを如実に示す鮮烈な一作だ。（坂本）

Scratchclart
& Baga Man
2021
Hyperdub

クワイトに触アされたUKベース・ミュージックの生き字引とも言えるプロデューサー、スクラッチャDVAが、ゴム、アマピアノとUKファンキーの融合に挑戦。白眉なのが、軽快なリズムを作り出すログドラムにグライム譲りの重たいベース・ラインを自然に干渉させた、バウンシーな"BANGlam"だろう。彼はこのトラックで、アマピアノにもUKファンキーにもない新たなリズムの跳ね感を発見したのだ。（坂本）

Sfarzo Rtee
House Of Sgija
2022
Rtee Sounds

アマピアノの基本形が出来上がった後、ディープなベース・ラインやシンセ、複雑なログドラムやパーカッションが使われシリアスなムードに変化していったアマピアノは、ズールー語でパーカッシヴという意味を持つスギジャ（isiGqi）と呼ばれている。スファーゾ・ルティーはそのサブジャンルの第一人者。スギジャはアマピアノのダブ的な存在だが、その後このようなサウンドが主流になっている。（板谷）

Kelvin Momo
Amukelani
2022
Kelvin Momo

ディープ・ハウスやラウンジ・ミュージックに近く、ログドラムを強調しすぎないジャジーでソウルフルなアマピアノは、洗練されていて、入れる者は一握りしかいないという意味合いで私立学校――プライヴェート・スクール・アマピアノと呼ばれるようになる。このサブジャンルは南アでとても人気があり、ケルヴィン・モモはその提唱者だ。このアルバムは3作目で、まさに洗練された美しいアマピアノを堪能できる。（板谷）

Mellow & Sleazy
Barcadi Fest
2022
Sony

ブレトリア出身のアーティストたちは、地元のサウンド、バカルディ・ハウスの特徴的な音をより強調したアマピアノを作るようになっていった。目立つスネアやハイハット、ベル、深いベース、チープなシンセなどを使った跳ねるようなサウンドや、バカルディ・クラシックのフレーズが融合されたサウンドは現在のアマピアノの主流になっているが、特にこのメロウ&スリージーはその代表的存在のプロデューサーだ。（板谷）

CamScannerでスキャン

Major Lazer & Major League DJz
Piano Republik
2023 / Major Lazer

メジャー・レイザーは、世界に偏在する新しいムーヴメントをつなげ、広げる役割を意図的に担っている。レゲエならダンスホールとエレクトロを混ぜたり、ルーツ・レゲエに回帰する若手を応援したり。本作でも早々に南アの若手DJデュオ、メジャー・リーグDJズと組み、アマピアノを紹介した。9曲中2曲がアトランタのタイ・ダラー・サインを招き、時の人となったタイラが参加して間口を広げた。だが、そこは2組のDJ集団による作品。肝となるログドラムを中心に据え、アマピアノ入門編として機能しながら本格的だ。実際、ログドラムが肌に合うか合わないかでハマれるかが決まるジャンルである。ハウス・ミュージック特有の機械的な拍子を、アフリカ大陸で太古から奏でられてきた木の幹で作られたトラムの音に寄せたベース・ラインで再現し、中毒性が高いリズムとなった。6曲目"Sangoma"の気持ちよさはどうだ。やはりDJのガバ・カナルを招いた3曲目は先祖返りを起こして、ソウルIIソウル風味なのがおもしろい。（池城）

Jay Music
Deep Grove Volume 1
2023
Sky Heaven

ログドラムやベースが強調され、サウンドシステムを鳴らすハードなアマピアノが増えていくなか、ジェイ・ミュージックはこれまでになかったクラブ・バンガーなアマピアノをいくつも作り出している。大人気の"Kanye West"や、アマピアノとゴム、バカルディがミックスされた"Casablanca"など、UKのクラブ・ミュージック・シーンなどと親和性がある新しいアマピアノの可能性を感じさせる。（板谷）

Artwork Sounds
The Gospel According To Artwork Sounds Chapter II
2023
Theko

ディープ・ハウスのシーンから生まれたアマピアノは、近年はハウス・シーンに戻ってきてサウンドに影響を与え、クロスオーヴァーしている。ディープ・ハウス／ソウルフル・ハウスのプロデューサー、アートワーク・サウンズの最新アルバムにはアマピアノのキング、カブザ・デ・スモールを始め、アマピアノのアーティストたちが多数参加しており、ゴスペルがフィーチャーされたハウスにログドラムが鳴る美しい作品だ。（板谷）

Uncle Waffles
Solace
2023
Ko-sign PTY / Encore

アンクル・ワッフルスは、インスタグラムのフォロワーが250万人もいるスウジ人の女性。00年生まれで、ロックダウンになった20年からDJの方法を学び始めた。デビュー曲"Tanzania"（22年）がいきなりヒット。ビヨンセの"ルネッサンス・ワールド・ツアー"のダンス・ブレイクにも使われた。本作はメロディがいかにも南アっぽい歌が魅力的な"Egoes"から始まる。ゴスペル・クワイアみたいなMVも良い。（石田）

ChopLife SoundSystem
Chop Life Vol.1: Mzansi Chronicles
2023
Choplife / EmPawa Africa

ナイジェリアのシンガー、ミスター・イージーとケニアのDJエドゥによるプロジェクトの1stアルバム。ジャマイカ由来のサウンドシステム文化を基に、アフリカ各国の非公式クルーらと移動型パーティーも手掛ける。今作ではフォーカリスティックやメジャー・リーグ・DJズなど南アのレジェンド・クラスのアーティストを多数客演に迎え、本場のアマピアノに対する尊敬と挑戦が共存している。（森崎）

CamScannerでスキャン

Asake
Work Of Art

2023
YBNL Nation / Empire

20年のアフロビーツ・シーンを席巻したセカンド・フル・アルバム。それまでもログドラムの多用などアマピアノからの影響は色濃かったが、今作ではついに同胞オラミデが客演した“Amapiano”を先行シングルとして発表。一部メディアで議論を呼んだ。それでもアフロビーツの特徴の一つである歌メロによるグルーヴの構築はしっかりと忘れず、アマピアノとのブレンドのさせ方は見事と言うほかない。（森崎）

Nandipha808
Jan Fever

2024
Stena Academy

直近の話題曲にも名を連ねて存在感を高めている新鋭プロデューサーによる、完全フロア仕様のアイデア豊かな6トラックを収録した最新作。黎明期のエレクトロにも通じるファットかつ生々しい音選びにも惹かれるが、随所にかなり奇抜なシンセを挟んできたり、意表を突く曲展開もみせながらテンションを高めていくマッドな楽曲の数々は、アマピアノの定石に収まらないもの。凶暴な鳴りで迫りくるログドラムも◎。（吉本）

audiot909
JAPANESE AMAPIANO THE ALBUM

2023
ジャパニーズ・アマピアノ

かなり早い段階からアマピアノに傾倒してきた日本人プロデューサー／DJが、東京発のアマピアノの可能性を提示した意欲作。あっこゴリラや荘子it、女性シンガーらの多彩な客演陣を迎え、単なる本場の模倣ではなく、日本ならではの在り方を実践した楽曲の数々は、ワールドワイドな観点で見ても貴重。ゴムやテクノ、ベース・ミュージックなどの他ジャンルとの接点も自然と反映され、独自のスタイルを示している。（吉本）

DBN Gogo
Click Bait

2024
Zikode / Universal

あらゆる意味で豪快なDJプレイで瞬く間にトップの座へ登り詰め、プロデューサーとしても映画『ブラックパンサー』続編のサントラで2曲を手がけて現行シーンを常にリードしている“女帝”の最新EP。本作では3ステップ、アフロテック、エレクトロなども呑み込み、より大胆かつ先進的な境地を目指した楽曲揃いで、ビートの切り口も変化に富んだ歌メロも斬新の一言。それでいてアマピアノの芯は外していない。（吉本）

Tyla
Tyla

2024 / Fax / Epic

アマピアノを基礎にしたR&Bとポップでデビューしたのが、タイラだ。弱冠22歳。官能的な歌声と動画映えする外見で人気爆破中。アマピアノはハウス・ミュージックの進化型サブジャンルであると同時に、現在の南アの若者文化、ライフスタイルを紹介するムーヴメントでもある。タイラは後者を可視化する役割をごく自然にこなす。大ヒットした“Water”のリミックスに参加したトライヴィス・スコットより、“No.1”でのナイジェリアのテムズ、“Jump”のガンマとジャマイカのスケルベン、“On My Body”のコロンビアのベッキー・Gたちのほうが独特のリズムを体得してうまく乗りこなしているのは興味深い。とくに、後者2曲はダンスホールやレゲトンの要素まで取り込み、このジャンルのポテンシャルの高さを示す。制作陣は大ヴェテランのトリッキー・スチュワートからロンドンの新鋭アリ・ベンスミスまで。タイラ自身も書いている歌詞は、独立心が強いラヴ・ソングが大半。人口が増え続ける国で恋愛を謳歌する女性の力強さが眩しい。（池城）

CamScannerでスキャン

クルアンビン

Khruangbin

今回は本当に自分たちに必要なものだけを残すことにしたんだ

オープン・ワイドに存在を拡大してきたバンドが、3人だけの密な世界に回帰した4作目

松永良平

左からマーク・スピアー、ローラ・リー、ドナルド"DJ"ジョンソン

バック・トゥ・ベイシック。クルアンビンの4年ぶりとなる新作『ア・ラ・サラ』の制作にあたって、彼らはそれを強く意識した。セカンド・アルバム『コン・トド・エル・ムンド』（18年）前後に、世界中の音楽ファンに見つかったクルアンビン。サード『モルテカイ』（20年）にはコロナ禍の始まりとリリース時期が被った不運があったが、ツアーを再開した際には、大きくなったステージでさらに洗練された世界観を提示してみせた。リオン・ブリッジズ、ヴィユー・ファルカ・トゥーレとの実り多いコラボレーションや、オープニング・アクトを務めたバンドのバフォーマンスも含めたライヴ・アルバム連発など、まさにオープン・ワイドに存在を拡大してきたのがここ数年の彼らだった。

しかし、ローラ・リー（ベース）の出産に伴う休暇を終えて、彼らはあえて3人だけの密な世界に回帰することを選んだ。ある意味、内省的とも言える新作について、ドラマーであるドナルド・"DJ"・ジョンソンに取材することができた。物静かでシンプルだが常に本質的な部分を支える彼のドラミングよろしく、その言葉はとても示唆に富んだものだった。

――今回、意識したというクルアンビンにとっての"ベイシック"とはどういう要素なのでしょうか。

「つまり、ギター、ベース、ドラムスという結成当初の自分たちの核に戻るということだ。これまで、ペダル・スティールやバーカッション、キーボード、ヴィブラフォンなどを友人たちに手伝ってもらったり、いろいろなコラボレーションもやってきた。でも、今回は本当に自分たちに必要なものだけを残すことにしたんだ。ひとつには、ライヴで演奏するときに再現するのが難しくなるような要素は、曲の中にあまり入れたくなかったというのもある。最善の方法は、レコーディングの段階ではできるだけシンプルにすること。

CamScannerでスキャン

それを徹底すれば、僕らの音楽をスタジオからシームレスにステージに反映させることができる」

――新作には、ファースト（『ザ・ユニヴァース・スマイル・アポン・ユー』15年）、セカンドにあった、曲間のフィールド・レコーディングが復活していますね。それも原点回帰な印象です。

「君がいうように、あれは僕たちにとって本当に必要なものだった。フィールド・レコーディングは、その環境に身を置き、物事に空間の広がりを与えるという素晴らしい仕事をしてくれる。とても静かですべてが聞こえるような無菌のスタジオ環境ではできないことだ。僕らが以前にやっていたような（周囲に自然音がある）納屋をスタジオにしてのレコーディングはできなかったけど、エンジニアがヘッドホンに自然音を取り込んでくれて、僕らは、自然の音、風の音、コオロギや鳥の声などを聴きながら演奏できた。そうすることで、かつてと同じような体験ができたんだ」

――アルバム最後の曲〈Les petits Gris〉をはじめ、ドラムレスの曲もいくつかありますよね。あなたはもともと教会ではオルガンを弾いていたし、ライヴでもときどきキーボードを弾いてますが、ここまで徹底してリズムから離れるアプローチはなかったですよね。

「今回のレコーディングは、あの曲から始まったんだ。もともと僕はドラムから離れて別の楽器を演奏し、別の方法で自分の才能を発揮する機会が好き。でも、クルアンビンでドラムレスの曲をやったのは今回が初めてだし、とりわけあの曲は特別だった。僕のピアノがリズムの土台を作り、ローラ・リーと僕の相互作用のようなものが行ったり来たりしながらワルツを形成した。そういう意味では僕はあの曲でもタイムキーパーとしての自分の仕事をしている」

――この静寂がライヴにどう組み込まれるのか楽しみです。僕はクルアンビンのライヴの熱狂と同じくらい静かなパートが好きなので。

「ありがとう。今、その構成をみんなで考えているところなんだ。特にライヴ・パフォーマンスでは、多くの関心は大音量での演奏に向けられているよね。よくマーク（・スピアー／ギター）やローラ・リーともその話をする。でも、僕はドラムを演奏するときも、全力で叩くことはないんだ。ダイナミック・レンジの目盛り10が一番強く叩ける音だとする。でも、目盛りの7がいちばん大きな音だと意識してプレイしたら、そのとき7は10になる。つまり、ソフトな部分とラウドな部分との関係で、本当のラウドさは決まる。僕がライヴで好きな瞬間は、静かでダイナミックな演奏をするときだ」

――先行で配信された〈A Love International〉という曲や、アルバムのアートワークには、楽園や旅行をイメージさせながらも、今この混乱した世界やアメリカの現状に対するクルアンビンとしての眼差しがあると感じました。

「それは解釈次第かもしれない。アートワークは常に芸術的で思慮深いものにしたい。今回は、誰かが窓から外を眺めている。でも窓の外に見えるのは、普段の生活では決して見ることのない景色で、それがシュールな雰囲気を醸し出しているよね。

そして、楽曲についてはあまり説明はしたくない。音楽が普遍的なものになるのは、曲が定義されていないときだ。多くのリスナーがクルアンビンの音楽を特別なものだと感じるのは、何かを決めつけないことが大きな役割を果たしているからだと思う」

――では、最後にいつもこの質問をさせてもらってますが、最近よく聴いている曲は？

「うーん（Spotifyを検索）、クインシー・ジョーンズの〈Some Fine Special〉かな。変拍子や奇妙なフレーズを自然に感じさせる曲が好きなんだけど、その好例。クルアンビンから選ぶなら〈Pon Pon〉だね。マークが作ったリズムが、バック・ビートをなくして、ハイハットとキックでドライヴさせるパターンで、僕には新鮮なチャレンジだったから」

〔3月5日　Zoomで〕

『ア・ラ・サラ』
デッド・オーシャンズ／ビッグ・ナッシング
DOC357JCD（CD、写真上）
DOC357JLPC6（LP、写真下）

CamScannerでスキャン

Leyla McCalla

レイラ・マッカラ

私たち女性の人生について、偽りなく語られるべきときがきている

米国南部音楽とハイチの伝統を混合させるシンガー／ソングライターが新しいアプローチで挑んだ新作

五十嵐正

レイラ・マッカラはキャロライナ・チョコレート・ドロップスのチェロ奏者として知られ、14年にソロに転向。米国南部の音楽に家族のルーツであるハイチの伝統を混合させた作品を歌うシンガー／ソングライターだ。新作 "Sol En Min Je" は2年ぶりのアルバムとなる。22年の前作 "Breaking The Thermometer" は、ハイチで初めてクレオール語放送を始めた独立ラジオ局を題材にした舞台作品のアルバム化だったが、今回は表題曲に奴隷制廃止を訴えた黒人活動家フレデリック・ダグラスの発言が引用されているとはいえ、直接的に政治社会的な内容ではない。彼女に話を聞いた。

写真＝Chris Scheunch

「これは自分の人生の状況を反映したものね。どの曲もとても私的な曲と感じている。もっと感情的な空間からのソングライティングで、知的な何かを追究したのではなく、心から生まれたものよ。私が探していた曲のためのアイデアは、生き残ること、傷心とそこからの立ち直り、時代の風潮の大きな変化、人生には必然の深い悲しみといった。私たち誰もが体験することだった。

ほとんどの曲は私的な体験から生まれたんだけど、現代の黒人フェミニスト思想家の本からのインスピレーションも重要だった。特にエイドリアン・マリー・ブラウンとアレクシス・ポーリン・ガムズの著作は私に強く語りかけてきた。そういったことがこのアルバムを生んだ根本的要素だと思う」

特にガムズ著 "Undrowned" は "Called To Survive" という曲だけでなく、アルバム全体にも重要なインスピレーションとなった。

「ガムズは海洋哺乳類の研究書として書いたんだけど、語り口はとても詩的で、学問書のようじゃない。生存のメカニズムの研究、常に変化を続ける世界への適合の仕方、気候変動への適合などは私たちの生活に取り入れられることでもある。ものすごく考えさせられる本で、私にとってこのアルバムのすべてが、祖先とのつながり、自分自身のなかに実の感覚を見つ

CamScannerでスキャン

"Sun Without The Heat"
Anti-

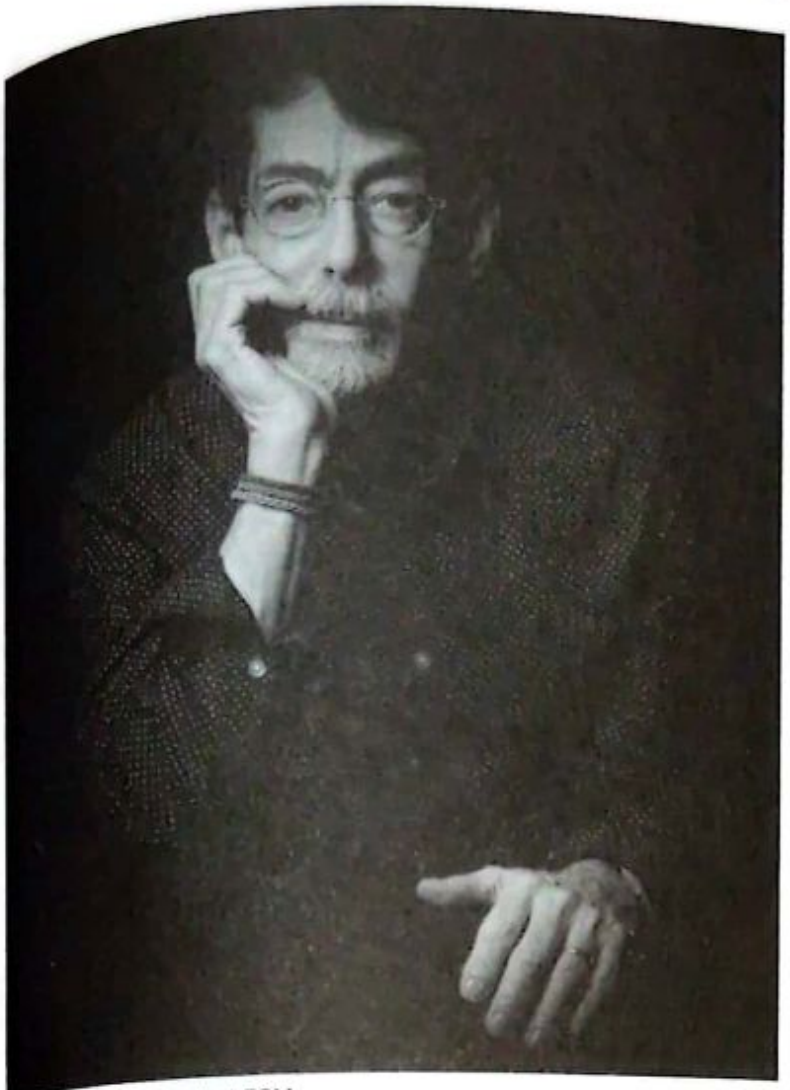
Fred Hersch

フレッド・ハーシュ

剥き出しの生命のようなその音には、果てしない神秘性が宿っている

ECMからの2作目は"自分の中でも特別な位置を占める"ピアノ・ソロ作

石川真男



写真＝Roberto Cifarelli / ECM

水のような音を奏でるピアニストである。その美しさや透明度、そして流水のような滑らかさは言わずもがな、いかなるフォーマットやスタイルにも対応できる柔軟性があり、その一方で、いずれのスタイルにも固定化されず、それらをスルリとかわすかのような流動性もある。だが、音のそのものには小賢しい意図などは感じられず、あたかも自然の摂理によって流れ出てくるかのような純粋さがありつつ、そこには、耳から身体に染み込み、聴き手の生命力を漲らせるような動的エネルギーも感じられる。と同時に、音自体は何色にも染まることはなく、ただ泰然と存在するかのような不変性あるいは絶対性のようなものさえ纏っている。

4歳からクラシック・ピアノを習い、8歳で作曲を始めた神童フレッド・ハーシュは、多彩なミュージシャンと交わり、多様な音楽を奏でたという点では、流転の音楽人生であったと言えるかもしれない。カレッジ時代にジャズと出会い、地元オハイオ州シンシナティで演奏するようになり、その後ニューヨークに出て、1978年にアート・ファーマーのバンドで本格的なプロ活動を開始する。そこから、ジョー・ヘンダーソンやスタン・ゲッツ、チャーリー・ヘイデンなど多彩な面々との共演を果たし、自身もリーダー／コ・リーダーとして60以上の作品を世に送り出してきた。その中には、ピアノ・ソロ作もあれば、ジュリアン・ラージやビル・フリゼール、デイック・シストらとのデュオ作もあれば、マンハッタン・トランスファーのジャニス・シーゲルやクラシック歌手ルネ・フレミング、あるいはエスペランサ・スポルディングらの歌伴を担った作品もある。また、アントニオ・カルロス・ジョビンやジョニー・マンデル、ビル・エヴァンスらの作品集を作ったり、さらにはビッグ・バンドや弦楽四重奏と共演し

CamScannerでスキャン

たり、クラシック演奏家に作品を取り上げられたこともある。後進の教育にも熱心で、ブランド・メルドーも門下生の一人だ。

そして、人生そのものにも、〝流転〟とまでは言えないかもしれないが、幾つかの大きな〝転機〟があったことは確かだ。1993年、ゲイでありHIV感染者であることを公表。また2008年には感染の影響で2カ月間の昏睡状態に陥り、生死の境を彷徨った。そうした波乱は自伝や伝記映画にもなり、それらの転機は、彼に精神的な解放をもたらした。そして、その演奏もあたかも瞑想のごとく内的宇宙を漂うような深遠さを帯びていったのだ。

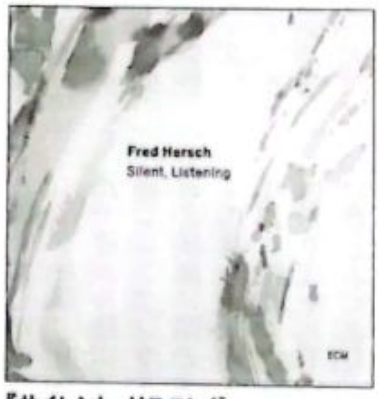
そんなハーシュの新作『サイレント、リスニング』は、新たなピアノ・ソロ作品であり、ECMからの2作目となるものだ。ピアノ・ソロは12作目となるが、「自分の中でも特別な位置を占める作品」となったとのこと。7つの自作曲に加え、スタンダードも4曲収録されている。

アルバムは、静謐な音の緩やかな流れから始まる。デューク・エリントン（実質的にはほぼビリー・ストレイホーンが作曲している）がシェイクスピアをテーマに作った組曲『サッチ・スウィート・サンダー』の中の1曲「スター・クロスト・ラヴァーズ」。エリントンは多くの組曲を作っているが、それらはスウィング・ジャズを進化させようとする野心から生まれたもので、そこには〝組曲〟という形式をはじめ、様々なクラシックの影響が見受けられる。ハーシュのこの演奏は、エリントン楽団の演奏を〝ジャズの濁り〟がなくなるまで煎じ詰め、まるでフランス近代音楽のピアノ小品のごとく響かせている。

続く「ナイト・タイド・ライト」は、ラヴェル「水の戯れ」をより写実的に描いたかのような印象の楽曲。「アクラシア」では、抽象と具象、音楽と非音楽を織り交ぜながら、揺れ動く感情を描き出している。内面から湧き出すものをそのまま指先からピアノに伝えたのだろう。時折ブルージーな音が混じり、人間味のようなものが垣間見えるのが面白い。そうしたイメージがタイトル曲にも引き継がれるが、音が抽象化を深めるにつれ、人間の内面が次第に自然と同化していくかのよう。まさに星の煌めきを音にしたかのごとき「スターライト」。再び抽象度を高める「イオン」。「リトル・ソング」では一転して実に音楽的なメロディが提示される。

クラシックの素養もあったジャズ・ピアニスト、ラス・フリーマンの楽曲「ザ・ウィンド」は、ハーシュもかつて取り上げていたバラードだが、ここではまさに風のような環境音へと再構築されている。抽象的な音列の「ヴォロン」。定番スタンダード「朝日のようにさわやかに」では、一転して実にシンプルなリズムの上で実にわかりやすくメロディが綴られる。アルバムを締め括るのは、クラシック／ポピュラー音楽の両分野で活躍した作曲家アレック・ワイルダーの「ウィンター・オブ・マイ・ディスコンテント」。こちらも実に端正に、しかしながら仄かに人肌の温もりが感じられるような演奏になっている。

聴き手の耳目を惹こうとする邪念のないハーシュは、奇を衒った仕掛けを施すことはなく、ただただ人間の機能あるいは自然の摂理に任せて、湧き出てくるものを音に変えている。いや、それは決してスリルのない無味乾燥な音楽ではない。むしろ剥き出しの生命のような、あるいは、壮大かつ深遠な自然のようなその音には、果てしない神秘性が宿っている。どこまでも深化していくハーシュ。それを存分に味わうには最高のアルバムである。



『サイレント、リスニング』
ECM／ユニバーサル
UCCE1205

CamScannerでスキャン

MJ Lenderman

MJレンダーマン

一番の理由は、ただそのサウンドが好きだからだと思う

現代カントリー・ミュージックのオルタナティヴを代表するキーマンに聞く

天井潤之介

写真＝KAZUMICHI KOKEI

昨年のアルバム"Boat Songs"(2024)のブレイクを機にUSインディ・ロックの新たな台風の目となったウェンズデイ、そのギタリストであるMJレンダーマンに注がれる関心の高さは、過日SNSで流れたビヨンセの新作への参加の噂がまことしやかに受け止められたことにも象徴的かもしれない(実際には不参加)。名門アンタイとの契約を勝ち取ったソロ3作目"Boat Songs"(22年)が高い評価を受け、"カントリーゲイズ"とも称される現代カントリー・ミュージックのオルタナティヴを代表するキーマンの一人。また最近では、ワクサハッチーやケヴィン・アプストラクト(元ブロックハンプトン)とのコラボレーションを通じてその雄弁なミュージシャンシップにスポットが当てられる機会も少なくない。昨年にはライヴ盤"And The Wind (Live and Loose!)"も話題を集めたが、4作目となるソロ・アルバムが現在レコーディングを終えて完成間近とのこと。先日のウェンズデイ初来日公演のオープニングでソロ・ライヴも行なったレンダーマンに聞いた。

――"Boat Songs"は、ボブ・ディランがザ・バンドと作った"プラネット・ウェイヴズ"が念頭にあったと聞きました。

「その頃、ザ・バンドの作品を片っ端から聴いていて、彼らの演奏にはファンクネスがあって、それを無意識に聞こえることなくやってのけたのはクールだと思ったし、リズムのバックボーンはとても力強くて、それでいて彼らの音楽には悲しみがあり、あらゆる感情が溢れている。その前("Good Old War, Guitar Solo")はスロウな曲が多かったから、ちょっと気分を変えたかったんだ。ツアーをやりながら曲作りとレコーディングに1年以上かけて、自分自身が何者であるかを見極めながら成長していった記録があの作品だった」

――他にはスパークルホースやウォーレン・ジヴォンなどもリファレンスに挙げていましたが、自身の音楽的なルーツや原点となるとどういったものになりますか。

「ギターを始めたのは8歳の頃で、当時は御多分に漏れず(笑)、ジミ・ヘンドリックスが大好きだった。あとはドライヴ・バイ・トラッカーズ。でもそこからソニック・ユースに出会って、サーストン・ムーアやリー・ラナルドのギターが大好きになり、ダイナソー

CamScannerでスキャン

あのリー・アンキンやニール・ヤングにのめりこんでいった。そしてサ・バンドのロビー・ロバートソン――像がギターで最も影響を受けた人たちだよ。それと、高校生の時に出会ったジェイソン・モリーナ（ソングス・オハイオ）は僕にとってとても大きな存在だった。彼は深いレベルの悲しみを伝えることができるソングライターで、彼の音楽は淡々としていてとてもシンプルだけど、まるで部屋の中でバンドが演奏しているような親密さに心から惹かれたんだ」

――ウェンズデイへは途中参加になりますが、バンドにカントリーを持ち込んだのはあなた？

「僕が参加する前のバンドはもっとポップ・パンク的なバックグラウンドがあったんだけど、僕のギター・プレイのスタイルがカントリーの要素を引き出したといって差し支えないと思う。ただ、元からバンドにはラップ・スティールがあったし、実際はカントリー好きが3人から4人になったって感じかな（笑）。僕の場合、その手の音楽の入り口となったのはジェイソン・モリーナだった。そこからニール・ヤングの90年代の作品や、リッチモンド・フォンテーンのようなスロウコアとカントリーを融合させたバンドを聴くようになって――ちなみにスロウコアに興味を持ったのも、ジェイソン・モリーナの伝記を読んでコディンのことを知ったのがきっかけだった。そしてカントリー・ミュージックにのめり込むにつれて、ゲイリー・スチュワートやウェイロン・ジェニングス、それにタウンズ・ヴァン・ザントを聴くようになった。あとグラム・パーソンズも（笑）」

――ちなみに、〝カントリーゲイズ〟と呼ばれていることについては？

「まさに僕たちを言い表わしていると思うよ（笑）。とくに僕がバンドに加入した時は今ほどカントリーの側面が結実していなくて、シューゲイザーの要素はとても大きかった。マイ・ブラッディ・ヴァレンタインやスロウダイヴの影響はメンバーの誰もが認めるところだったし、僕自身、ギターを弾くことに関してはケヴィン・シールズから多くのことを学んだよ」

――保守的で、白人による男性主義的な音楽という見方がされてきたカントリー・ミュージックですが、近年はその表現や取り巻く環境も変化と広がりを見せています。

「ビヨンセがやっているように、カントリーを演奏することは確かに今の流行りなのかもしれない。歴史的に見てカントリーの世界はとても人種差別的だったと思うし、業界がオープンに受け入れてくれるようになったのはいいことだと思う。だからリル・ナズ・Xのヒットのようなことがポップのレベルで起きたわけで、そういう先進的なアイデアは素晴らしいことだと思う。でも一方で、カントリーの歴史には常に黒人がいて――チャーリー・プライドがその最大の例だろうね。ただ長い間見向きもされず、評価もされてこなかった先人の存在があって今がある、ってことは言っておきたいね」

――あなた自身、カントリーやルーツ・ミュージックを今の時代に捉え直すことの意義については、どの程度意識的ですか。

「いい質問だね。僕らの誰もがそれをやっている一番の理由は、ただそのサウンドが好きだからだと思う。でもアーティストには、自分たちの音楽がなかったら理解できなかったかもしれない人たちのために、元あるアイデアを新たな形で提示する能力がある、という考え方が僕は好きだ。シューゲイザーやインディ・ロックにカントリーや様々なリファレンスを忍ばせることで、それを聴いた人が〝このサウンド最高！〟って気づいてもらえるかもしれない。それってとてもクールなことだし、僕が言えるのはそんなところかな」

――次の新しいソロ・アルバムはどんな感じになりそうですか。

「〝MJ入魂〟のアルバムって感じかな（笑）。新しい楽器がいくつか入っていて、アップライト・ベースを使った曲もある。もっとアコースティックな曲もあれば、ロック調の曲もあって、僕には〝僕らしく〟聞こえるアルバムだよ。あと、ローファイじゃないかもしれない――当時は〝Boat Songs〟がローファイだとは思わなかったけど、今聴くとかなり歪んでるから（笑）」

――ウェンズデイの新作は？

「曲は書き上げていて、4月にレコーディングする予定だよ」

〔3月13日　渋谷・カフェミヤマで〕

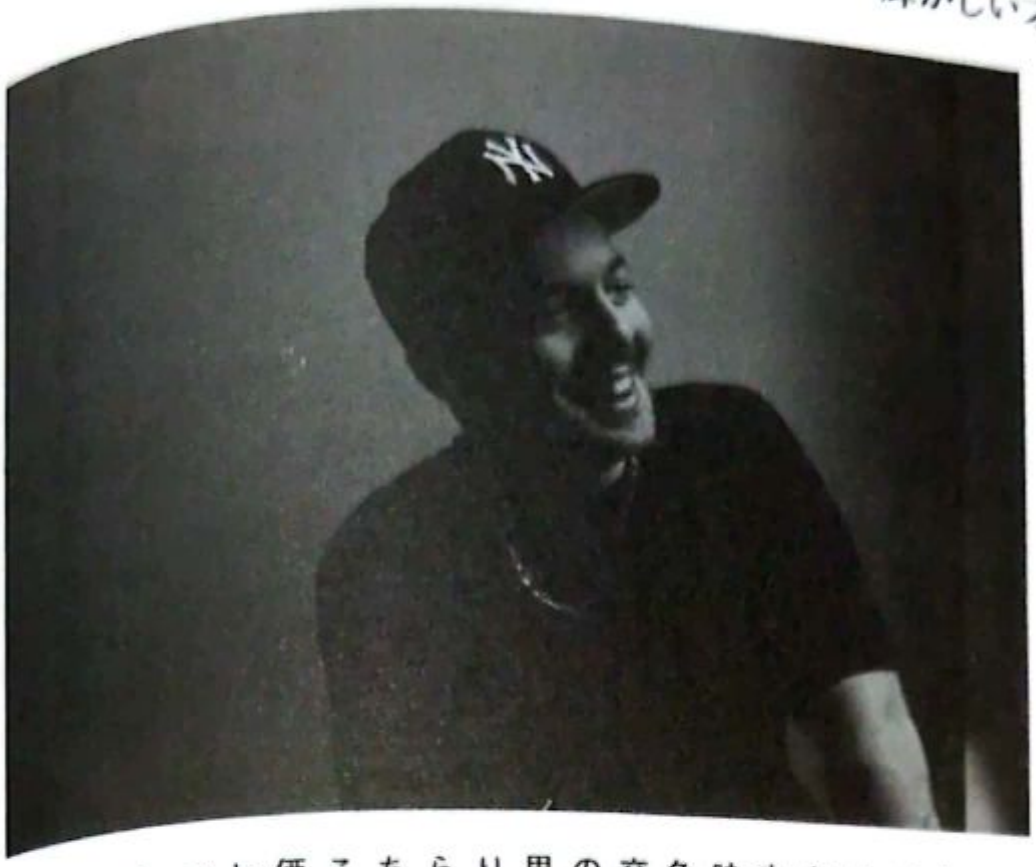
CamScannerでスキャン

Mac Ayers

マック・エアーズ

美しいメロディーと夢心地なグルーヴを生み出す輝かしい才能が初来日

川口真紀



5月末に横浜で開催される"GREEN ROOM FESTIVAL'24"及び、ビルボードライブ東京での単独公演のために初来日を果たすマック・エアーズ。ダニエル・シーザーやブライソン・ティラーといった他の男性R&Bシンガー・ソングライターと比べると、日本での知名度はやや劣るかもしれないが、しかし本国でのライヴ映像を見ると黄色い声援が飛び交っていて、その人気の高さを思い知る。何より若くして素晴らしい実力の持ち主であり、そこがきちんと評価されていることに羨ましく思ってしまった。その実力を体感する機会を見逃すわけにはいかないだろう。

マック・エアーズは1996年12月、ニューヨーク州ロングアイランド出身。幼い頃にクリスマス・プレゼントでキーボードをもらって以来、毎日のように弾いて楽しんでいたそうだ。高校時代にはジョン・メイヤーに憧れてギターを始め、さらにはベースなど他の楽器もマスター。マルチ・インストゥルメンタリストとしてあらゆる楽器を操る一方、曲作りも始めるなど、若くして早くも才能を開花させていく。また、同時期にはのちにマックの作品にも参加するドラマーのクリス・アンダーソンと一緒にセッションをしていたそう。そういった環境と元々ある才能によって、彼がどんどん音楽にのめり込んでいったというのは想像に難くない。

その後、その才能をさらに昇華させるべく、名門バークリー音楽大学のソングライティング科に進学。大学在学中、19歳の時にEP"I Know Enough"をサウンドクラウド上にアップすると、その甘い歌声を活かしたネオ・ソウル・ナンバーが好事家の間で話題となる。その後アップしたシングル"Mac"も評判を呼んだことで、より自身の音楽制作に集中するべく大学を中退（大学では課題が多くて自分の音楽が作れないという不満もあったようだ）。そして2017年にデビューEP"Drive slow"を完成させる。この時まだ21歳。早熟のシンガー・ソングライターがいよ

CamScannerでスキャン

ンターに参加したセカンド・アルバム "Sleepbox"（2019年）、カートゥーンズの参加にも驚いたEP "Magic Beat"（2021年）と順調にリリースを重ね、昨年サード・アルバム "Comfortable Enough" をリリース。これまで多彩なゲストとのコラボも聴きどころであったが、同作はゲスト参加なし。ライヴの定番曲になりつつある哀愁漂うスロウ・チューン "Something's Gotta Change"、やはりディアンジェロからの影響を感じずにはいられないファンク・ナンバー "To Be"、ジャズ・セッションのようなグルーヴィーな音世界から突然バラードになる "It's Not" アコースティックな "You're Feeling Lost" など全16曲、収録曲は本当に百花繚乱だが、しかしどれもとことんメロウで上品。美しいメロディーと夢心地なグルーヴにただただ身を委ねてしまう一枚となっている。愛や人間関係を綴った歌詞も共感性の高いものが多く、彼の誠実な人となりが窺えるようだ。何より、これらすべてをセルフ・プロデュースで手掛けているのだから（しかも26〜27歳で！）、その才能の豊かさたるや恐ろしくもあるが、輝かしい才能を目の当たりにして、ただただ嬉しくもなってしまう。

2020年11月に出演したタイニー・デスク・コンサートは、当時コロナ禍真っ只中ということもあって、バンドを引き連れてNPRオフィスで演奏する通常のスタイルとは違い、自宅で一人歌っていたものだった。しかしそこで彼はギター、ベース、キーボードを一人で演奏し、一人多重コーラスも披露。完璧なショウを繰り広げていたのである。来日ライヴでもそのマルチ・プレイヤーっぷりを発揮するのか楽しみだし、バンド・メンバーにクリス・アンダーソンも名を連ねているので、気心知れた仲間と共に、最高にハッピーなショウを見せてくれることだろう。彼の才能からしたら、もしかしたらこんな小さな会場で観られるのは最後になるかもしれないし、こちらも気合いを入れて臨みたいと思う。

"Comfortable Enough"
Dixon Court [2023]

マック・エアーズ
来日公演

5月28日（火）
ビルボードライブ東京
1stステージ　18時開演
2ndステージ　21時開演

料金は前売り7900円と7400円。
詳細はビルボードライブの公式サイト（http://www.billboard-live.com/）へ。

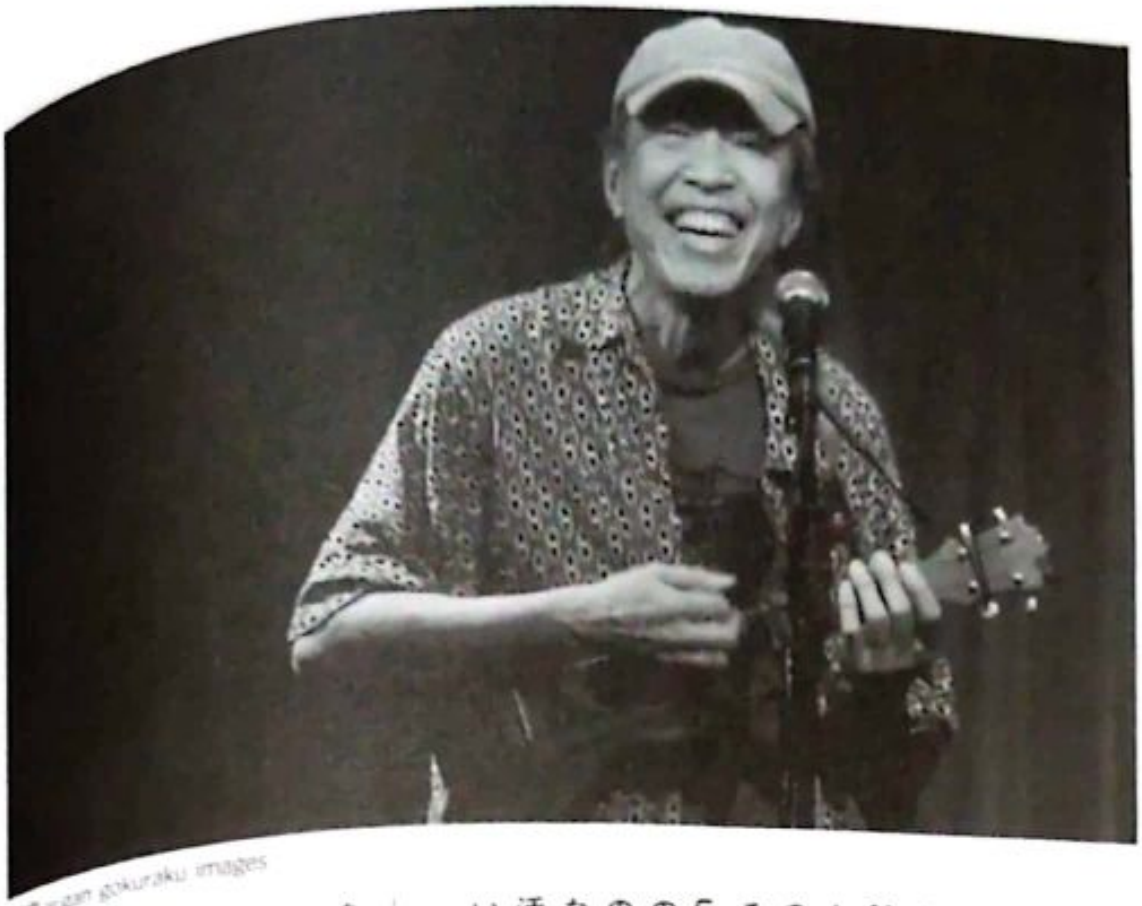
CamScannerでスキャン

春日博文

これが埋もれたまま私が死んだら、誰も知らないままになっちゃう

忌野清志郎の未発表ヴォーカル2曲を含むサード・ソロ作

志田歩



写真＝gen atsukuru images

70年代にカルメン・マキ&OZのギタリストとして名を馳せた後、RCサクセション、NOIZ、東京ビビンバクラブなどのグループで活躍。さらに打楽器に魅せられて韓国を長く拠点とするなど、ピュアな音楽的好奇心に突き動かされるがままにキャリアを重ねてきた春日博文。4月14日に発表された『Pachi Uke Songs』は、近年、行なってきたウクレレの弾き語りを軸とする作品で、『Pachi Uke Songs』『独りの唄』に続く3枚目のソロ・アルバムとなる。本作と現在の活動について話を聞いた。

――まず3作の経緯を確認させてください。

「16年には韓国で活動していたので、韓国語で歌った『Pachi Uke Songs』を作ったんです。でも日本で出たのは、18年の『独りの唄』の方が先で、これ（『Pachi Uke Songs』）も置いてもらえませんか、みたいな話になって、日本で出したのは後追いみたいな感じ。それから19年に日本に帰ってきて、家で備忘録的な宅録を3年だか4年だかやって、できたのが『Pachi Uke 3rd』という流れです」

――では〈口笛吹いたら〉と〈酔いの宵〉を共作しているチョ・テジュンさんとの関わりを教えてください。

「05年頃、私は韓国に行きっぱなしになっていて、向こうの有名どころのレコードのプロデュースもしてたんですけど、よほどの話題作とかヒットでもない限りは裏方でしかないなと。でも私は曲も作れるし、歌も作れるし、演奏もできるので、自分の名前も入ったようなものをやりたいと思い始めたんです。そこで出会った28歳ぐらいの青年が彼だった。いい声だねってことで、一緒に歌を作り始め、私のあだ名にちなんだPachi & Tで、06年にデビューしたんです。結構ヒットして、カラオケもあるんですよ」

――〈夜の虹〉は、作曲が（ロンサム・ストリングスの）桜井芳樹

CamScannerでスキャン

さん、作詞が松井孝泉さんというご夫婦による楽曲。カルメン・マキさんの音楽人生50周年を記念する19年のデラシネ・ライヴ・シリーズの場で春日さんご自身が演奏されていますね。

「それで気に入ったんですね。OZでもやったことがあります」

――その〈夜の虹〉から、僕はたまを連想したのですが、〈俺のオアシス〉は春日さんが作曲で、作詞は二元たまの柳原陽一郎さん。

「やなちゃんとは94年の暮れに知り合って仲良くなっていたんです。それで憂歌団から楽曲の依頼がきた時に、私が曲を作って、彼に歌詞をお願いしたんです」（憂歌団のヴァージョンは、95年のアルバム『ブルース・バウンド』に〈おれのオアシス〉というタイトルで収録されている）

――〈Cry Cry 夜さ〉と〈僕らは〉は、忌野清志郎さんとの共作でヴォーカルも清志郎さん。この2曲の『Garam』という名義は、83年にお二人が立ち上げたユニットの名前で、元々春日さんがウクレレに興味を持ったのもこの時でしたよね。

「Garamは二人だけのお座敷バンドで、忌野さんがウクレレを弾いて、私がギターとかエレキ・マンドリンを弾くというコンセプト。この2曲は30何年前に当時流行ったA-DATで忌野さんが録ってて、その日簡単に落としたDATのテープだけが残ってたんです。そこに入っていたのはすごく地味な生ギターと歌とベースくらいで、他の音は私が足しました」

――ペダル・スティールのような音が印象的です。

「あれは普通のギターで、難しいんだけどレギュラー・チューニングのスライド。これが埋もれたまま私が死んだら、誰も知らないままになっちゃうと思って、（清志郎の）事務所に話したらOKっていうことになったんです。私の歌なんか聴かなくていいから、このためだけに2500円払ってくれ、みたいな（笑）」

――いえいえ、ラスト3曲はしっかりご自分の歌で締めているじゃないですか。まず春日さんは、ソングライターとしての清志郎さんを多大に評価されてますよね。

「こんな風に自分も歌を歌うようになってみると、どうしても避けて通れないっていうか、魅力的で巨大なソングライターだと思います」

――そういう想いを込めつつ、ラストはRCサクセションの〈夜の散歩をしないかね〉。原曲はピアノが中心なのに対し、ウクレレを使ったスリムに研ぎ澄まされたアレンジで、まるで春日さんのオリジナルかと思うような練り上げ方で。清志郎さんへの敬意を表明しつつ、ご自身のミュージシャン、ヴォーカリストとしての立ち位置を表明して締める構成は胸にくるものがありました。これは達成感もあるのではないですか。

「なんかもう雑用とかが多すぎてね。それに達成感とか、売れてこその話だと思うけど、まあでも、今はいい気持ちですね」

――本作の収録曲を書いた時期には、かなり幅があるようですね。

「私の場合、売らずにずっと眠ってる、そういう楽曲が多いんですよ。4曲目の〈Never〉は、00年代初頭にギター・アルバム用に制作したインストだったんですけど、ある日ウクレレで弾いてみて、いいなと思って、今回入れちゃった。最近は、春日 "Jacky" 博文 & AIBONというバンドで、昔の曲をやったりもしてるんですが」

――本作にコーラスで参加している勝試二さんはAIBONのベーシストで、松浦湊さんはザ・ナスポンズのヴォーカル&ギター。いずれも春日さんが現在やっているバンドのメンバーですね。

「今動いてるのはこのふたつなんですけど。やっぱりバンド自体が動いて新しいものを作っていかないと、過去をなぞっていっちゃうとこがあると思うんですよ。ノスタルジーが大きくて、みんながそれを聴きたがるわけ。商業的にはどうかわかんないけど、でもやっぱり、新しくやる方が面白いなっていう風には感じるんですね。いつまでできるかわからないですけど」

〔3月22日　下北沢・トロワシャンブルで〕

『hachi uke 3rd』
地底 B108F

CamScannerでスキャン

忘れじの唄

町田康

第10回

しらこいんじゃ

昭和伍拾年頃、庶民・働き奴はテレビを見て生活していた。と言うと違う。テレビだけではなく新聞も読んでいた。情報を得て事実を知り現実を把握したいときは新聞を読み、ちょっとした刺激や興奮、或いは休息・団欒をテレビ番組から得ていたのである。

知識や教養を得たいときは本を読み、音楽を聴きたいときは劇場・ホールに出掛けていく、或いは球場、競馬へ行くなどすることもあったが、それには銭と時間を費やす必要があったし、仕事で身体が疲れている場合などはやはり自宅で観る無料のテレビ番組が最高であった。つか、テレビには教養番組も音楽番組も演芸もスポーツもあった。

彼らが観ていたのは演者である。で、演者とは何かというと、文字通り演じる人である。演じる人があると言うことはどういう事か。

そう、台本・筋書を書く作者が、その裏に居るということで、テレビ番組に必ず作者がいる。

テレビ番組が、なにも考えず、完全な受け身で観ているのにもかかわらずスルスル頭に入ってくるのはこの為で、それは偏に作者の作意と演者の演技に因る。

と言うと、「じゃあ、そうは言うけど、スポーツはどうですか？　スポーツ中継は？　スポーツは筋書きのないドラマというじゃないですか」など理屈を言ってくるどうしようもない屑がチラホラあるが、あれだってテーマ音楽があり、実況中継があり、解説があって、それよりなにより、完全な恣意よりなる

イラストレイション＝吉澤成友

CamScannerでスキャン

虚と実と

EX

「それもうっかり聞いたら、という感覚に当然なるはずである。ここちが。

俺こそがって毎日そんなことをやっている芸人の演者である、聞き手は、そんな感覚は一度にも出さず、絶に驚えぬ、という調子で「あー、そーだったんですねー」と、まるで初めてそれを聞いたかのように、相槌を打つ。俺は絶時したくなる。

「しらこいんじゃ」

と。だけどそれを言うと、作意どころか、番組が成り立たなくなってしまうので我慢して通り取りを続ける。しかしそれは嘘であり、欺瞞である。もちろんすべての作意あるところ、作者があり演者があるところにはこの嘘と欺瞞が存する。すべての芸能にこの嘘と欺瞞が存し、作者があり作意がある以上、「文学」にも存する。

それ故、問題は、嘘と欺瞞があることではなく、それより現実に、そして生の真実に突き抜けることがあるか／ないか、なのだが、それを知らず、子供のようにこの嘘と欺瞞を告発して無闇に糾弾しているのが並しパンクであった。続く。

なんこうかの「お笑い第三の男」の時に感じた違和感と同じ。

「素晴らしいことやんか。ちゃんと作意、やんか」と思う。しかしひとつだけ懸念がある。それはなにかと言うと、しらこい、という一事で、この場合で言うと、聞き手の人が俺になんか、例えば、「スルメとうどんの未来についてはどうお考えですか」と問うたとする。それに対して俺が、「やっぱ、なんだかんだ言ってスルメですね」と答える。そうすると聞き手の人は、「ほう。その理由を教えてください」と聞く。それに対して俺が、「やっぱ、鰹馬天胸の兜巾とか見ると頭の形、スルメじゃないすかあ。今、トレンドとしても頭巾、来つつありますし」と答える。

そしてそれはさっきリハーサルで言ったことにする必要もない。それ故、言うのも二度目なら、聞くのも二度目である。だからそこに新味はまったくない。なので俺の口調は若干ダルくなるというか、なんなら細部を省略してしまったりするし、本来であれば聞く方も、

ニュー・スタンダード

New Standards

いま注目されるシーンに至る歴史的な流れを現在の視点から辿るディスク・ガイド

第52回

ハートランド・ロック

選=早坂英貴

ブリーチャーズ（写真＝Alex Lockett）

“ハートランド”とは、アメリカ中西部や工業地帯が密集する“ラスト・ベルト”をさす。その名称どおりハートランド・ロックは、農業に携わる人たちや労働者階級が多く住むこの地域の文化や価値観と結びついている。

流派の始祖とされるブルース・スプリングスティーンに代表されるアーティストは、ブルーカラー労働者、工場従業員、田舎町の住民の日常を物語で表現した。メイン・テーマは疎外感、絶望、ノスタルジア、経済的不平等といったものだ。多少のフィクションは含むだろうが、彼らの歌は聴衆の共感を呼び、連帯感と集団的アイデンティティを育んだ。

ハートランド・ロックは、スプリングスティーン、ボブ・シーガー、ジョン・メレンキャンプ、トム・ペティといったアーティストによって1970年代半ばに誕生し、80年代に商業的ピークを迎えた。90年代に下火になるが、同様のサウンド・テイストを持ったアーティストはアダルト・オルタナティヴやオルタナ・カントリー／アメリカーナなどに居場所を見つけ、00年代には新しいバンドがこのサウンドに独自の解釈を加えてハートランド・ロックというジャンルは復活を遂げる。キラーズ、ウォー・オン・ドラッグス、ホールド・スティディ、ガスライト・アンセムのような現代のハートランド・ロック・アーティ

CamScannerでスキャン

フトはインディ・ロックやオルタナティヴ・ロックのスタイルを融合させ、より折衷的でジャンルを超えたアプローチを生み出している。一方で、近年ブリーチャーズやイギリス人のサム・フェンダーなどが、よりヴィンテージの再現性に拘っている。

多くの日本人にとってこのジャンルは長年「聴き触わりのいいストレートでルーツ志向のアメリカン・ロック」もしくは「80年代テイストのキーボードが入ったロック」くらいのカジュアルな認識で喧伝されてきた。よって今回は、このジャンルにとって最も重要な歌詞の世界観について触れていく。

企画の起点となるブルース・スプリングスティーンの『明日なき暴走』のタイトル曲は、現実逃避と救済を求める労働者の歌だ。リリースされた75年といえば第一次オイルショックの真っ只中で、アメリカでは失業率が第二次大戦後最悪の9%まで上昇した。そんな時代背景のなか、ロンドンやニューヨークで生まれたパンク・ロックと、アメリカ中西部で支持されたハートランド・ロックは、ともに不確実な時代に誕生し、人々に寄り添った音楽という解釈もできる。反体制で対立的な態度、物質主義に対する拒絶に向ったパンクに対して、労働者たちを代弁し、社会的・経済的苦境のなかでより内省的で伝統的な価値観への回顧を見出しつつ、現状への沸々とした内面の怒りと変わりたい願望を表現したのがハートランド・ロックだった。アティチュードは違えど向いているベクトルは一緒だったのではないかと感じる。

登場人物の〝未来のない町や労働者階級、窮屈な生活から逃れたい〟という強い願望は、このジャンルの代表的なプロットのひとつとしてたびたび登場してきた。スプリングスティーンが70年代に描いた工場勤めの車好きのブルーカラーの青年と、80年代に貧しい湾岸労働者の男が〝仕事もないし運もない。でも恋人と二人で（上手くいくって）祈りながら前を向いて生きていくしかない〟と歌ったボン・ジョヴィの大ヒット曲「リヴィン・オン・ア・プレイヤー」（86年）は、同じ価値観の歌だと分かる。ジャンルやイメージ以上に歌の持つ本質はハートランド・ロックの世界観に近い。

21世紀のハートランド・ロックの復活については、サウンド面の再評価によるリヴァイヴァルと、歌詞の内容まで踏襲した精神の継承の両面がある。スプリングスティーンの「明日なき暴走」のコードとリズムを強く意識したキラーズの「ホエン・ユー・アー・ヤング」（06年）あたりに代表されるように、サウンドは寄せつつ、社会派ソングよりも〝恋愛の期待と現実〟や〝良いパートナーや夫であるゆえの葛藤〟など、個人の経験や感情に焦点を当てている傾向の曲が増えたのは時代性といえるだろう。同じく心の痛みや喪失感を歌うウォー・オン・ドラッグスなども音の面でのフォロワーといえる。

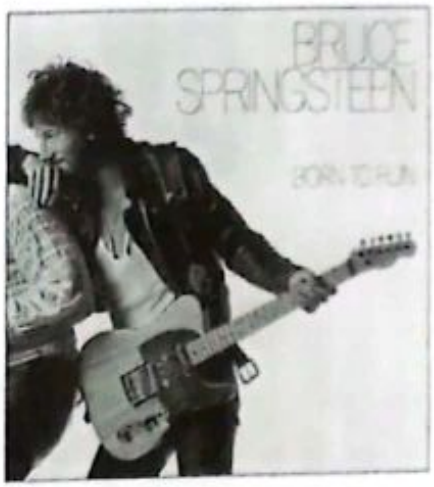
その一方で、音はパンク・ロックで、歌詞の内容は往年のスプリングスティーンのような労働者の味方であるガスライト・アンセムや、見事なまで音も歌詞も寄せつつ、内省的な歌詞も織り交ぜるジャック・アントノフ率いるブリーチャーズは、両者とも奇しくもボスと同じニュージャージー出身の同郷でもあり、こちらは精神面も含めた継承者といえるだろう。

〝もう自尊心を保つことに疲れたよ…〟と歌うブリーチャーズの今年発表のアルバム収録の最新曲「セルフ・リスペクト」は、恋人と別れて精神的に参ったアメリカ人男性の日常的な苦悩を緩っている。〝ペプシを飲めばブラック・ライヴズ・マターの暴動も収まる〟とあまりにもお気楽すぎるCMへの主演で大炎上したスーパーモデル、ケンダル・ジェンナーや、コービー・ブライアントの死について言及するフレーズで現代の歌であるとの認識がパッと開けるが、この曲の〝僕らの人生の日々は荒々しく、移り変わりは速く、不公平だ〟と嘆くその内容は、いつの時代でも変わらない庶民の声＝ハートランド・ロックの概念そのものだ。

（早坂）

CamScannerでスキャン

Bruce Springsteen
Born To Run
1975
Columbia



このアルバムを聴いて、夜道を無闇に駆け出したくなったなら、あなたはすでにハートランド・ロックの虜だ。

バンドが一丸となって叩きつけるリズム、グルーヴ。いなくサックスと、ドライヴするギター、不器用に未来を渇望し、闇夜の先に光る希望を求めて吐き出されるシャウト。今はただ走り続けるしかない。たたがむしゃらに、孤独と希望を胸に抱きながら。『明日なき暴走』は、初期ロックンロールやリズム&ブルースの躍動を、退屈な成熟を迎えつつあった主流ロック・シーンから奪い返した。その奪還の手さばきはあまりに鮮烈で、まさに、ロックンロールの未来〟を切り開くものだった。ボブ・ディランのような詩を書き、フィル・スペクターのような曲を作り、デュアン・エディーのようなギターを弾き、ロイ・オービソンのように歌う。ブルース・スプリングスティーンが目標としたサウンドが、ここに初めての完成を見た。実のところ、過去のレコードの該博な知識と見識を元にした、ある意味で〝マニアック〟な内容ともいえるが、決してシミュレーショニズム的なせせこましさにはハマり込まず、あくまで肉体と精神の躍動と自由への渇望が全体を覆う。そこが何よりも偉大だ。本作はその後に現れるすべてのハートランド・ロックにとっての完璧かつ不可侵の雛形となった。と同時に、ブルース自身のキャリアにとっても一つのメルクマールとなった。（柴崎）

Southside Johnny & The Asbury Jukes
I Don't Want To Go Home

1976
Epic

ブルース・スプリングスティーンと盟友関係にあるニュージャージーのグループによるデビュー作。プロデュースを務めているのは、ボスの腹心でもあるスティーヴ・ヴァン・ザントだ。ホーン・セクションをふんだんにちりばめたサウンドは、Eストリート・バンドよりもR&B色が強めで、それが彼らならではの個性となっている。カヴァーの選曲も、リー・ドーシー、ソロモン・バークなど渋いところを突いてくる。ボス曲「ユー・ミーン・ソー・マッチ・トゥ・ミー」にはロニー・スペクターがデュエット参加。アズベリー・パーク周辺シーンの暗礁がそのままパックされたような傑作だ。（柴崎）

Bob Seger & The Silver Bullet Band
Stranger In Town

1978
Capitol

ボブ・シーガーは45年、デトロイト生まれ。61年にアナーバー高校（イギー・ポップの2年先輩）で結成したデシベルズを筆頭に複数のバンドで活動。76年、自身のバック・バンド、ザ・シルヴァー・ブレッド・バンドを率いての『炎の叫び』が大ヒット。続く本盤（邦題『見知らぬ街』）も米4位に達し、500万枚を売り上げた。シャッフル・ビートで疾走する「ハリウッド・ナイツ」から酒焼けしたソウルな歌声で我が道を疾走する。ギャンブラーを描いた「スティル・ザ・セイム」がヒット（米4位）。9曲中4曲の伴奏はマッスル・ショールズ・リズム・セクションが担当。（安田）

CamScannerでスキャン

Tom Petty And The Heartbreakers
Damn The Torpedoes

1979
Backstreet

リッケンバッカーの12弦ギターを手にボブ・ディランやロイ・オービソンらのバックを務め、新旧世代の橋渡し役となったトム・ペティ率いるバンドの3作目にして、全米2位の大ヒット作。ブルース・スプリングスティーンらと比較されることも多いが、労働者階級の代弁者というよりは、ボーイ・ミーツ・ガールなロックンロールの美学を貫いているところが魅力のひとつだろう。ディランやオービソン、ジェフ・リン、ジョージ・ハリスンと結成したトラヴェリング・ウィルベリーズでも活躍したペティは17年に死去。信奉者でもあるカート・ヴァイルは、彼に捧げる曲を発表している。（清水）

John Fogerty
Centerfield

1985
Warner

クリーデンス・クリアウォーター・リヴァイヴァルで数多くのヒットを飛ばしたジョン・フォガティが約10年の沈黙を経て発表した85年のソロ。すべての楽器をひとりで演奏、多重録音している。世紀を越えてMLBの試合中継で使用されるベースボール賛歌「センターフィールド」やテレヴィジョン・エイジの追憶「アイ・ソウ・イット・オン・TV」などベビーブーマーたちの共感を呼ぶ題材を、誰もが聴き分けることが出来る、強い喉で聴かせる。フォガティと法廷闘争を繰り返した元上司のファンタジー社長、ソウル・ゼインツを揶揄するラスト曲＝“ゼインツはうまく踊れない”も強烈。（安田）

John Mellencamp
Scarecrow

1985
Riva

グラマラスなロックンローラーとしてデビューしたのち、インディアナ＝ハートランド出身というアイデンティティとルーツ・ロック・サウンドを打ち出すことによって人気を揺るぎないものにしてきた。ノスタルジーに加え、社会に抗議するタフな姿勢が加わった8thアルバム。1曲目の“Rain On The Scarecrow”で農家の窮状を訴えたジョンはウィリー・ネルソン、ニール・ヤングと共に農家を支援するチャリティ・イヴェント、ファームエイドを立ち上げる。乾いた音色を基調としたバンド・サウンドは、ハートランド・ロックのイメージにそぐわないほどハードだ。全米2位を記録。（山口）

Steve Earle
Guitar Town

1986
MCA

ナッシュヴィルでソングライターとしてキャリアを積んだスティーヴが、31歳で発表したソロ・デビュー作。師と仰いだタウンズ・ヴァン・ザントやガイ・クラークらの影響はもちろんのこと、ブルース・スプリングスティーンにも通じるロックンロールのビートや躍動するエネルギーが溢れ出る。歌われるのは、アメリカの現実。貧しさの中でもがいて生きるやるせなさや怒りが滲む。楽曲の完成度は高く、バンドの演奏はタイト&ソリッド。バッキー・バクスターのペダル・スティールがフィーチャーされたバラードは幼い息子の幸せな成長を願っており、今となっては悲しみを誘うのみ。（赤尾）

CamScannerでスキャン

Melissa Etheridge
Melissa Etheridge

1988
Island

積極的な社会貢献活動でも知られるオープンリー・レズビアンのロッカー、メリッサ・エスリッジ。旧来からなにかとホモソーシャル的な倫理が支配的であった主流ロック界に殴り込みをかけるようにデビューし、キャリアを通じて優れた曲を連発しているエスリッジだが、短期間で録音されたというこのデビュー作の勢い、切迫感、シンプルな詩情はやはり他に換え難い。嗄れた歌声と、フォークやカントリーのマナーを消化した作曲がバランスよく並立し、王道のロック芸能かくあるべしという説得力に満ちたサウンドを聴かせる。いかにも80年代後半的な音像も、今なかむしろ好ましい。（後藤）

Bon Jovi
New Jersey

1988
Mercury

80年代後半、ハートランド・ロックの時代は終焉に向かっていたが、入れ替わるように登場した時代の寵児、ジョン・ボン・ジョヴィの歌詞は労働者階級の闘争やブルーカラーに寄り添う役割を担っていた。親が元海兵隊員で典型的な労働者階級だったこともあり価値観も一致していたのだろう。ヒットした「ボーン・トゥ・ビー・マイ・ベイビー」は忍耐と夢がコンセプトの労働者階級のアンセム。当時から政府の雇用対策や企業に与えた政策に批判的で、民主党支持者。その後のホームレスや低所得者への支援を継続的に行う姿勢など、歌と行動姿勢が現在まで一貫している。（早坂）

Lucinda Williams
Lucinda Williams

1988
Rough Trade

「ロックにしてはカントリー過ぎ、カントリーにしてはロック過ぎる」とレコード各社から敬遠された彼女に手を差し伸べたラフ・トレードからの初作で通算3作目。ダークネスとタフネスを備えた歌声には独特の響きがあり、小気味よいロッキン・カントリーに乗った歌は気風がよく、バラードでは切々とした感情が溢れる。人間関係の困難に直面しても彼女は泣いて逃げたりしないし、小さな町から出ようとする女性＝シルヴィアをやさしく見守り、後にメアリー・チェイピン・カーペンターが歌ってルシンダにグラミーをもたらす"Passionate Kisses"では女性の権利を主張する。（赤尾）

Neil Young
Freedom

1989
Reprise

テクノありロカビリーありと迷走を続けたニール・ヤングが80年代の終わりに放った傑作で、爆撃機のごときノイズ・ロックからリンダ・ロンシュタットとのデュエットまで、文字通りフリーダムな内容となっている。時のブッシュ政権に言及した「ロッキン・イン・ザ・フリー・ワールド」のアコースティック版を冒頭に、エレクトリック版をラストに配した構成も79年の『ラスト・ネヴァー・スリープス』を思わせるもので、商業的にも批評的にも復活を印象づけた。ちなみに同曲はドナルド・トランプが大統領選出馬の際に使用したが、もちろんこの男がそんな暴挙を許すはずはなかった。（清水）

CamScannerでスキャン

James McMurtry
Too Long In The Wasteland

1989
Columbia

『ラスト・ショー』などで知られる作家ラリー・マクマートリーの息子、ジェイムス・マクマートリーのファースト・アルバム。彼の才能を高く買い、デビューのきっかけを作ったジョン・メレンキャンプがプロデュースを担当した。朴訥とした語り口のヴォーカルと、ルーツ・ミュージックを深く消化した実直な楽曲は、デビュー作にして老成ともいうべき風格をまとっている。タイトルの"ウェイストランド"＝荒れ地とは、アメリカ中西部のとある街を指している由。巧みな舞台設定とリアリティ溢れる人物描写が、現代アメリカーナ小説にも通じる味わいきった詩情を醸し出す。（柴崎）

Hootie & The Blowfish
Cracked Rear View

1994
Atlantic

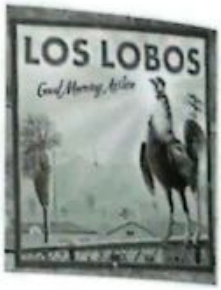
サウス・カロライナ大学の学生バンドからスタートしたフーティー・アンド・ザ・ブロウフィッシュ。本作は94年のメジャー・デビュー作。ダリアス・ラッカーの骨のある歌声を最大の武器とした裏表のないフォーク・ロック・サウンドは高い訴求力を持つ。このアルバムから「ホールド・マイ・ハンド」「レット・ハー・クライ」「オンリー・ワナ・ビー・ウィズ・ユー」「タイム」と4曲のヒット曲を飛ばし、アルバムも1位を獲得した。「オンリー…」におけるボブ・ディラン「ブルーにこんがらがって」の歌詞引用（盗用ではない）は、作者のラッカーとディランの示談によって解決された。（安田）

Pete Droge
Necktie Second

1994
American

シアトル生まれ、ペインブリッジ島育ちのシンガー・ソングライターによるデビュー作。グランジ期にニール・ヤングやトム・ペティら先達の後を追った彼の音楽には、やはりあの時代の閉塞感が通底し、見えない希望や、もっと言ってしまえば、絶望。が近くに横たわっていると感じられる。列車、ホーボー、チェーンのホテル、田舎町のバー…アメリカ的なモチーフが散見される歌詞を、曲によってはペティに似た歌い回しで歌うビート。独立記念日をそのままタイトルにした"Fourth Of July"、はかなり皮肉めいた曲で、ささくれだったギターの音がいたたまれない気持ちに拍車をかける。（赤尾）

Los Lobos
Good Morning Aztlán



2002
Mammoth

イーストLAを拠点に、チカーノ文化を軸にルーツとなるアメリカ音楽を豊かなニュアンスで聴かせるロス・ロボス。21世紀初のスタジオ・アルバムとなる本作はバンドと、XTCなど英ニュー・ウェイヴ・バンドとの仕事で知られるジョン・レッキーとの共同プロデュース。痛快なロックンロールのタイトル曲から、ブルース、ソウル、クンビアと、90年代に組んだミッチェル・フルームとチャド・ブレイクとの作品と比べると、飾り気のないストレートな曲が揃う。ハートランド・ロックという概念がロス・ロボスの多様性を拒まないとすれば、よりポジティヴに使われるものになるだろう。（安田）

CamScannerでスキャン

The Wallflowers
Red Letter Days

2002
Interscope

ボブ・ディランの息子ジェイコブが率いるバンドの4作目。2作目を大ヒットさせた後、自己疑念を露わにした3作目を経た本作は、多様なスタイルとアップバーかつビッグなロック・サウンドが印象的で、"売れ線狙い"、"楽観的過ぎる"と言われた。が、この前年に9・11テロが起きていることと、黙示録的な「エヴリバディ・アウト・オブ・ザ・ウォーター」のような曲が無関係だとは思いにくい。ジェイコブは本作に関して"暗闇の中に光があるかもしれないと信じることを示したかった"と語っており、後年には"サウンドに改善の余地はあるが楽曲は気に入っている"としている。（赤尾）

The Hold Steady
Separation Sunday

2005
Frenchkiss

クリスチャンで売春婦のホーリーとボン引きのシャルルマーニュ、スキンヘッドのギデオンといったキャラクターたちが登場する、酒とドラッグにまみれた物語仕立てのコンセプト・アルバム。同郷ミネアポリスのハスカー・ドゥやリプレイスメンツ直系のヘヴィなギター・リフに乗せ、吐き捨てるように歌うクレイグ・フィンは"インディー・ロックの桂冠詩人"と称され、熱い支持を集めた。ホーンやピアノも交えた狂騒的なアレンジはEストリート・バンドを彷彿させ、死語と化していたハートランド・ロックなる言葉が再び聞かれるようになったのも、このバンドが登場してからだ。（清水）

The Killers
Sam's Town

2006
Island

ニュー・ウェイヴ・リヴァイヴァルの旗手としてロック・シーンの寵児となったラスヴェガスの4人組が改めてアメリカのロック・バンドとしてのアイデンティティを打ち出した2ndアルバム。バンドの存在が大きくなる中で自分達は何者なのか、今一度、確認しておきたかったのだろうか。80年代のイギリスのバンドからの影響が色濃いバンド・サウンドにアメリカン・ロックの2大テーマとも言える、おおらかな歌と故郷からの旅立ちの物語を落とし込んでいる。"When You Were Young"を聴けば、スプリングスティーンが大きなインスピレーションになっていたことは明らかだろう。（山口）

The Gaslight Anthem
The '59 Sound

2008
SideOneDummy

スモール・タウンの青春をヴィヴィッドに描いたストーリーテリングを、胸を焦がすメロディーと共にスピーディーなパンク・ロックに落とし込んだニュージャージーの4人組による2枚目。目指したのはパンク・ロック版のロイ・オービソンだが、ブルース・スプリングスティーンからの影響は"No surrender, my Bobby Jean"と歌う"Meet Me By The River's Edge"からも明らかだ。本作のヒットを足掛かりに人気バンドになっていった彼らは元々、ポップ・パンクに対するブルーカラー・パンクをリードする存在として注目されたことも付け加えておきたい。（山口）

CamScannerでスキャン

New Standards 2010s

The Menzingers
On The Impossible Past

2012
Epitaph

パンク・ルーツと現代のハートランド・ロックのリアルな世界観を巧みに融合させた作品。田舎町での退屈な生活、労働者階級の葛藤など主題のテーマに人間関係、成長、若さゆえの失敗など青春パンク的な要素も全部入れたストーリーテリングが特徴だ。内容は「ダイナーのウェイトレスに告ってフラレて落ち込んだ、死にたい」など極めてしょうもない等身大だが、ノスタルジックな歌詞、クラシック・ロックのようなストレートなソングライティング、アメリカーナ／ルーツ・ロックの無骨で土臭いサウンドに乗せて、地方民の本人たちにとっては大真面目な悩みと呟きが詰まっている。（早坂）

American Aquarium
BurnFlicker Diss

2012
Last Chance

ジェイソン・イズベルがプロデュースしたノース・キャロライナ州出身のアメリカーナ・バンド。労働者階級の嘆きのポエム詰め合わせのような作品で、不幸自慢のような歌詞を読んでいるとにかく悲しくなってくる。Tennessee Mind Fieldは、貧困による離婚を歌った歌だが、この男はビートルズもイーグルスもストーンズも、コレクションすべてを別れた嫁に差し押さえられてしまうのだ。本誌の読者は大事なレコードを取り上げられることが如何に辛いことか解ってくれるはず。「俺の人生9年間は決して戻らない」という言葉が実に重い。全編通して妙にリアリティを感じる。（早坂）

The War On Drugs
Lost In The Dream

2014
Secretly Canadian

親友ーカート・ヴァイルもギタリストとして在籍していた、アダム・グランデュシエル率いるフィラデルフィアのロック・バンド。異味深いのは脱退後のカートがソロとしてアメリカーナ路線に向かうのに対し、ウォー・オン・ドラッグスはシューゲイズ～アンビエント的な要素を飲み込んで巨大化していく点で、その音楽性はブルース・スプリングスティーンと（実際に交流もあった）シンセ・パンク・デュオ、スーサイドの邂逅を思わせる。メジャーからリリースされた次作は全米10位を記録、グラミーのベスト・ロック・アルバムを受賞し、名実ともにトップ・バンドの仲間入りを果たした。（清水）

Butch Walker
Stay Gold

2016
Dangerbird

プロデューサーとしても、ソロ・アーティストとしてもオルタナ以降のメインストリームで鳴るロック・サウンドを得意としている印象がある中で、この8作目はひときわルーツ・ロック色濃い作風になっている。ジョージアの田舎町で過ごした少年時代を映画『アウトサイダー』に重ね合わせた本作の世界観を表現するには、そういう音の景色がふさわしいと考えたのだろう。ピアノ・バラードの「Descending」をデュエットしたアシュリー・モンロー、若き天才ギタリスト、ダニエル・ドネートといったカントリー界から招いたゲストの顔ぶれからもブッチがやりたいことは明らかだ。（山口）

CamScannerでスキャン

Bleachers
Take The Sadness Out Of Saturday Night

2021
RCA

グラミー賞3冠など大きな成功を収めたファン（Fun.）で、ジャック・アントノフは、メンバーとの共同作業のなかで、主に若さ、ノスタルジア、成長することの悲喜をテーマに扱っていた。一方で極めて彼の個人的な反映されたブリーチャーズは内省的で、メンタル・ヘルスの問題、人間関係における焦燥、ぼんやりとした内向きの不安に立ち向かう自分探しのバンドだ。

ディスク・ガイドのセレクションからも判るように、2000年以降のハートランド・ロックは、音と歌詞がそれぞれ個々なる形で継承され、更に進化してきた。音はそれっぽいが歌詞は内省的であったり、より冒険的なサウンドだったり、そんななかで最も興味深いつつ、あるべき現代風に昇華しこんだのが本作だと思う。

やはりスプリングスティーンとの共演曲「チャイナタウン」の分析的で完成された歌詞が目を惹く。ニュージャージーの同郷同士が育ちと労働者階級のルーツを探りながら青春、田舎町での生活、故郷のしがらみから逃れたいが懐かしさや帰りたい願望もある複雑な気持ちを繊細なタッチで綴っている。サウンド面での類似性や密せ方はもちろんだが、これだけ私的な内容を取り扱いつつも、このアルバムにはハートランド・ロックの王道テーマである、悲観と悲しみの中から見つけた希望や、不確実性からの克服などのイシューをしっかり提供しているのだ。（早坂）

Kings Of Leon
When You See Yourself

2021
RCA

キングス・オブ・レオンのキャリアを追ってみると、アメリカにおける"ハートランド・ロック"的なるものの豪力の強さに改めて驚かされる。初期のガレージ・ロック然とした荒々しさから徐々に音楽的地平を広げていき、そのスケール感はアリーナを飛び超え、今やアメリカ中西部の広大な大地、大気と同化してしまった感すらある。この8作目では、再びマーカス・ドラヴスをプロデューサーに迎え、自身の立ち位置を今一度問いつつ、より自由に飛翔するような楽曲が揃った。現在もなお"王道のロック"という概念が有効なのだとしたら、その代表選手は彼らをおいて他にない。（柴崎）

Daniel Romano's Outfit
Cobra Poems

2021
You've Changed

ウェザー・ステーションらを輩出したインディー・レーベルのオーナーでもあるカナダ人ミュージシャンのダニエル・ロマーノが、女性ヴォーカリストらと結成したプロジェクト。アルバムによってパンクだったりサイケだったりと作風がバラバラで、ジャケットのデザインからも窺える通りコスプレ感覚の強いものだが、革職人でもある本人の器用さゆえか、どれもクオリティは極めて高い。本作は比較的ストレートなロックンロールだが、ロマーノのハイトーン・ヴォイスは70年代イギリスのグラム・ロックを連想させる。22年には1曲33分のアルバムをリリースしてファンを驚かせた。（清水）

CamScannerでスキャン

Sam Fender
Seventeen Going Under

2021
Polydor

スプリングスティーンを崇拝するイギリス人シンガー・ソングライターによる問題作。27歳になった彼が、8歳で母親が家出し、10代で継母に家を追い出されて、17歳の時に再会した母親は病に倒れるなど、イギリス北部の田舎町で体験した地獄のような10代の日々を綴る。鮮やかなストーリーテリングと詳細な人物描写に長けており、1曲目のタイトル曲「もがき苦しむ17歳」から衝撃的だ。経済困窮した実体験を歌った曲で、サウンド的にはEストリート・バンドを彷彿させるエネルギッシュなもの。アレンジからはウォー・オン・ドラッグスなど現代のフォロワーからの影響も感じられる。（早坂）

Margo Price
Strays

2023
Loma Vista

前作同様、クイーン・オブ・アウトロー・カントリーからの脱却を意識した4thアルバム。いきなり重厚なサイケデリック・サウンドが鳴る1曲目をはじめ、カントリーにとどまらない曲の振り幅は、イリノイの農家出身の彼女を育んできた音楽の反映でもあるのだろう。シンガーとして成功するためにイリノイからナッシュヴィルにやってきた彼女の半生そのものがハートランド・ロックの物語のように思えるが、アルコール依存の実体験をモチーフに"I've been through in the hell"と歌った"Hell In The Heartland"のような曲があるからこそ、その物語はよりドラマチックになる。（山口）

Jason Isbell And The 400 Unit
Weathervanes

2023
Southeastern

アラバマ州出身のシンガー・ソングライターによる現時点での最新作。叙情的なバラードもソウルフルなロックも緩急自在に演奏する手練れのバンドを従え、哀しみを帯びたハイ・トーン・ヴォイスが吠える。これまで個人的な経験や感情を赤裸々に書いてきたジェイソンは本作で、他人の経験や言動や感情と自身のそれとの共通点や相違点を探りながら、物語の視野を広げている。故郷への愛情と反発。仲違いしたミュージシャン仲間への感謝と複雑な心境。10代での恥ずべき苦い記憶。学校で起きた銃乱射事件…キーワードは"愛憎"か。今の米国に生きる自分を再確認しているような1枚。（赤尾）

Spanish Love Songs
No Joy

2023
Pure Noise

最初の3枚のアルバムで、内省的でエモーショナルな自称"グロウチ・ロック"を掲げていたバンドが、この4作目ではこれまでのエモなスタイルを残しつつ、現代の労働者階級が直面する生活の葛藤などを題材に取り組んだ意欲作。ザ・キラーズの影響が色濃いサウンドは、パンク／エモの基盤に根ざしながらも、インディー・ロック、ニュー・ウェイヴなどの影響が大きい。きらめくシンセ、雰囲気のあるテクスチャーに乗せた疾走感全振りの作風に後押しされるように、やや暗澹とした始まりから徐々に自問自答を繰り返しながら楽観的なトーンにシフトする点が聴き手にとっても救いだ。（早坂）

CamScannerでスキャン

近田春夫の帯に短し襷に長し

第65回 ロックとロックンロールを分けるポイント

ロックとロックンロールでは何か音が違うのか？　いやそんなの一緒だという考え方もあるけれど、俺はやっぱりロックとロックンロールは別な音のような気もしてるのね。

ところで。日本では一般的にロックンロールというと、Johnny B. Goode、のような音楽スタイル――「コミック雑誌なんか要らない」とかである――を指すだろう。

一方でいまやロックンロール・バンドといえばローリング・ストーンズなのだが、彼等がいかにかなりな曲数チャック・ベリーのナンバーをこなしていようと、そのロックンロール・マナーは明らかにクールスや横浜銀蝿のそれとは別物だ。

そもそも最初の頃ストーンズはロック・バンドといった。てか60年代当時、ロックンロール・バンドと呼ばれていたバンドはなかったかも知れない。全部ロック・バンドだ。

日本のロックンロールの源流は多分ウェスタン・カーニバル／ロカビリーだろう。しばらく間が空いて映画『ウッドストック』でシャナナを知り、続いてキャロル登場。『アメリカン・グラフィティ』のシックスティーズ・ファッションに、ヤンキー風味が加わって独自の発展を遂げた――音楽様式というより――文化なのだと思う。系譜としてはシャネルズ（ラッツ&スター）チェッカーズ、氣志團へとつながるものとも考えられる。

その〝ロックンロール〟とストーンズのサウンドに何か共通するものはあるのか？

色々と考えたのだが、どうだろう。それはエレキ・ギターにあんまりエフェクトをかけていないってことなのかも。

そしてそれこそがロックとロックンロールを分ける大事なポイントではないかと私は考えた。キース・リチャーズにしてもロン・ウッドにしても、ギターをアンプに直結してるイメージじゃないさ（笑）。いわゆるロックって、大体みんなギター・サウンドに凝ってる感じがするのよ。ディレイとかコーラスとかエフェクター結構多用するでしょう。

ところでそれはそうと、そもそもロックはロックンロールから進化していったものよね。なのに――軒を貸したら母屋を取られるじゃないけど――いつのまにかロックンロールはメタルとかプログレみたくロックという大枠のなかのひとつのジャンルのように扱われるようになっちゃった。

それにしても、いまストーンズ的な意味でロックンロール・バンドっていったら他にもあるのかなぁ？　ついでにいうと、ビートルズがロックンロール・バンドだったとは誰もあんまりいわないよね？

おっと。脱線ついでにもうひとつ。キャロルは、いわゆるオールディーズなナンバーではなく、何故あえて〝メタな構造〟の69年のヒット〝Good Old Rock 'n' Roll〟のカヴァーを売りにしたのか？

今回は、ちょっと思ったよりテーマが大きかったようで、紙幅も尽きてきたが書きたいことが残ってしまった。未完であることをお許しください。

以下次号につづく

イラストレイション＝近田春夫

CamScannerでスキャン

寺尾紗穂の戦前音楽探訪

イラストレイション＝梁川玲子

第59回　「月ぬ可愛しゃ」

3月は毎年、沖縄北部の今帰仁でライヴをやらせてもらう。今年は前日に宜野湾でも歌った。最近、古本屋で入手した東洋文庫の島袋全發編「沖縄童謡集」から、メロディが美しい「月ぬ可愛しゃ」を選び、珍しくイントロをつけてアレンジを少しはどこして、予習していった。

月ぬ可愛しゃ　十三日
みやらび可愛しゃ　十七つ

月の美しさは十三夜、みやらび（乙女）の美しさは十七。月の綺麗な晩はみなで遊びましょうと呼びかける歌だ。十五夜でなく十三夜がいいという歌詞について、松永伍一は「まだ夢が残されている、可能性のある十三夜」と表現している（『定本うたの思想』）。

宜野湾の翌日は、名護の瀬嵩の浜を案内させてほしいというファンの桜子さんの申し出があり、仕事まで休んでくださるという。世界でも有数の貝の宝庫と言われ、毎年新種が見つかるその浜に向かった。岩場を挟み、前浜、中浜、東浜にわかれている。前浜が一番やわらかく、裸足の足が沈む。桜子さんは懇意の貝の学者、名相純さんから聞いた話や、教わった貝の名前を伝えてくれる。沢山の微生物が生きており、団体で人が踏み荒らすと浜の生態系バランスが戻るのに時間がかかるから数人がちょうどいいのだという。

岩場を越えて中浜に立つと、向かいに辺野古が見えた。辺野古の海には現在、資材置き場が作られており、これが完成すると潮の流れが変わり、瀬嵩浜もヘドロの海になるのでは、と名相さんは心配していました、と桜子さん。私は、少し前に書評した三上智恵『戦雲』のことを思い出した。沖縄のドキュメンタリーを撮り続けている三上さんにお会いしたことはないが、本を読むと民俗学にも明るく、単なる〝沖縄問題〟の描き方とは違う。この本には、何度か「弥勒世」という沖縄の歌に歌われてきた言葉が出てくる。いつかはみんなが幸せで不足ない世界がやってくる、と歌われる言葉は、長い時間この島に息づいてきた祈りなのだ。石垣や宮古の祭りの祝詞に出てくる「世ば直れ」という言葉も紹介される。基地反対運動は時に冷笑的に眺められる。金をもらってやってるのだろう、なんてつまらないデマも流される。しかし、三上さんはあきらめないおばあたちの中に流れる歌や思いを伝える。

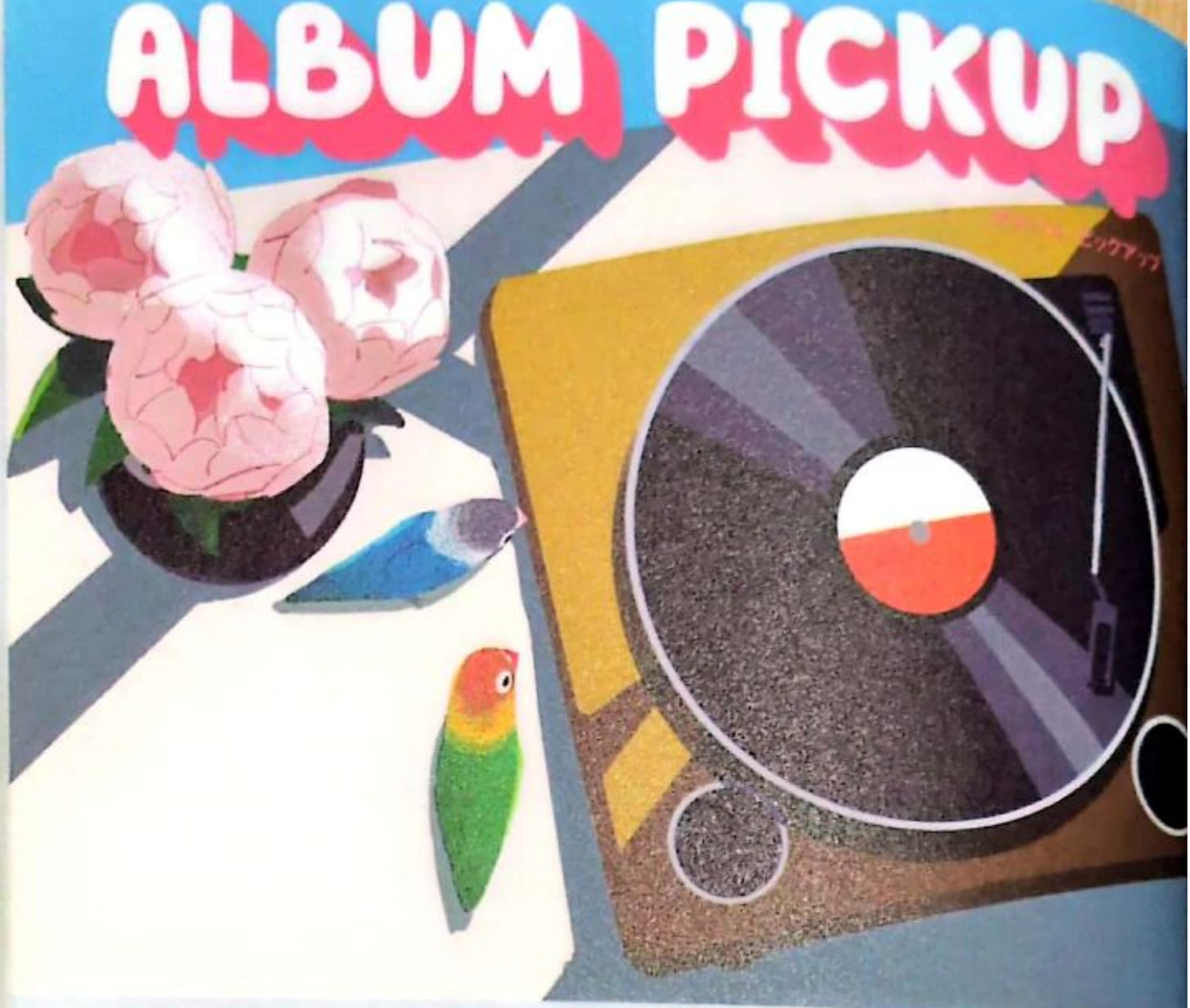
中浜から辺野古を眺めて考えた。祈ることは無力であり、〝負け〟なのだろうか。「月ぬ可愛しゃ」を演奏後に、詩を書く人でもある桜子さんが、八重山では〝美しい〟が〝かいしゃ〟ですが、これは〝影さ有り〟という言葉からきている

そうです、と教えてくれた。かいしゃの美しさは光であると同時に影を含んだものでもあり、月影は月の光なのだと。

東京に戻ってから、「月ぬ可愛しゃ」の元歌と言われる「波照間ぬみんぴーか（チョーガ節）」がYouTubeに上がっているのを見つけた。波照間の野底光子さんの演奏だ。3番は「弥勒世ば給らり　神ぬ世ば給らり　ホーイチョウガ」と歌われていた。

私はこの一連のつながりを思いながら、十三夜を愛した感性と、弥勒世を願った沖縄の人々の祈りが通底することを感じていた。光がそっと影を含むように、影も光も混然一体であるのだと、生まれおちた時代の苦楽を受け止めてきた人々の思想が伝わってくる気がした。

ALBUM PICKUP



A
asuka ando→170
Avalanche Kaito→161

B
Beyoncé→162
The Birthday→176
The Black Keys→149
Blue Lab Beats→158
Brainstory→153

C
Ana Lua Caiano→157
Matt Champion→153
Natalie Cressman & Ian Faquini→168

F
Fat White Family→154
Four Tet→160
Hannah Frances→151
Faada Freddy→169

G
Girl In Red→156
Jasmin Godoy→168
Ariana Grande→152

H
Fred Hersch→167

I
Iron & Wine→150

J
Jlin→161
Josh Johnson→165
Justice→157

K
春日博文→171
Khruangbin→148
Kim Oki→170
Cassie Kinoshi's Seed→165

L
The Libertines→155

M
町あかり→173
Leyla McCalla→147
Jeff Mills→159
Mdou Moctar →169
Moor Mother→147
Mourn→156
Kacey Musgraves→146

N
Neighbors Complain→173

O
大滝詠一→176

P
Pearl Jam→149
Jessica Pratt→150
Prefuse 73→160
Bolis Pupul→158

R
Jordan Rakei→154
Claire Rousay→159
RYUSENKEI→174

S
S.A.R.→175
ScHoolboy Q→164
Shabaka→167
Shakira→163
St. Vincent→151
すずめのティアーズ→172

T
竹内朋康→171
Thiiird Place→175
Justin Timberlake→152
tofubeats→174
Tyla→163

V
Vampire Weekend →148

W
Kamasi Washington→166
Tierra Whack→164
Kathryn Williams & Withered Hand→155

イラストレイション＝シマ・シンヤ

●掲載作品は品番の後にDVD、LPなどと記した場合を除きすべてCDです。価格は税抜き定価。なお、筆者には主に試聴用のCD-R、DVD-R等で評を依頼しています。

CamScannerでスキャン

端正でエレガントなアンサンブルで パーソナルな思いを吐露

Kacey Musgraves

"Deeper Well"

MCA / Interscope / Universal [US]
3・15発売

[illegible]

[illegible]

[illegible]

Leyla McCalla
"Sun Without The Heat"
Anti- [US]
4・12発売

熱量高めなバンドの演奏を得てエモーショナルに迫る歌

ハイチ移民の人権活動家の両親のもとに米国で生まれ、現在はニューリンズに住みながらチェロ、バージョー、ギターを弾きこなすマルチ奏者のシンガー・ソングライターとして活動を続ける才媛による通算3作目。前作は独裁下のハイチで弾き続けた独立ラジオ局を題材とし、その場で組み立てていくスタンスで臨んだとのことで、良い意味でラフな音作りがこの人としてはむしろ新鮮だ。

とはいえ、米国のカントリーやブルースにアフロビート、ルンバ・コンゴレーズ風のギター、トロピカリア期のブラジル音楽などの要素が奔放に混在する音は、常に越境的なサウンドを示してきた彼女ならではのもの。〝激しい熱を放っていない太陽など存在しない〟といった意味合いのタイトル通り、熱量高めなバンドの演奏を得て彼女の歌もいつもよりエモーショナルに迫る。**吉本秀純**

Moor Mother
"The Great Bailout"
Anti- [US]
3・8発売

ヨーロッパの植民地主義に向き合った言葉を展開

イレヴァーシブル・エンタングルメンツの一員としてインパルスからデビューもしたムーア・マザーことカマエ・アイエワの最新作。前作〝Jazz Codes〟はブラック・ミュージックの起源を探求するテーマのもと、ジェイソン・モランらジャズ・ミュージシャンをフィーチャーし、ジャズのサンプリング・ループも使って、従来よりも聴きやすいアルバムとなっていた。しかし、ヨーロッパの植民地主義に向き合った本作では、再びダークなサウンドスケープと即興性の高い演奏空間の中で、彼女の言葉が展開されていく。

ハープ奏者のメアリー・ラティモア、ピアニストのヴィジェイ・アイヤー、トランペッターのアンブローズ・アキンムシーレ（変名を使っているが）、作曲家／マルチ奏者のエンジェル・バット・ダウィッド、インブロヴァイザーのC・スペンサー・イェーらが曲ごとにプロデュースでクレジットされていて、彼女の言葉が様々なアーティストから求められている状況が窺える。制作の背景やリリックを知ることで印象が変わり、理解もより深まる音楽だと思うが、手元に資料は一切ない状態でこの音源を聴いた。**原雅明**

CamScannerでスキャン

Vampire Weekend

『オンリー・ゴッド・ワズ・アバヴ・アス』

ヴァンパイア・ウィークエンド

ソニー SICP31710（ブルースペック CD2）
¥2700／4・5発売
（原題 "Only God Was Above Us"）

聴くたびにあらたな発見がある
深遠で奥深い作品

並々ならぬ音響的配慮に富むという点で、ウィルコ『ヤンキー・ホテル・フォックストロット』、アニマル・コレクティヴ『フィールズ』、ロス・ロボス『コロッサル・ヘッド』と並べて聴かれるべき傑作である。初期に顕著だったアフリカ音楽からの影響は影をひそめ、根をつめてのスタジオ・ワークの成果が前面にせりだした印象だ。制作には5年をかけて、LA、NY、東京、ロンドンで録音されており、テーマは20世紀のNYということらしい。

ミックスを手掛けたのはデイヴ・フリッドマン。フレーミング・リップス、MGMT、テーム・インパラ、ナンバーガールなどのレコーディングを担当した才人だ。歪みとざらつきへの徹底したこだわり、定位やEQの大胆な工夫に幾度となく感嘆させられる。残響系／空間系エフェクトを多用したサウンドは、ダブを感じさせる瞬間も多々。一方で、グラウンド・ビートを牽引したソウルⅡソウルの曲のビートをサンプリングするなんて小技もあり、ニクい。表面的にはポップだが、奥の方で静かに鳴る微細なノイズに耳が行く。聴くたびにあらたな発見がある、実に深遠で奥深い作品だ。

土佐有明

Khruangbin

『ア・ラ・サラ』

クルアンビン

デッド・オーシャンズ（ビッグ・ナッシング）
¥2500／4・5発売
（原題 "A La Sala"）
●輸入元＝ bignothing.net（ビッグ・ナッシング）

温かいグルーヴが支配する
極めて心地よいサウンドだが…

米テキサス州ヒューストンを拠点に独自のタイ・ファンクを奏でるクルアルピン（タイ語で"空飛ぶエンジン／飛行機"の意）の4年ぶり、通算4枚目となる新作。2年前の"Ali"はマリのギタリスト、アリ・ファルカ・トゥーレを称えたコラボ作だったが、これまでも多種多様、数多いゲストとの共作でも知られるトリオながら今回は原点であるギター、ベース、ドラムスだけで、鳴り音と、その絡まり具合にこだわったアルバムとなっている。レイジーなトーンと緩いフレーズを紡ぐギターとファンキーなベースがすぐに場の雰囲気を決定するかのように流れ出し、空気や聞き手の心をほぐし、温かいグルーヴが支配する。フジロックのフィールド・オブ・ヘヴンで横になり音を浴びてる光景につながっていくかのようで極めて心地よい。

ただし全編それだけなのだ。ボーナス・トラックは付くらしいが本編12曲、約40分ほどで飽きるほどではないにしても、もう少し変化や違ったアプローチを仕掛けて欲しかった。サウンド的にも広大なスペースが空いていて、聞き手のイマジネイションを拡大しろということかもしれないが、物足りなさは残る。

大鷹俊一

CamScannerでスキャン

The Black Keys
『オハイオ・プレイヤーズ』
ザ・ブラック・キーズ
ワーナー WPCR-13653
¥3000／4・5発売
（原題 "Ohio Players"）

ハンドの〝生誕州〟を絡めたタイトルの、賑やかなアルバム

01年結成の米国のロック・デュオが、自分たちのバンドの〝生誕州〟を絡めたタイトルで2年ぶりに発表した12作目。コンスタントなリリースを続けているにもかかわらず佳作を連発し、今回も話題性を上回るクオリティの高さに舌を巻くばかりだ。

何かと賑やかなアルバムである。前作みたいなブルース風味よりもR&B～ファンクのテイストが強めだが、むろん彩り豊かで、ラテン音楽やサーフ・ロックンロールも溶かし込んでいる。多数のゲストの〝応援〟の影響も大きい。曲の後半の〝ヒップホップ・バート〟で目立つリル・ノイドやジューシーJの他に、ベックやノエル・ギャラガーらが曲作り等で守り立てているのだ。演奏楽器やバッキング・ヴォーカルの音数が多いことを感じさせないシンプルな作りも、また見事。タイトルがサビで使われる3分前後のキャッチーな曲の中で、要所を押さえた洒落たアレンジも心憎い。そんな中でAORに聞こえるほどメロウなヴォーカルが際立ち、ウィリアム・ベルの「アイ・フォーゴット・トゥ・ビー・ユア・ラヴァー」のカヴァーでは熱唱も。ディープなポピュラー・ミュージックの14曲入りである。**行川和彦**

Pearl Jam
『ダーク・マター』
パール・ジャム
ユニバーサル UICY16212（SHM-CD）
¥3091／4・19発売
（原題 "Dark Matter"）

穏やかな高揚感を堪能させてくれるポジティヴな力強さ持つ新作

バンドとしては前作『ギガトン』から4年ぶりとなるものの、フロントのエディ・ヴェダーは22年にサード・ソロ『アースリング』をリリースしている。そこではアンドリュー・ワットが、生真面目なエディの資質に、開放感と華のあるアプローチで光を当てていた。23年にはローリング・ストーンズも手がけたアンドリューは、本作でもプロデュースを担当している。

レコーディングは3週間と短期で、作曲はキーボードとギターでサポートしている元レッド・ホット・チリ・ペッパーズのジョシュ・クリングホッファーと5人のメンバーによる共作とクレジットされている。これは本作が特別な集中力の産物であることを物語っているようで、エディ自身が「最高傑作だと思う」と述べたことも伝えられている。

全曲エディによる歌詞は、シヴィアな認識が込められているように思うが、投げやりにならず、声色や全体のムードの基調にあるのは、むしろポジティヴな力強さ。ラウドだったりハードだったりする局面はあるが、終盤ではアコースティックな温かみも活かしつつ、穏やかな高揚感を堪能させてくれる。**志田歩**

CamScannerでスキャン

Rock

Iron & Wine

『ライト・ヴァース』

アイアン&ワイン

サブ・ポップ（ビッグ・ナッシング）
SP1615LPXJ
¥2600／4・26発売
（原題 "Light Verse"）
●問合せ先＝ bignothing net
（ビッグ・ナッシング）

静かな思いで日々の暮らしに向き合っていることが伝わる歌

フォーク系シンガー・ソングライター、サム・ビームによるこのソロ・ユニットはキャリアの中で一度として停滞したことがない。出世作となった2002年の『The Creek Drank the Cradle』から2年になるが、自己流の爪弾きの繰り返しをメインにしつつも年々表現を深化してきており、通算4作目のフル・アルバムを出したのちに本格的なバンド・サウンドを導入した前作はさらに人生の芳醇さを伝えるようになった。7年前はクレジットされていたもうひとりのプロデューサー兼ミュージシャンであるブライアン・ディーンとの5年ぶりとなる本作は、フィオン・アップルとデュエットした先行シングル「Boy With a Coin」が話題となったが、全体的に穏やかな時間の経過を味わうような曲が多い。コロラド録音ということもあり、作品を出さなかったのは、こうした環境になるのを待っていたからうと思えるほど豊かな思いで日々の暮らしに向き合っていることが伝わる歌が揃っている。ローレル・キャニオンにある自身のスタジオではほぼ録音。中には24人編成のオーケストラを迎えた曲もあるし、ダヴィード・ガーザ、セバスチャン・スタインバーグらと組んだモダンな演奏の曲もあるが、今生きていることの喜びをじっくりと言葉とメロディにのえている姿が何より沁みる。**岡村詩野**

Rock

Jessica Pratt

『ヒア・イン・ザ・ピッチ』

ジェシカ・プラット

シティ・スラング（インパートメント）
AMIP0352
¥3100／5・3発売
（原題 "Here In The Pitch"）
●問合せ先＝03・5428・6800
（インパートメント）

これまで以上にポップ・センスが打ち出された5年ぶりの新作

LAを拠点に活動するシンガー・ソングライター、ジェシカ・プラットの5年ぶりの新作。デビュー・アルバムが気に入ってずっと聴いてきたが、いつも忘れた頃に素敵な新作を届けてくれる。母親の影響で子供の頃からティム・バックリーやガン・クラブなどを聴いて育ち、16歳でエレキ・ギターを弾いて曲を録音するようになった彼女の歌は、フリー・フォークとして語られることが多い。ギターの弾き語りを中心にしたリヴァーブを効かせた儚げな歌声には、確かにサイケデリックの浮遊感がある。しかし、見逃せないのがソングライティングの才能で、ティン・パン・アレイ系の名曲を書ける力を持っているのではと思っていた。

そんな彼女のポップ・センスが、本作ではこれまで以上に打ち出されている。珍しくドラムを入れた1曲目「Life Is」ではビーチ・ボーイズ『ペット・サウンズ』的世界を展開、アルバムを通してストリングスやバーカションなど音の装飾が豊かになり、アレンジはこまやか。歌声にはのかな甘みが加わったように感じるが、本来の静謐なムードは健在で、60年代ポップスを独自に昇華、成熟した歌を聴かせてくれる。**村尾泰郎**

CamScannerでスキャン

St. Vincent
"All Born Screaming"
Total Pleasure [US]
4・25発売

ダークで内省的で暴力的だが空虚な心が希望に満たされていく

3年ぶりの7作目。初のセルフ・プロデュース作品である。

今から13年前、セント・ヴィンセントが小さなライヴハウスで、そこらの学生のような野暮ったい格好でビッグ・ブラックのキレキレのカヴァーを演奏してる映像がYouTubeに上にある。今では見違えるように洗練され、グラミーを3度受賞するようなアメリカを代表するアーティストになったが、今作はそんな彼女の出自がどこにあるのか示すような作品と言える。

「一人でしか行けない場所があり、本作の制作はそこに辿り着くまでのプロセスだった」と語っているが、本作はこれまででもっともダークで内省的で暴力的な作品となっている。デイヴ・グロールを始めゲストが多数参加しているが、徹底的に自己の内面と向き合い、掘り下げていったものを外部と共有するために、媒介者として彼らが必要だったのだろう。亡くなったソフィーを追悼する曲を収録したアルバムは、徐々に傷が癒えるように死から生へと遷移し、空虚だった心が希望に満たされていく。そいつはえらく感動的な体験だった。セント・ヴィンセントは一段階上にあがったようだ。

小野島大

Hannah Frances
"Keeper Of The Shepherd"
Ruination [US]
3・1発売

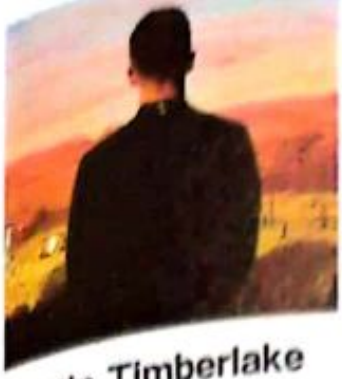
歌い手としての総合的な能力の高さを十全に発揮した一枚

ハンナ・フランシスは米シカゴのシンガー・ソングライターで、本作ですでに5作目となる。基本的にはアコースティック・ギターの弾き語りをメインにしたアシッド・フォーク調の曲が並ぶものの、ギターのリフのポリリズムは非常に複雑であるし、シンフォニックな管弦を生かしたスケールの大きなアンサンブルもあり音楽的な飛距離の長さを備えている。ジョアンナ・ニューサムと比べる向きもあるようで、たしかに彼女と同様に1曲のなかで壮大なドラマを描き出す力が強いタイプだ。さらに複雑なアレンジメントを乗りこなす統制された歌唱もあり、歌い手としての総合的な能力の高さを十全に発揮した一枚と言えるだろう。

主題としては自身の内面にどれだけ深く潜ることができるか、とのことだが、メランコリックな雰囲気に流されることなく、芯の強いメロディと歌に感情の解放を委ねる意思の強さに貫かれている。"わたしなしにあなたを愛することはできない"と歌うタイトル曲はじめ、確固たる自己を持つことの大切さが曲調にはっきりと表れているのだ。枯れた味わいのフォーク・ソングが管弦と飛翔する最終曲が白眉。

木津毅

CamScannerでスキャン



Justin Timberlake
『エブリシング・アイ・ソート・イット・ワズ』
ジャスティン・ティンバーレイク
ソニー　SICP5572
¥2500／3・15発売
(原題 "Everything I Thought It Was")

評価されるべき新しい試みもある 曲77分の大作となった6作目

ジャスティン・ティンバーレイク　なお新しい試みは評価されるべき。ショングク「3D」へのゲスト参加に留まるまでもなく、ボーイ・バンドからの転身時の先駆者かつ、ソロアルバムの本家でもある。作詞もプロデュースの手綱も本人。40代に入ってもテーマを変えないのはじつはライバルのアッシャーと一緒だ。ティンバランドのプロデュース曲は安心して聴けるし、ヴォーカルもとくに艶やか。先に再結成曲があったが惜しい部分を認めた「ファンキー・アップ・サ・ディスコ」、ナイーアのファイアボールDMLをハーモニーもいい。意外と男性も多かったグループのファンの人たちが喜んでいそうだ。

池城美菜子

Ariana Grande
『エターナル・サンシャイン』
アリアナ・グランデ
ユニバーサル
UICU1364
¥2500／3・8発売
UICU9112(限定)
¥3800／3・8発売
UICU9113(限定)
¥4200／3・8発売
(原題 "Eternal Sunshine")

揺れ動く感情の機微を表現する "別れ"を題材としたコンセプト作

2020年作『ポジションズ』では、赤裸々なセックス描写も交えながら性愛の悦びを高らかに歌っていたアリアナ。あれから3年半ぶりとなる本作は、"別れ"を題材としたコンセプト・アルバムとなった。

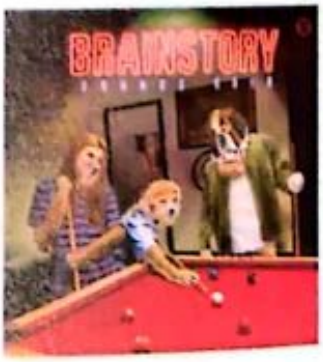
ミシェル・ゴンドリー監督の04年公開作『エターナル・サンシャイン』から引用したタイトルも示すとおり、今作を通して彼女は終わった関係に折り合いをつけ、次に進むまでのストーリーを歌にしている。サウンド面は前作の延長線上にあるが、北米R&B色はやや薄まり、マックス・マーティンとイリヤ・サルマンザデ主導のストリングスを効果的に使ったアレンジは、北欧ポップハウスの要素をより強く感じさせる。

歌詞も多面的だ。別れを切り出すことへの躊躇、新たな恋のときめき、煮え切らない態度への苛立ち、心ない批判による傷心。そこで揺れ動く感情の機微を、彼女のソプラノ・ヴォイスは見事に表現してみせる。本作に限らず、これまでも自身の体験をモチーフに恋愛の様々な局面を歌ってきたアリアナ。ラヴ・ソングとはポップ音楽における最も多種多様な表現形式なのだと、彼女の歌はいつも気づかせてくれる。

渡辺裕也

CamScannerでスキャン

Rock [US]



Brainstory

『サウンズ・グッド』

ブレインストーリー

バリオ・ゴールド
(ミュージック・キャンプ)
BG5252
¥2600／4・19発売
BG5253 (CD+ZINE)
¥2800／4・19発売
ZBG1525 (LP)
¥4118／4・19発売
(原題 "Sounds Good")
●問合せ先＝042・498・7531
(ミュージック・キャンプ)

ジャンルにとらわれない心地よさを追求するトリオ

カリフォルニアのトリオ、ブレインストーリーの来日公演に行けなかったのは去年の痛恨事のひとつ。いわゆるチカーノ・ソウル新世代。だが、デビュー当時からその音楽性はゆったりとしながら破格だった。ソウルやヒップホップ、ジャズ、あるいはカンタベリー・ロックまで引き合いに出す人がいる。ケヴィンとトニーの兄弟に、エリックは音楽的な義兄弟。会話のように曲によって矛先を変えるスタイルは、いい意味でつかみどころがない。ジャンルにとらわれない心地よさを追求する姿は、ビッグ・クラウンのレーベル主であるリオン・マイケルズのもっとも好むところでもあるだろう。

この新作では、これまで以上に歌を中心に据えるアプローチを徹底させた。前作EPではもうちょっと聴きたいと思わせるくらいでサラリと短めに切り上げていた構成も、今回はしっかり全12曲。音楽にとうりと浸かった陶酔のなかで何かが目を覚ます。それは、常識や流行とは違う脳（ブレイン）が語り出す新しい物語（ストーリー）。1曲目「Sooo Yes」が鳴り出して15秒ですべて持っていかれる。解説は奈良ブリトミの島田陽平。

松永良平

Rock [US]

Matt Champion

"Mika's Laundry"

RCA [US]
3・22発売

センスの爆発を見せるブロックハンプトンの人気者

10年代後半のブロックハンプトンのカルト人気の秘訣は、バラバラな個性がわちゃわちゃしながらぶつかり合う様と、センスの良さにあったように思う。2022年の解散後、まずリーダーのケヴィン・アブストラクトが思いがけない方向に行った"Blonde"をリリースし、次のソロ作が人気者のマット・チャンピオンなのは自然だろう。

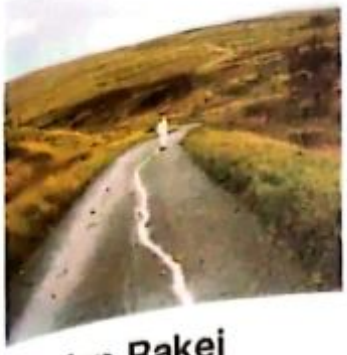
これが、センスの爆発なのだ。ノスタルジックなファンクを取り込み、フランク・オーシャンの初期のミックステープを彷彿させる瞬間も。プロダクションのほとんどをマット本人が手がけ、ブロックハンプトンのキコ・マーリーやジャヴァリも参加している。DJディジョンや話題のドラ・ジャーもテクスチャーに奥行きを持たせる。とことんシンプルな歌詞を、声芸と言えるほど多彩な声色で聴かせる。懐かしさと新しさが同居する"Sex"は必聴。

一番の話題はブラック・ピンクのジェニーとの"Doss"だろう。意外な組み合わせだが、狙ったかのようなマットの不安定なウォーカルとジェニーのウィスパー唱法のブレンド具合が美しくてうっとりする。これも必聴。

池城美菜子

CamScannerでスキャン

Rock [UK]



Jordan Rakei

『ザ・ループ』

ジョーダン・ラカイ

デッカ（ユニバーサル） UCCM1274
(SHM-CD)
¥2600／5・10発売
(原題 "The Loop")

ホール向きのアーティストに成長した
ロンドン拠点のシンガー

ニュージーランド生まれ、オーストラリア育ち、15年からロンドンを拠点に活動しているジョーダン・ラカイ。僕は、19年9月に200席に満たないクラブで来日公演を観た。それから約4年半が経つが、今年10月1日にロンドンのロイヤル・アルバート・ホールで行なわれる彼の公演は即座にソールド・アウト。同会場での追加公演が決定済みだ。前記のホールは、約8000人のキャパシティーを誇る。英国における人気の高さには驚かされるが、このデビュー以来の移籍作を聴いて納得した。もともとラカイの音楽は、メロウなブルー・アイド・ソウル系AOR。艶りを帯びているものの、必要以上に尖ったところはなく、たとえばサム・スミスが好きな大衆の心も捉える中庸さがポイント。しかも本作は〝希望〟がコンセプトで、ヴォーカルが真ん中に据えられている。ラカイは手持ちマイクが似合うソウルフルな歌手ではないが、ここにはオーケストラとコーラス隊をバックに切々と歌い上げているバラードがある。楽器を手にしながら歌うニュー・ソウル系からの影響も伝わってくるが、ともあれ、彼はすっかりホール向きのアーティストに成長した。**渡辺亨**

Rock [UK]

Fat White Family

『フォーギブネス・イズ・ユアーズ』

ファット・ホワイト・ファミリー

ドミノ（ビート） BRC754
¥2400／4・26発売
(原題 "Forgiveness Is Yours")
●問合せ先＝03・5768・1277
(ビート)

80年前後のインディを背景に
現在のポスト・ロックを駆け抜ける

アルバム2曲目のタイトル『ジョン・レノン』にまずドキッとさせられる。ジョンが自身の霊に憑かれる短編小説風のものだというが、これまでもマーク・E・スミス（ザ・フォール）に通じる世界だと語られたり、文学的なこだわりが大きいリーダー格リアス・サウディらしいナンバーだ。南ロンドンで誕生し、13年にデビュー、本作はドミノ・レコードから19年に出した"Serf's Up"に続く通算4枚目。好きなグループがライバッハだったり、スロッビング・グリッスルのジャケットをパロったシングルを出したりと、かつてのインディ系へのリスペクトや愛が強いが、それをみごとに今日的な表現と混ぜ合わせて聴かせる。

80年前後のインディを背景に持ちつつ現在のポスト・ロック・フィールドを駆け抜けていったらこれほど面白いものを生み出せるのだと改めて訴えているようでもある。サイケやクラウトロック、オリジナル・インダストリアル、ポエトリー・リーディングなどの要素がふんだんに埋め込まれてはいるが、どれも現在の状況と向かい合っているから極めてスリリングだ。もっともっと聴かれてほしい。**大鷹俊一**

CamScannerでスキャン

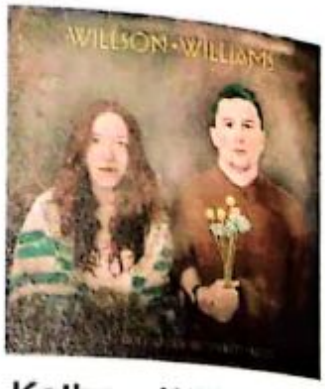
The Libertines
『東部遊歩道異常なし』
ザ・リバティーンズ
EMI(ユニバーサル) UICW10034
¥2600／4・5発売
(原題 "All Quiet On The Eastern Esplanade")

Rock [UK]

聴き応えがぐっと増していく
聴く者の胸を焦がす音楽

faster than the past." という言葉とともに刹那的な生き方を謳うロックンロールの「ラン・ラン・ラン」、チャイコフスキーの「白鳥の湖」の旋律をサンプリングしたゴシック・ウェスタン・バラードの「ナイト・オブ・ザ・ハンター」。アルバムのリリースに先駆け、MVを公開したこの2曲を聴き、ピンと来た人はアルバムも聴いたほうがいい。

デビュー当時の彼らが持っていた、ロック・シーンに風穴を開けるような勢いこそないものの、ここにはリバティーンズにしか奏でられない、聴く者の胸を焦がす音楽がある。ジャズ、フォーク、ラテン、レゲエなどの要素を1曲1曲に詰めることなくロックンロールとバラードの2本立てに落とし込んだ全12曲。後半、捲るように聴き応えがぐっと増していくのがいい。中でもジャジーでファンキーな「シヴァー」は、空間系のエフェクターでキラキラと鳴らしたギターの音色とともにアルバムのハイライトと言える。彼らに求めるものが大きすぎるせいか、全12曲を聴き終えたとき、正直、ちょっと物足りないとは思ったが、後味は決して悪くない。そして、その後味はやがて愛着に変わっていく。**山口智男**



Kathryn Williams & Withered Hand
『ウィルソン・ウィリアムス』
キャスリン・ウィリアムス&
ウィザード・ハンド
ワン・リトル・インディペンデント
(ビッグ・ナッシング) TPLP1894CDJ
¥3100／5・1発売
(原題 "Willson Williams")
●問合せ先＝ bignothing.net
(ビッグ・ナッシング)

Rock [UK]

多才多作な女性自作自演歌手が
男声と奏でる絶妙なハーモニー

英リヴァプール生まれのシンガー・ソングライター、キャスリン・ウィリアムス。99年のデビュー以来、自身の名義で多数のアルバムをリリースしているが、筆者がその陰影に富んだ声の深みに引き込まれたのは、ヴィブラフォン奏者アンソニー・カーと共作したジャズのカヴァー・アルバム『レゾネイター』だった。その後もベストセラー作家ローラ・バーネットとのコラボで架空の女性シンガーを演じた作品を出すなど、とにかく多才多作な人という印象だ。

そんな彼女が今回コラボ相手に選んだのは、ウィザード・ハンドとして知られるインディー・フォークのダン・ウィルソン。プロデュースはアイドルワイルドのロッド・ジョーンズが手掛け、スコットランドのミュージシャンが多数参加している。

ドラマティックで映画的なサウンドだった前作『ナイト・ドライヴス』に比べ、今作はシンプルでゆったりとしたフォーク調。内省的でリリカルなキャスリンの歌声にダンのややハイ・トーンの穏やかなヴォーカルが重なり、絶妙なハーモニーを醸し出す。まるで長年のパートナーのように滋味溢れる珠玉のコラボにじっくりと耳を傾けたい。**かこいゆみこ**

CamScannerでスキャン

Rock [Europe]

Mourn
"The Avoider"

Cielos Estrellados [Spain]
3・1発売

様々な音楽から刺激を得たことを窺わせる4年ぶりの5枚目

2010年代の半ばにハインズを旗頭として注目を浴びたスペインのインディ・ロック。大きなムーヴメントになることはなかったが、その後もこのバルセロナの3人組はコンスタントに活動を継続してきた。当時10代だったかれらが鮮烈な印象を刻んだデビュー作から10年。通算5枚目の今作は、古巣のキャプチャード・トラックスを離れて地元レーベルからのリリースになる。

かれらの下地をなすシャープでロウなガレージ・ロックやポスト・パンクのマナーは変わらない。今作でも終盤に置かれたエモ／ポップ・パンク・スクイル、PJハーヴェイ風のハスキーな〝At Midnight〟はその延長線上にある展開と言えるが、一方でシンセ・ポップを組み込んだエレクトロニックな〝The Avoider〟など新たなアプローチも聴くことができる。かたや、アコースティックなテイストの〝Teal Eyes〟も新鮮で、かれらにしては間隔の空いたこの4年の間に様々な音楽から刺激を得たことを窺わせる。トランペットを交えた楽曲ではアメリカン・フットボールも想起させる奥行きを得た演奏が耳を引き、節目を飾る作品にふさわしい充実した内容だ。**天井潤之介**

Rock [Europe]

Girl In Red
"I'm Doing It Again Baby!"

Columbia [US]
4・12発売

北欧らしいキャッチーなメロディと適度にダンサンブルなサウンド

ノルウェー出身のマリー・ウルヴェンによるソロ・プロジェクトの2作目。自らのセクシュアリティを明らかにした〝I Wanna Be Your Girlfriend〟で注目を集め、21年にはビリー・アイリッシュの兄フィニアスをプロデューサーに迎えてデビュー作を発表。その評価の高まりによってテイラー・スウィフトのツアーでオープニング・アクトに抜擢されるなど、同郷のオーロラに続いてワールドワイドに進出したアーティストとなった。日本でもリキッドルームでの初来日公演が即完、今年のフジロックへの出演も決定している。

その人気と魅力は北欧らしいキャッチーなメロディと、適度にダンサンブルなサウンドにあると言っていい。前作との間に出したザ・ナショナルのアーロン・デスナーを共同プロデューサーに迎えたシングルはメランコリックなタッチだったが、この新作はポジティヴ感のあるサウンドが占めていて、00年代後半に日本のインディ・ポップ好きの間で支持されていたマティアス・テレズをプロデューサーに迎えたことも、そのポップ感向上につながっている。コロンビアと契約したことで北米での人気にも火が着きそうだ。**油納将志**

CamScannerでスキャン

自分たちのイメージを引き受けつつ まとめられたカジュアルなポップ作

Justice
『ハイパードラマ』
ジャスティス
ヴァージン(ユニバーサル)
[2CD]
¥3500/4・10発売
(原題 "Hyperdrama")

ダフト・パンクが正式に終了した現在、00年代のフレンチ・エレクトロのイメージを継承する役割を実行し続けているのはジャスティスかもしれない。とはいえこの4作目も8年ぶり。その間、片割れのギャスパール・オジェのソロ作などもあったわけだが、ジャスティス流のディストーション・ノイズに満ちた大仰なエレクトロ・サウンドがシーンで長らく飽和状態だったため、前作『ウーマン』(16年)は意識的に初期の過剰さから離れたものだった。勢いが失速した印象は拭えなかったが、必然的な過程だったとも言える。

本作ではテーム・インパラのケヴィン・パーカーをヴォーカルに迎えたキャッチーなシングル「One Z=0ぴ ≠ ∃= Z=0ぴ」を筆頭に、メロディックなディスコ、エレクトロ、テクノが程よくミックスされている。荒々しいギターのようなわかりやすくロック的な要素は控えめだが、ジャスティスらしいノイジーなサウンドやプログレめいた大仰な展開も楽しめる。リヴァイヴァルの機運も影響しているのかもしれないが、自分たちのイメージをきちんと引き受けつつ、カジュアルなポップ作としてまとめられた一枚だ。

木津毅

ポルトガルの伝統音楽と電子音楽を融合する異才によるデビュー作

Ana Lua Caiano
『ヴォウ・フィカール・ネステ・クァドラード』
アナ・ルア・カイアーノ
ライス(オフィス・サンピーニャ)
[NR252]
¥3200/4・7発売
[NR5306(LP)]
¥5300/4・7発売
(原題 "Vou Ficar Neste Quadrado")
●問合せ先=048・814・0630
(オフィス・サンピーニャ)

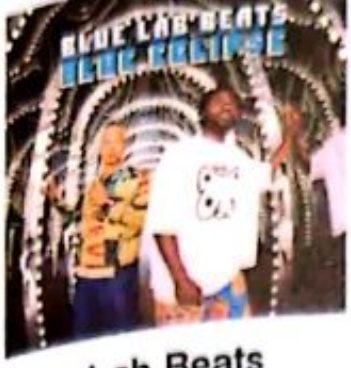
幼い時期からクラシック・ピアノを学ぶ一方でビョークやポーティスヘッドに傾倒し、コロナ禍でバンド活動ができなくなった間にひとり多重録音でポルトガルの伝統音楽と電子音楽を融合するスタイルに至った99年生まれの異才によるデビュー作。ビョークからの影響は聴けば誰の耳にも明白だろうが、ルーパーを駆使してのポリフォニックなコーラス、生演奏の打楽器や銃声っぽい音も多用してのアグレッシヴなビート、かなりアヴァンギャルドなタッチの鍵盤類やサンプリングなどを操りながら展開する音は、ライヴでもソロ・パフォーマンスで完全再現できる肉体性に裏打ちされており、よくあるビョーク風とは一線を画している。

全12曲で約28分と尺は短いが、一気に駆け抜ける濃縮された音の連続で物足りなさはナシ。かつて〝ラディカル・トラッド〟と形容された、ヨーロッパ周縁国発の尖ったトラッド勢にも通じる歌のメロディも良いが、アンゴラ生まれのクドゥロが根付いて独自発展してきたポルトガルらしいとも解釈できるビート・メイキングの独特さも特筆もの。打楽器に南米音楽でおなじみのボンボが使われている点も興味深い。

吉本秀純

CamScannerでスキャン

Rock [UK]



Blue Lab Beats

"Blue Eclipse"

Decca [France]
4・19発売

今様ジャズの表情の向こうから90年代のUKソウルが匂ってくる

90年代のUKソウル界で輝いたDJインフルエンスのメンバーのご子息によるユニット。それだけで飛び入れしたくなってしまうブルー・ラブ・ビーツなのだが、本作ではしっかり歩みを進めている様子が伝わってきてまた嬉しくなる。2年前のブルーノート・デビュー作『マザーランド・ジャーニー』より、グッと焦点の絞られたアルバムになっている。

曲ごとに違うゲストを迎える構成。前作を引き継いでいる。前作でイーゴ・イラ・メイにあたる本作の目玉は、ムーンチャイルドのアバー・ナヴラン。ジャズであり、ソウルであり、クラブ・サウンドであり、ワールド・ビートであり、みたいなヴァリエイションを披露しつつ、録音状態が良くなり音楽全体の説得力が増している。

女性シンガーの参加が多めなのだが、特に良いのはむしろ2曲目の硬質なヒップホップ。男性ラッパーの太い存在は主人公2名のトラックと相性が良く、随所で織り込まれるインストゥルメンタルも心地好さだけではない音楽の膨らみをもたらす。今様ジャズの表情の向こうから90年代のUKソウルが匂ってくるのが、やっぱり彼らの個性で。 **宮子和眞**

Electronic Music

Bolis Pupul

『レター・トゥ・ユー』

ボリス・ププル

ディーウィー／ビコーズ(カレンティート)
RTMCD1622
¥2400／3・20発売
(原題 "Letter To Yu")
●問合せ先＝03・5292・2416
(カレンティート)

エレクトロをさらに先祖帰りした中国系のベルギーのアーティスト

九龍と香港島を結ぶ汽船、スターフェリーのシートに座った濃紺色のスーツ姿の男がこちらを見つめている。彼の名はボリス・ププル。ベルギー人の父と中国人の母を持つベルギーのエレクトロ・アーティストだ。

ソロ・デビュー作『Letter To Yu』は亡き母の故郷、香港への旅をきっかけに生まれたコンセプト・アルバム。"Yu"は母の苗字＝余なのだ。母への思慕の強さはルーツに想いを馳せた「Completely Lait」や、母の生家に面した通り(馬頭圍道)を冠した「Ma Tau Wai Road」といった収録曲のタイトルからも伝わってくる。もっとも全体のトーンはアイデンティティ探求の旅というより異邦人の目を通した香港観光日記の趣が強いため、決して重苦しくはない。

アフリカ系女性シンガー、シャーロット・アディジェリーとのデュオ作でも、現在進行形のサウンドに90年代アシッド・ハウスの要素を織り込んでいたププルだが、本作ではエレクトロのルーツをさらに先祖帰り。中国音階を採用した曲では、まるでヴィンス・クラーク在籍時のデペッシュ・モードがYMOのパスティーシュに挑戦したかのようなサウンドが楽しめる。 **長谷川町蔵**

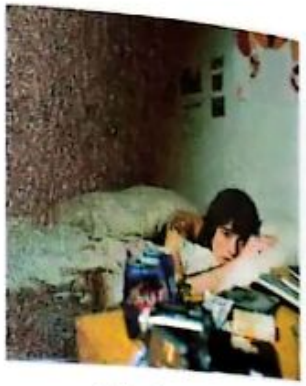
CamScannerでスキャン

Jeff Mills
『The Trip - Enter The Black Hole』
ジェフ・ミルズ

アクシス（ユーマ） UMA1147
¥2500／3・20発売
（原題 "The Trip - Enter The Black Hole"）
●問合せ先＝ www.umaa.net（ユーマ）

ヴィジュアル・チームと共作した舞台作品のサントラ・アルバム

4月1日に東京・新宿のゼロでもヴォーカルを担当。上記2曲にキョーでワールド・プレミア上はヤブーズの山口慎一、ヤマジカズされたジェフ・ミルズ総指揮によヒデも参加。またライオン・メリィ舞台作品「The Trip -Enter The の名前もクレジットされている。戸Black Hole-」のサウンドトラック川の存在感はさすがというほかなく、アルバム。本作のコンセプトを巧みに象徴するライヴ・オーディオ・ヴィジュア が、彼女を抜擢したジェフの慧眼にル作品と位置づけられた同公演はジも脱帽だ。SF（宇宙）とコンセプェフがヴィジュアル・チーム＝チュアル・アートはジェフ作品の背COSMIC LABと共同で制作。本サ景を貫く支柱のようなものだが、スウンドトラックにはジェフが書き下トイック&ミニマルな個性を折り込ろした新曲12曲を収録。戸川純が共みつつ、シンフォニックな展開やエ演した8曲目のMVではCOSMIC レクトロニック・ジャズの感興など、LABが生成したAI戸川純も登場し、彼のシグネチャーも贅沢に披瀝。シムードを盛り上げる。戸川は5曲目ョウケースのような作品だ。**廣川裕**



Claire Rousay
『センチメント』
クレア・ロウジー

スリル・ジョッキー（ヘッズ） HEADZ263
¥2200／4・19発売
（原題 "Sentiment"）
●問合せ先＝03・3770・5721（ヘッズ）

ポップ・ソングの側面が増したエクスペリメンタル・ミュージック

クレア・ロウジーは、現在のエクスペリメンタル・ミュージック・シーンにおける旗手と言っていい存在だ。フィールド・レコーディングやフリー・インプロヴィゼーションなどさまざまな手法を駆使しながら、いくつものジャンルをシームレスに接続していくサウンドは高く評価されている。作品ごとに新たな表情を見せてくれる引きだしの多さと、それを可能にする創造性と制作スキルは驚異的だ。コラボ作も含めるとかなり多作のアーティストだが、同じように聞こえる作品はひとつもないのだから。

そんなロウジーの最新作が『センチメント』だ。本作はこれまでよりもポップ・ソングとして楽しめる側面が増している。ギターとヴォーカルを軸にしたサウンドはロックのフォーマットをなぞり、たおやかな音像はアンビエントやドローンに加えフォークのスパイスも見いだせる。実験音楽のアーティストというイメージを塗りかえ、リスナー層の幅を広げる可能性で満ちあふれる曲が多い。トランス女性として生きるロウジーの視点が色濃い情動を歌った歌詞は、幽玄な詩情が滲んでいて聴きごたえがある。**近藤真弥**

CamScannerでスキャン

Electronic Music

Prefuse 73

"New Strategies For Modern Crime Vol.1"

Lex [UK]
3・22発売

生演奏主体に寄りつつも独自の作風になった6年ぶりの新作

プレフューズ73ことギレルモ・スコット・ヘレンによる6年ぶりの新作が完成。これまでも時期や名義によって電子音楽と生演奏を行き来してきたが、今回の作品はかなり生寄り。グラミー・ノミネートの経験があるサックス奏者／作曲家のレミー・ル・ブーフがクラリネットやフルートも含めた管楽器のアレンジと演奏を担当し、ドラムも生演奏主体でグッとジャズに接近しつつ、そこにスコットらしいアブストラクトなサンプリングやミュージック・コンクレート的な要素が加わることによって、独自の作風を作り上げている。

"現代における犯罪のための新しい戦略"というタイトル含め、かつてのフィルム・ノワールのサウンドトラックを現代に更新するかのような、重厚にしてフレッシュな快作だ。

01年のデビュー以降しばらくはワープから作品を発表していたが、前作『Music for Machines』に続いて本作もワープから独立したレックスからのリリース。レーベルの出世頭であるデンジャー・マウスの諸作と本作には確かなリンクが感じられるし、レックスが映画のプロダクションでもあることが、本作の作風にも影響を与えているかもしれない。

金子厚武

Electronic Music

Four Tet

"Three"

Text [UK]
3・15発売

アンビエントなトラック・メイクを深めている12作目

昨年はスクリレックス、フレッド・アゲインとのコラボも話題で、今年5月には自らフェスも開催。シーンの中心でありこれが12枚目となるヴェテランだが、キャリア初期から他ジャンルとの交わりも多いだけあって、今作では生ドラムやハープなどの音色を取り入れて元来のリリカルさを際立たせている——と共に驚いたのが、アンビエントなトラック・メイクを深めていることだ。ハウスのビートを敷きつつノイズが絡みながら次第にハープのリフレインに取って代わられていく4曲目などは、環境音を用いているわけではないのに、荒天が次第に穏やかに、雲の切間から日が差し込んでくるような情景さえ思い浮かぶ。

クラブ・ミュージックの本質をトラックがシームレスに変容する時間の流れ自体に見出し、アンビエントとの共通項として解釈した、とも言えそうだ。思えば、コロナ禍初期には癒しと開放が切望された結果か、ジャンル問わずアンビエント的な作品が増え、図ってか図らずか2020年末の彼の前作もアンビエント・ハウス。が、それを単に時代のムードとせず現在の糧としている点には誠実さも感じられる。

井草七海

CamScannerでスキャン

Jim
"Akomar"
Planet Mu [UK]
1・2月発売

公式から逸脱した音響アートなのに どこか人懐っこくポップな作品

衝撃的だった出世作『□□□』から7年、着実に進化し、領域を広げてきたジェイリンの新作。フル・アルバムとしてはそれ以来の作品だが、もはやジューク／フットワークの領域をはるかに超えた、ポスト・フットワーク、とも言うべき革新的な実験音響を展開している。ビョーク、フィリップ・グラス、クロノス・カルテットという多彩なゲストの参加が、その開かれた自由な冒険精神をよく表わしている。

複雑にプログラミングされたリズム・アレンジ、研ぎ澄まされた音色とテクスチャー、ジャズ、クラシック、テクノ／エレクトロニカ、現代音楽、ミニマル、アフリカ音楽、ブラス・バンドなどをミックスした音には、メロディやハーモニーの要素がほとんどなく、通常のポップ・ミュージックの公式からははるかに逸脱した音響アートなのに、どこか人懐っこくポップですらある。ビョーク参加曲のアブストラクトな前衛性、クロノス参加曲のミニマルなストリングスとビートの融合もさることながら、フィリップ・グラス参加曲のクラシカルなピアノの響きがドラマティックだ。期待に違わぬ大傑作。録音も抜群。

小野島大

Avalanche Kaito
『タリタクム～亡者よ眠れ』
アヴァランシュ・カイト
ライス［オフィス・サンビーニャ］
¥3200／4・14発売
¥5300／4・14発売
（原題 "Tarimakum"）
●問合せ先＝048・814・3［オフィス・サンビーニャ］

グリオ音楽の根底に宿る生命感や 凶暴性を西洋楽器によって増幅

西アフリカの内陸国ブルキナファソのグリオ家系に生まれたカイト・ウィンセを中心とするベルギー発の3人組＝アヴァランシュ・カイト。"グリオ・パンク・ノイズ"を標榜するサウンドは、パンクとエスニックをアヴァンギャルドな手法で解体／再構築したザ・ポップ・グループなどを彷彿させるが、ポスト・パンク勢がエスニック音楽をある種の"憧憬の対象"としてサウンドに取り込んでいたのに対し、このバンドは"本物"が奏でているのが特徴だ。

この2作目は、ライヴの臨場感をパッケージした前作に比べ、スタジオ作業によってより緻密にサウンドを作り込んだとのこと。また、グリオ伝統音楽を奏でたカイトの2020年のソロ作とも、その野性的なグルーヴや呪術性といった点で、思いのほか地続きである。そういう意味でも本作は、グリオ音楽にパンクやノイズという異物を混ぜ合わせて作為的に摩擦を生じさせようとするのではなく、あくまでグリオ音楽の根底に宿る生命感や凶暴性を西洋楽器によって増幅させている印象だ。そこには、異なる音楽を本質的に共鳴させることで生じる根源的なエネルギーが漲っている。

石川真男

CamScannerでスキャン

アメリカの歴史を告発しながら豊かな可能性は存在するという視点

Beyoncé
"Cowboy Carter"

Parkwood / Sony [US]
3・29発売

2022年のアルバム "Renaissance" からスタートした3部作の "第二幕" となる "Cowboy Carter" が無事にリリースされた。一部では前作のツアーを追ったドキュメンタリー映画 "Renaissance: A Film by Beyoncé" を "第二幕" と捉える向きもあったが、どうやらアルバムのみで構成された3部作のようだ。先行曲から、"アフリカン・アメリカンによるカントリー・ミュージックの探求" を中心に据えた作品になることが予想されていたが、まず一度アルバムを通して聴いてみれば、たしかにカントリーのテイストを感じる作品ではあるものの、リリースに際したビヨンセのコメントにあるように、これはカントリー・アルバムではなく、ビヨンセのアルバムであることがはっきりとわかるだろう。

ヒップホップ、サイケ、ロック、オペラ…。サウンドにおいて多彩であることは言うまでもなく、カントリーの新世代をバック・ヴォーカルに招いたビートルズ "Blackbird" の比較的原曲に忠実なカヴァー、ビー チ・ボーイズを引用しナンシー・シナトラ "These Boots Are Made For Walkin'" をサンプリングした "Ya Ya" など、本作はダンス・ミュージック・シーンでそれを成し遂げた "Renaissance" と同様に文脈が複雑にも交錯している。それらは時おり鋭利にアメリカという国が持つ白人優位の歴史を告発しながら、ビヨンセ自身もその国で生きてきた事実をも照らす。つまり、ここで提示されているのは黒人／白人の安易な二項対立に止まらない。もちろん陰惨な歴史を書き換えるわけでもない。そういった歴史の中であっても、人々が触れ合い、混じり合い生まれる豊かな可能性は存在したのではないか、という視点ではないだろうか。

ちなみにリリース日にタワーレコード渋谷店で緊急開催された（世界的に見ても珍しい）ビヨンセのサイン会に駆けつけたファンたちの感動の声も、文化が横断し、繋がりを生むことの一つの証左と呼べるはずだ。

言い換えるなら、ポップ・ミュージックの持つ魅力的な跳躍力である。そして、それを駆動させているのはビヨンセの圧倒的なヴォーカルに他ならない。先日刊行された、川口真紀＋つやちゃん監修による『オルタナティヴR&Bディスクガイド』に掲載されたインタヴュー記事の中で20年デビューの次世代シンガーSiaが指摘するように、ヒップホップ人気の高まりやオートチューンの一般化を背景にしたミニマルなヴォーカルが広範囲で受け入れられている昨今において、それとは逆行しているとも言えるのがビヨンセのワイド・レンジかつパワフルな歌声だろう。その抑揚と美しさ、ダイナミックさがオーガニック寄りのアレンジの上で花開く瞬間が収められているからこそ、張り巡らされた文脈は意味を持ってリスナーに届くのである。

本人がほのめかしていたように、本作のきっかけには16年のザ・チックス（当時の名義はディクシー・チックス）とのパフォーマンスに向けられた保守層からの批判があったのかもしれない。しかし現時点で "Cowboy Carter" は、そんな批判を覆す以上の成果を収めているかのように思う。

高久大輝

CamScannerでスキャン

Gloria
"Turn Motown To Her Lover"

中南米ポップのサウンドの幅広さと濃厚さを体感できるアルバム

[illegible] 多谷川町蔵

Tyla
"Tyla"

アマピアノの入門書でありつつ万人受けする作品でもある初作

[illegible] 川崎真紀

CamScannerでスキャン

ScHoolboy Q

"Blue Lips"

Top Dawg / Interscope [US]
3・1発売

深みを増した完成度の高い楽曲で構成された約5年ぶりの復帰作

TDEのラッパー、スクールボーイ・Qによる約5年ぶりの復帰作。キャリア15年の彼がこの美しい傑作を生むには、ゴルフで人生を見つめ直し、再スタートを切るための充分な時間が必要だった。本作でこれまでのキャリアを総括し、富や名声、薬に狂わされたギャングスタ、それを悔い改めた成熟したラッパー、父親といった多面的なペルソナをシームレスに揺れ動き、痛み、苦悩、安らぎといった複雑な感情を描く。狂気じみた"pop"、ラップに対する新たな想いを綴った"Back 2 Love"などのハードなバンガー、彼の新しいアンセムとなるであろう"Thank God 4 Me"など、これまで以上に深みを増した完成度の高い楽曲で構成され、全体的に充実した内容だ。

なかでも、深遠なラップで故マック・ミラーに捧げた"Blessings"は特別な1曲。ワッツ・プロフェッツをサンプリングした楽曲は、南口サンゼルスにおける詩人とアートの系譜を彷彿させる。プロダクションも、ヴィンテージ感溢れるサウンドスケープからスリリングで凶暴なビートまで、安定のTDE印で素晴らしいクオリティだ。今年の年間ベスト入り間違いなし。

上神彰子

Tierra Whack

"World Wide Whack"

Interscope [US]
3・15発売

マルチメディア的創造性を持つラッパーの初スタジオ・アルバム

米フィラデルフィア出身のアーティスト、ティエラ・ワックが18年にリリースしたデビュー・ミックステープ『ワック・ワールド』は、1分以下のTikTokシングルが珍しくない現在を予見していたと感じられる作品だ。各曲の長さがジャスト1分という内容はもちろん、収録された全15曲をインスタグラムにアップし、それぞれにショート・ムーヴィーをつけた手法も、SNSを駆使したマルチメディア的表現の雛形を作ったと評せる。それを可能にした創造性は広く支持され、彼女は一躍時の人となった。

そんなティエラ・ワックにとって初のスタジオ・アルバムが『ワールド・ワイド・ワック』だ。これまでの作品でもうかがえたシンプルな音作りに対するこだわりは健在で、ファンクやバラードなどさまざまな様式を軽やかに乗りこなしている。自殺やうつ病に言及し、感情の暗い面を掘りさげる歌詞は、メンタル・ヘルスの議論が盛んな現在と共振するという意味で同時代的だ。歌詞の言葉も音と同様に簡素で、等身大の言語感覚が際立っている。こうした言葉選びのセンスは、ピンクパンサレスとの類似性を見いだせる。**近藤真弥**

CamScannerでスキャン

Cassie Kinoshi's Seed

『グラティチュード』

キャシー・キノシズ・シード

リングス(ディスクユニオン) 初CD

¥2800/4・24発売

(原題 "Gratitude")

●問合せ先 03-3511-7640

(ディスクユニオン)

スピリチュアルなジャズを聴かせる ロンドン・ジャズ界の重要人物

バンドキャンプのサイトの本作のページには、"フォーマー・メンバー"と書かれているから、キャシー・キノシは英ブラウンズウッドに所属しているココロコを脱退したのだろう。もっとも、彼女は自身のプロジェクトであるシードを、当初からココロコと並行して動かしていた。また、エズラ・コレクティヴのデビュー作やヌバイア・ガルシアのメジャー・デビュー作への参加歴もあり、現在のロンドンのジャズ界における重要人物のひとりという立ち位置に変化はなさそうに見える。というあたりを強く印象づけるのが、シードのこの5年ぶりのリリースというわけだ。

ココロコはアフロビートにも傾倒したバンドだが、シードでのキャシーは、よりスピリチュアルなジャズを聴かせる。自身のアルト・サックスをメインにしつつ、弦楽四重奏をバックに加え、ターンテーブリストをメンバーにもってくる。本作は18人編成によるシームレスなライヴ録音が6曲と10人編成によるスタジオ録音1曲で構成されていて、サイズはコンパクトだがジャズ・オーケストラのニュアンスも滲ませる十分な聴き応え。この先のリーダーとしての躍進が楽しみになる。 **宮子和眞**

Josh Johnson

『アンユージュアル・オブジェクト』

ジョシュ・ジョンソン

リングス(ディスクユニオン) 初CD

¥2800/4・24発売

(原題 "Unusual Object")

注目が集まるサックス奏者による アンビエント的な〝そこにある音〟

米シカゴ出身、LAを拠点に活動するサックス奏者。配信とアナログのみでリリースされていたファースト・アルバム"Freedom Exercise"(20年)が日本のみでCD化されたのが1年前。その後、ミシェル・ンデゲオチェロのブルーノート移籍作"The Omnichord Real Book"(23年)をプロデュースし、これがグラミーの"ベスト・オルタナティヴ・ジャズ・アルバム"を受賞。ジョシュ・ジョンソンという名前に注目が集まる中、4年ぶりのセカンド・アルバムがリリースされる。

今作はバンド・スタイルから離れ、自身のサックスによる多重録音と思われるオーケストレーションと、電子音によるシンプルなバッキングの上にリードを乗せていくという、非常に構築的な作り。泡ができては消えていくように、ある意味アンビエント的な"そこにある音"を淡々と生み出していく。アドリブ的なソロのフレーズもあるにはあるが、何かを表現するというよりも、音の流れに変化をつけるためのものといった感じか。そのサックスの響きにはオーネット・コールマンを思わせるものがあるが、鳴らす方向性がまるで違う。開眼したか。 **池上尚志**

CamScannerでスキャン

宇宙的なスケール感をもった表現を今一度人間の内奥に呼び戻す試み

Kamasi Washington

『フィアレス・ムーヴメント』

カマシ・ワシントン

ーンド(ビート) YQ350CDJP(ZUHQCO)
¥3200/5・3発売
原題 "Fearless Movement")
●問合せ先=03・5768・1277
ビート)

LAジャズ・シーンの台風の目として輝かしい活躍を見せるテナー・サックス奏者、作曲家のカマシ・ワシントンによる、新作『ヘヴン・アンド・アース』(以来約5年ぶりとなるオリジナル・アルバム。長大なヴォリュームの過去作に比較すると、ややコンパクトにまとまっているように感じるが、それでもCD2枚組トータル90分近い内容で、溢れ出るエネルギーにまたもや圧倒される。今作の特徴としてまず挙げられるのが、参加陣。フィーチャリング・アーティストの多彩さだろう。ブランドン・コールマン(kbd)、キャメロン・グレイヴス(p)、ロナルド・ブルーナー・ジュニア(ds)、トニー・オースティン(ds)、ライアン・ポーター(fb)、サンダーキャット(b)、テラス・マーティン(as)、パトリス・クイン(vo)といったお馴染みの面々に加え、アンドレ3000、ジョージ・クリントン、BJ・ザ・シカゴ・キッド、D・スモーク、タジ&ラス・オースティンらが参加し、各トラックに個性を刻んでいる。

サウンド的には、スピリチュアル・ジャズを基軸に、オルタナティヴなR&Bやビート・ミュージック、アフリカ音楽やラテン・ミュージックをミクスチャーする旧来の方向性をさらに進化させた内容となっているが、各フィーチャリング陣の個性に寄り添うように、これまでにも増して様々な要素が盛り込まれている。特に興味を惹かれたのが、ジョージ・クリントンとDスモークを迎えた「ゲット・リット」と、アンドレ3000が参加した「ドリーム・ステイト」だ。前者は、一聴して分かる通り如実にPファンク調で、カマシのリスペクトぶりが現れている。後者では、アンドレがソロ近作でも聴かせたフルートを持参し、ニュー・エイジ色の濃いジャム・セッションを展開している。他トラックも、全体に楽曲ごとの音楽的狙いがシャープになっている印象で、カマシならではのポップネスがより鮮やかに花開いているように感じる。

本人によると、本作のテーマは"ダンス・とのこと。といっても、狭義のダンス・ミュージックを企図したものではないようで、実際、そうしたビートが明示的に用いられる曲はほとんどない。むしろ彼がここで表現しようとしているのは、より普遍的な意味におけるダンス＝身体の律動と、それによる精神の高揚という、人間の根源的な営みに関わるものであるようだ。これまで推し進めてきた宇宙的なスケール感をもった表現を、今一度人間という存在の内奥、およびその生が営まれる"今、ここ"へと呼び戻す。

様々なレベルでヒューマニティの危機が喧伝されるこの間の世界にあって、そのようなある種の内省ともいうべき志向を実践するに至ったこと自体が、ジャズを含む現代のポップ・ミュージックがいかに世界へと応答し、いかに新たな地平を切り開こうとしているのかを伝える、優れたドキュメントになっているとも感じる。幼い愛娘と音楽の邂逅を元に作られたという曲「アーシャ・ザ・ファースト」の、穏やかながらパッションの溢れる演奏を聴くと、そうした想いがさらに大きくふくらんでいくのだ。

柴崎祐二

CamScannerでスキャン

強いメッセージが秘められた全編を通して広がる静謐な音世界

Shabaka
『美の恵み』
インパルス！[ユニバーサル]
¥2600/4
(原題 "Perceive Its Beauty, Acknowledge Its Grace")

英国ジャズ・シーンの最重要人物シャバカ・ハッチングスは、本作で本格的に新章の扉を開けたと言えるだろう。シャバカ・アンド・ジ・アンセスターズこそ昨年末に来日公演を行なっているが、これまで参画してきたサンズ・オブ・ケメットとコメット・イズ・カミングはそれぞれ2022年、23年に解散。22年にはシャバカ名義でのソロEP "Sons Of Kemet"をリリースし、いよいよ初のソロ・アルバム『美の恵み』を世に問うこととなった。

ソロEPと本作で特徴的なのは、何と言ってもシャバカがサックスを吹いていないことだ。今の彼にとっての"メイン楽器"というクラリネットを筆頭にフルートや尺八などを演奏。そのサウンドはスピリチュアル・ジャズをさらに純化したもので、彼がより深く内側へと向かっていることを感じさせる。内なる世界を掘り下げることは、外界と対峙する自己を発見すること。そこには不穏な世界情勢への憂慮から自身の内面に見出す安寧まで様々な心模様が投影されているかのよう。全編を通して広がる静謐な音世界には、むしろこれまでにない強いメッセージが秘められているかもしれない。**石川真男**

リスナーに聴き流すことを許さないピアニストによるソロ作品

Fred Hersch
『サイレント、リスニング』
フレッド・ハーシュ
ECM[ユニバーサル] UCE-[illegible]
(5/M-CD)
¥2600/4
(原題 "Silent, Listening")

昨年はエスペランサ・スポルディングとのデュオでライヴ盤をリリースするなど、様々な形態の活動の中で多様な表情の演奏を聴かせてきた、"詩人"と評されるピアニスト。

最新作は3年ぶりとなるソロ・ピアノ作品で、ECMでのソロ名義のリリース第1弾。21年のソロ・ピアノ作品"Songs From Home"は、コロナ禍で隔離を必要とする中で、あえて明るいトーンに仕上げられていた印象があったが、今作はそれとは対照的。重苦しいまでの静謐さは、22年のECMでの1作目、エンリコ・ラヴァとの"The Song Is You"に近い世界観だが、今回はソロである分、よりピアノと対話しているかのようなシリアスな響きがある。エレガントでロマンティックだが、決してナルシシズムに溺れないストイックなプレイは、リスナーに聴き流すことを許さない。スイス・ルガーノ・スタジオの部屋の残響音も実にクリアに録音されており、目の前で弾いているかのようにリアルに響いてくる。収録された11曲中4曲がスタンダード、残りの7曲がオリジナルで、作曲家として久々にまとまった数のオリジナルを発表する場にもなった。**池上尚志**

CamScannerでスキャン

Jasmin Godoy

『ショウ・ミー・ザ・ウェイ』

ジャスミン・ゴドイ

ジャズ（ディスクユニオン） THCD630

¥2200／3・4発売

（原題 "Show Me the Way"）

●問合せ先＝03・3511・9944

（ディスクユニオン）

ミナス勢の協力を得て作り上げたオランダの自作自演歌手の新作

オランダのロッテルダムに生まれ、リオの街から音楽とポルトガル語で育ち始め、17歳でヒットの音楽学校を卒業したブラジル人シンガー・ソングライター、こんなジャスミン・ゴドイのファースト・アルバム。彼女はこのアルバムを作るにあたって、ブラジルに移住、レオナルド・マルクスのプロデュースと録音のもと、ウアクチからムーンスの一員のメンバーまで、新旧のミナス勢の協力を得て本作を作り上げた。

ジャスミンは、もともとミナスのクルビ・ダ・エスキーナ、中でもロー・ボルジェスが好きだったという。この点こそが面白味だ。

一方で、ヴォーカルの面ではメイ・バーム（ハイエイタス・カイヨーテ）やベッカ・スティーヴンスからインスピレーションを得ている。実際、歌い回しは前記の二人を彷彿させるし、弦楽器と擦弦楽器の使用、多重録音コーラス、非西洋的な音階の導入は、ベッカの音楽志向と重なる。ジャスミンはティグラン・ハマシアンも聞いてきたという。また、ギターを弾きながら歌う彼女は、ジャヴァンのリズミカルな演奏にも影響を受けてきた。つまり音楽的な引き出しは、"ミナス"に限定されておらず、

Natalie Cressman & Ian Faquini

『ギンガ』

ナタリー・クレスマン&イアン・ファキーニ

コアポート RPOZ10093

¥2400／4・10発売

（原題 "Guinga"）

●問合せ先＝042・328・2160

（コアポート）

トロンボーン奏者とギタリストによるブラジル人音楽家ギンガの作品集

ニューヨークを拠点にジャンル横断の活躍を見せるトロンボーン奏者、ナタリー・クレスマンはシンガーとしても魅力的で、2017年にギタリストのマイク・ボノとのデュオで"Natalie & Mike"という秀作を出している。トロンボーンを吹かず、歌に専念したそのアルバムは幻惑的な曲揃いで、ブラジル音楽の強い影響を感じさせるものだった。

その後、クレスマンはブラジル人ギタリスト、イアン・ファキーニと出会い、デュオで活動。本作は彼らの3作目で、タイトル通り、ファキーニの師匠でもあるギンガの作品集だ。しかも、冒頭からギンガその人が客演し、ギター&トロンボーンのアンサンブルの中で歌い出す。

謎めいた和声感覚を持つギンガの曲をどれだけ自分達に引きつけることができるか、そういう挑戦作なのだろう。二つの楽器が1音1音を大事に、ある意味、平易に曲を演奏する。それによって、ギンガ作品の特異なメロディー曲線が浮かび上がるようなトラックが多い。

ギンガの客演は5曲。中でも、10曲目のクレスマンとのデュエットは絶品だが、彼女にはもう少し歌って欲しかった。

高橋健太郎

CamScannerでスキャン

熱気とエネルギーが渦巻く“砂漠のサイケデリック・ロック”

Mdou Moctar
『フュネラル・フォー・ジャスティス』

エムドゥ・モクター（名前のギタリストの名前であり、4人組のグループ名でもある）の前作『アフリク・ヴィクティム』（21年）はぼくもすっかりドハマリしたクチだが、待望の新作『フュネラル・フォー・ジャスティス』はさらに熱気とエネルギーが渦巻く進化型“砂漠のサイケデリック・ロック”の頂点だ。同じトゥアレグ族で、砂漠のブルース”を体現し、日本はおろか世界中でセンセーションを巻き起こしたティナリウェンが想起されるのは自然なことだろうが、エムドゥ・モクターの場合、そのサウンドはよりラウドでハード。歌詞は手元にないが、アルバム・クイトルから推察されるように、政治的な抑制に徹底的に抗うメッセージ性を打ち出した内容が多くを占めているようだ。

リヴァーブを効かせたストラトキャスターから鳴らされるサウンドはハードだが、同時に終始反復性に依拠し、トランス感を誘発する。アラブ歌謡的なニュアンスまで包含するその感覚はやはりティナリウェンと共通するが、エムドゥ・モクターのサイケもまた伝統と分断することなく、フュージョンすることで無二の独自性を確立している。　**廣川裕**

今のセネガルのリアリティを強く感じさせるセカンド・ソロ

Faada Freddy
『ゴールデン・ケインズ』

セネガルのヒップホップ・グループであるグーラ・Jのリーダーであるファーダ・フレディ。15年の彼の初のソロ・アルバム『ゴスペル・ジャーニー』に続くセカンド・ソロ・アルバムが届けられた。

ヴォイス、ハンドクラップ、ボディ・パーカッションによってすべてが構築されているアルバムにもかかわらず、タイトル曲である「Gospel Gospel」には重厚なロック・ナンバーのような雰囲気がある。肉体から発する音だけで重層的なサウンドが作られていることの表れでもある。グーラ・Jは伝統色のあるヒップホップを聴かせるが、「The One For Me」の人力ビートはヒップホップ的でもある。23年の先行EPのタイトル・ナンバー「Fables Wii Yii」はまるでR&Bで、シンガーとしてのファーダの表現の多彩さ、技術の高さに魅了される。

「Africa Renegade」ではファーダはコブシもきかせ、さらにアンジェリーク・キジョーも参加して、セネガル、そしてアフリカを鮮烈に描きだす。伝統と現代を身体ひとつで往来するファーダの音楽的なしなやかさは、今のセネガルのリアリティを強く感じさせるのだ。　**宗像明将**

CamScannerでスキャン

Kim Oki
「Love Japan Edition」

バイヨン BOMA1027 (2LP)
¥4000／5・1発売
●問合せ先＝bayon-p.com
(バイヨン)

サウンドのつくりこみもぬかりない韓国のサックス奏者のベスト盤

[illegible]ウォーカルも魅力的な、なんとも[illegible]という、韓国メサックス奏者のアルバム。これまで発表された[illegible]の作品の中から[illegible]ものを[illegible]ミックスしたもの。メインとなるのはクロスオーバーであるサックスだが、サウンドのつくりこみもぬかりない。特にトラック・アンビエントやインディー・クラシック、ソウルなどの要素をまぶしたゆったりとしたグルーヴのトラックに耳を奪われる。空間系エフェクトの多用もソフトに貢献している印象だ。優しく耳を愛撫してくれるような[illegible]なウォーカルも魅力的な、なんとも[illegible]という、韓国の

ラ・バンドの音楽を基本に
自分のギターを弾きまくる

最新演奏とのオリジナル曲も含む
ギタリストのソロ・アルバム

CamScannerでスキャン

町あかり

『地球出発にしていいよ
～ディスコあかり
DISCO Machi Akari

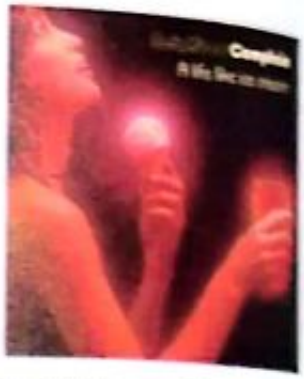
ポットワックス（ウルトラ・ヴァイヤ
HOT
¥1800／4・
●問合せ先＝03・3496・
（ウルトラ・ヴァイヤ

ディスコというテーマを得て自由闊達に異才ぶりを炸裂

今年1年で季節ごとにEPを4枚していくというシリーズ企画の第弾で、ディスコをテーマにした4を収録。だから全曲ダンサブルなウンドで統一しているのだが、彼女だけにヒネリが利きまくったアイアばかり。1曲目からダンス・ビートでありつつ自身の声やコーラスを空間にちりばめて相当にエグい音像を作っているし、"常磐ディスコ港町"はディスコと三味線をくっつけて"ご当地演歌で和ディスコ"というべき邪天烈曲だ。さらに"楽園流しの刑"は"踊り合い寄われた人生"の地獄っぷりを描くというバラドックス的歌詞が絶大なインパクト。全曲で彼女ならではのブッ飛んだワード・センスも冴えまくっている。

前作のアルバム『超天然色痛快音楽』がなんでもアリの集大成的傑作だっただけに、今回はそこから次の段階に進んだ企画として捉えられるが、ディスコというテーマを得て、いっそう自由闊達にのびのびと異才ぶりを炸裂させていて、もはや圧巻というしかない。なによりもこんなラジカルなことをやっていながら、あっけらかんとした歌声でサラッと聴かせているのが一番すごいのかも。痛快すぎる好企画だ。

小山守



Neighbors Complain

『A life like ice cream

ヴィヴィ
VSC
¥3000／4・
VSLP
¥4000／4・
●問合せ先＝03・3496・
（ヴィヴィ

最先端に走り過ぎずレイドバックしたバランスの良さ

拠点は大阪だが、すっかり全国区になったといっていいだろう。佐藤竹善らとも共演してきた4人組R&Bバンドの6枚目のオリジナル・フル・アルバム。関西のソウル・グループというとどことなく泥臭いイメージを持つかもしれないが、彼らはいたって洗練されたシティ感覚のポップスを披露してくれる。嫌みなく聴き心地の好い声質を持つOtoの歌声に、誰しも魅了されるだろう。

しっとりしたジャジー・ソウルで幕を開けたかと思うと、メロウなナンバーにつないでいく前半は非常に大人っぽく、以前の作品よりも余裕を感じさせる。全体的にクラシック・ソウルの影響が濃厚だが、アウトプットするメロディはキャッチーで親しみやすい。生音主体のグルーヴィーな作品が並ぶ中、打ち込みサウンドの"Departure"やヴォコーダーを使った"Life"がふいに差し込まれるのもユニークだ。ネオ・ソウルなど現行のR&Bシーンを横目でにらみつつも、最先端に走り過ぎず適度にレイドバックしたバランスの良さも見事。オハイオ・プレイヤーズへのオマージュを表わしたアートワークも楽しく、彼らのブラック・ミュージック愛が感じられる。

栗本斉

CamScannerでスキャン

アルバム・レヴュー

イラストレイション＝norahi

●各アルバムを10点満点で評価しています。それぞれの評文についた□の数字が点数です。
●評者には主に試聴用のCD-R等で評を依頼しています。
●Ⓟマークのついているものは今月の"アルバム・ピックアップ"（145ページから）で取り上げています。
●アルバム中DVDのデータ部分にある略号および各メーカーへの問合せ先については199ページをご参照ください。

ロック

アメリカ／カナダ　渡辺亨

Ⓟ**St.Vincent "All Born Screaming"**
Total Pleasure / Virgin

初の完全セルフ・プロデュース。デイヴ・グロールやマーク・ジュリアナなど多彩な面々が貢献し、エレクトロニクスも使用。が、何度か繰り返して聴くうちに、セイント・ヴィンセントという一人の表現者のリアルな感情がじわじわ伝わってくる。 9

Ⓟ**ジェシカ・プラット『ピア・イン・ザ・ピッチ』** シティ・スラング／ゆ A MIP0352

サンフランシスコ出身のシンガー・ソングライターの新作。今回は60年代のサンシャイン・ポップやガールズ・ポップ風の曲が並んでいて、ブライアン・ウィルソンに通じる曲もある。ヴォーカルは相変わらず奇妙にしてキュート、そして各曲の作風はほの暗いが、これまでの路線とひと味違う。 8

Ⓟ**Hannah Frances "Keeper Of The Shepherd"** Ramseur

シカゴ出身のシンガー・ソングライターの新作。ギターを弾きながら生々しいサウンドに乗せて歌うスタイルは、ごく普通。ただし、チェロやペダル・スチールが絶妙なアクセントになっているし、ブラスも効いている。 8

Ⓟ**Leyla McCalla "Sun Without The Heat"** Anti-

ハイチ人の血を引くNY出身のシンガー・ソングライターでチェロ奏者の新作。前作同様、民主的な思想家や黒人フェミストの作家などからインスピレーションを得ているとのことだが、音楽的にはナイジェリアのフォークやアフロビートの要素が取り入れられていて、より陽性で軽やか。もっとも、気怠さが魅力的なバラードもある。 8

Ⓟ**ヴァンパイア・ウィークエンド『オンリー・ゴッド・ワズ・アバヴ・アス』** ソニー SICP31710

5年ぶりの新作。たとえギター1本やピアノ1台だけで歌われたとしても、ヴォーカルとメロディの魅力が伝わってくるような曲が多く、実際、各曲はメロディアス。ただし、ストリングスをはじめ、アレンジは凝っている。 9

Ⓟ**アイアン&ワイン『ライト・ヴァース』** サブ・ポップ／ビクター VICP65071

サム・ビームの新作。セバスチャン・スタインバーグやダヴィード・ガーザなどに加えて、24人編成のオーケストラが参加。全体的には、弦楽器がとても効果的。また、フィオナ・アップルとのデュエットが1曲あるが、サム

CamScannerでスキャン

◆ブレインストーリー『サウンズ・グッド』バリオ・ゴールド／mc BG552 [7]

◆メッツ『アップ・オン・グラヴィティ・ヒル』サブ・ポップ／bg OTCD 6873 [8]

◆ザ・ブラック・クロウズ『ハピネス・バスターズ』シルヴァー・アロウ／bg SAR66CDJ [7]

◆オールド97『アメリカン・プリミティヴ』ATO／bg ATO0667CDJ [7]

◆エリック・ビブ『ライブ・アット・スカラ・シアター、ストックホルム』BSMF BSMF2864 [7]

◆メイ・シモネス『カブトムシ』ミュージック・キャンプ MCBI004 [7]

◆サンディ・サリスベリー『メロウ・アズ・サンシャイン』BSMF BSMF7719 [7]

◆アン・サヴォイ『アナザー・ハート』ライス／05 FLR3156 [6]

◆メルヴィンズ『タランチュラ・ハート』イビキャック／bg IPC276CDJ [7]

Moor Mother "The Great Bailout"

フィラデルフィアを拠点とする詩人でMCの新作。今回もエクスペリメンタルなリズム・トラックに本人の朗読やゲストのヴォーカルが乗ったものが主体。スピリチュアル・ジャズの要素は比較的抑えめだが、よりフリーキーなジャズ的色合いを増している。 [7]

Matt Champion "Mike's Laundry"

ミニストリーのロイ・マヨルガ等をゲストに迎えた新作。ノイジーなギターと重いビートを軸にしたサウンドは健在で、キャッチーなリフもときおり飛び出す。ただ、曲によってはダミ声になるキング・バズ・オズボーンのヴォーカルは、個人的に苦手だ。 [6]

レット・ミラー率いるテキサス出身のバンドの新作。元Drivin' N' Cryeのピーター・バックが参加。オルタナ・カントリーやネオ・ロカビリー風味のギター・ロックが主体で、各曲の作風にはレット・ミラーらしさが感じられる。 [7]

日系米国人シンガー・ソングライターの5曲入りEP。彼女自身はジャジーなギターを弾きつつ、ヴィオラやヴァイオリンが入った編成で、日本語と英語で囁くように、または多少ぶっきらぼうに歌っている。作曲の面では主にジャズから学んでいるようだが、未成熟な部分に魅力を感じる。 [7]

『ピギン』で知られるザ・ミレニアムのメンバーの一人が、66～68年にオ

CamScannerでスキャン

ープン・リールのテープに録音していたデモ音源集。音作りは簡素だが、甘いヴォーカル&コーラス入りで、メロディも冴えている。 7

●ロザリー『バイト・ダウン』 マージ／bg MRG8224JCD

ノース・カロライナ州を拠点とするロザリー・ミドルマンの通算4作目。妖気を振り落としたスティーヴィー・ニックスのような歌と、ルーツ・ロック志向のバンド・サウンドの組み合わせ。ただし、両者の関係はニール・ヤングとクレイジー・ホースのように多少ルースで、なおかつディストーションの効いたギターが耳を引きつける。 7

●ローレン・クラマー『グラヴメイカー』 シークレットリー・カナディアン／bg SC4844JCD

LAを拠点に活動しているシンガー・ソングライターのデビュー作。ファーザー・ジョン・ミスティほど味わいが深くはないが、基本的にはほの暗く、落ち着いた雰囲気のオーケストラル・ポップ。もしかすると、トーク・トークが好きなのかも、と思わせる曲もある。 7

●ジョン・ブライマー&ボブ・コリトー『クローリング・キングスネーク』 BSMF BSMF2861

ギタリストとブルース・ハープ奏者によるコンビの新作。もう一人のギタリストやピアニスト等を加えた編成で、ブルースを歌い、演奏している。ブルースの形式に基づいた音楽なので、それ以上のものは期待しない方がいいが、歌と演奏自体は悪くない。 6

●ケイティ・ヘンリー『ゲット・ゴーイン』 同 BSMF2862

ニュージャージー州出身の歌手の新作。ジャニス・ジョプリンの流れを汲んでいるが、ギターやピアノも演奏。ただし、かなり類型的なブルース・ロックだ。 6

●リー・アーロン『タトゥー・ミー』 ワード GOCS91458

80年代から活動してきたカナダ人歌手の初カヴァー集。レッド・ツェッペリンやハート、そしてニーナ・シモンの曲も歌っている。ただし、予想外のアレンジは見当たらず、大半はハード・ロックの範疇に留まっている。 5

●エンディディ・オー（オヌクール）『シンプル・ソングス・フォー・コンプリケイテッド・タイムス』 BSMF BSMF2863

カナダはオタワ生まれのシンガー・ソングライターの新作。かつて、同じくカナダ出身のアリソン・ラッセル等と一緒にサンコファとして活動していただけに、ベースはブルースやR&Bなど。スティーヴ・ドーソンのスライド・ギターを含めて、なかなかブルージーかつソウルフルだ。 7

●コリドー『ミミ』 サブ・ポップ／bg SP1587CDJ

モントリオールを拠点とする4人組の通算4作目。バンド・サウンド主体だが、エレクトロニクスが随所に使用されている。歌と演奏は淡々としていて、その分、ときおり聞こえてくるノイジーな音が引き立っている。 7

●ジェーン・ゲッター・ブレモニション『ディヴィジョン・ワールド』 マーキー MAR244010

ギタリストでシンガーのジェーン・ゲッターが、パートナーのアダム・ホルツマン等と結成したバンドの新作。プログレッシヴ・ロック系だが、演奏は別にインストの比重が高いわけではない。ただし、全体的に平板。 6

●キャンド・ヒート『ファイナル・ヴァイナル』 BSMF BSMF2860

60年代末から在籍し続けているメンバーはドラマーのみだが、ともあれ、古参バンドの新作。ジミー・ヴィヴィーノに加えて、ゲストのジョー・ボナマッサ、デイヴ・アルヴィンといったギタリストが参加。曲名に「ブギ」が付く2曲をはじめ、かつての音楽的路線を踏襲。演奏はもっさりしているが、これもひとつの持ち味だ。 7

●ニック・グレイヴナイツ『ローグ・ブルース』 同 BSMF2859

60年代からザ・ポール・バターフィールド・ブルース・バンド等で活動してきたベテランの新作。歌は滋味にあふれているわけではないが、歌詞の面でもシカゴに由来するブルージーな曲、管楽器を含む演奏が味わえる。 6

●リック・ヴィト『キャデラック・マン』 同 BSMF2857

70年代からジョン・メイオールやフリートウッド・マック等のアルバムで活躍してきた人物の通算11作目。主にブルース調のオリジナル曲を、仲間たちと一緒に演奏。十八番のスライド・ギターはもちろん、ヴォーカルからも現役感がひしと伝わってくる。 7

メッツ『アップ・オン・グラヴィティ・ヒル』

アン・サヴォイ『アナザー・ハート』

メイ・シモネス『カブトムシ』

CamScannerでスキャン

ロック

エレクトロニクス、ポップ、ソウル、ジャズ、ファンク、ラテン、ストリングスを駆使した多様なサウンドを用いたオーガニックなアプローチへと変化し、豊かな広がりを持ったヴォーカルの存在感も高まっている。進化を持してのメジャー移籍作となった。[8]

◆ライド『インタープレイ』 ウィチタ／bg WEBB630CDJ

再結成後の方が充実しているという思いを強くさせる通算7作目。地元オックスフォードで録音され、持ち味であるドリーミーなサイケデリアの世界にシンセやエレクトロニックなビートをうまく導入し、今の標準となる音像や音量感に合わせた上で完成させている。そんな老練さもありつつ、音はみずみずしい。そこが現在のライドの魅力であると言っていい。[8]

Ⓟザ・リバティーンズ『東部道歩道異常なし』 EMI／u UICW1034

約9年ぶりとなる4作目で、原題は"All Quiet On The Eastern Esplanade"。前作との間にフロントマンのピート・ドハーティが何度か薬物絡みで逮捕されているが、以前のようなバンドの破綻にまでは至らず、ライヴ活動も続け、こうして無事に新作が届けられた。彼らにしては波風の立たない、そうした状況が好転したのか、または20年以上にわたるキャリアによるものか、メロディ、アレンジともによく練られており、バンドの充実ぶりを伝える内容となっている。マンネリと受け止める向きもあるだろうが、時事や社会問題と向き合った歌詞も含めて、英国のヴェテランらしい風格が伴うようになってきたのは喜ばしい。[8]

◆テキサス&スプリングスティーン・オールダム『ザ・マッスル・ショールズ・セッションズ』 PIAS／bg PIASLL224CDJ

英国では根強い人気を維持するグラスゴー近郊出身バンドが、伝説的ピアニストの音を求めてマッスル・ショールズのフェイム・スタジオに赴き、代表曲とカヴァー2曲を録音。92年にアル・グリーンのカヴァー「タイアード・オブ・ビーイング・アローン」をヒットさせるなど、サザン・ソウルへの愛を表わしてきた中心人物のシャーリーン・スピテリにとっては夢の実現だったはず。スプリングスティーンが奏でる慈愛に満ちたオルガンと共に歌う喜びを内に秘めながら、麗しい声を聴かせる。[7]

Ⓟファット・ホワイト・ファミリー『フォーギブネス・イズ・ユアーズ』 ドミノ／bt BRC754

史上最凶のカルト・バンドというキャッチフレーズがついたこともあるが、音楽は混沌としていても荒々しくはなく、むしろその混沌を制御しながら音を組み立てている南ロンドンの5人組による4作目。エレクトロニックなサウンドが目立つのが本作の特徴だが、同時に楽曲が端正になった印象も受ける。自分は評価するが、ファンはどう判断するのか気になる。[7]

◆ロッド・スチュワート・ウィズ・ジュールズ・ホランド『スウィング・フィーヴァー』 ワーナー WPCR18658

ビッグ・バンド・ジャズやスウィング、ジャンプ、ブギウギの黄金時代に思いを馳せるふたりが戦前戦後の名曲を取り上げたコラボ作。ロッドの『アメリカン・ソングブック』シリーズに連なる1枚と言ってよく、御年79歳とは思えないキレの良いスウィングぶり。ぜひこの組み合わせで再来日を。[7]

◆ペット・ショップ・ボーイズ『ナンサレス』 パーロフォン／w WPCR18654

3作続いたプチュワート・プライスからジェームス・フォードにプロデューサーがバトンタッチ。まさにPSBなエレクトロニック・ポップが繰り出されていく理想の展開だが、1曲1曲の完成度が驚くほど高まっている。オーケストラを用いたサウンドは密度が増しながらも、洗練度も上がっており、その絶妙なバランスにうならされる。さらに聴き覚えのあるフレーズも交えながら、自らの現在地点を示しているようだ。これまでの代表曲4曲を新録したEPも付随する2枚組。[9]

Ⓟジョーダン・ラカイ『ザ・ルーブ』 デッカ／u UCCM1274

ニュージーランドで生まれ育ち、現在はロンドンを拠点に活動するシンガー・ソングライターが、ニンジャ・チューンからデッカに移籍。この5作目では従来のソウル、ジャズ、ヒップホップをブレンドした令嬢のハイブリッドなサウンドを展開しつつも、前作のエレクトロニックなタッチの音作りから

ペット・ショップ・ボーイズ『ナンサレス』

ライド『インタープレイ』

ロッド・スチュワート・ウィズ・ジュールズ・ホランド『スウィング・フィーヴァー』

CamScannerでスキャン

ロック

ヨーロッパ編　村尾泰郎

●Gazpacho『Tick Tock Noah』

ノルウェーのシンガー・ソングライター、マリー・ウルヴィンのソロ・プロジェクト。2作目となる本作は、セルフ・プロデュースのもと、同郷のシンガー・ソングライター、マティアス・テレスと作り上げた、親しみやすいメロディーを引き立てる、温かく包まれるサウンド・プロダクション、表情豊かな歌声も印象的で、無邪気さと成熟さを併せ持ったアルバム。[8]

●Sons of Apollo『Psychotic Symphony』

スペインのロック・バンド。4年ぶりの新作は、グランジやエモコアからの影響を感じさせる骨太なギター・ロックを核にしながら、エレクトロニックな要素も取り入れるなど新しいアプローチを導入。メロディアスで引き締まったハンド・サウンドには、ポジティヴなエネルギーが満ちている。[8]

●リコ・フリーヘ『アンセムス・フォー・ア・ロスト・ジェネレーション』

イム・イン・ザ・スペシャル・ブラック・ティス・オブ／d　RTMCD1-0…

これまでリコ・プエステルの名義でテクノ作品を発表してきたドイツのミュージシャン、リコ・フリーヘによる初のヴォーカル・アルバム。ダンサブルなビートにメランコリックなメロディーを乗せて、ミニマルに構築されたサウンドにエフェクトをかけた歌声が乗る、フレンチ・タッチの作品に通じるノスタルジックなムードも漂わせたエレクトロ・ポップ。[7]

●イーサーン『イーサーン（メタル）』

キャンドルライト／Inc　CNDL80…

スウェーデンのヘヴィ・メタル・バンド、エンペラーの中心人物によるソロ作。セルフ・プロデュースで3年の歳月をかけて制作され、ヘヴィ・メタルにオーケストラ風のシンセを加えてシンフォニックな世界を構築。力強いリズムが躍動感を生み出しているところはインダストリアル・ロック的でもある。本作のオーケストラ・ヴァージョンも同時リリースされた。[7]

●コルピクラーニ『コルピと温故知新の旅』

フィンランドの人気ヘヴィ・メタル・バンド、チルドレン・オブ・ボトムの元ベーシスト、ヘンカ・ブラックミスによるバンド。メタル要素は控えめで、メロディーを大切にしたダイナミックな演奏のもと、熱い歌声を聴かせるオルタナ・ロック。[7]

●サムライ・オブ・ブログ・フィーチャリング・マルコ・グリエコ『ア・クワイエット・ダウン』

ベル・アンティーク／Inc　MAR24005…

イタリア人ベーシスト、マルコ・ベルナルドを中心としたプロジェクト。イタリア人マルチ奏者のマルコ・グリエコを迎えた本作は、グリエコが考えたミステリー仕立ての物語を下敷きにしたもの。シンフォニックなプログレ・サウンドを通じて殺人事件の犯人を追う、という趣向が面白い。[7]

●カルファーゲン『メッセージス・フロム・アファー：セカンド・ネイチャー』

Inc　MAR24003…

ウクライナ出身のキーボード奏者、アントニー・カールギンによるバンド。本作は異星人との接触をテーマにした17年作『メッセージス・フロム・アファー：ファースト・コンタクト』の続編で、スペイシーなキーボードを中心にしたシンフォニックなロックと叙情的なメロディーには70年代のイギリスのプログレへの愛情が感じられる。[7]

●スピグニエフ・ブレイスネル『メランコリー』

ブレイスネル／d　RTMCD163…

これまで映画音楽を数多く手掛けてきたポーランドの作曲家によるオリジナル・アルバム。雄大な自然の風景からインスパイアされたそうで、シンフォニックな広がりを持つ音楽はアンビエントな趣やかさを漂わせていて、丁寧に作り込まれたサウンド・プロダクションには風格を感じる。[7]

イーサーン『イーサーン（メタル）』

コルピクラーニ『コルピと温故知新の旅』

スピグニエフ・ブレイスネル『メランコリー』

CamScannerでスキャン

◆野田洋次郎『パレード（Original Soundtrack）』EMI／u PRCN-1064

ネットフリックス配信の同名映画のサントラ。藤井道人監督と野田洋次郎はこれが2作目のタッグとなるはずだが、野田自身も役者をやるようになったからか、主題歌「なみしぐさ」のみならず劇伴すべてを手がける彼のこまやかな仕事が素晴らしい。1分に満たないインストの小品ばかりながら、穏やかな場面に緊密な音…というように意外性ある作りになっているのに驚く。ところで筆者は既に観たけれど、映画自体とても面白いです。[9]

◆ジャンク フジヤマ『憧憬都市 City Pop Covers』ポニーキャニオン PCCA06277

ブームになる前からこの道を牽引してきたシンガー・ソングライターによるシティ・ポップ・カヴァー・アルバム。鉄板の「真夜中のドア」「ふたりの夏物語」「雨のステイション」など誰でも知っている銘板曲のオンパレードで単純に聴いていて楽しいし、何よりソラで歌えるくらい慣れているからが、今や7人編成となったグループの初のフル・アルバム。ジャズ、ソウル、AOR、R&B、中南米音楽、ヒップホップなどをバランスよくミックスして、さながらロバート・グラスパーのようなサウンドを聴かせる。マイルス・デイヴィスを連想させるタイトルなのがとても微笑ましい。[7]

◆The Birthday『April』ユニバーサルシグマ／u UMCK5746

活動休止直前まで制作していたという楽曲から録音を終えていた3曲がEPとなってリリース。3曲ともタイプの異なる曲ながら、いずれも既に体調が思わしくなかっただろう、亡きチバユウスケの厳しい思いが刻まれているように聞こえてしまう。特にタイトルがただ繰り返される「I SAW THE LIGHT」があまりにもやるせない。[8]

◆THIS IS JAPAN『NEW JAPAN』キューン／s KSCL3504

ツイン・ギター、ツイン・ヴォーカルが特徴の4人組のメジャー初のフル・アルバム。ポスト・パンク色が強いバンドというイメージだったが、テレビ・アニメの主題歌が多いように、メ

◆STSHTAMO『STSHTAMO 8』ユニバーサルシグマ／u UPCM1411

昨年にデビュー10年を迎えた3人組の3年ぶりの新作。曲調やビートはどれも似ているが、メロディが良くてつい覚えてしまうこのバンドの魅力が全開していて聴いていてシンプルに楽しい。いい曲を書くだけに、アレンジで冒険してみてほしい気もするが、これはこれでいいのだろう。[7]

◆Novelbright『CIRCUS』同 UMCK1763

昨年に結成10周年を迎えた大阪出身の5人組の通算4作目。約半数が配信で既に発表された曲だが、バンドとしてのサイズ感が確実に大きくなっているのに気づく。シンガロング系のサビ、劇的な構成などはベタだが、ベタであることの美徳を目指している潔さが感じられる。[7]

◆SUPER BEAVER『音楽』ソニー SRCL-2275

結成から20年弱となる4人組の通算9作目。メンバー全員30代半ばになったが、エナジェティックなバンド・サウンドはデビューの頃より遥かに強固になっていて、アルバム・タイトルさ

◆首振りDOLLS『ジェットボーイ ジェットガール』キング KICS4134

北九州は小倉で結成された3人組の6枚目のアルバム。10年以上のキャリアをライヴに費やしてきただけあって、今なおステージそのままにパッションが爆発していて痛快。ギターウルフ、ミッシェル・ガン・エレファント、ブランキー・ジェット・シティらの影響はもちろん、メロディアスな曲になると歌謡ロック路線が顔を出す。[7]

◆リュックと添い寝ごはん『Terminal』スピードスター／v VICL65955

東京拠点の4人組による3作目。いきなり初期never young beachかと思える疾走としたブライトな曲に始まり、その後もオールディーズ、モータウン、シティ・ポップ、80年代ヒット・ポップスなどこれでもかとばかりにキャッチーな曲が次々と出てきて最後まで飽きることがない。ここまであっけらかんと自分たちの"好き"を表現できるバンドもなかなかいない。[7]

（以上、岡村詩野）

CamScannerでスキャン

●春日博文『Back Like 3rd』地底 BRF-108F

ウクレレ・アルバムの第3弾。ウクレレの響きを中心とした簡素な音作りと、肩の力が抜けまくったリラックス・ヴォーカルで、時間がゆっくりと流れているような豊かな空間を構築していて、独自のスタイルが確立されている。曲ごとにリズムやアレンジを変えているから単調にもならない。なによりも忌野清志郎と共作した2曲が目玉だろう。清志郎のあまりにも生々しい歌声に驚かされるし、程よいリラックス感があって本作にうまく溶け込んでいる。またラストの「夜の散歩をしないかね」のカヴァーも絶品だ。[8]

●Thiiird Place『This is Thiiird Place』フレンドシップ／東洋化成 TYOLP-1051

スガナミユウをはじめとする13人編成バンドのファースト・アルバム。アフロ、ラテン、ジャズ、ソウル、ファンクなどを消化した大所帯ならではのパワフルでエネルギッシュな演奏と、複数の男女ヴォーカルによるメッセージ性とが同居する、ディープで重量感あふれる仕上がり。その歌詞からも、フリーな創造性を重視した演奏からも、"自由"を感じさせる傑作。[8]

●竹内朗展『BEAT BAZO』ミドリヤ MRCD005

スーパー・バター・ドッグなどのバンドで活動してきたギタリストのソロ作。ジェフ・ベックへのオマージュ的な作品で、手練れのバンドとともにファンキーなフュージョン色の濃い曲をやっていて、エッジの尖った音色のギターを全編で弾きまくっている。ギターだけが突出するのではなく、ドラムスや鍵盤のソロをたっぷり聴かせるなど、自由度も高い仕上がり。[7]

◆アサキチ『こけたらむけた』スパイン SPR003

アメリカン・ルーツ・ミュージック系のシンガー・ソングライター。程よくしゃがれたブルージーな歌声を中心に、情が深く絶妙にツボを得たバンドの演奏、全編で際立つ女性コーラスとともに、スワンプ・ロックやブルース、ブギ、ソウルなどが混ざり合った豊かな世界を聴かせる。どの曲もミディアム・テンポの泰然自若とした歌と演奏で、彼の蓄積が滲み出ていて、だからこその味わい深さがある。特に終盤のディープなバラード連発が絶品。[8]

◆眞名子新『カントリーサイドじゃ普通のこと』スペースシャワー PECF 32289

神戸出身のルーツ・ミュージック系シンガー。やわらかなハイ・トーンの歌声とアコースティック・バンド・サウンドが基本なのだが、高速ビートでラップ的に言葉をたたみかけていったり、オルタナっぽいダーティーな音作りだったりと、曲ごとに多様な試みをしているのがおもしろい。ソングライティングのセンスも秀逸だ。[7]

◆伊澤一葉『Corrupted Carnival』あっぱ／br APAS01

the ALFEEや東京事変などの鍵盤奏者によるソロ作目。前作に続きピアノ・インストゥルメンタルの作品で、繊細だったり弾むように躍動していたりと起伏に富んだプレイを聴かせ、現代音楽っぽいアプローチやエレクトロ・トラックとピアノのコラボもあり、多彩な試み揃い。それで全体を夢の中っぽいムードでまとめている。[7]

◆宮田岳『青春ジャック 止められるか、俺たちを2 オリジナル・サウンドトラック』ETYN ETYN0002

黒猫チェルシーなどで活動してきたベーシストによる劇伴。バンド・サウンドのファンキーな曲、コンボ編成のジャズ、ピアノや管楽器のソロなど、多様なアプローチを駆使して、独特の空気感のある作品になっている。[7]

◆yahyel『SALVAGED』ラヴ／カルト 番号なし

昨年のアルバム『Lovers & Cults』に続くEP。収録の4曲はいずれもファースト『Flesh and Blood』の曲をリメイクしたもので、エレクトロ中心だった原曲から、ドラムス、ベース、ギターなどの生演奏を前面に出したフィジカルなサウンドに生まれ変わっている。もともとのダークで不穏なムードはそのままに、いっそう広がりを感じさせるアプローチが興味深い。[7]

◆横山起朗&ワールドスタンダード『Maebure』ステラ／ip SLIP8517

ピアニストの横山起朗が、ワールドスタンダードの最近の楽曲をピアノ・ソロで演奏したアルバム。"間"や"響き"を重視したような、とてもデリケートで丁寧なプレイばかりで、しんしんと降る雪の情景を思わせる映像的音

野田洋次郎「パレード (Original Soundtrack)」

ジャンク フジヤマ「極情都市 City Pop Covers」

THIS IS JAPAN「NEW JAPAN」

CamScannerでスキャン

映画音楽盤『パレード Original Soundtrack』

シュンク フジヤマ『僕情都市 City Pop Covers』

THIS IS JAPAN『NEW JAPAN』

●**Third Place『This is Third Place』**（ビーンドロップ／東芝EMI）

スカやミュウをはじめとする13人編成バンドのファースト・アルバム。アフロ、ラテン、ジャズ、ソウル、ファンクなどを消化した大所帯ならではのパワフルでエネルギッシュな演奏と、複数の男女ヴォーカルによるメッセージ性とお国柄。ディープで個性的あふれるせよかり。その歌詞からも、アリーの国際性を感じ、演奏からも、自由、そして楽しさを感じる作品。[8]

●**杉本恵美『SEAMS』**（ビーンドロップ／東芝EMI）

ウクレレ・アルバムの第3弾。ウクレレの響きを中心とした簡素な音作りと、瞬の力が抜けまくったりラックス・ヴォーカルで、時間がゆっくりと流れているような豊かな空間を構築していて、独自のスタイルが確立されている。曲ごとにリズムやアレンジを変えているから単調にもならない。なにより心地良い透明感と共作した曲が目玉たろう。清志郎のあまりにも生々しい歌声に驚かされるし、程よいリラックス感があって本作にうまく溶け込んでいる。またラストの「夜の散歩をしないかね」のカヴァーも絶品だ。[8]

●**Third Place『This is Third Place』**（ビーンドロップ／東芝EMI）

スカやミュウをはじめとする13人編成バンドのファースト・アルバム。アフロ、ラテン、ジャズ、ソウル、ファンクなどを消化した大所帯ならではのパワフルでエネルギッシュな演奏と、複数の男女ヴォーカルによるメッセージ性とお国柄。ディープで個性的あふれるせよかり。その歌詞からも、アリーの国際性を感じ、演奏からも、自由、そして楽しさを感じる作品。[8]

●**杉本恵美『SEAMS』**（ビーンドロップ／東芝EMI）

ウクレレ・アルバムの第3弾。ウクレレの響きを中心とした簡素な音作りと、瞬の力が抜けまくったりラックス・ヴォーカルで、時間がゆっくりと流れているような豊かな空間を構築していて、独自のスタイルが確立されている。曲ごとにリズムやアレンジを変えているから単調にもならない。なにより心地良い透明感と共作した曲が目玉たろう。清志郎のあまりにも生々しい歌声に驚かされるし、程よいリラックス感があって本作にうまく溶け込んでいる。またラストの「夜の散歩をしないかね」のカヴァーも絶品だ。[8]

MRCD005

スーパー・バター・ドッグなどのバンドで活動してきたキタリストのソロ作。ジェフ・ベックへのオマージュ的な作品で、手練れのバンドとともにファンキーなフュージョン色の濃い曲をやっていて、エッジの立った音色のギターを全編で弾きまくっている。ギターだけが突出するのではなく、ドラムスや鍵盤のソロをたっぷり聴かせるなど、自由度も高い仕上がり。[7]

●**アサキチ『こけたらむけた』**（スパイン SPROOS）

アメリカン・ルーツ・ミュージック系のシンガー・ソングライター。程よくしゃがれたブルージーな歌声を中心に、僕が深く絶妙にツボを得たバンドの演奏。全編で際立つ女性コーラスとともに、スワンプ・ロックやブルース、ブギ、ソウルなどが混ざり合った豊かな世界を聴かせる。どの曲もミディアム・テンポの素朴自然とした歌と演奏で、後の着積が滲み出ていて、だからこその味わい深さがある。時に絵画のディープなハラード連発が絶品。[8]

●**眞名子新『カントリーサイドじゃ普通のこと』**（スペースシャワー PECF 3289）

神戸出身のルーツ・ミュージック系シンガー。やわらかなハイ・トーンの歌声とアコースティック・バンド・サウンドが基本なのだが、高速ビートでラップ的に言葉をたたみかけていったり、オルタナっぽいダーティーな音作りだったりと、曲ごとに多様な試みをしているのがおもしろい。ソングライティングのセンスも秀逸だ。[7]

●**伊澤一葉『Corrupted Carnival』**（あっぱ／bv APASS01）

ex EATERSや東京事変などの鍵盤奏者によるソロ作品。前作に続きピアノ・インストゥルメンタルの作品で、繊細だったり弾むように躍動していたりと起伏に富んだプレイを聴かせ、現代音楽っぽいアプローチやエレクトロ・トラックとピアノのコラボもあり、多彩な試み揃い。それで全体を夢の中っぽいムードでまとめている。[7]

●**宮田岳『青春ジャック 止められるか、俺たちを2 オリジナル・サウンドトラック』**（EYN EYNO005）

黒猫チェルシーなどで活動してきたベーシストによる劇伴。バンド・サウンドのファンキーな曲、コンボ編成のジャズ、ピアノや管楽器のソロなど、多様なアプローチを駆使して、独特の空気感のある仕上がりになっている。[7]

●**yahyel『SALVAGED』**（ラヴ／カルト番号なし）

昨年のアルバム『Lovers & Cults』に続くEP。収録の4曲はいずれもファースト『Flesh and Blood』の曲をリメイクしたもので、エレクトロ中心だった原曲から、ドラムス、ベース、ギターなどの生演奏を前面に出したフィジカルなサウンドに生まれ変わっている。もともとのダークで不穏なムードはそのままに、いっそう広がりを感じさせるアプローチが興味深い。[7]

●**横山起朗＆ワールドスタンダード『Maeburo』**（ステラ／ビ SLPS 5117）

ピアニストの横山起朗が、ワールドスタンダードの最近の楽曲をピアノ・ソロで演奏したアルバム。「風」や「雪き」を連想したような、とてもデリケートで繊細なプレイばかりで、しんしんと降る雪の情景を思わせる映像的な

CamScannerでスキャン

◆花園distance『十五』アルカンジェロ／dw ARC-1056 [6]

香川出身の3人組ガールズ・インスト・バンドで、結成15年目にして3枚目のアルバム。ディス・ヒートあたりを思わせるような、ダーティーな質感のヘヴィな音色でミニマル・ビート中心のインストなのだが、それを終始軽やかに、チャーミングな面持ちでやっているのがおもしろい。展開が激変したり異物っぽい音が入ってきたりする予測不能な実験的アイデアも、無邪気さを感じさせたりする。アヴァンで不穏で摩訶不思議でキュートっていう、ちょっと得がたい怪作。

◆までいまぁこん『腹気様の中、あなた』ポンコン／みんなきける 番号なし [9]

まである鼓笛隊を中心とする姫路のバンドで、今年1～2月に5人編成で録音したEP。デリケートな空間的音像と、まであのピュアで透き通った歌声とによって、淡いサイケデリアが立ちのぼるような幻想的世界を構築している。今の充実ぶりを示す会心作。 [8]

◆Zeitenborg Complain『A life like ice cream』ヴィヴィド VSCD3

花園distance『十五』

までいまぁこん『腹気様の中、あなた』

大谷氏『狂った世界で』

◆Men Spyder『Men Spyder』シンフォニー・ブルー 番号なし [7]

二人組ソウル～ファンク・ユニットの初となるEPで、青木慶則のレーベルからのリリース。フュージョン色の濃いAORというべき、シンセをフィーチャーしたグルーヴィーな曲をやっていて、洗練されていて端正なサウンド・デザインは非凡なものがある。 [7]

◆ラジカセ狂気『ライヴ・イン・トーキョー』ゼンカイ・インディペンデント 番号なし

オサムアカバネのソロ・ユニットで、昨年のワンマンを収録したライヴ盤。ダーティーでノイジーなヘヴィ・ロック～ハードコアに乗せて、野太い声がR&B、ファンク、ソウル、AOR、フュージョンをブレンドした曲が並ぶ。特に洗練された都会的センスと心地よいメロディーが光る。 [7]

◆大谷氏『狂った世界で』荒野 KO25

約30年にわたって活動している富山在住シンガー・ソングライター。ファンク、ブルース、ジャズ、レゲエなどを取り入れた音作りとともに、世間に対する反抗心を示したような歌詞を、武骨で不器用でぶっといヴォーカルで聴かせている。むき出しのままのリアルな歌だからこその説得力がすごい。 [8]

◆FRONTIER BACKYARD『frontier』ニュー！／dw NIW162

20周年を迎えた二人組ユニット。シンセ・ポップ的サウンド、ダンサブルなビート、ダンディーなヴォーカルが三位一体になった楽曲が並ぶ。よく磨かれたサウンド・デザインと洗練されたセンスが魅力。

◆This is LAST『HOME』SDR／ [7]

千葉県船橋市のスリー・ピース・バンド。オルタナ的バンド・サウンドで攻める曲を中心に、ホーン・セクションやストリングスを入れて分厚い音作りにしたり、爽快感あふれるメロディーのキャッチーな曲があったりと、多様な試みでとっつきやすい仕上がり。 [6]

◆SLINGSHOT MILLION2『もっと広がれ！ハッピーバンク』スリングショット・ミリオン2／pi DSIM1003

5人組パンク・バンドのセカンド。ポジティヴでハッピーな楽曲を、高速ビートのパンク～ハードコア・サウンドと男女ツイン・ヴォーカルで聴かせる。二人のヴォーカルのタイプが異なるのでヴァリエーションも豊富だし、全編に渦巻くエネルギーも痛快だ。 [7]

◆テツコ『Curl』ササナミ／dw SZDW1112

女性3人組バンド。ソリッドでてらいのないパンク・サウンドと、みずみずしくてスウィートなヴォーカルとメロディーでたたみかけていき、ユーモラスなソングライティングだったりコーラスを多用した曲だったりと変化もあり、全10曲を一気に聴かせる。屈託のないピュアな衝動が眩しい。 [7]

（以上、小山守）

CamScannerでスキャン

Jポップ／歌謡曲

原田和典

◎すすめのディアーズ『Sweet Days』 トヤマ／ポリスター PSTR-0001

話題の女性二人組ユニットがファースト・アルバムを発表。「和風だしの利いたブルガリアン・ヴォイス」との印象も受けた、つかず離れずの分厚い3声ハーモニーと、アコースティック・ギターや打楽器を生かした伴奏が見事に融合し、なんとも風通しのいい世界を生む。9分近い「ポリフォニー江州音頭」には、アレンジも含めて、徹底的に引き込まれるのみ。[9]

◆H.E.R.『Something to You』 トリプルK／ビクター VICL-5

19年結成の12人組グループがついにファースト・アルバムを発表。アイドル声を相当つくり込んでいるメンバーもいるように聞こえるが、結果的にそれが歌声の多彩さにつながっている。「好きだ」を連発する「偶然シンフォニー」、超アップ・テンポ曲「す、好きじゃないっ」の対比も気持いいし、「想わせぶりっこ」にも、あざといとわかっていても惹かれてしまう。[8]

◆ティロリスティーのヨンス『恋愛』 ビクター VICL-5

2年ぶりの新作。「アイドル界におけるファンク～ディスコ路線をどこまでも突き詰めてゆく」という決意を感じてやまない。日向ハルの強靭な歌声を軸におきつつも、前作以上に各メンバーの歌声がコントラスト豊かに響き、キーン・セクションやリズム隊も威勢がいい。曲を聴き進めていくのが楽しくてしょうがなかった。[9]

◆鈴木雅理『28 29』 エピック／ソニー ESCL-5018

ますます精力的な活動を続ける人気シンガー、2年ぶりの4thアルバム。ドラマやアニメ関連のナンバーを前半におき、中盤では「grampoo」などファンキーなナンバーも盛り込んで、ラストは歌のうまさが実に際立つドラマティックなバラードで締める。ソロ第1弾アルバムの頃の歌唱にはもう少々、引いた感じ、があったはずでは、とも思うが、卓越したヴォーカリストであることに変わりはない。[8]

◆柏木ひなた『1／24』 SME／ソニー SECL-567

アイドル・グループ、私立恵比寿中学に在籍中からソロ活動に取り組んでいたシンガーの初アルバム。グループは3年に解散。作家陣に川谷絵音、中村幸輔、尾崎雄貴らを迎え、ヘヴィーなエレクトリック・ギターをフィーチャーした伴奏（全曲ではないが）に一歩も引かない、力感たっぷりの歌声で実力を示す。[8]

◆其原有沙『phosphorus』 ファブトーン FBAC201

アイドル・グループ、乙女新党が16年に解散した後、ソロ歌手～役者として活動する其原有沙の初EP。屈託のない歌声と、洗練されたリズム・パターンやベース・ラインが心憎いまでに調和する。コード・プログレッションに、いわゆる〝ジゴロ進行〟をほんの少々持ち込んだタイトル曲を繰り返し楽しんだ。[8]

◆SANDAL TELEPHONE『SHUT-DOWN→REBOOT』 ホエン SDTP19

現在は3人組として活動するアイドル・グループのセカンドEP。ライヴで盛り上がることを前提にしたかのようなアッパーなナンバー主体の印象を受けたが、各自の歌声もユニゾン・パートも繊細だ。電気グルーヴ「Shi-Ba-Ki」のカヴァーもあり。[7]

◆超特急『Just like 超特急』 スターダスト／ユニバーサル UPCH-5566

結成12年を迎えた男性グループ（現在は9人組）のミニ・アルバム。歌唱からは粗削りな印象も受けるが、個性的な声質の持ち主が揃い、いろんな言い回しで聴き手にエールをおくる。「Love Song」の歌詞に心が熱くならない彼らのファンはいないはずだ。[6]

◎RYUSENKEI『イリュージョン』 アルファ／ソニー MHCL-3082

伝説のアルファミュージックがレコード・レーベルとしてついに復活！その第1弾が才人・クニモンド瀧口によるプロジェクトなのだから嬉しさが倍増する。今回から正式メンバーになったSincere（シンシア）の歌声は日本語も英語もナチュラルで軽やか、鍵盤類やストリングスのゴージャスな響きとの相性も良い。早くも今年最高峰のリゾート・ミュージックのひとつに出会った印象を抱く。[9]

◎町あかり『地球出禁にしていいよ～ディスコあかり DISCO Machi Akari』 ホットワックストラックス／ユ HOTWAXCD2004

1年に4作のEPをリリースするプロジェクト、その第1弾。町あかりのディスコものといえば個人的には「聴くだけで痩せる歌」の印象が強烈すぎるのだが、その質能ぶりは今回の4曲にも振りまかれている。"黒帯フィーバー"の英語ディクションは滑らか、表題曲における歌声とロイ・エアーズ

CamScannerでスキャン

◆いきとっと『ARCANA』ユニバーサルシグマ／UMCK-1488

10年代から動画サイトで話題を集めていたクリエイターが、約1年半ぶりにソロ・アルバムを発表。全曲の作詞作曲を手掛けるとともに、声の張り

◆Saucy Dog『されど空の高さを知る』クラウン／ﾀﾜｰ VVCL2449

18年結成、23年から現在の名前（オークミューと読む）で活動を続ける4ピース・バンドの第2弾EP。圧倒的な光彩を放つシキのヴォーカルに耳を傾けていくうち、それを守り立てる楽器陣の技のこまやかさにも注意が向かい、良いバンドであるということが見えてくる。フル・アルバムを待つ。[7]

◆清浦夏実『Breakfast』KTP 番号なし

TWEEDEESでも活動するヴォーカリストが、ソロ名義としては12年ぶりとなる作品を発表。全楽曲の作詞を自身で担当し、作曲者はそのつど交替する。アンビエント的なものからタテノリ系ロック・チューンまで曲調も多彩だが、清浦のクリアな歌声が全体に心地よい統一感を与えている。[8]

◆A夏目『Gem』ビクター VICL6

鈴木愛理「28 - 29」

nase「凡才」

鈴木雅之「Snazzy」

◆鈴木雅之『Snazzy』エピック／SME ESCL5937

ただ歌うだけで満場を唸らせるに違いないレジェンドなのに、今回の作品では、つのだ☆ひろ、GReeeN、松本孝弘（B'z）、水野良樹（いきものがかり／HIROBA）等のメンバーとコラボし、自らの作詞・作曲も3曲収録（ブルース進行を基にした「Psychedelic City」がたまらない）。68歳にしてますます広がるソウル・ミュージックの輪に敬意を表する。[8]

◆玉置浩二『玉置浩二 Concert Tour 2022 故郷楽団 35th ANNIVERSARY ～星路（みち）in 仙台』コロムビア COCB54366～7

桁違いに傑出したヴォーカリストの作品を続けて紹介できて光栄だ。安全地帯の盟友、六土開正も参加した充実の"楽団"との仙台公演を収録。畢生の名曲「サーチライト」を筆頭に熱唱満載。イントロで自然発生的に飛び出すスキャットもまたいい。[8]

◆三浦拓也『Geoworld』SME／SECL2973

ギター・インスト・ユニット＝DE

運詐欺師"の人間模様を描くコンセプト・アルバム。脚本家・演出家の根本宗子が全体プロデュースを担当し、作家陣にはマハラージャン、清竜人、吉澤嘉代子らの名も。セリフ単独のトラックも含まれ、耳で味わう舞台といった趣もある。実演化を望みたい。[7]

◆山崎育三郎『The Handsome』ソニー・ミュージックアソシエイテッド／SRAICL4565

ミュージカル俳優、久々の新作は"強

性、20歳のラッパー／シンガーによるメジャー1stアルバム。鏡を踏みまくるラップ曲と、「朝焼けTRAIN」や「Full Moon feat. キズナ」などの抒情的な歌モノが共存する。声もトラックも過度な高まりを避けた淡白な感じだが、もうひとつのスパイスがあれば、内容に起伏が生まれたのでは。[6]

CamScannerでスキャン

ジャズ

村井康司

●カマシ・ワシントン『フィアレス・ムーヴメント』ヤング／M YOUNG CD-P

カマシの新作はジョージ・クリントンやDJ・ザ・シカゴ・キッドなどのシンガーやラッパーが参加したヴァラエティに富んだ内容。瞑想的な曲、ハッピーなトラック、カマシがハードに吹きまくる曲などが並び、全体的には親密で穏やかな空気が漂っている。[9]

●ビル・フリゼール『オーケストラズ』ブルーノート／U 発売なし

マイケル・ギブスが編曲し、ディスク1は60人編成のオケ、ディスク2は11人編成のジャズ・アンサンブルがフリゼールのトリオと共演。「ラグ」「ストレンジ・ミーティング」「モニカ・ジェーン」などに混じって、ビリー・ストレイホーンやフォスターの曲も。個人的にはギル・エヴァンスを思わせるディスク2の方が好きです。[9]

●シャバカ『美の恵み』インパルス／U UCCV-1097

"ハッチングス"を歌ったシャバカ名義の第一作は、フルート、クラリネット、尺八を吹いた"サックスは一曲のみ"スピリチュアルで瞑想的な作品。アメリカの一流どころが勢揃いして録音はヴァン・ゲルダー・スタジオだが、内容はアフリカやカリブの匂いが漂う、しかし静謐な音楽だ。[8]

●フレッド・ハーシュ『サイレント、リスニング』ECM／U UCCE-1205

ハーシュのECMでの初ソロ作。オリジナルの他に「スター・クロスト・ラヴァーズ」「ソフトリー」なども演奏していて、ハーシュの透徹した美意識が全開になっている。ピアノの倍音を実に美しく捉えた録音もすばらしく、ハーシュの代表作になるかも。[9]

●Blue Lab Beats "Blue Eclipse"

英ロンドンのビートメイカー・コンビの新作は、ラッパーのジェイ・プリンス、トランペッターのポピー・ダニエルズ、ムーンチャイルドのアンバー・ナヴランなどのゲストを迎えた多彩な作り。パワフルでタイトなビートとポップなメロディが心地よい。[8]

●ジョシュ・ジョンソン『アンユージュアル・オブジェクト』リングス／dw RINC-252

ジョンソンはミシェル・ンデゲオチェロ『オムニコード・リアルブック』をプロデュースしたサックス奏者。サックス多重録音と電子音、シンプルなリズムが淡々と流れるクールなサウンドがじわじわと迫ってくる。サム・ゲンデルを素直にしたような音楽。[8]

●キム・オキ『Love Japan Edition』バイヨン ROMANO27

韓国のサックス奏者キム・オキの日本向けベスト・アルバム。ウッド・ベースの深い響きを効果的に使ったサウンドはシンプルで美しく、オキのサックスはサブトーン主体のメロウな雰囲気。シンガーをフィーチャーした4曲の出来がよく、特に「ゆめ」で歌っているイ・ハイの声にしびれました。[8]

●キャシー・キノシズ・シード『クラティテュード』リングス／dw RINC-121

ココロコの元メンバーでもあるUKのサックス奏者、コンポーザーが組織しているラージ・アンサンブル。ストリングスとホーンズが入ったスケールの大きい楽曲が並び、本人のサックスをはじめとしたソロ・パートも充実している。ココロコのはじけっぷりとはまた違う落ち着いたサウンドだ。[8]

◆ジャリス・ヨークリー『サムタイム、レイト・アット・ナイト』コアポートRPOZ-10094

ヨークリーはホセ・ジェイムズ・バンドのドラマー。ここではドラムス以外にキーボードとヴォーカルを担当し、BIGYUKIがシンセなどで協力している。ドラムのテクニックとグルーヴはさすがだし、BIGYUKIと二人で作り上げたカラフルで分厚いサウンドもかっこいい。淡々と歌うヴォーカルも味がありますね。[8]

◆ブロック・ランゼッティ・オガワ『ドローイング・ソングス』森の雷／ip MHIP3791

スナーキー・パピーのヴァイオリン奏者、ギタリスト、パーカッション奏者によるトリオによる、シンプルでさわやかなアコースティック・サウンド。ヴァイオリンとギターがブルーグラス的なテクニックを披露するが、そこに小川慶太のカラフルなパーカッションが絡んで独創的な音に。[9]

ビル・フリゼール『オーケストラズ』

ジャリス・ヨークリー『サムタイム、レイト・アット・ナイト』

ブロック・ランゼッティ・オガワ『ドローイング・ソングス』

CamScannerでスキャン

ラップ／ヒップホップ 日本 ニホン編

◆D.O 『Rain』 論 番号なし

日本のギャングスタ・ラップの開拓者の一人であるラッパーの約10年ぶりとなる17曲入りの最新作は、「雨」というタイトルとアートワークが暗示するように一種のホラーコアだ。現代のように残酷で凄惨な視覚表現や映像に気軽にアクセスできてしまう時代でも、彼のラップの恐怖の言葉と声、物語、特に本作の「大東京」シリーズには背筋が寒くなる。その説得力たるや。 8

◆B.I.G JOE 『It's Not A Bad Thing』 メンター 番号なし

このリスペクトすべき北海道出身のヴェテラン・ラッパーの5曲入りEPの素晴らしさは、ポジティヴなパワーが放出され、人生における愛や自由を主題にした曲が輝いていること。レゲエ／ラガ調の曲があり、BESとの自由への賛歌があり、ソウル・ヴォーカルのループが印象的なビートで未来を見据えた詩を書いている。 7

◆Black 『report』 高田音楽制作事務所 番号なし

言わずと知れた板橋区出身のラッパー／プロデューサーは進化／深化を続

D.O 『Rain』

Black 『report』

BAD HOP 『BAD HOP (THE FINAL Edition)』

のD.O／プロデューサーらがリミックスした5曲入りが2枚出る。リミキサーはTREKKIE TRAXのメンバーらが中心。レゲトン／ダンスホール、フットワーク、ベース・ミュージックやドラムンベースと多彩。挑戦的な企画。 7

◆同 『Soul Quake (Remixes, Vol. 2)』 同 番号なし

私の世代だと、日本のラップとクラブ・ミュージックの融合、あるいは前者を後者のプロデューサーがリミックスするという両者の蜜月は、リミックス文化が普及した90年代や00年前後の時代を彷彿させる。ダンス・ミュージックは言葉の壁をこえる可能性が高く、現在人気のラッパーがこうした試みに関わるのが興味深い。 7

◆BAD HOP 『BAD HOP (THE FINAL Edition)』 バッド・ホップ 番号なし

2014年に結成され、2024年2月に解散した川崎のグループは、好むと好まざるとに関わらず、この10年の国内のヒップホップの最大のインパクトであったことは間違いない。世代や地域をこえて、旬のラッパーやヴェテラン勢とのコラボレーションを次々に発表、ラスト・アルバムのこの最終ヴァージョンにはなんと計33曲を収録。BAD HOP以降の時代に入ったと言える。 8

CamScannerでスキャン

日本国／ソウル／ブルース
林剛

● [illegible] 『Sweet Dreams Cure』 [illegible]

ウーマン・リーダーの歌う癒しの歌。カリフォルニアのリゾート地を思わせるような、ゆったりとしたリラックス・カントリーの雰囲気もあり、第1曲目から南国の別サイドを感じさせられる1枚だ。[9]

● Tierra Negra 『Wood Nine Wood』 [illegible]

フィラデルフィア出身のフィメール・ラッパーがインタースコープとの契約から6年間をかけてようやく発表したフル・アルバム。ビヨークへのオフセッションに満ちたそのスタイルは、オルタナティヴでありながらポップ。そしてファニーで楽しい。メディアではミッシー・エリオットとよく比較される彼女だけど、むしろシーアとの共通点を多く感じる。いずれにせよ「Smoke」「27 Club」と続く秀逸な曲で描かれるシンガー・ソングライター的なサウンドは、これまでのヒップホップになかったものだと思う。[9]

● シャバス・パレセス『ローフド・イン・レアネス』 ヒップ・ホップ／[illegible] [illegible]

シャバス（ボーカル）イン・レアネス

ベロ・ヴィアンイアース、ドラー・プラネット

コリン・ブレイ『ファウンド・ヘヴン』

ラップ／ヒップホップ
海外 鹿島川町蔵

● [illegible] 『Lost』 [illegible]

[illegible]

エレクトロニック・ミュージック
坂本哲哉

● ジェフ・ミルズ『The Trip - Electric Roots』 アンビエント／ユニバーサル

ジェフが89年から始めたアート・パフォーマンス・プロジェクトが遂にフラックホールに突入。彼は自身の武器とも言えるテクノ・ビートの磁場にコスミックなシンセやギター、芦川純の力強いヴォーカルを引き寄せ、誰も見たことのないブラックホールを想像する。彼の宇宙に対するイマジネーションは抽象的な部分はあれど、その勇気ある跳躍がなければ、ここまで躍動感のあるテクノは生まれない。圧巻。[8]

● クレア・ロウジー『センチメント』 スリル・ジョッキー／[illegible] HEAD22 63

衝撃のアンビエント 音響作家の移籍後初の新作は、驚くべきことに非常にポップだ。彼女はミニマルなギター・アルペジオを軸に、時には自分の声を加工し、時にはヴァイオリンやチェロの艶やかな音色に耳を傾け、時には環境音と戯れながら、メランコリックで官能的なアンビエント・スケープを描いていく。彼女はいつも我々の想像を鮮やかに超えてくる。[9]

● Jon 'Alcorn' [illegible]

彼女のサウンドをラップトゥークという言葉で表現するのはもう無意味なのかもしれない。ループを軸としない流動的なリズム・パターンによって彼女はサウンドに余白を生み出し、そこにクロノス・クァルテットの繊細な弦楽

ブルーノ・ベルリ『ノ・ヘイノ・ドス・アフェートス2』

ルーカス・アルーダ『オミニラ』

サンバスンダ『レゲエ&ルグー』

Tyla "Tyla" Fax / Epic

昨年のシングル "Waist" のヒットで世界的なポップの最前線に躍り出た、南アフリカの女性シンガーによる初のフル・アルバム。ロカビリーやアフリカのビートの要素と、独特の味いたタイラの歌声、そしてセクシーなコーラスがクセになる、現行ポップの最注目作品だ。[9]

Shakira "Las Mujeres Ya No Lloran" Ace / Sony

昨今のラテン・ポップ隆盛のなかでますます存在感を高めるコロンビアのシンガーの新作は、スペイン語圏のスターが大挙参加した勢いのある作品。ときに大仰にもなるサウンドも愛嬌にしながら、妖艶さに磨きのかかった歌を聴かせる。ドミニカ系のラッパー＝カーディ・Bとの共演が良い。[8]

ジャスティン・ティンバーレイク『エブリシング・アイ・ソート・イット・ワズ』 ソニー SICP6572

ネルシャツを着てカントリー風味を醸した6年前の前作や、映画『トロールズ』関連の楽曲ですっかり気のいい中年男性のイメージがついたジャスティン・ティバーレイクだが、今回は少し妖しくセクシーな面も復活。とはいえ、アルバム・ロックやR&Bを基調とするアプローチは前作と同様で、新鮮味の利いたタイラの歌声、そしてセクシーなコーラスがクセになる、現行ポップの最注目作品だ。[9]

アリアナ・グランデ『エターナル・サンシャイン』 ユニバーサル UICU-1364

30代を迎えた米フロリダ出身の人気シンガーによる3年ぶりの新作。ハウスっぽい先行シングル「yes, And?」をはじめとした心地よいダンス・トラックの上に乗る、絶妙にコントロールされた高音のヴォーカルが、かつてなく魅惑的に響く。[9]

コナン・グレイ『ファウンド・ヘヴン』 同 UICU-1174

アイルランド人と日本人の両親の間に生まれて米サンディエゴで育ったシンガーの3作目。MVはマイケル・ジャクソンのまねで曲調はゆるな「ネヴァー・エンディング・ソング」をはじめ、ヴォーカルの発声も含めて80年代エレ・ポップが憑依したようなサウンドに驚く。完成度は高いし好みだけど、これでいいのか？という気も。[7]

ブラジル
栗本斉

ブルーノ・ベルリ『ノ・ヘイノ・ドス・アフェートス2』 ユニミュージック

CamScannerでスキャン

CONDO FUJIKO

ヨーロッパ
柴山雅也

●アクセル・クイアーン『ヴォウ・ア・クール・ネスト・ウェドラー』

[9]

●ルカ・『ピュア・ベスト』

[9]

東アジア
関谷元子

●Tsai Tzeyun『Chaos・The Art Of The One』

[9]

●シゼル『セラピー・セッション・デラックス』

[9]

レコードコレクターズ増刊

新刊案内

ロック・アルバム200 創刊40周年スペシャル

レココレ執筆陣による1960~90年代のロック・アルバム200決定！

1960年から99年にリリースされた洋楽ロック・アルバムから、音楽評論家、ライター、ミュージシャンの投票で決定した200位までのランキング。まさにロックのオールタイム・ベスト200！

「あなたが選ぶロック・アルバム50」アンケート結果発表！

ハガキ、ウェブで募集したアンケートの集計結果を発表！

読者が選ぶ「わたしの一枚」

「あなたが選ぶロック・アルバム50」のノミネートからはずれていた「私だけの推しアルバム」を読者の推しコメントとともに紹介します

わたしが選ぶベスト20　あがた森魚、亀渕昭信、近田春夫

ランキング分析座談会　小倉エージ×柴崎祐二×松永良平

60／70／80／90年代の年代別ロック・アルバム・ベスト200

レコード・コレクターズ2022年5~8月号で紹介した各ランキングの順位を掲載

A5判224ページ／定価1650円（2022年刊）

株式会社ミュージック・マガジン　〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-5 北沢ビル　☎03-3263-3201　http://musicmagazine.jp

CamScannerでスキャン

萩原健太のコンパクトディスカヴァリー

昔から映画のサウンドトラック・アルバムというのは人気があって。特にまだ家庭用のヴィデオ機器など皆無だった時代、映画ファンは映像を個人所有することができなかったため、劇中に流れる美しい音楽やセリフなどを収めたサントラ盤を買い求め、自宅で映画を追体験したものだった。その後、MTV全盛時代がやってくると、音楽シーンでも映像が重要な役割を果たすようになってきて。映画そのものをプロモーション・クリップのように活用した新曲コンピ的サントラ盤が話題を集めるようになって。ヒット作も続出して。このほどユニバーサルが〝サントラ・キャンペーン2024〟として新旧サントラ盤71作をまとめて廉価で再発したのだけれど、その中にはポップス・ファンにとって気になる盤も少なくない。駆け足で雑にチェックします。

エリック・クラプトンとかボブ・マーリーとか、近年公開されたドキュメンタリー映画のベスト盤的サントラも含まれているけれど、記憶に新しいので省くとして。まずは00年のコーエン兄弟監督作品『**オー・ブラザー！オリジナル・サウンドトラック**』（ユニバーサル　UICY80403）から。T・ボーン・バーネットのプロデュースの下、映画の舞台である30年代の米南部を彩るブルース、カントリー、フォーク、ゴスペルなどをフェアフィールド・フォー、ラルフ・スタンレー、ギリアン・ウェルチ、アリソン・クラウス、エミルー・ハリスらが、渋く真摯に再演した音源中心に構成された名盤だ。とあるレコード・ショップを舞台にしたリヴ・タイラー主演の青春コメディ映画、95年の『**エンパイア・レコード　サウンドトラック**』（同　UICY80405）はエドウィン・コリンズ、クランベリーズ、ジン・ブロッサムズらの名曲が並ぶ1枚。クエンティン・タランティーノ監督の91年作品『**パルプ・フィクション　オリジナル・サウンドトラック（コレクターズ・エディション）**』（同　UICY80406）はディック・デイル、リンク・レイ、マーケッツらの演奏インスト・コッテージから、チャック・ベリー、リッキー・ネルソン、クール&ザ・ギャング、アル・グリーンなどやばめのオールディーズ全般に最注目させた雑多な傑作。劇中のセリフなども詰め込んだ02年コレクターズ・エディションでの復刻だ。スティーヴン・スピルバーグ監督の85年作品『**バック・トゥ・ザ・フューチャー　オリジナル・サウンドトラック**』（同　UICY80410）はご存じヒューイ・ルイス&ザ・ニュースの特大ヒット「パワー・オヴ・ラヴ」を生んだ盤。スパイク・リー監督の89年作品『**ドゥ・ザ・ライト・シング　オリジナル・サウンドトラック**』（同　UICY80411）はパブリック・エネミー「ファイト・ザ・パワー」を筆頭に80年代後半のヒップホップ・カルチャーを満載。ジュリアン・テンプル監督の86年作品『**ビギナーズ　サウンドトラック**』（同　UICY80415〜6）は出演していたデヴィッド・ボウイ、レイ・デイヴィス、シャーデー、エイス・ワンダーらの録り下ろし音源集。ハワード・ドウイッチ監督によるミュージック・ヴィデオ感たっぷりの青春ラヴ・コメディ『**プリティ・イン・ピンク〜恋人たちの街角　オリジナル・サウンドトラック**』（同　UICY80418）も懐かしい。OMD、スザンヌ・ヴェガ、INXS、スミス、ニュー・オーダー、

CamScannerでスキャン

『オー・ブラザー！オリジナル・サウンドトラック』

ディープ・パープル『マシン・ヘッド：スーパー・デラックス・エディション』

ウディ・ガスリー『我が祖国～ジ・アッシュ・レコーディングズ VOL1』

ル・サウンドトラック』（同 UICY80 4332）はシナナナ、フランキー・ヴァリ、フランキー・アヴァロンらが大活躍。と、きりがないわけですが。もうひとつだけ、個人的にこれでオールディーズの深い沼に誘われた73年のジョージ・ルーカス監督作品『アメリカン・グラフィティ オリジナル・サウンドトラック』（同 UICY80437～8）を挙げたところで次いきましょう。

普段あまりハード・ロックは聴かないぼくですら高校生時代、友だちに強いられてギターをフル・コピーしたディープ・パープル、72年の名盤の豪華版『マシン・ヘッド：スーパー・デラックス・エディション』（ライノ／ワーナー WPZR30990～4）は、3CD＋ブルーレイ・オーディオ＋LPという構成の5枚組。CD1がドゥイージル・ザッパが手がけた24年最新リミックスと最新リマスター音源、CD2が12年にアナログ盤で出た『イン・コンサート72』、CD3が71年のモントルーでの未発表ライヴ、LPは最新リミックス音源、ブルーレイは最新アトモス・リミックス＋74年の4チャンネル＋3曲の5・1サラウンドをそれぞれ収録している。

スミソニアン・フォークウェイズなどが発掘リリースする貴重なCD群に丁寧な日本語解説を付けて配給してくれているライス・レコードから、今月は97年に編まれたウディ・ガスリー『我が祖国～ジ・アッシュ・レコーディングズVOL1』（ライス FLR3152）と、03年に編まれたロスコー・ホルコム『アン・アンテイムド・センス・オヴ・コントロール』（同 FLR3148）が登場。ボブ・ディランやエリック・クラプトンが好きな人ならば、彼らの重要な背景を知るためにも再訪必須の音源たちだ。

韓ビッグ・ピンクものとしては67年、スナッフ・ギャレットとJ・J・ケイルの共同プロデュースの下、レオン・ラッセルらも協力してザ・バーズ、ドノヴァン、カウント・ファイヴ、アソシエーションなどによる当時のヒット曲のカヴァーとJ・J・ケイルの書き下ろし曲とを混在させたザ・レザーコーテッド・マインズ名義の『トリップ・ダウン・ザ・サンセット・ストリップ』（ヴィヴィドVSCD6190）がわりとおもろいです。

萩原健太のコンパクトディスカヴァリー

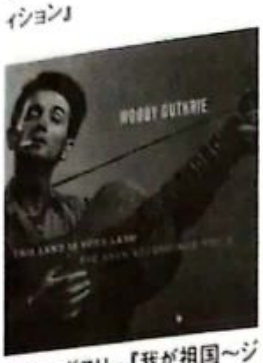
昔から映画のサウンドトラック・アルバムというのは人気があって。特にまだ家庭用のヴィデオ機器など皆無だった時代、映画ファンは映像を個人所有することができなかったため、劇中に流れる美しい音楽やセリフなどを収めたサントラ盤を買い求め、自宅で映画を追体験したものだった。その後、MTV全盛時代がやってくると、音楽シーンでも映像が重要な役割を果たすようになってきて。映画そのものをプロモーション・クリップのように活用した新曲コンピ的サントラ盤が話題を集めるようになって。ヒット作も続出して。このほどユニバーサルが〝サントラ・キャンペーン2024〟として新旧サントラ盤71作をまとめて廉価で再発したのだけれど、その中にはポップス・ファンにとって気になる盤も少なくない。駆け足で雑にチェックします。

エリック・クラプトンとかボブ・マーリーとか、近年公開されたドキュメンタリー映画のベスト盤的サントラも含まれているけれど、記憶に新しいので省くとして。まずは00年のコーエン兄弟監督作品『オー・ブラザー！オリジナル・サウンドトラック』（ユニバーサル　UICY80403）から。T・ボーン・バーネットのプロデュースの下、映画の舞台である30年代の米南部を彩るブルース、カントリー、フォーク、ゴスペルなどをフェアフィールド・フォー、ラルフ・スタンレー、ギリアン・ウェルチ、アリソン・クラウス、エミルー・ハリスらが、渋く真摯に再演した音源中心に構成された名盤だ。とあるレコード・ショップを舞台にしたリヴ・タイラー主演の青春コメディ映画、95年の『エンパイア・レコード　サウンドトラック』（同　UICY80405）はエドウィン・コリンズ、クランベリーズ、ジン・ブロッサムズらの名曲が並ぶ1枚。クエンティン・タランティーノ監督の94年作品『パルプ・フィクション　オリジナル・サウンドトラック（コレクターズ・エディション）』（同　UICY80406）はディック・デイル、リンク・レイ、マーケッツらの強烈インスト・ロックンロールから、チャック・ベリー、リッキー・ネルソン、クール&ザ・ギャング、アル・グリーンなどやばめのオールディーズ全般に最注目させた猥雑な傑作。劇中のセリフなども詰め込んだ02年コレクターズ・エディションでの復刻だ。スティーヴン・スピルバーグ監督の85年作品『バック・トゥ・ザ・フューチャー　オリジナル・サウンドトラック』（同　UICY80410）はご存じヒューイ・ルイス&ザ・ニュースの特大ヒット「パワー・オヴ・ラヴ」を生んだ盤。スパイク・リー監督の89年作品『ドゥ・ザ・ライト・シング　オリジナル・サウンドトラック』（同　UICY80411）はパブリック・エネミー「ファイト・ザ・パワー」を筆頭に80年代後半のヒップホップ・カルチャーを満載。ジュリアン・テンプル監督の86年作品『ビギナーズ　サウンドトラック』（同　UICY80415～6）は出演していたデヴィッド・ボウイ、レイ・デイヴィス、シャーデー、エイス・ワンダーらの録り下ろし音源集。ハワード・ドゥイッチ監督によるミュージック・ヴィデオ感たっぷりの青春ラヴ・コメディ『プリティ・イン・ピンク～恋人たちの街角　オリジナル・サウンドトラック』（同　UICY80418）も懐かしい。OMD、スザンヌ・ヴェガ、INXS、スミス、ニュー・オーダー、エコー&ザ・バニーメンなどがずらり。ロジ

CamScannerでスキャン

『オー・ブラザー! オリジナル・サウンドトラック』

ディープ・パープル『マシン・ヘッド:スーパー・デラックス・エディション』



ウディ・ガスリー『我が祖国~ジ・アッシュ・レコーディングズ VOL1』

ー・ウォーターズが音楽プロデュースをまかせ、テイラー・ホウイが主題歌を歌った、80年の反核アニメ『風が吹くとき オリジナル・サウンドトラック』(同 UICY80419)も見逃せない。ダン・ハートマンの「あなたを夢みて」のヒットを生んだ84年の『ストリート・オブ・ファイヤー オリジナル・サウンドトラック』(同 UICY80423)にはグレッグ・フィリンゲインズの「カウントダウン・トゥ・ラヴ」とかライ・クーダーの「ホールド・ザット・スネイク」も。アイリーン・キャラの主題歌が大ヒットした83年の『フラッシュダンス オリジナル・サウンドトラック』(同 UICY80424)は、この種のオムニバス・サントラの象徴とも言える1作。マイケル・センベロ、ローラ・ブラニガン、キム・カーンズらが参加。ザ・フー、79年のドキュメンタリー『キッズ・アー・オールライト オリジナル・サウンドトラック』(同 UICY80431)は説明不要の1枚。オリヴィア・ニュートン・ジョン主演、78年の『グリース オリジナル・サウンドトラック』(同 UICY80432)はシャナナ、フランキー・ヴァリ、フランキー・アヴァロンらが大活躍。と、きりがないわけですが。もうひとつだけ、個人的にこれでオールディーズの深い沼に誘われた73年のジョージ・ルーカス監督作品『アメリカン・グラフィティ オリジナル・サウンドトラック』(同 UICY80437~8)を挙げたところで次いきましょう。

普段あまりハード・ロックは聴かないぼくですら高校生時代、友だちに強いられてギターをフル・コピーしたディープ・パープル、72年の名盤の豪華版『マシン・ヘッド:スーパー・デラックス・エディション』(ライノ/ワーナー WPZR30990~4)は、3CD+ブルーレイ・オーディオ+LPという構成の5枚組。CD1がドゥイージル・ザッパが手がけた24年最新リミックスと最新リマスター音源、CD2が72年にアナログ盤で出た『イン・コンサート72』、CD3が71年のモントルーでの未発表ライヴ、LPは最新リミックス音源、ブルーレイは最新アトモス・リミックス+74年の4チャンネル+3曲の5・1サラウンドをそれぞれ収録している。

スミソニアン・フォークウェイズなどが発掘リリースする貴重なCD群に丁寧な日本語解説を付けて配給してくれているライス・レコードから、今月は97年に編まれたウディ・ガスリー『我が祖国~ジ・アッシュ・レコーディングズVOL1』(ライス FLR3152)と、03年に編まれたロスコー・ホルコム『アン・アンテイムド・センス・オヴ・コントロール』(同 FLR3148)が登場。ボブ・ディランやエリック・クラプトンが好きな人ならば、彼らの重要な背景を知るためにも再訪必須の音源たちだ。

韓ビッグ・ピンクものとしては67年、スナッフ・ギャレットとJ・J・ケイルの共同プロデュースの下、レオン・ラッセルらも協力してザ・バーズ、ドノヴァン、カウント・ファイヴ、アソシエーションなどによる当時のヒット曲のカヴァーとJ・J・ケイルの書き下ろし曲とを混在させたザ・レザーコーテッド・マインズ名義の『トリップ・ダウン・ザ・サンセット・ストリップ』(ヴィヴィドVSCD6190)がわりとおもろいです。

CamScannerでスキャン